



七
觀



新公易策集

卷八

(兩角製本)

昭和十三年八月十六日印刷
昭和十三年八月二十日發行

新萬葉集 第八卷

編纂代表者 山本三生

發行者 山本三生
東京市芝區新橋七丁目十二番地

印刷者 村尾一雄
東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地

印刷所 大日本印刷株式會社
東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地

發兌 改造社

東京市芝區新橋七丁目十二番地
振替口座東京八四〇二番
電話芝(49)自一一二四番

目次

——作者別氏名五十音順——

み	の	部	三
む	の	部	一四
め	の	部	一五
も	の	部	一六
や	の	部 (その一、山野井まで)	二四
作者略歴			三六

○装幀 横山 大観

○題簽 比田井 天來

第
八
卷

三池 亥佐夫

道ばたの齒ざはり粗きざらめ雪かみつつのぼる榛名の裾を

落葉松の若木けぶらふ雪谿にうぐひすは啼くこゑのをさなく

谷かげを荷駄つむ馬ののぼり來ぬしばらくにしてその馬子も見ゆ

縁がはにとどける雪はみづうみの氷の上につづきたるかも

霧ふかき山をおり來て眼にぞ沁むふもとの路の冬あざみ花

朝けより飲みつぎてをればいつしらず吾子は學校より歸り來にけり(痛飲即興)

飲みはじめし昨日の夕べおもほへば遠きがごとし陽のかげり來ぬ

その祖父母に初めてあはす子もありて親子五人となりて歸省りきぬ

滿洲のたたかひをわが語るとき故里人の顔かがやけり

年ごとに追ひゆきがたきなげきあり君が到りし道のはろけさ(牧水五周忌)

伊豆の國の海邊の山を越えゆきて眼路をあやしむ廣きみのり田
地圖にして狭くぞわが見し半島の盆地をよぎる川のゆたけさ
朝戸出に友の計を聞きて旅立ちしこの國原に日は暮れむとす

翔空吟二首

とある部落に土匪の放てるまがつ火を焚火のごとく瞰て過ぎにける
おのづから人の踏みなせる道ならむ曠き砂漠に糸なして瞰ゆ
提灯の三つならび行くは荷馬車ならむきしりつつ行く山かげ道を
隣家の屋根の深雪のうす青みあをみわたりて昏れゆきにけり
むづかれる吾子を寝かすとうたふ唄やがてはわれの唄となり來つ

上海蘇浙戰從軍

耳の邊をかすめし彈にわが尿はたと止まれり笑はれなくに

孫逸仙と語る

濃き眉にうもれかがやく彼が瞳をまづ見きはめて手を握りたれ
眼をとちて唇ひきしむる彼がくせ三年まへとかはらざりけり
廣東にかつて會ひしとき日本を罵倒し今日は英吉利を責む

三 浦 正 守

手にあまる風呂敷包かかへゆく除隊兵士の顔輝きぬ
取巻きて坐りし孫のひとりひとり笑み返へしつつ數へ見るわれは

三 浦 勇

乙女子は驚き易く早春の土に芽生ゆる草に聲あぐ

三 浦 靖

國境の兵舎の屋根にはためける祖國のみ旗をろがみにけり(滿蘇國境)

三浦百郎

春の蚊の晝立つ見れば枯れ萱の下滲む水も動きそめしか
明けの霜凝りふかむらし噫りて既に馬の醒めゐる聞けば
行きはてて果つる命を秋鮎の下らむとして何かせはしき
鯉らは命をはりてしろがねの鱗つめたく地に置かれたり
海風のすがしき朝や露垂りてをだまきの花咲き過ぎむとす
梶木船ひきあげられて大いなり砂地におとす船腹の影
尾根越えて路は岩手へ下りなり黄なる山蜻蛉の草いでて飛ぶ
牝の牛はあはれなるもの日に瘦せて生めば賣らるる子を生まむとす
他人妻が買ひし春着をわが妻の縫ひてぞ得たるいささかの錢

三浦敏夫

年毎の夏の初めに聞くものか鱧ふかの湯ざらし賣る聲きこゆ

裸木に鴉二羽ゐて背伸びしつ羽ばたきをしつ朝日に對へる

三 浦 正 次

六十人の遺骨まもりて人々と夜をいくたびか香つぎまつる(兵營生活)

三 浦 瑞 穂

潮ひきし晝の渚に沖つ藻はなびけるままに乾きたるかも

三 浦 修 秀

村道を通るタンクの地響に雞は驚き土蹴りて逃ぐ

三 浦 忠

大和なる中宮寺門跡尊覺尼がわが子の冥福を祈りたまひぬ

映畫みつつ妻はひそかに泪ふく常ともなひし亡き娘こおもふらし

三 浦 友 三

したたりて土に喰ひ込む雨だれに今宵の空の暗さ仰ぎぬ

三 浦 正 雄

まがなしき報もとせ手に取り暫らくは寒けき土間に立ちてゐにけり(友逝く)
日廻りの花向きかはる午下り雲日を含みてぢりぢりあつし
馬市のはてて散らばる捨藁の何處にかゝてこほろぎのなく

三 浦 守 治

うつし世の千とせ百年なにかあらむとこしなへに人は生くべくありけり
厳かに道は守れどいささかはほりかにこそすすみをゆかめ
ありふれし書まよまむより時しあらばそを枕にて寝るこそよけれ
今日のことは今日なし遂げつ明日のことは心靜かに慮おぼひはからむ

いささかはとるべきふしもありぬべし心のままを我に言はしめ
山ざくら汝をおきて世にますらをが戀しと思ふ人なかりけり

光なき石一つだも天地にかくべからざる物にしありけり

さして行く道はひとすぢあらむ世もあらざらむ世もなか迷はむ

おろかにてわれ學びがたし唐衣三重に二重に膝をし折る業

小法師がほりそこねたる猿の面つくづく見よや誰にか似たる

汝が椅子は危ふかるべしたく繩のながくしよらば鞆とたふれむ

身はものの數ならねどももののふの八十氏人の一人とし思ふ

笑はずてわれをり得むや小猿ども人まねしつつかしらするを

あしひきの山の岩がね駒なべて誰かはわれと共に越ゆべき

ますらをのわれいやしくも天地にはぢらふ心かつてもたなく

斯くしつ々見しあきらめむ百世にもかはるべからぬ天のおきてを
なにがしは正しかれどもにぶしてふうはさを聞きて我かと思ひぬ
海の果穩やかにして夕づく日穩やかにこそ入り畢んぬれ

水底にしづく白玉わが爲めにまもらひたまへわたつみの神

いきのうちに五百千の眞玉ひろひてを我が大君にたてまつらばや
かきつけてのこしこそおけ今の世の人のさだめをのぞむとにあらざ

いそしみてつくりし小山くづれなば擧りて笑へ後の世の人

遠よせにせめよせ來らし心地よくひと眠りして敵をほふらむ
ゆく末はいかにと思ひし竹の子もまた世の常の竹にしなりぬ

世の中にありとあらゆる物皆をほしとし我はかつておもひき

しぬびかねいはむと思ひし一言をいはざりし吾は強くしありけり

直くしておろかなる吾いつとなく求めて人にうとまれにけり

老いて世をさとりがましくふる吾の昔は鬚も何もなかりき

奥山にゑらぎつどへる猿の族猿酒くみて花見すらしも

かかる世にありしばかりのなごりにと木ぼりの猿に我が名しるしぬ

青空をさしつらぬきてましろなる富士が嶺たてりきさらぎの空に

生きの緒に思ひし我が文燕くる春になりても未だ書きをへず

書見ればいよいよ遠しわたる日のかげにきほひて進む我が道

身にあへるよき事なして世の人の知るも知らぬも吾與あつからず

聖ひじりだにしばしば空しおろかなる我のみやただ足らで世にふる

諫め言ききて夜すがらいをもねずつくづく思へば我あやまてり

もたる石光あらねどいそしみて自ら得つる物にしありけり

曉の眠たらひて我が心すがしがしかり何をか求めむ

國の爲め心をこめて教へなむ妬ましきまでさかしき人を

わくらはに訪ひたまひしを守治もりほるも妻のお常も家にあらずして(妹に贈る)

八束やつづひげおふる益良雄男子兒の愛に引かれて身を馬になす

久方のあめの御柱神の代にさけて残りし富士の高嶺かも

三 笠 香 富

祝いわぎ酒に獨逸をみなは頬あかくそめてうたへりナチスの歌を

父母の生あれしふるさと玉藻よし讃岐に吾れは歸り來にけり

三 河 春 野

生みの母をなくししこともわすれつつすぎこし吾の半生なつかばを思ふ

父となる日を待ち待てる夫つととみて吾のねがひのほかにあらめや

三 上 茂

ときのまの嵐過ぎたり月澄みて寒くはるけく鋪道を照らす

三 鬼 實

目をあぐれば我が席のみに灯はあかり隅は小暗く金庫ならべる

三 木 洋 子

手に痛き水道の水となりにけり白き食器のふれあふひびき

三 木 小 雨

葛飾かつしかの冬枯小田のはちすほり今日のぬくさに掘りいそぐらし

高原たかはらを土岐とぎの下石おろしに通ふ路はろばろと見えて氷雨ふるなり(土岐の町石は美濃の地名)

三 木 孝

木の芽だちにほふ霽れ間を立つ虹に夕餉の子らが聲あげにけり

すでに夏も盛り過ぎたるあはれさや海女實演場に午後の陽暑し(海水浴場)

三 雲 青 二

雨ばれの明るき朝や眼にあふぐ山しろじろと芽ぶきすらしも

野葡萄の露葉そよると吹く風にあるとしもなき花の匂ひす

三 聲 富 太 郎

朝の陽のいまだ射し來ぬ山峽に花散り終る萩のつづけり

三 澤 孔 文

白菅の眞野の川邊の合歡木の花この朝雨にぬれそぼち居り(佐渡)

水の津の岬を出でて廣らなる海のはたてに越の山見ゆ

おのづから春めきにけりおそくまで辻に子供のさわぐをきけば

ひたすらに學校に行けば鈍き子もややに進むはあはれなりけり

三 島 祥 道

觀 音 崎

上るとき光る世界にあこがるる我れぞと思ふ燈臺にして

挽 歌 (與謝野寛先生をうしなひて)

三百里日に夜をつぎて馳せ來り仰ぐは悲し先生の棺

我れ老いぬ一とせのうちあまたたび來よとみことば賜ひしは昨日きそ

おふけなく涅槃ねはんの圖繪の片隅にぬかづく我れと思ひけるかな

先生のおん骸を呑み夕ぐれの大地しづかに春雨に濡る

葬はかりのこと果てて車の歸りゆく路にも泣けり武藏野の雨

荻窪と多磨 四首

音もなく林をくぐり來る風におくつき光る春淺き多磨

一對の花を捧げて合掌す都のみ弟子根の國の弟子

永劫を隔つる門は眼に見えず涙そそぐはおん前の土

います世と我が世へだたるものに似ずあえかになびく武藏野の靄

十萬の春の灯を著て都あり歩むは旅の出雲人いづもびとわれ

いと淡き安房の藍をば重ねたり石川島の煤煙の層

煙突をつづりて飛べる鳩白し石川島の工場くわじやうの空

飛行機が東京灣の淺葱あさぎ幕まくくぐりて飛べば曇る安房かな

ささ濁りそれも小鮎こぢのたはむれと見えて涼しき朝の溪かな

木の葉ちりゑがける水の輪の中にまたひと葉ちる浮く鳥のごと

一夜ねて伊豫の湯の香の染みし身を山の小雨のぬらさずもがな

忽ちに舟をめぐりて穗すすきの立つ原と見ゆ沖の夕立

大空が弓張るかたち今日は誰れわたる穂高のたわみたる尾根

三 島 秀 次

あぎやかに照り出だされし梅が枝の光もきよし雪のあけぼの
大空の青の眞中まなかを流れゆく雲の心となりて生きなむ

三 島 彌 生

マンゴの芽は伸び立ちて大いなるうすくれなるの嫩葉わかば垂らしぬ
米粉ギョフンを乾しならべたる草原に人影もなく眞白ましろき反射（米粉は竊語、食用ソバの一種）

三 島 格

臺灣にて

平溪峠へいけいとうにくれゆかむとする庄々むらむらを今しがた見しが月夜となりぬ
水社大山すいしゃたいざんのなだりの末は平らかに枯木つづきて湖うみにおちたり

つはぶきのくきのすぐ立ちかたむきてとぼしき花もちりそめにけり
草かげの飯場の土間に飯の吹く白き湯氣見たり芒葉ごしに

三 島 ふ さ

わが心かたみに鬩ぎあひたりし一日は過ぎぬ明日さへも經む
樹々の影玻璃戸にすきてうつりゐる馬道には古き瓶子ならべぬ
ほととぎす家居近くに啼くきけばうれしき縁ありて來にけり
ぜんまいの絮かづきゐる寂けさや秋田あがたに人ゆきし道
うすづける光あたれる遠き山杉立てる山重なり昏し
月島の汀に來ればにほひたつ晝上汐になりにけらしも
心張りてまた働かむとおもふさへ若葉の搖るる時にまがなし

三ヶ島 霞子

一ところ開けおく窓の明るみに寄りても縫ふあらしの晝を

さ夜ふけて釘打つ音す隣にて松を打つならん小さき松を

つつみなほす舅ちやうの風呂敷けさ見れば牛引く太き綱をつつめり

かすかなる仕事なりけり針しごとわれにせはしき冬としなりぬ

雨の夜は早くとぎしていとまあり綿入せんとにはかに思ふ

はるばると夫つとの假住おとづれて小さきばけつにしやつを洗へり

この心ただに靜かにたもたずばけだし癒えがたき病と思ふ

年玉の手拭たたむわが前をゆきかひ遊ぶ吾子あなこの足見えつ

手紙やれどかへりごとだになき人のふと歸りこん今日かと思ほゆ

わが夫つとはすこやかにして朝ごとにわが炊く飯いひをうましと言ひしか

おとぎばなししつ々たまたまともに寝る吾子の手足の固くふとれり

寝ながらの夕餉をはりて眠らんとするひとときの安けかりけり
格子戸を隣の人があけたてする音よりものこほしくなりぬ
あらはにもこの身苦しむひとときは尊きものもおもかげに來ず
今にして我や知りけん寒き日は火鉢に炭火つぎて足らふを
たまたまに外より見たりわが窓の細葭すだれ古びたるかな
うみたての玉子を人に貰ひたり毛のつきたるが幾つもあるも
わが家とさだめられたる家ありて起き臥しするはたのしかりけり
わが病すこし快ければとことはに死ぬ日なきごと身をばさびしむ
このごろはうれひ打ちつづきうつしみをさびしがる暇無くなりけり
この夜ふけにはかに苦しこのまま死すともよしと心しづめをり
きその夜の苦しみ思ひしみじみと今日ある命ありがたく思ふ

今はもよ心に深く決めしなれば堪へがたけれどもものは言はざり
瘦せたりと思ひて伸べしただむきに幼き時の種痘はつぼうの痕

はなびらに天鵞絨に似たる感じありて手にふりて見たきこの紅うばら
いま見たる夢のつづきを或は見む夜半の小床にみじろがずをり
遠方に長鳴く鶏のあはれさはわれの心をむかしに還す

なにかたのしき思ひわきをりこの病の癒ゆる望みはなしと思ふに
さかりある一人の吾子を思ひつつ眼つぶりて飯かきこみぬ

わが窓によそのあかりのさしそめて冬のひと日ははや暮れしなり
入りつ日のまぶしき光に面むけ立ちてゐるなり春寒き窓に

ひとときれのあやにかがよふ夕雲をせまれる屋根のあひだに見たり
重きほどふとんかさねてなほ寒し肩に掌てのひらをあてかがまるあけがた

夜の更けの凍土いひつちをゆく下駄の音錢湯へゆく人々ならん

手當だによければなほもいつまでも生きはうべけんかなしきやまひ
今にして人に甘ゆる心あり永久とほに救はれがたきわれかも
しみじみと障子うす暗き窓の外音たてて雨の降りいでにけり

三品千鶴子

酔に漬けてひとしほ紅はじみき薑かまの秋づく味をしたしみて嚙む
叱られしあとかたもなきやすらかさ吾わ子は枕まくらをはづして眠れる

三隅正行

起伏せる伊香保平を一色ひといろの朱に塗りつぶす雑木の紅葉
割引のあがる間際の吊革に押しもまれゐて作りし歌なり

敗將の墓に手向けし一本の野草に通ふ荒海の音(三崎新井城趾)

汽車降りて驛の鋪道に托鉢の僧をまづ見る鎌倉の朝

三 田 祐 一

潮騒しほさわのまなくし聞ゆこの山の小松のなかはみな躑躅なり

三 田 滂 人

滿洲從軍詠 十八首

畝うねの條すぢはてしなく見ゆる野に降りて斑雪はだれ消えゆく日のあらなくに
あかあかと夕照りにごる國原に戦ひて人の死ぬと思へや

巨流河にて

月くらしかかる深夜しんやのいづくにかあらぶる馬賊おもひつつをり

牛莊方面の匪賊討伐隊に従ひ海城出發

トラックあらあらしく搖れ突つ切りゆく曠野あれのの末に戦はんかな

牙えざえと日にひかりなき朝闌かけていのちにひびく寒氣をこらふる
そこはかとなく悲しかり鼻腔はなのあなのむづむづかゆく凍りつつあり

數日前匪賊襲ひたる村落を過ぐ

高粱きび稗がらのほのほに沸きし湯をのみてねぎらはれつつ泣かまほしけれ
たべるもの失ひし人のうつろなる垢面くめんがわれに笑みかたまくる

多門部隊の進出に先だち營口より遼河を渡る

流水のとよみみ空にこもらへば黄なる夕日に向きてなげかゆ
船の底に舷にくだくる流水のとどろく聞くは戦の如し

錦州城頭にて

夕燒に照らさるる身の黄塵をうち拂ひつつ寂しといはむ

通遼に向ふ

雉子一羽たかく翔りてあはれとも眺めらるるよ砂漠の空に

わが汽車の音におどろきうろたへる雉子をかくす枯草もなし

雪の上にはけだもの驅けり過ぎにける足跡ばかり遠くつづくも

檻樓まとふをみなごら驟馬に乘せられてほとほと死にし面輪かなしも

熱河討伐に従軍記者として北票に向ふ

砂塵ふる空のにごりにまどかなる血のいろの月かたぶきそめぬ

あからひく日の照るかぎり耕して冬越ゆる野良に萌ゆるいろなし

南嶺附近は數日交戦せる地點なり

いきほひて火箭にむかひ匍匐せしくらやみの中の兵おもはしむ

小笠原行

みんなみにただに向へり一日經し船路の昏れてともす灯を見ず

飛ぶ鳥のかよはぬ海わたにあなあはれすなどりの舟揉なまれつつ見ゆ
十五夜の月三日月の如くにも虧けてかがよふ渡津海の上
ふりさけて見ゆるものなし海中に灯あかりかかぐるあはれわが船
島人ら佛心いとど怠れり夕づく寺の扶桑華のはな

鵲はしたかが舞ひくだらむとする椰子の傾斜なだりは海にしづみゆくがに
木洩れ日の澄みてすずしき林道にいちびの黄花ちれば踏み行く

三 田 喜 藏

稚くて見にける伯母が眼尻の小疣もありて軀さびいます(久潤の伯母)
唐松の防雪林はいろさびて下びの霧は流るとも見ゆ
街の上に擴がりおもき雪雲はゆき降りつくし夕茜せり

三 谷 涉

豌豆の生なふる坂道を下りたるに砂利多くしてあかるくなりぬ(葉山にて)

三 谷 蘆 華

夜ふかきにいそしむ吾わが子をあはれみつ言ことねもごろに物食ものをさせけり(入學準備)

トラピストに往いにし露風が顎の鬚久に逢はねばのびにけらしな(舊友)

蜘蛛のいの端につるされて蓑蟲のとゆれかくゆれ落ちんともせず

春寒き麥生のみどりうは土の乾く日ざしとなりにけるかな

呟ささきて餅もちきる妻に言かけず寢ねざけあたたため自らが酌しやくむ

忙いそしさに心こゝろいらてば險あやしさを目顔めがほにしるや子は近ちかづかず

山村は心安やすけし立て札しるしに杖つゑ賣うらしめて人居ひとらずけり(月ヶ瀬)

松まつかげにきのこあふればほうほうと鳥追とりふ聲こゑす麓田ふもとのへに

山やまがつはくらしおぎなふたつきとてラムネを冷ひややす軒のきの噴ふ井いに

朝露に爪木しめれば飯盒いげのつぶつぶめしを筥けに盛りて食ふ
恙づがもつ母いたはりつ秋はやき糸瓜へちまの水をとりにけるかな
山裾の狭田さだのくろべに土築きて猪垣ししがきつくる狭田のくろべに

三 戸 保

入りつ陽に向ひなだるる山原の芽張り明るき細枝の群がり
林ぬけてとみに明るき月光に眠る背の子の顔白く見ゆ
音細くすみて流るる溪川の飛び石つたふ月のあかりに
木もれ陽のあをき日すぢに光りつつ岩すべり水の音には立たぬも
抱き上げて子に撞かしむる鐘の音は紅葉明るき山にこだます(石山寺)

三 苦 守 西

わが廻りのほの明るさを眞寂しと眺め續けつ日を重ねたり
わが思ひなべて愚かとなりにけり吾子に手向くる雛罌粟の花

祖 母

乾反葉の匂ふが如き明るさを病みます祖母に見出でたるかも
病む祖母に添寝をしつつ故郷のかたき枕をかなしみにけり

初 冬

夜半降りてあした霽れゆく雨癖の三日四日續き冬づきにけり

山

山に来て仰ぐ空こそはろかなれいや尊けれひとりし仰ぐ

高山の花

むらさきも黄なるも白もただ澄みて空へ向きたる高山の花

庭の石路

しぐれ降る冬のいまごろ咲く花にわが縁先の石路もあるかも

述懐

若き日を樂しむひまも無かりしが老いづく愚痴をいふ日きたりぬ

急性肺炎を病みし折

曉も夜半も意識の外にありてなほ惱みしは生きのなごりぞ

英彦山遊行

この坂をすでに遙かにひとり來て今見てをるは山あぢさゐの花
山毛櫨ばやし明る青葉の下路をのぼりつつ見る山あぢさゐの花

三 苦 京 子

心澄みて病やしなふわが許に枯葉散るごとくとどきし手紙
永く病みて心眞澄みぬ贅肉ぜいにくの落ちたる手足すきとほりつつ
休眠の蠶のごとく身は澄みて春の日永をうとうと眠る
一本の煙草をつけて出来るだけ永くかかりて喫ふが樂しさ
もろくも人死にければ死なざりし己が命の思はれにけり

花尾城址より八幡製鐵所を望む

海岸より海に棄てらるる鑛滓のりは燃えて金盞花色の火柱立てをり
洞ヶ丘のけぶれる海に熔鐵の滓棄つる見れば火瀧のごとし

三 野 刀 雄

馬鈴薯の葉をゆすりしにゆくりなくてんとう蟲は轉げ落ちたり
ころげ落ち死せる眞似せるこの蟲はをかしけれども戯たはむれならず

顔よせて嘴ながきペリカンに物言ふ我は兵士なりけり

三原空蟬

雨に似て音こそ立つれ夜もすがら柿の花おつる庭くさの上

三重野善人

夕もやのすでにかかれる麥原ゆとぎれとぎれにひびく麥笛

三村澗氣

身は遂に雲の眞中に残されて草も木もなき焼山に立つ(久重山)

三村達麿

枯れ芝に雪はだらなる圓形辻場鴉が一羽降りてまじろぐ

三村ふさ子

話すこともとぎれとぎれに新宿の雑踏をぬうて友とゆくかも

三室 文夫

見はるかす阿蘇も久住も太良ヶ嶺も空けぶらひてむらさきふかし
雲仙嶽の岨を下り來る白雲の低くなだりぬ温泉の街に

三本 千史

土間に積む馬鈴薯の中に蟋蟀の住みつけるらし夜に晝に鳴く

三宅 恒久

山上のみ堂さびしもふもとなる工場のさいれんここまで聞ゆ

三宅 雪枝

何日の夜も鍵してあらむ思出が添寝したらば恥しき爲

三宅 健治

この山のこの杉の根の泉こそ大北上の源と知れ

三宅 繁樹

大正十二年九月の震災に母はじめ兄弟ら七人被服廠跡に死す

雜司ヶ谷父のみ墓に並びたつ七つの塔婆に今ぬかづくも

三宅 幹次

ましぐらに大比叡さして風雲のかけりゆく空に瓦とびちる(秒速六十米の颯風驟來)

三宅 貞綱

笈もるるしづくに風のさやるらし夕べたまたまみだるる水の音

朝露にぬれうるほへる虎杖(いんとう)の自(し)が葉の上に花をこぼしつ

三好 達治

高原(たかばら)のキヤベツ畠ゆたつ鳥の淺間が嶽にむかふひと列(つら)

山峽の雪の日暮れにともしたるランプの火屋(ほや)の指のあとかな

三好 ゆきゑ

風はらみ顔により來る蚊帳のすそ本におさへて又眠りけり

沖の島黒く浮かしてうしろよりサアチライトが光を廻す

風ありて居間のたたみの奥ふかく松葉ちりこむ桐の枯葉も

三好 七郎

わが中に人二人をり風をはやみ地に伏す我と天がける我と

一ゆれして汽車山峽の驛にとまる何といふ静けさ鶯のこゑす

三好 保

四十糎四門の射角ぢりぢりとさだまりゆくをまも目守る無氣味さ(四十糎主砲射撃)

短艇カッボを漕ぐ手も輕し久しくもこほしみ居りし陸に向ふに(半舷上陸)

三好 英子

御下賜金古着よ餅よ春を待つ細民街は一時いつときにぎはふ

如何なればかくは貧しといふことを知らずひたすら救助米欲ほる

三輪 文男

夕まけて熱いでにけり落柿は暗きが中に音を立てつつ

更けしづむ深山の闇に鳴く鳥は子の喚なげぶに似て寂しかりけり(三河鳳來寺山より放送の佛法僧)

新しき亡父ちちの位牌も旅なればリンゴの箱に据ゑ奉る

三輪 汪子

言葉にはまとまりがたき寂しさを消さむ術すべなみ渚を歩む

衣紋竿に掛けんと羽織手にとれば人のにほひのしてを愛みなしき

三輪 田元道

頼る子に別れし親はあはれなりその年ごろの人みれば泣く

三輪田美津生

みひたひに水を注ぐと身をこごめとどめかねたる涙流るる(母急逝)

伊那谷へ遮ぎりもなき山裾は緩くなだれて霞みたるかも(木曾駒ヶ嶽山頂)
十六夜いざよひの月の明りは木の間よりかつがつ及ぶ草鞋穿く足に(伊吹山登山)

三橋公勇

日の暮れはさすが露けく立ちなほる雑草あらくさむらに月ぞ照りたる

庭先に鳳仙花赤く咲かせたる造船作業場の前を通りぬ

男體山おんなみだりの大きなだりは雨霧の暗める中にきれぎれに見ゆ

夕時雨晴れて間も無き枯れ山にあたる落日のいろさむざむし

松山に見下ろす街はたちまちに夕づく光となりて寒けき

晝過ぎの授業終りて下りゆく階段に日の當りぬにけり

階段の一ところ日のあたりゐて白じろと立つ埃目に見ゆ

三 橋 隆 臣

青空に湧く白雲の峰なして葦切來なく日となりにけり

葦切はまづ川口に移り來て日に日に川をさかのぼり鳴く

葦切の鳴く聲及ぶ限りには晴れやかならぬものあらぬかな

一點の雲なく晴れし初夏の空のもとなる苗代の青

龍膽リンドウの花を手折りて歸り來ぬはるかに海の見えし山より

三 堀 雪 子

岩走る清水を引きて人住まふ家ありてより山深まりぬ(房州鋸山)

三 矢 重 松

大み大刀三池の鍛ひまさやかに國の寶と今し輝く

あはれ大刀や軍の君がとり佩きて國ことむけし大み大刀はや

大神の御稜威かがふり禮代と納め奉りしその大み大刀

三尺二寸反り高くして中心やき一すぢ樋がき直刃ををしき

八百年のそのかみながら翻し見る刀の大刀のつゆの疵なき

庄内田川の湯に遊びしは十歳に足らざりしほどなり

春彌生耳つくろふと古里の田川の出で湯あみに來たれり

わが思ふ田川をとめにかざさせて見まくぞ思ふ堅香子の花

日向兒湯郡西米良村竹原兒玉市藏の子らの水死をあはれみて 三首

麥刈ると母が出で行きし家もりて子ら陸びけむ西米良の里

たらちねの母を戀しみ子ら四人相たづさへて行きしその道

天地に神はまさぬかはしき子の四人ことごと水に溺れぬ
大佛の眼開くとすめらぎがとらしし筆を見るが尊さ

出づる日は日毎日毎に新なりこのあらた代に人な舊りそね

大正十二年五月十九日胃癌の診断を受けて

長からぬ命と知れる今宵しもよき歌出で來人に書きてむ

を生に與ふる歌より 三首

汝が行きし國べ思ふと春くるる卯月の雨の日をありきつつ

沖繩へ汝をしやらむと思へども静けき國べは心さびしき

ふるさとの町をとよもすわざをぎの其ふりよしと遊ぶらん汝

いにしへのふみをあらたに説き得つるその楽しさを知るや幾たり

木々の芽のちぢに匂へる春山のあはれを知りぬこの年にして

三井 金藏

入江よりひろがりいづる春潮のうねりひかりて日のわたるなり(不知火海)

三井 八郎

夕映の空に鮮かに聳えたる起重機ゆるやかに向きかへてをり

三井 甲之

山に行く

道おほふ細竹しゆの葉そよぎ風起り遠田の蛙まぐ天あまに聞ゆも

南山雲湧き起りたたなつく山根うごかし夜は明けむとす

山おほふ雲のとばりの西なびき夜よのあくらく空晴れ渡る

残る星うすれ遠そきひむがしの山あきらかに朝日出でむとす

御嶽に遊ぶ

岨道えはみちの雪ふみしだき谷風に面向おもむかひつつきほひゆくかも
岩の上の松の若子わやくこは白妙しろたへの雪のあひだにうまいせりけり
石の間を瀧いばなしたぎち行く水の氷柱つららにさやりさやさやにゆく
石の間に泡なす水は泡のまま白木綿しろゆふわた花と氷りけるかも
忽ちに青空ひらけ空に立つ岩いは秀ひことごと削るが如し
青空に疊み立ちたる五百箇岩いばのいただきの岩に小松生おふ見ゆ

雄島に遊ぶ

雨晴るる夕川岸に鯨を釣る子らに雄島の道を問ひけり
岩根道雄島に渡す板橋を踏みのひびきに常世とこよしおもほゆ
久方の五百重棚雲いへなぐも入日さし松が下路露あきらけし

松の間ゆ遠見さくれば眞弓なす海のかぎりをつらら五百島

萩の道行きとどまれば松が下磯打つ波のとどろ響けり

潮満つる岸になびかひ頂伏す薄穂むらを波越えむとす

夕映の空の遠方五百重波潮満つらむか海鳴りどよむ

刻々迫る重大時機

はてもなき大わだつみのしほの流れいよいよはやし心せよ友よ

いたづらにすぎにしあとにかかづらひ居らば悔あらむ今や立てはらから

國民はみなあつまりて御祖の御靈いかにおぼすとうかがひたてまつれ

我を忘れみなこの國の限りなきいのちの流れに没入せよ今

そのときにひらめききたる一すぢのみちをあゆまな國をこぞりて

朝な朝ななく鶯の聲きくもしばしのあひだとなりけるかも
つたなかるそのなき聲の日ごと日ごとたくみになるをきくがともしさ
春ごとに來なく鶯ことしこそ耳かたぶけてきかれけるかな

伏見桃山御陵參拜

久方の空にむかひてきだはしをのぼりゆきけりみささぎあふぎて
きだはしをのぼりてゆけば大地おほつちゆみ空はるかにまるのぼるごとし
白雲のたなびくみ空によりあへる大みささぎのたふとくもあるかな
あしびきの山松の上ゆみささぎのみ空に鳶はまひもどりをり
いしたぶや天馳あまはせづかひとぶとりもみ民のいのりたすくらむかも

折にふれて

ますらをのかなしきいのちつみかさねつみかさねまもる大和島根を

たたかひてつかれ傷き息絶えむいまはのおもひしぬびつつ生く
いのちこもるうたのしらべはいたづらに御空にひびき消ゆと思へや
ことのははいくるしるしとつながりて人のいのちをよよにつたふる
しきしまのやまと心はうつそみの目には見えねど耳にきくべし

三井 正雄

初めて父や姉の故郷なる富士見高原に入る 一首

この國に父は生れしかこの國の土をしたしみわがふみてゆく
高粱の畑の向うに立つ兵の頭もみえてよき月夜なり(山東事變の頃)

三井 實雄

支那家の土をかぶりてすすけたる屋根越しに青き朝の海見ゆ

美甘 武子

夜半の疊にくづれて暗き紅裏はすさまじく見ゆわがものながら
寝つつ見る天井板と眼の距離が無限に遠くなりゆく心地す
かくなれる原因は何ぞと争の最中にふとも思ひかへしつ

美 木 行 雄

けさの雨しづかにふれり牡丹花のくわふんは地に流れたるかも
だありやの花の重みの掌に應へるこの親しさよ朝庭に切る
人のこと世のこと悪しざまに罵倒りてさて歸るとき錢借せといふ

美 岐 か す み

落葉やくけむ紫の尾をひきて十一月の空にうするる

美 島 百 合 繪

雨の棧橋につみ上げられし藁づとの白桃の花山ざくら花

戸締を忘れぬし部屋に寒々と光を流す冬の夜の月

美島 佐恵子

つまだちて物干すわれのゆびさきに沁むばかりなる冬の青空

しゆろの葉にふりくる霞おほかたはまろび落つれどとどまるもあり

たまさかにしゆろの葉底にとどまりて朝のあらは靜かに白し

美代 かつ

なんといふ輕き姿ぞこのほこり落ちむとしてはまた舞ひあがる

今はしもありて用なき黒髪と思ひさだめて切り捨つるかな

うたかたのげにもはかなきこれの世の煩惱ぼんごをたつと黒髪をたつ

これの世に只一すぢの母心たもたむものと黒髪はたつ

さやりなく思ひのままをふるまひてなほ眞寂しき身は一人なり

美 波 早 智

山峽にひとすぢあがるけむりありあらしやみたる朝のしづけさ

美 禰 國 樹

中隊長となりて

満ち足らぬ事のことごと一人しのび兵と生くべし中隊長我は
兵と生き兵と死ぬべき願ひ持ち身を立てしかばまうらたのしも

露満國境某地を訪ふ

陸遠く我は來にけり目の前にそばだつ山はソヴェエツトの山

北鐵接收に前後して東部線帽兒山附近の討伐に従事す

深々と夜霧こもらふ谷底に聲秘めて下る匪賊を討つと

我が指紅およびあけにそめつつ止め度なき鼻の血のりを拭ひてやるも(兵の戦死)

故里にまだ知らざらむ父母を思ひつつあはれ拾ふ骨くづ

濱江省五常縣に紅槍會匪と戦ふ

森かげに無氣味に動く朱の槍見つめつつ我が備へを直す

我は一中隊を以て五常縣一帶の討伐に任じ荒廢百方里の山野を馳驅し寧日なし

首のべて谷の水欲る馬の背に仰ぎつつ寒し天雲の往き

一列側面縦隊の兵の銃つづく廣原や雨降りそそぐその銃先に

母逝く。余北滿の陣中にありてこの悲報に接し、ついで歸郷

骨壺の母の遺骨を抱きたる父と日中の道に遭ひにけり

軽々とかつがれ給ふ我が母のみ骨ばかりの小さきみひつぎ

美濃谷 茂介

わが觀つつかすけかりけり夕の陽は寒菊に冴えずすぐに暗みぬ

美濃谷 咲子

時化^{しけ}となりし廣き海岸吹き立つる砂煙は一面に波をなし來つ

漁減りし吾町の家々賣られて隣町に運ばるる多し 一首

とりこぼち運び去られし家の跡を時化の海風は突き抜けて吹く

父

今宵又酔ひ來し父の飲み足らぬ酒ととのふと火を熾^{やど}すかも

小夜更けてしぐるる音す酔ひ臥しし父には父の嘆きあるべし

美作 まさ子

ぎいつと扉があいて銃口を向けられぬとも限らぬ夜なり

全世界の人を戀しと思ふ夜あり月ほのぼのくにほひ立ちくる

いくたりかカスタネットを投げすてて祖國の土に散りてぞゆきし(動亂の調べ
イソンの舞姫)

見原文月

空はほのかにあかるみもちて木蓮の満開の花に雨ふれりけり

見原常子

色々の時にうちたる天井の釘をながめぬ病ひの床に

なが病みにいまは細れどこの體二人の吾子はみづから産みし

見沼冬男

驛 旅

山鳴りのとどろく音に向ひをり雪あるみ山荒れにけるかも

山川の岩むらとよみ降ちつつ雨水ややに澄みゆかむとす

山の子は遊びなかりき鴉なけばほとほと紛ふ聲まねにけり

遊びなく子等はありけりつくばひて鉢合はせしつよろこぶ見れば

鳴りたぎつ川瀬のとよみ谷深くこもるが上に住める家むら
羽黒山のぼり來にけり海坂に入りて行く日の静けさを見つ
我等にしふるまふらしも爐の上の小さき鍋は米を煮てをり
黄に透きていろすがすがし寄生の枝手にとどくべき山原をゆく
樋を埋めて湯をとほすらし地にこもる流れの音の上を行きけり
浮び出し鳩の頸一つひそかなり湖ゆきはてず日は入らむとす
山こころなべて培ふ煙草畑淋しき村を通り來にけり
降りつもる静けさならず兵營の屋根にそげたり風なりの雪

逗子驛

栗色の車體に著し御紋章山野かがやき行かす様見ゆ

時おきて白き蒸氣を吹き上げつ止りひそけき大き機關車
朝靄の靜けさにあり幾筋の路線のかあぶたわみよろしき

北海道

海面に霽れてゐる日の時の間や空はにほひつつ吹き散らふ雪
雪山の峽深く來て汽車おそし何の木の實ぞなりて赤きは

連絡船

如何にある風に乗れれか船につきて鷗ほとほと羽振くことなし

身邊

庭の木の木の間にひそけく咲く花や人死にゆきてなほ絶えずけり
吹きたまる花堆し病院の長き廊下の往來に見れば

深山 裾夫

足跡を踏みくぼめつつ砂濱を歩く妻子ら樂しむらしき(磐崎の濱)

深山小一郎

良夜あらたよの庭木を渡る風の音さみしけれどもかすかなるもの
梅雨雲のたためる空に入日さしにぶき光を浪におとせり
ひぞり葉に夕時雨降る音さむし父が三回忌近くなりたり

深山影二

坑内の赤濁りさむき排水は光もちて深谿に落つ

御子柴 誠子

實を持てるあら草なかに交りつつはつかに赤し犬たでの花

御崎津多雄

風かすむ磯に干したる海藻の香穂麥の畑を越えて匂へる

御園恭子

たまきはる命傾けて生き抜かむ思ひ漸く定まりにけり

御津磯夫

夕橋をこころつかれてわたり來つ海は干潮にくらきしづけさ
うからいでて磯に海苔柴扱かく見れば海にあけくるる人の寂しさ
あかときの磯もとどろにひびかひし秋雷のひとつに止みぬ

岬 三 呂

いささかの湯疲れもちて歩みぬる吾が目の前に砂埃はこりふきたつ
思ひ切りいよいよ職を退くといふに何に心のかくはわづらふ
安産の書物など買ひたのしみし初産のころを思ひ出しぬ
吾が孀あづは媪おやの如く頸たれて箆へら箆へらの前に錢をかぞふる

溝口登美咲

いづこゆか少年團の服を着て笑みつつ吾子の歸り來るがに(吾子歿後)

溝口萩子

田舎にて育ちし母は腐葉土をデパートより買ふ父をのみこめぬらし

溝口巖

雨あとの空すみわたり裏山の松にかそけき風の音する

溝淵道次

短か日の暮さむけきに無期囚のさみしき顔を窓よりみたりし

道場清二

ヘッドライトの光移り行く稻田にはいまだ農夫の稲刈るが見ゆ

道久良

大いなる山より山へ吹きわたる風がたてたる山の鳴りはも

第十一師團秋季演習を終り家に歸りて一首

大君に捧げしからだ歸り來ておん母のもとにけふ憩ふかも

鳳善に遊びに來よとよびにやればかざり財布の音させて來ぬ

秋ふかくさびれし邑まちの十字路に漬物キムチの甕かめの市たちてをり(北鮮)

滿岡照子

ふところ手しみじみ空の雲を見る秋は男も淋しからまし

ながながと母がかきたるかな文字のてがみとどきてわれを泣かしむ

うつしみのぬぐ温みかたみにかよはせつ産室うぶやにねむる母と子あはれ

春淺みひとりあそびをするやうになりしわが子の赤きももひき

光 田 滿 穂

青竹を賣る聲きこゆ朝はれて夏めき來るそらのいろかも

思ひつつゆふ野を行けばひそやかに穂草の花は散りにけるかも

光 田 作 治

てりかげる陽のしづけさや聖堂に碧きがらすのいろはえきたる(浦上天主堂)

上り路はつひにつきたる峰つづき陽裏の山にとよむ風のおと(慶州佛國寺石窟庵)

光 永 比 佐 夫

朝づく陽障子を染めてあたたかし家をめぐりて雪解する音

禁獵のここの山べに鳥多し道をよぎりてしばしば飛ぶも(勝尾寺)

晝寢よりわが覺めし時谷あひに啼ける鴉はあはれなりしか(山の湯にて)

夕いまだ暴風雨の名残りの風吹けり水漬きながらそよぐあらくさ雑草

秋さればひらく木槿ききんの白花の清くさびしく吾れは生きなむ

しみじみと人に使はるる寂しさの思ひみらるるよはひとりなりぬ

起き起きのまなこ冷たし秋さりて垣の朝顔白ばかり咲く

枯草を踏めばやはらかし何か身にやさしく觸れてくるものあり

結ひあげて君が桃割れ初々つひらひし見よとなるべし今日訪ひ來しは

わが心臓われと高鳴り來たるなり討つべきものは討たざらめやも（滿洲事變）

陽に干ぞる本の表紙を撫でさすりかくも戀しむまれのいとまを

窓あけてすなはち咽喉に沁む冷氣信濃の朝をしはぶきにけり（信濃の旅）

敵の彈丸たまもよく的中あたりしなりたはやすく勝ちしにはあらずこの彈痕たまごを（三笠艦）

雪光る天城の嶺呂をそがひにし春寒はるむかき湖うみやさざ波立てり（一碧湖）

十年後の今も見る亡き師の夢は昨日會ひたるとく新らし

病み臥せばいとまありけり手に取りてみかんのへそをしみじみと見ぬ

この部屋に乙女子二人清く住み壁につるせる白き足袋かも(さる病院寄宿舍)

光 永 セ ツ

さびしさにこのいく日を黙もだしをれば吾には誰も語りたまはぬ

光 村 讓

かなしみにえ耐へぬ時は薪小屋に木を切ることを樂しみとする

光 岡 良 二

癩發病し入院或事情にて一時歸省を許さる。國府津附近にて

さむざむと潮騒しほざわよする砂に竹たけち聲あげて見つ海原とほきに

庭木手入

かがまりて下枝しげを刈れば額ひまかつたふ汗の垂りつぐ白き乾土かづちに

水鳥川春帆

咲きいでて花ばかりなる木蓮の秀枝はづえはゆらぐ朝の光に

白樺の繁しみ立つ幹のうつくしさいま朝光あさかげのさしとどき来る（燕岳）

はひ松の露かがやきて高やまの夜は明けきたるうす月のまま（鹿島鎧）

水落貞次郎

雨あがり夕陽は赤し西窓の障子のよごれあきらかに見ゆ

向つ岡の楠の大木の揺るる音かすかにきこゆ今日の曇りに

水川天一

白馬岳登山

峽の雲晴れゆくなべに白馬岳雪の白斑のこごしくもあるか

立山の雪の秀は高く現れて黒部の谷は霧とざしたり

遠ひける雲の黒きは入つ陽をそがひに負へる山の影かも
静もりてひくく凝りたる雲の海くろぐる山の影ひろがれり

櫻島頂上

高千穂と韓國岳と相對ひ霞の中に霧島も見ゆ

水川 貞而

どの鈴が鳴りて居るならむ提げ歸る包の中の鳴る音澄みたる
遠くより話する聲の聞えつつ月に明るき野を人の來る

水上 赤鳥

新宿御苑櫻花拜觀 一首

鴨の群御苑の池に下りむとや春のみ空の風にながるる
見はるかす環狀道路のゆるき坂遠きはまりて冬の空あり

妻初の出産を安けくなせし時

生るるもの生れ出でたる安けさに産湯を汲むぞ鉢巻をして

病氣療養の爲千葉市寒川海岸に轉地

我とわがいら立つ心もてあまし寝てをる顔に晝の蚊きたる

我生來健康ならず

吹け吹けと吾^あ子^こが持て來しラツパ故病みこやりつつ吹き鳴らすなり
つややかに柿のみのれる隣家は健かにして病む人もなし

奈 良

我が撞きし鐘のひびきの未だあり二月堂下の白梅の花

臺灣南部東部等の未開地に於ては河川に橋無き所多し。

自動車は淺瀬をもとめて渡渉す

ざぶざぶと川に車輪を深くひたし自動車わたる傾きつつも

來る波も來る波もみな散りしぶき虹をこそ描け同じあたりに
釣道具背負ひて分くる川原葦をりをり折れつはりはりと鳴りて

水 上 ト シ

かへりみる墓標にただに陽は照りて寂かなるかも冬鳥のこゑ(株の墓)

水の面にとどかむとして咲き垂るる一むら萩の花しづかなり

照りあつき晝野をゆきて草苺日にぬくめるを子は食なうべたり

鶏はみなもらはれゆきて糞白く土にかわけり唐きびの花

思ひは遂に獨りのものなり行きてやまぬ遠瀬の音を聞きすましゐる

過ぎし事は虚しかるべし花ひそむ山蘭の鉢に水かけて居り

水 上 す ず 子

幼くして父を喪へるひとり子をゆゑありて遠く人の手に委ね
んとす。生きてゐてまた會ふことも叶ふまじき別離なり。そ
の前夜子を負ひてあてどもなく暗き道に出づ

明日になれば別るる汝か背に俯してわが血にかよふこの温もりを
いまひとたび母と呼びてよ耳もとに息吹は觸れて悲しかりとも

その家に伴ひゆきぬ

向ふむき蜜柑をたべてゐたる子に別れの言をいはで來にけり

後
に

山越えて汝がある方に行く汽車は雪積りたり逢ひたきものを

空みれば空に陽はありしかれども生きおほすべきわれにはあらぬ
目に顯ちて小さき面輪はありぬとも汝はわが子にあらざりにけり
子には子の世界があらむとおもへども思ひつむれば戀しかりけり
年長けてあるひは母を憎しむと一途に言はむその眼は見ゆ

たはやすく人は己が子を愛しめりわかるる時のなきがごとくに

袖實二歳

その知れる言葉のかぎり言ひつらね一つの希望つげむとする吾子

生活の暗さ極まれど

きはまればきほふ心をいまははや人には秘めじわれ起ちゆかむ

職を得て働けど子を失ひてよりわが心さびしく荒れぬ 三首

うつくしく夜霧に耀りて灯はみつる衢を遠くかへり來にけり

大いなる月のぼれりとひとりいひて家並の上の赤き月を見ぬ

枯れいろのひかりさびしき冬の陽の没ちなむとして炎ゆるをみたり

高きより土塊ひとつころがりてやがてとどまる冬の日の崖

樵の木の高枝のうへに夕映えの光はさしぬ遠き空より

冬の木よけむれるごとし心こころふかくいきどほりもちてわれは歩むに

外洋に岬かたぶく黝くろき影わが住みし町の灯は遠くみゆ

なにを思ひ呆だけぬしわれか渚邊に夜潮は満ちて足をひたしぬ

波の上に夕べとなれば没なつる陽のことわりのごと疑はざりき

波暗き海にむかへる巖の上に大いなる火を人焚ける見ゆ

きさらぎの海の上なる空にしてわがしれる星はひかりたりけり

もろともにありていのちの寂しさを堪へよとひとのいひにけらずや

常のごと川は流れてゐたるゆゑ佇たちてながめぬその川波を

蔓草のただひとともにありぬともおのれ光れるいのちを生きむ

くるしみに堪へて生きなばおのづから命ひかるといふにあらずや

過ぎて思へばあはれなりけり人言のゆゑなきにさへや身を苦しめき

ひとりなる生をねがへればしろがねのごとくさびしき道われにみゆ
こころひとつにわが成さむことを思ふ時この身にいたる光ありけり
芽ぶく樹のいのちかなしく輝ける光のなかに立ちゐるわれは

水 木 之 青

白が口の物食ふ音を聞きにけり闇の中なる物食ふ音を
竈の扉のうち開かれましたまゆらを顔にかかりたるあやしき温み(火葬場)
池中の朽木の上に龜あまた甲羅干しをり石かと思ひき
夏ふけし峠の原の青萱に押し照る眞日をさびしみて立つ

水 澤 邦 髙

たちこむる夕霧深しさわがしく人の聲するは頂の小屋(參科登山)

水 島 麗 峯

みすずかる秋の信濃をはるばると越え來し人に山のにほひす

水 島 い ね

あかときの月夜とわれは思へども雞かひもなかねばただにひそけし
深山木の雨にうるほふ若みどり頂かけて雲もあらぬなり

水 田 房 子

見極めしわれに悔なし夫つまと呼ぶひとの瞳を受けてまむかふ
芥浮く街川の流れ入る海は橋いくつ向うにかがやきて見ゆ

水 谷 静 子

ハーゲンベック・サーカス

宙に吊る火の輪燃えたつ火のまへに猛るともせぬ獅子の群れつつ
獅子つかひに馴れよる獅子のおのづから列なしてあはれ牡獅子もまじれり

異國人ことに女は桃いろの肌衣をつけてよき均整なり

たまゆらは空飛ぶひとの宙に見えし美^はしき反り身のあはれ目を過ぐ

街のサーカス 二首

ブランコに宙返る子の身の細りゆれつつあはれ聲たてにけり

たかだかと梯子のぼりし幼な子のいまや逆立つあはれ身の反り

池の面のときに暗がる日のだよみ生きてよりゐる鯉のむれつつ

照りしらむ垣の無花果^{いぢじく}影濃くて誰^たぞや聲たつ笑ひけらしも

滅びゆくもののははれは炎天に時の間おかず啼く蟬時雨

菊五郎の鏡獅子を観る 二首

牡丹花の花によりゆくうつごころ獅子^{しし}頭^{がしら}生きて狂ふその手に

猛きもの花によりつつねむる獅子のしづかなりやげに白牡丹紅牡丹

日暮るとものひそけさよ雪に出て遊べる子らがさやぎ聞ゆる

映畫々面におもかげ生きてもの言はず白鬚の老顔またたき給へり(高橋藏相)

霧ながら明る疎林の櫨はじもみぢ米あひのぬれ葉の雫する見ゆ(奥秩父)

暑中郷里にあり叔母の急死に會ふ

悲しめる人あつまりてひと夜明けしあかときの家に川瀬きこゆる

朝ひびく川瀬の音の家近しまことやひとの息絶えいます

み柩は山あひに入り夜の道の闇に踏みまどふ瀬の音かなしく

夜蟬啼くこゑ近々と葬所はふりどの外の面もの闇に見ゆるものなし

水谷 艶子

舞ひ上る雲雀の聲をかすませてみ空は今日も花曇りなり

小さきわが庭なりながらえにしだのひともと一本ありて足るおもひなり

水谷 理 安

書^{ふみ}讀める宵の吾が居間に衣^{きぬ}縫ふと妻は靜かに布ひろげたり

水谷 貞 子

春雷は遠くになりぬしやがの葉のしづく光りて爽けく見ゆ

水谷 一 楓

庭の土に蟬のぬけ殻落ちてをり鈴鹿の嶺の蒼く澄みつつ

終列車とどろき行けばまたもとの妻の夜^よ業^{なべ}のミシン踏む音

衰へし人をかなしとかき抱きて唇ふりぬ燃ゆる思ひに

水谷 文 憲

このごろの日癖の雲は晝すぎの雷をひそめて赫^{あか}く照り入る

紅梅の蕾を裂きてひとしきりつぶてのごとく霰たばしる

折柄の雨をはじきてひらきたるこぶしの花のしろきかがやき

六月の風かぐはしき熟れ麥の光りの中の故里の家

一秋をおもひつくして吐く息の紅すさまじき蔦の眞ごころ

水谷比呂志

八十八夜まだ出揃はぬ麥の穂にさやさやと快し海より吹く風

山腹を移る素早さ陽の翳はすでにふもとの村をわたれり

水谷信吾

蔦かづら朱に染まりし斷崖をはるかにつたひ落ちてゆく水

水谷香畝

枯れ草に冬の日ざしのみちゆくを心さぶしく我は見て居り

水谷貞之

朝時雨妻の作りし瀬戸島のはうれん草は青みそめたる

水 溪 峽 村

さびれたる舊道ふるみちは行く人もなし手折りてかへる山吹の花

水 沼 達 哉

雨脚の及べる見れば川淀のみどりの色は涌き立ちにけり

この命死にゆくものと知らざらむ珠算の加法兒は聞きに來つ

枕邊に遊びて兒等はいささかも父の命を疑はぬらし

血を喀きて口腥し飲む水の咽喉のどに立つる音のけ寒く

いみじくも命ありけりうから等と冬至南瓜を我が食うべつつ

可愛ゆければ遠ざけてゐる子供等の此頃父を見る眼冷たし

枕邊の屏風除らしむ庭さきの景色はただに一面の光

月夜なりと妻は言へども仰臥して見上ぐる我目届かざりけり

水野詩華湖

寄合の席にありつつ思ふ事言ひ得ぬ吾は貧しかりけり

畑すみに深き穴掘り冬越の大根を埋めぬ寒き一日を

たちこめし霧の中より鑛石運ぶ鐵索の籠つぎつぎ現はる

喧嘩して泣き來し子供すかしつつ握れる小石捨てさせにけり

水野 栉園

竹田の山中人饒舌讀むときは正しき筆のするどかりけり

水野 薰

北海道の旅

有珠岳の麓につきて傾ける原一面にそばの花白し

大山毛櫛の林の裾を片卷に屈斜路湖の水盛り上り見ゆ

水野 つね

足の立つそは何時の日かいくたびも歩きし夢を見れば淋しも(病床吟)

水野 鈴夫

御來光に槍の穂かげはいや遠き加賀の白山にうつりあるみゆ(槍ヶ嶽頂上)
明らかに言へざる事か恥らひて我れに寄りそふ人のかなしも

水野 榮二

なりはひをもてる女をみまの身の廻りはなやげるさへあはれなりけり

水野 謹吾

夕光ゆふかげに起き伏す山や谿底の蕃社はすでに昏れて灯ひを見ず

水野 美知

すがすがし朝の林にわがたてばこのあめつちは鳥の聲なる
日の照りて明るき道を馬ならばはしらし來るも少女と男
走りゆく馬の蹄にまつはりて白きほこりのまひ上る見ゆ

水野 良一

ソビエト映畫五ヶ年計畫を見る

黒海の荒き波の上に漁りするは何と呼ばれる民族ならむ

水野 來馬

兵士等の張りて行きたる電線に光を置きて春の風あり

水野 準三

夜氣せまる障子を閉してにはかにも遠く思ほゆる木曾川の音

おもおもと雪に暮れゆく庭木越し塀に夕陽光ただよひ消えぬ

己がことはみづからせよと躑けしをわきまへもちてうたがはず子は

この朝をさな手ぶりに靴みがきゐるあはれさは言はざらむとす

水野 秀雄

苗代の水ひたひたと畦にあたる音を聞きつつ夜更けて歸る

水原 隆

天地の物のなべての影をだに見えがたき目となりはてにけり

吾が顔に散るは薄の絮ならむ日向ぬくとき森ぞひをゆく

手にふれし桐の一葉は露けかり落しし杖を探る夜の道

鐵瓶に水さしにつつよき月と看護の人のつぶやくきこゆ

海苔卷きのすしはもうまし現身の眼見えなば尙うまからむ

やるせなくなみだの頬をつたふときわれにいのちの歌生れくる
片端を口にくはへて我が結ぶ帯はももとなまた解けにけり

水町 迪

老母の今日は病みふす枕邊に火鉢を置きて芋がゆ煮るも

水町 佐多雄

傘かしげ添ひくる君が白足袋にはね上る泥が夜目ながら見ゆ

水町 京子

高きより見はるかす湖（三井寺）の夕あかり岬の家は灯をともしたり
たちまち日はかげろひつ見はるかす海に大きな山のかげあり（湯河原途上）

やまもものしげりにかさなる柿紅葉み墓の丘べ月おし照れり
あらしに揉まれ峽間の空をまひおつる青き木の葉をさびしみにけり(湯ヶ島)
うす紅の葉間にふふむ山櫻ひらく朝けをわがおもひをり
あれつぎて青葉にむるる蝶の羽のとびわかれつつ朝あけむとす

逗子櫻山にて

目の前にほぐれむとするぜんまいの巻葉のけはひわれは見にけり
をさな子の手に持たせおきしぜんまいはほぐれてぞゐる薄くれなるに

百草山歸途

夕づく日はつかにさして家つづき噴井の水のたかくあがれる

大熊長次郎氏の葬送

骨瓶の白埴にさす夕日の光りたまゆらあかきをうつつにぞみし

大和室生寺

繁^しみ生^かふる秋海棠の花の上に山のさ霧はおりしづみゆく

信州野澤温泉

われひとり乗せて揺れゆくばす寒し村も屋庭も雪の中なる
よべ降りし雪にうもるる楚^{しもとほら}原くるまのかげのうすらにうつる

三ッ峠

歩みとめて仰ぐ岩の秀^ほ大空のますみの色にふれて高しも
まなかひをおして流るる雨雲のゆゆしき見れば高く來にけり
これの洲のさし出葦原枯れいろに見えまがひつつ散りぼふ墓原(奥田浦)
花の上にさす花のかげくきやかにさやけき月の夜となりにけり(小金井)

志摩鳥羽にて

身をかへし海女は潜くも夕浪に蹠しろく見えてかくりぬ

奈良にて

この道に佇ちて思へばすぎゆきし二十年もなし柳にふる雨

北山殿追憶

明日しらず別れゆかむに時の間も北山殿の林泉にあそばむ

蓮月尼晩年の隱棲の處神光院にて

山鴉なけば起きいで業はしてすがしかりけむ松風の音

松の風轆轤の音にひびきあひておのづから埴はなりいでにけむ

しらたまの埴はろくろに任せつつ聽きすましけむ松風の音

寂光院

寂光院の汀の池の夕さざれ波かへりゆくべきわが身なりけり

人病みて旦暮にせまるときく

とほ國に人は病むといふひとつ世のかぎりと思へばあひたかりけり
今にしてひと目のあひの何ならむひとりおもひてあるべきならむ
その妻がそのまな子らが念ひより死なしめざらむたのみてあらむ

赤城山

この山に夜もすがら月の照りすみて谿のけものの寢ざめてあらむ

鷺山

さしのべし長きうなじや巢に入ると大白鷺の叢毛はけぶる

あかあかと夕日さし來れば丘のへのかずかぎりなき鷺の羽ぞ照る

事ありて思ひ煩ひたりしころ

おのづからしづかなるものぞ來りけるやややに心すみゆく如し

高山の上にたたふる湖のふかきしづけさを思ひ見むとす

さ夜ふけの月かげに見る鏡の中瘦せてすがしきかげありにけり

これの世のさだめかしこみうけざりし人のまことぞいまし思ほゆ

水 本 敏

日々に吾が教ふる道は現實に何のゆかりもあらざることし

水 井 れ い 子

さわやけき町裏川の瀬のたぎち聞きて歩めり會はぬ日ゆゑに

うしろでをかなしきものと思ひつつ濱邊に下る人を見にけり

朝心かなしく下りし廣庭の石に坐りて嘆きつるかも(退院の日近し)

月よみの光とどかぬ城壁かべかげに人はゐるらしはぶきにけり

湊 美 子

木曾人の歌唄ひつつ流しくる筏あやふく岩間を奔る(日本ライン)

湊 盤 雄

新墾の畑營むと谷べりの熊笹原に人火を放つ

山川の淀のまろ石乾きつつ鐵漿てつば付蜻蛉とんぼおほきくし止る

南 う を こ

その昔父が住みける澁川の署長官舎を見てすぎにけり(父逝きて一年)

南 み ど り

向ひ家のジブシーいつか移りしか赤き服着て遊ぶ子は見えず

南 粟 人

一しきり荒れし早ちの遠のきて吹きつのるまの深きしづもり

高倉の神山近き町住ひ月夜に五位ご鷺ろを聴くべくなりぬ

猪垣しじがきの石ならべたる山裾の田の畔に赤き曼珠沙華の花
藤原の大宮どころ掘りあげし土はしめりてもゆるかげろふ絲遊

南 邦 之

生業の合間を門に佇めば身に觸るる風はすでに秋なり

南 大 濱

眼疾再發、靜養六年を経てつひに根治不可能となる

疾やめる眼は内へ内へとみつめさせ求むるもののあるを教ふる
疾める眼は物に囚はれず靜かなる世界を我に見いでてくれし
ありとあるうれひ喜びとりいれて生命のかてのゆたかなるかな
盡十方無碍光にして我みだは御名に無量の壽をたまちいます
掌てをあはす心の世界は萬象を容れてさやらぬ空にかも似たる

南 龍 夫

如何に生きいかに死すべきか曉の空を仰いでまづおもふこと
獄死せしその友の母と語れどもつひに獄死のことにはふれず

スペインの動亂指もて辿りをればその地圖の上に汗は落ちたり

南 唯 雄

瑠璃寶池なぎさの茅ちがみすがれけり耳だちてさびし木々を洩る風

南 正 胤

生きがたき世なれどかかる世の中に生れ合せし張合ひを思ふ

南 森 之

見はるかす熊野の灘のはつるところむくむくと夏の雲立ちのぼる

南 谷 和 吉

朝あけて遠く墓のうねり見ゆ又多忙なる今日はあるべし
事なかりける如くに姉に手紙かきてまた静かなる部屋に坐りぬ
まづしき吾をたよりて來しひとと晝しづかなる錢湯にあり

南谷繁治郎

眞實を諭しきかすがなんぞ悲しき正しき戀もすなとはいははなく(妹に)
つごもりのふけゆく夜を圍爐裡べに佛具みがくも妹と吾は
カーテンをあけて貫へば降り積る雪は臥てゐる我より高し
呼吸面いよいよせまくなり來しか臥てゐてさへも息のせはしき(再發)

峯 百合子

幼子のおもひおもひにゑがけるよこは汽車といひこは猫といふ
黒がねの窓もくさりもくちはててひとやてふものなき世ともがな

月の夜をわれよりさきにゆく人の霧にこもれるはなしごゑかな

峯 日出吉

紀の國の富田の濱の靜けさにわれは遊ばむ雨は降れども

鐵の香を嗅ぎつつ行けば幼なき日住める難波のほとり思ほゆ

峯 村 文人

谷深く岩にくだけてきほひ立つ春の荒瀬のひびき太けれ

蒼ぞらをつらねていゆく戦闘機向きかはるとき朧光りたり

編隊機春の霞の山かげにとどろき入りて村はひそまる

赤松の枝にからみし藤蔓の實はすでに長し秋となる山

踊る手のしろさを見せて吹く風は身に沁む秋のものなりしかな

くひあがる鋼索鐵道の窓にしてたちまちあかし漆もみぢ葉

山は今は青葉となりぬ遠く住みて山の蕨を思ふ日あらむ

さびしくも咲く日となりて咲くならむ秋風の中の山やま獨ひとり活どの花

友とゆく冬木の山の木の間より光を見する犀川の水

あをみつ つ幾重の谷の落ちあへる入山いりやまとほき白雲の峰

蒼白くすももの花の咲く軒に山々寒くそぎ立ちにけり

繰りいそぐ糸の小杵を金色につや立たせたる青桐のかけ

東の淺間が嶽に立つけむり嘆きを惹きていまも霞める

泥蛙くぐもり鳴くや眞間山の若葉をうつす苗代の水

掘りかへす土に蚯蚓のたぐひだに棲まぬ都をさびしみにけり

てきばきと事務をさばきて騒音の中に氣味よきこのをとめたち

よき話聞きて受話機を懸くるとき營業室はとみに明るき

我若くルソーを讀みしおもひでの山の家にも春や來ぬらむ

高原の夕日の中に町並の白壁見えて風草を吹く

窮まれる冬の信濃の大空をかき晦まして山は火を噴く

寄る雲もなくてみ空にとがりたる彼の嶺此の嶺の雪のかがやき

山鳥の枯葉色なるしだり尾に冬うとき日の光さしたり(動物園)

下野の白根の山にいちはやく降りし雪かも湖にうつろふ

千曲川とほく落ちゆく瀬の音を夜々のまくらにおもひつつ寝む

信濃にはきのふか雪の降りつらむ櫻にさむし北よりの風

夏ふけぬ村の小みちを藁草履ひそかに踏みてくるは誰が子ぞ

ふるさとや朝の雲寄る前山に黒々として松はまぎれず

菫山の城あとどころ桑の葉のおどろくばかり生おひぞしげれる
ゆふだちの降り過ぎぬれば葡萄園さしも青々と實をつけにけり
雪を待つ秋くれぐれの山明り遠くと邃ふかきに涙落ちくる

霜さむき朝を眼覺めてわがおもひ秘かなるものにまづ觸れむとす

峯村 英 薫

そのむかし皇子みこなやましし荒山の伊吹は雪の夕あかねせり

大阪南郊臨南寺の竹林秋深うして白鷺大いに集る

竹やぶの秀はに靜まりてゐる鷺はつばらに白し朝あけきたる

高野 山 二首

このやまの外八葉をふりめぐる後夜のしぐれをおもひつつ寝む
わが心草木のごとく寂かなり慈悲淨光の露をあびつつ

霧はあれど比叡橋頭の天皇旗燦々きらきらにさやにぬきんでて航ゆく（大阪灣觀艦式）

掃きよせて露まだ重き梅落葉庭火寂かに燃えつづきをり

峯村清江

悔多きところに沁みてあはれなり火山の雪の夕焼の色

風邪ごちち五月の晝のうたたねに母は布團をかけてくださる

幼なくて母のたもにかくれつつ聞きしを思ふ順禮の鈴

盥をあげてやうやくしるき身の疲れ庭の杏も熟れそめにけり

ゆくものをゆかせてしまひて寂しくも冬を急げるふるさとの山

白雲のとぎれてはゆく空高しばらりばらりと稻を扱こく音

わが庭の梅一本を見るものに昨日も今日も衣縫まひいそぐ

春おそき山の出湯にゆあみして母と聞きたるうぐひすの聲

嶺内 六步

はひのびてひさしにとどく朝顔の花にまじりてへうたんの花も

嶺田 俊雄

妻病みて干したるままの子らの衣にこの朝白く雪おきにけり

蓑部 哲三

腰椎カリエスを病む

黍畑を吹き來る風に起きいでつギブスにこもるほてり冷えゆく

窓ちかき蘇芳の黄葉もみぢ夕ぐれてギブス乾かす身は冷えきりぬ

ギブスの香染みし蒲團を陽に當てて大掃除すみし室に移りぬ

病みがちに籠りのみ居てなにもなき庭に萌えなむものの芽を待つ

きぞの夜に雪降りしとふ霧島は麥田の涯に雲がくりにき

宮 柵 二

額縁屋の歌 五首

木地の稜磨りおとしつつかなしくて生くらくはたのし和み來につる
さむざむと曇り硝子に影はゐて夜すがらを人の縁磨くらし
額縁の影亂雑に重りあひまさしくを夜の更けにたるらし

すでに肺を痛めてゐた子(少年工人)だつた

ふとして上ぐる笑はしづけかり命短くこの子死にせむ
青金箔の色冴えてきぬ簡朴の模様に匂ふ深みは見るべし
ひた壓してわれを疲らす夜の障子白き一色に來る音もなし

故 郷 二首

夜に聽けば矢振間川の川の音の魚野川に注ぐおときこゆ

燈をつけて根小屋へわたる人ならむ川下のくらき橋ゆくが見ゆ

風後をひととき明る夕日向山茶花は寒く檜葉に隣りぬ

田舎町堪へがたく蒸す日の鬨けを甲だちし鶏の聲徹りくる

目覺めては隣の人が屋根の上に鶏飼ふをかなしみ思ひぬ

晝間見し合歡のあかき花のいろをあこがれの如く夜憶ひをり

夜夜を紙帳にあをく來る月の光冴えつつ缺けゆくらしも(山寺)

この國の湖に音なく朝明けて大津と思ふ町の躉見ゆ(汽車にて近江を過ぐ)

白きバス何事もなく過ぎし後の炎天の道をわれは横ぎる

草の葉に和ぎつつしづけき冬の陽や霜月半ばの途を來て對ふ

霜風ぎのふかき朝なり音鈍く材木が倒れし音して止みぬ

朝より撮影所の音楽きこえ來て寒き木の間をたのしくするも

寒の土つちに嘴はしつくる鶏とりのくぐもりて啼く聲こゑならし啼きてるにけり
清あやらけく笑あはひて空を仰ぐ兒の幼わかきは眼まなこ盲こしひてありけり

法隆寺寶藏伎樂面

かなしびは隱かづさふべくもあらずして泣なきて笑へる一つの伎樂面
汗拭あせぬぐきておもひさびしく出づるとき伎樂面の笑あはひを背後せごに感あず

宮 優 梨

をさな兒の夕暮ゆふぐるまで草叢くさむらに遊あそび恍ぼろけたる顔かほのしづけさ

宮 内 敬 四 郎

音ねにたちて雪解ゆきげの水みづの這よひくだる山路さんじゆは明あしひとり越こえつつ

宮 内 浩 二

みごもれる妻つまにも日毎ひごと働はたらかしめこのまづしさはつきぬかんとす

宮内麻茅郎

鹽量るわがかたはらにこほろぎの啼きそめて夕べ店のさみしき
たけ低き妻が手をのべ棚結ひし釜場の葡萄つぶらに光る

宮川佳胤

斷截機の響音止まりたり男二人出で來て大きく背延びしにける(工場の晝食時間)

宮川喜一

橋詰の大建物が落す影ななめに寒しこの橋の上に(大阪中之島)

宮阪古梁

靜かなる夜にもあるかな風絶えて月おし照れり青葉の丘に
康國寺和尚留守なる大伽藍秋旱りなる庭の秋草

宮崎たき子

かがる手に息吹きかけて洗ひ物ひろげゆく間に凍りてゆきぬ

宮崎 康一

熱ひきて心やはらぐ思あり夕日明るく障子にあたれり

月夜雨の屋根うつ音はもの書き終へし氣安さにをりて靜かに聞きぬ
よき雨に蘭は久々うたしめて安らに父は寝ねたまふらし

宮崎 茂久

水鳥が飛び立つ時に鳴きし聲は山の湖水に響き渡れり

借馬を返して歸る道端の草叢中に螢光れり

滿洲に移り行きたる弟を木枯強く吹く夜は思ふ

宮崎 靜思

桶の代支拂ふさへや言荒き人を寂しみもだし聞き居り

貧しければ心尖りてあるものか荒き言葉に耐へて吾居つ

父と居れば思ひ足らふか仕事場に日もすがら居て子はおとなしき

届け行く杉の柾目の風呂桶の良きをいはずに値をねぎるらめ

思はざる桶の注文を受けし朝おのづから心ほぐれ居たりき

渡りとして同職の人を訪ひ食或は錢を貰ひあるくものあり一首

飯遂に食へずと歎く同業の額ひたにきざむしわを寂しむ

桶のたぐひ世にへり行くをなげきつつ四十路に近き齡重ねぬ

宮崎りく

勝手より入れと人言ふ目見まえには早くも犬に劣る身となる

ひそめきて人の語れば我れを追ふ話なるかと心をのく

佇みて死など思へる暇にも背に受けてありののしりのむち
夜となればともる灯にすら我が心のぞかれじとてくらがりにある
たちまちに胸せまり來ぬ遠山を見る心もてゐんといひつつ
病むことを親には告げじつばくからも來て我が家のたのしかるべし

宮崎 修介

満天星の花咲く頃となりにけりたはやすからぬ思ひ深しも

落葉松の林に鳴きし山蟬の聞えずなりて空とみに蒼し(蓼科温泉)
吹きつくる硫黄くさきをこらへつつ火口を寫す鏡をのぞく(伊豆大島)

宮崎 龍介

裁判所のうた

すらすらと罪狀を讀み死刑ぞと判官は言ふ口早やに言ふ

盗みをば常習とする彼なりし世に出ることの恐しと言ふ

三年の執行猶豫となりしよりおでんを賣りて渡世する彼

宮崎銀次郎

手に餘る竿のたわみを引きがてに引けばあらはれ大き鯉をどる
柱なる籠の鶯なき出でぬ人と對ひて深き静けさ

宮崎徳

小澤常赤石岳に入りて炭を焼く

あめの魚あまた放ちし澤のへに小屋を作りて炭やくといふ
鐵鑄の匂ひまじれる埃風ゆふ暮の街に流れゐたりけり

宮崎紫水

緑濃き松山ぞひの撫養の町細長くして鳴門につづく

宮崎智恵子

晴れいよよきまりたるらし盆栽棚の腐木の水氣あがりつくしぬ

宮崎芳男

曉の巨艦の坐りずつしりと租界を護る砲口の冷え

高々と秋大根を積む馬車の長くつづきて澄める秋空

宮崎興基

一めぐりめぐりて又も眺め入る南圓堂に照れる秋の日

宮崎篤

濱砂原さまよひゆけば干鰯場に干鰯のひぞる音ぞかそけし

いりつ日のなごりのひかり沼岸の枯高萱の穂なみにあつまる

老いてなほ人あげつらふこの友のにがにがしさに身をかへり見ぬ(同僚)

宮崎 幸子

あかときの空明りもつ庭の土見れば一夜を苦しみしなり

愛しきやし吾子をそばに寝かしめてつくづく見れば吾に似たるかも

むづかりて吾が顔を打つ幼子の手力つよくなりけるかも

手を拍てば吾が子も眞似て手を拍つにこの世のものは早やあはれなり

ものもちてひとり立たんとする吾子の眞顔をみれば笑はれざりけり

宮崎 守

粟つくれど粟はあきなひどんぐりを食ひて火田の民は生くとふ

宮澤 虎雄

飛びまへる蠅の羽音のしみらなり日向はぬくき初霜の朝

宮澤 紀美

亡き夫つまの忌日のけふを母にさへ心なじまず過したるかも

宮 澤 進

納屋口の垂氷たるひを低くくぐりつつ眞柴かかへし妻が出できぬ

宮 下 安 太 郎

土手の上に繭車くるま挽き上げて汗拭きをり河原一面月見草の花

宮 下 芳 文

ま向ひの山に冬の日入りてより空はいよいよさやけく澄めり

宮 下 仙 之

日本海にむかぶす雲に沈む日はあかあかとして大きかりけり(白馬山上)

宮 下 菊 二 郎

艦體の大方沈みゐる潜水艦そば過ぎながらつぶさにわが見つ

山の根に青草食^ばみて遊びある身ごもり馬は一つ二つならず(赤城牧場)

宮 島 正 美

ともかくも服の月賦は終へてけり子がもてあそぶその領收證

宮 代 直 吉

ほととぎす裾野の晝を啼きつづけ梅雨空ぐもり富士は見えなく

甲斐の國の都留^{つる}の郡^{こほり}にこの道は通ふといへど吾は越えがたし(相模定村三保村行)

蘆原と青田と堺ふ畦の木の合歡^{あむぎ}花咲きて夕茜さす

今日もまた糸瓜^{へちま}の花は落ちつづけ一夏^{いちげ}を籠る心倦みたり

豆刈りて畝間さびしき瘠畑の秋の早^{ひたひ}を咲く棉の花

刈り豆の稗積^{から}まれたる田の畦に胡麻の花咲き秋いまだ暑し

明日漬くる青菜積みたる板敷の厨の隅の夜の寒きかも

冬ざるる鳴立澤の水尻は濱邊の砂に吸はれつつ消ゆ(大磯海岸)

宮 田 植 徳

卵巢の成熟しきりしかまきりの狂暴性はをののかしむる

かまきりが胚子に被せて樹枝（木だ）におく角質様の黄いろき凝體

精悍に地をまたぎ踏む將軍の角ばりし顔のたのまるるかな(非常時)

無表情の重く大いなる意志をおもひ東郷元帥の像をかかげき

雲板（うんぱん）に齋（とき）を告げしめる寺にゐてわがむらぎもはつぶさなるかも（黄檗山萬福寺に宿る）

ひとすぢの瀬をつくれどもたぎつともあらで日の澄む高原の水

音にぶくねばり鳴りするいかづちの雲にむさるる日まはりの花

雪解川木の芽の澤をおしくだる六月の日のうぐひすのこゑ(北海道にて)

山に寝てわれらかたみに胡桃（くるみ）の實ただに噛み食（は）み猿にかも似る

神山のあらみ靈より授かれる百草ぐすり脾胃にしみ入る

敷き油紫煙をあぐる鍋のうへ臓もつ炒りて薬喰ひする

宮 田 清 文

明け放ち晝餉とるまも背戸畑の熟れし穂麥のしろく匂ひ來
蒔き終へし麥畑なべて月照れば畝幾すぢの敷藁白し

宮 田 芳 子

玉のごとつゆけがれなきをとめこそ君がまことをささぐべきひと
思出を玉といだきてこれの世にあらむ限りは君をしのばむ
山の井の水は冷たく澄まむとす君よふたたび亂し給ふな

宮 路 緋 砂 詩

鉛筆をなめなめこの兒書きにけむ稚なき音信讀めば哭かるる

網小屋の蔓に松葉散りしきて陽にひかる見れば秋は寂けし

繩跳びの繩にかかりて交代る兒の頭髮吹きすぎる雪もよひの風

宮 永 春 琴

哭くほどのおもひにあらねさりながらいつまでかくてあらむとすらむ
おほかたにふけゆく秋やかまつかの我より丈ののびにけるかな

いささかの苔もしめりて苔寺の岩はみながらあはれといはむ(洛西西芳寺)

宮 野 辰 夫

菓子果實子よりは先に欲る父をあはれと見つつ吾は柿むく(十年を病む父)

宮 野 貞 男

赤城嶺を登りてゆけばたたなはる五百重の山に霧うごくみゆ(赤城山野營)

ほのぐらきランプの下に日焼けせし顔よせあひて黙し坐れり(道を失ひて山小屋に宿る)

宮野 薫

入營せんと出で立つ日教へ子の一人車中まで來りて離れず

何處までも附いて行くと云ふ子供をプラツトフォームに抱へおろしぬ

宮原 茂 一

荒れだちし遠嶺の雪はゆふかげのながるる空を黄にぞ濁らす

鉢伏はちぶせの大嶺おほねの裾のかたぶきは秋風の野となりてひろがる

けづられし雪山襷はかたぶきてゆふづく日にし青く陰なす

山鳩の眞太まぶときこゑは樹この芽吹くあしたの谿の靄をゆるがす

眼まなざしの澄めるをみれば我われは願ふ世のにごりには染まで生きよかし

夏空のひかりの奥に雪かづく陰くらき山ありて我をうかがふ

空のはたて日のあたりあるかの山に陰くろみきかげあることをおそるる
さかんなる夏に負けじと大蒜たんにの臭きを焼きてけふも食ふなる
たくましく生きたしと思ふ向日葵は光はげしき日のなかに咲く
秋風に吹かるる石は草のなか石に心のなしと誰たか言ふ

宮 原 秀 山

何氣なく告げし言など子供等は母につたへをり心ひきしまる(懇話會)

宮 本 松 雄

夜の村を歩み來にけりうみきやうの香しるきは花咲けるらし
病む母のみとりに幾夜ねむらざるまなこにしみて栗の花咲けり

宮 本 利 男

畑中の道に吾を追ひ越すおつせ嫗あり黄色き風呂敷を持ちて足早し(多磨村)

午後の日はぎらぎらまぶしはるかなる四方に垣なす火成岩の山(伊豆大島)

宮本榮一郎

山多き田舎の町に移り来て朝はつめたき井戸水くむも(千葉縣松尾町)

曇り日の海のかぐろさここに^ろして岩といふ岩に波打ちかぶさる(犬吠岬燈臺)

一切は食足りて後のことなりといふ人の前に心壓おさされぬ

そのひとの白くか細き指およびなど今はおもかげの中に數へつ

宮本清子

秋となる日和ととのふ昨日今日ひと夏つりし蚊帳干しにけり

ふるさとに稀に歸りて誰彼の話をきけば誰もまづしき

利根川と海と寄りあふ河口にひもすがらなる潮鳴りの音(銚子)

宮本利彦

我が魚籠いさごに列べ數ふる鮠はよの背の深き碧色は眼に冴え冴えし
降りつつ車窓より仰ぐ妙義嶺の岩間にあかし夕しづむ空
山清水汲みて沸せる外風呂に浸れば苔の匂ひかそけし
蒟蒻こんじやくの搗き粉ただよふ川端の小笹は白く道につづけり
トラツクに山と積まれし下仁田葱行き過ぎてなほ香のただよへり
山宿の夜風は寒し目覺めつつ靴下履きて寢つがむとすも

宮 元

鶏とりを飼ひ花を作りて肥後の國球磨くまの郡こほりに足るいのちかな
かたはらに檳榔の葉の團扇たんせんなどありて暮れたる鳥の宿やどかな
とどろきて高原わたる砲聲ほうせいのひまにも鳴きぬ山ほととぎす
しづかにも白き雲などかたはらに湧くとぞ思ふ君と語れば

わだつみの沖の波より高くして彼方に青し雲仙が嶽

宮脇武夫

盲ひて

樹の枝が亞鉛とたんの塀に擦れ合ひて熱き夕ぐれわがひとし居り

日ぐれより夜ふくるまでに蚊の群が人を怕れぬ幾時刻とまかあり

栗の樹に青くむらがる毬いけを言へどただに吹きたつ風の音われは

都川勝

山もとの日向をゆけば春の日に乾きて白き笹のはしり根

六車勇

但馬田久日の海

沖つべは荒るるにかあらむ海鳥は陸くわをしたひて鳴き寄りにけり

船の上ゆわが見し丘に夕べ来て子ろの墓所とさだめてさびし(亡き兒の墓を定む)

おくつきの笹生かそけく鳴る音は海より霧の流るるらしき

月の夜の雨かときける霧の音蘆の秀はむらを吹き流れたり

この深夜荷役人夫の掛聲のさびしくとほるくらき海づら

風焼の雲影はやし竹藪の秀ごしにくらき海見ゆるなり

春いまださむき光をふふみつつ海をながるる雲しづかなり

日本海冠島にて

荒磯を洗ふしぶきにぬれつつぞ鶴はつぎつぎに眼近くとぶも

舞鶴要港に聯合艦隊入港

將官旗はためく軍艦ふねに大砲のねぶく光りて暮るる海暑し

日本海の漁村にて

月明き入江の船ゆしはぶきのきこえ來るなり眠られぬらし
天の川かたむくはてに陸（つち）の灯は遠くなりゆく浪のうねりに（夜釣）
夕時雨すぎし海づらひえびえと宮津はとほく灯をつらねたり

さぬきの海岸の家に歸りて一首

雷遠き海原の上ゆ來る風を二階にききて午睡たのしむ
海鳥の聲がとほれる炎天の青き光りはしづかなるかも

海水浴場

砂の上ののびてばかりとかんぼちやの大きな花咲く海へゆく徑
にはか雨すぎし砂地に花咲きて濱ひるがほの花はさびしき
ときすぎし濱豌豆のむらさきの花もまじりてひるがほ咲けり

武 笠 曉

峽田は段きだづ作り長くつづけければ下の谷田やうたの水光り見ゆ(奥多摩)

武者 汀 焔

見はるかす藏王連山に没日いりつのいよよ落ちむとして秀はさききびしき
川口のかすみに徹る響あり土堤の野薔薇の白き花むら

武 藤 隆 一

この友も貧しくありて靴下はつくろひはけり思ひつつぞ見つ
小さなる火種を吹きてゐるわれのこころはなにかたのしきごとし
トタン屋根にタールを塗れる男ゐて残暑はつづくけふは二百十日

武 藤 阿 岐 良

ぬかるみを見透すとわが止りたる足音に誰か二階あけたり

武藤善友

曉にわが起きて突く鐘の音いまだ静けき町に響かふ

いづくしき花と思へど沙羅の木のはなはふた日をたもたざりけり
つかの間をうつくしくして咲き落つる沙羅の木の花見れば悲しも

那智より舟見峠を越えて熊野に向ふ 四首

夏の雨通り過ぎたる山路に垂りの短かき白藤の花

峠路は行く人もなし虎杖いたどりのおどろがなかに橋朽ちにけり

いたどりに取りすがりつつのぼる道果つるともなく夕さにけり

夕雲は遠とちの山邊に静もりぬわが足たゆくなりけるかも

蛙鳴く母が家居に歸りねて馬のいななきにめざめつるかも

この山に放ちゐる馬は道の邊に湧き出づる水を飲みに下り來る
冬山に放てる馬は雪掘りて残れる笹を食ふとこそきけ
いにしへの人ら佛をまつりけるみ山にほふ鈴蘭の花
ひそやかに佛につかへまつりける古への代を羨うらやましむわれは
杉山にひと日ありける雨雲の立ちのぼりつつ夕づきにけり
裏山の雨に濡れたる杉の秀たけに入日の光しばし照り映ゆ
夕風の入海に浮ぶ鳩の群天には虹のまさやかにして
夕ぐれのひむがし空にたつ虹の下にたたなはる渡鳥山脈

福 山

この濱にま近く過ぎてゆきし船いづく通ひか岬にかくる

惠 山

歩みとめて仰ぎ見にけり天つ日は虧けゆきにつつ光失ふ
食甚の暗き山邊に鴉らの啼くは夕べに似てあはれなり

八甲田山より葛温泉に至る

高原に草食む馬も嘶くもおのづからに群をなしゐる
高原にほしいままに馬群がれり食足るものを見るは和まゝ
神の御田みに水をやうやくぬき出でて藺草ひぐさほそぼそし穂ほにいでにける
晴れ渡る八甲田大岳のうへにして雲のおりゐる岩木いわぎに對たいふ
蟬せみの聲ここに聞かねばみちのくの山の高くに來しとぞ思ふ
睡蓮の花の間より浮びたる蝶てんとうはしほし泳およぎて沈しずむ

十和田

川のうへに瀧細々と幾すぢもしぶきをとばす青葉の中に

奥入瀬をさかのぼり來て寄り合ひし人らとわたる雨の湖
湖のあるるほとりにひと夜あけ昨日歩みし道ひきかへす

武 藤 勝

めざむればま裸にしていねてをり坑の暗きにいまはなれつる
坑内の掟はきびし母戀ひて泣く乳吞兒をつれゆくべからず
腹這ひて坑内いでしわが妻の汚れし乳房にすがる乳吞兒
よごれたる妻の乳房に吸ひつきて兒が笑ふにぞ胸つまるなり

武 藤 俊 一

めづらしく行軍兵のながくつづき吾が村の路にほこりあがれる

武 藤 白 咲

厩舎より出されし馬は高原のしづけき朝を嘶きにけり(備後七瀬原)

無羅多 正健

握りたるはじめての手のぬくもりをひそかおもひて離り來にけり

向井 宗直

赤城山

深溪をへだててむかふ山かげはひととき迅き霧にかくれぬ

みづうみへ降りゆくみちは白樺の林の中にあかるかりけり

向井 清胤

み佛に供へまつると子の身長たけにあまる芒を刈りて持たせつ

桂川

ここにして雪降りこむる谿底にとどろと騒ぐ瀨の音きこゆ
吊橋をわが行きしときふかぶかと澄む青淵に雪降りてゐし

向林菊男路

半年の入院中に訪れし人の數はも五百五十四人

向山敬治郎

伸び早き朝顔なれや添竹をしのぎて先は曲り初めたり

小作米納めてかへる道のべの野菊の花は今さかりなり

六日分の米の袋を結ゆはへたる背負子もかろく我らいでたつ(炭焼)

夕まけて炭焼く我にききなれし山雀やまがら鳴かず雪のけはひす

疲れたる夜床に足をのばしつつ兩手をあげて太き息せり

向山雅重

桑かぶれにくびのほてりてねむれねば濡れ手拭をまきてねにけり

對井滄人

かにかくに勤務を終へてうらやすし夜店は軒をならべそめたり

いささかの霽れ間とおもふ月かげや捨て蠶ひそかに地を這ひにけり(梅雨禰)

裸となりし桑のともずれ夕まけて寒けき音の野に満ちにけり

吹き晴れて露霜しげき朝明けや落つる木の葉も無くなりけり

暮ちかき光にともなひ出づる風ならひとなりて寒けかりけり

しみじみとこの夜更けつつ人と馬とただに黙して通りたりけり

おほどかに常あるべきを時として子等にけはしきもの言ひにけり(述懐)

むかし來てあはれと思ひしこの寺の撫で佛いまも撫でて人をり(某古寺)

高架線成りし新装の名古屋驛にて

風明るき舗道眼前にひらけたり地下と思ひし驛の出口に

麥谷亞星

うつろなる笑ひにもあれ聲立てて笑ひてあればいとこころよし
老ゆるとはかかることも來るものは頼まれがたく去るものは惜し
漸くに思ふ甲斐なき世と知りて邪よこしまごととも惡たぐまずなりぬ
啞おしに言へ盲めしむに見よと言ふごとし吾には問ふな行末のこと
あはれなる此男かな鷄とりの如くつばさをもてど飛ぶすべ知らず

宗 像 麟 治 良

虔つづましくいのち生くべしふるさとの山は幽しづかに空あかりせり
ひそかにもいのちかたむけ戀ひをりしとし子は嫁けり吾はかへれるに
草わけてひとり來れる山窪に澁き地梨をわが食はみにけり
山がはの鳴りひびきつつ夕ぐるるこのひとつ家に代々を住み經ぬ

宗 友 一 時

寢桑やりすみたるらしき隣り家に雨戸の音す今寝るらむか

村磯象外人

嗽ひすとあげたる顔に近々と葡萄の葉裏かさなり合へり

對岸は朝の日和にしろじろと川原の石のすでに乾けり

とりよろふ山のかこみに空明り照りあひにつつ暮れ残りたり

裏日本の秋晴れ渡りわだつ海青鯖色に澄みぎらつけり

海よりのかぜ吹き曝す砂浦はひろびろとして風あとの皺

月の出に峽の暗がり深まりて山の背並は涼しく光る

照りあつき夕日の名残り空にありてこぬれはなるる油蟬一つ

田の中に降りたまりたる水漬雪ところどころに浮きて白しも

火桶には炭の火となる勢ひの音をたてつつあかつき寒し

冬となる空は明るく晴れわたり合歡あいかんの實莢じやくの木に残るなり
坦々たる舗装道路の屋敷街ながき春日は暮れ惜しむらし

村川 益子

山澤にあやめ花咲くむらさきに吾が元結の色は染めまし
軒つばめ帳場格子につと入りぬ裕すがしきほどの朝なり
遠里の野火の焰のもゆるにもいまはた何と告げてやらまし
はちす田の光となりて一點の白さも清すがし下り立てる鷺
白萩のたわみにたもつ一しづく誰が眸まなこよりこぼれけるらし
すいと出て二筋三筋すすきの穂紅がらとんぼとゆきかくゆき
寝てけさの曉となる大淀の艚聲さねの上の秋のかりがね
立ち枯れておどろにさわぐ草木さへあるがままなる冬はしたしき

村上成之

富士登山

はろはろと石路に生ふる虎杖いたどりの青きがあたり雲這ひのぼる
久方の雨のを歇やみに見放さくれば三日月の湖空うみに浮べり

明治天皇御大葬 一首

山城は國のまほらば桃山をとほの宮居としづまりましぬ
今日といへば春日の光あらがねの地つちに透りて草は萌ゆるかも
松が根のを笹が中に春の日の光とほれか山蘭咲けり

大正大嘗會

神ながら神を祭らす大嘗おほはにへのいかし此の夜を霜おき渡す
大嘗のいかし夜更けて天と地とい寄り相合ふ神天降あるらし

今の時は神代に通ひ大嘗の御饌みけきこしめす大君と神と

大嘗會賜餐 一首

草中のかそけき臣やつてあなかしこ御餐みあへたばりぬ天つみ餐を

我が外に人のふまねば廣前の雪しらじらと玉敷けるはや

神山の夜明を待つとしばし來て斑雪はだれ踏み立つ巖櫃いわかが本

伊香保呂のあしたよろしも虎杖いたどりの赤き莖立露にぬれ居り

伊香保嶺の谷間ゆ出づる石河原水もながれず茱萸の花咲く

岩清水くりやに引きて山獨活やまうどと桜つらの木の芽と浸してありけり

岩山に片そへ立てる温泉ゆの室は馬が仔と居る厩につづく

雁坂峠 三首

しみ生なまふるみ鶯すずが上に白々と沙羅さら雙樹さうじゆの花散りて露けし

山霧の晴るる梢の露を重み堪へず散るかも沙羅雙樹の花

深山路は物こほしさに沙羅の花の散りし花びら拾ひてもみつ

富士の嶺は山とはいへど天の原高く來にけりと思ひけるかも

夜を越ゆる伊香保山峽道盡きてほのぼの立てる竹煮草の花

故郷の道のべにして採りきにし黄蓮わづれんの花咲きにけるかも

故郷は山深ければ山草の黄蓮咲けり苔路靜かに

黄蓮の花咲きしかば故郷の苔の細道思ひ出でつも

枯々のさ庭の土に莖立ちて二本咲きぬ黄蓮の花

山草の芹葉黄蓮我が庭に細莖立ちて花咲きにけり

村上義一郎

工場内の人の關はりのくさぐさのうるさき事が生きゆく術か（工場勤務）

無錫は太湖畔の街、附近に名所古蹟多し

遊覽のバスに横切る無錫の街紡績が見えて續く桑島

梅

園

(榮氏の私庭にして一山數千株の梅を植ゑ太湖五湖を望む)

咲き馨る梅園の嶺に憩ひ居れば八十八師の喇叭が聞ゆ

村上昭房

越えてゆく素浪のうねりただに碧ければてなきものはてを悲しむ(伊勢灣を横切る)

この溪の逆光線に凍りゐる瀧や落差のするどさをみす(赤目四十八瀧)

ささやけき不比等の墓や藤原もその頃はまだ驕らざりしか(多武峯)

紀淡海峽

しらみ來て海は鰯のにごり潮さえざえしさは身をふるはしむ

海峽はみちひの潮の段落のきらりとふけし秋を覗かす

岩礁にうちてくだけて天づたふ日をいや澄ます浪のとどろき

鎌倉行

鎌倉や五山の霜の鐘ひとつ聞く夜もなくて旅あわただし

須磨

磯をひく波ひと波にゆく春のたゆたふほどの日の戻かな

ゆく春の瀬戸のうしほにうらうらと乗り來し魚のいのちを思ふ

六甲山

三千尺そそりてここに山ひとつ晝を冷えてをりひぐらしの聲

雲さそふひぐらし遠しこの山に有馬とおもふ空をみてをり

村上惇子

蠶を飼ひて忙しがりゐる家の庭栗の青毬おちてころがる

村 上 富 六

潮鳴りの轟きやまぬ海を見て見はるわが眼にわきくる力

吸ひたまふ呼吸もほそりて臨終の名残りと思ふ目を開きます(父逝く)

村 上 静 子

さしよする君がみ頬のぬくとさにとどろく心とどめあへぬも

病み易き君と過さんながき世にたつべき生計思ひわづらふ

常よわき君がみからだをみな子の一生をかけて吾はまもらむ

束の間の陽光をたのみ乾す髪のにほひかなしく室にこもらふ

北 鮮 雄 基 に 移 り 住 み て

山一つ越えなば露國見ゆるとふまことはるばる吾が來つるかも

表書は父にたのみてたどたと書かれし母のたより着きたり

朝川の清き流れに布ひたし朝鮮娘と並び吾も衣打つ

夜の町に花火見に来てうら悲し吾が知る人のひとりだに無く

この汽車に乗りて歸るはいつならむ國のはたてに来て住まひつつ

はろけて逢へぬとふかくあきらめし人びとながらひたに戀しき(絶詠)

村 上 草 三

磨る墨の濃さもかなひぬ書かなむと萬葉集のさきもりの歌

村 上 廉

一つうつ鉦の響かむ間だにもうから相想ふかりそめならず(亡父法要)

おそひ來る霧は深山の樹に凝りて雫しやまず熊笹の上に(碓氷峠)

村 上 瓶 三

炬燵やめてそぞろに佗しけながくもこやれる床に足ふみのぼす

村上多一郎

ものこほしく部屋いでてきぬゆふ月は陸穂をかほの上に光りてゐたり
くら闇にタンクの水の高處たかどより溢るる音もやがてしづまりぬ
山の鳥下りきたらず山脈やまなみはいたくまぢかく思ほゆるかも
わが臥こむる窓まぢかくに幾頭の馬は日昏れて砂利運び來し

村上晴朗

湯浴して裏に出づれば風渡る青田の上に月上りたり

村上清

わけもなく叱りしあとのさびしさよ行火あゑくわのかげに兒は寢入りたり
くるるまでミシンの音のつづきをりざくろちひさく實を結ぶ家

しぐれ雲すぎてしまへば五日月水のやうなる空に澄みをり

村上 義 威

的に向けてかざす双眼鏡の視野の中に蜻蛉とんぼ一ぱい群飛ぐんひべる見ゆ(生徒の實彈射撃)

村上 可 卿

山口縣熊毛郡八代村に鶴の群を見る

啼き交す聲こそひびけ雪深き谷の奥ども鶴居るらしし

冬空の朝のま澄みに啼きつれて高く翔とべよと待ち居り鶴を

酒造りの時とはなりぬ

とろとろと上る醪むらみの高泡を消しあぐみ桶に蓆をぞ捲く

有明の月夜なるべしあかり窓に明るく空の色見えてゐる

酒槽さかゆ酒の垂る音さだまりて今は靜かに朝近みゆく

やれやれと思ふこころの落着きの口に上りてやれやれといふ

村上泰堂

霜枯の空地ひろびろと照りわたりむなしくありしひと日夕づく
雪もよふ雲のひまより日のくれの黄いろうする空を寂しむ

村上新太郎

太平洋横断飛行にハンドン・パング・ボーン兩氏成功

大き仕事なりたるあとの寂しさを次第に深く感じ行くなり

肉弾三勇士を偲ぶ 三首

訣別の念こころのおのひた持ちて鐵兜かぶとの緒寒く酒くみかはす

破壊筒身にまきつけてかけりし時ほとばしりてぞ揚げし萬歳

大君のみたてとなり彈と共にさけてとびにけりたふとくもあるか

落椿糸に通して持てる童が二人寂しく門前に居る(應舉寺)

むねはだけ暑し暑しと言ひたるは昨日の如しさるびやの照り

雪をふむわが杳の音その音は久しく忘れ居しものの如く身に沁む

歌作り餘生をおくり來し如しあはれに思ふ若きよはひを(歌作)

ほてりたる疊の上に腹ばひてちよろちよろ水の流るるを聞く

一塊の固き冷たき石となり野にさらされて過ぎぬ七年(澄江堂七回忌)

關西風水害 三首

地肌のまざまざとして見らるるは何かうつろの如く寂しき

カンナの青い莖立ちが倒れ土塀が倒れ音もこそなく夕日さし居り

重量ある瓦飛び鐵板吹き揚りし一瞬を夕べとなりて想ひ起し居り

鐵砲の音ひとつせぬ山葵田を水はガラスのごとくながる(冬)

村上秀代

練兵場近くに住みて

陸軍廢馬かなしかりけり値ぶまれつつ寒風の中に向うむきてゐる
陸軍廢馬かなしかりけり値ぶまれてそれぞれの人に隨きて去りにける
くづれむとする前の靜寂しじやくさもちつつ白牡丹は佳し濃き藥しやくの色
牡丹雪垂直に降りて無風なり玻璃戸に明る大きな雪片

村木富美子

向つ家の左官は雨の終日ひねもすを古藁切りて過せるらしも

村木清一郎

枯草もやはらかき日のにほひして春のこちになりにけるかな
坂の上に立てばかなたの木がくれの路にわが子のあそびある見ゆ

朝のもやはれあがるとき山かひにあをみとほりて湖は濡れたり(十和田湖三首)

わが前におほきみづらみよこたはり戸來への山の雲はうごかず

山かひの空のゆふ月すでにうつり大野のうへに照りてあまねし

あつき飯に鹽うにまぜて食ふうまさ年たけてわれはじめて知りぬ

馬市に引く馬ならむ夜をこめてはだかの馬のここだく行くも

村 木 一 雄

大いなる人になれとは希ふまじ直ぐなるままに伸び行けよ兒等

むきかけの一つの林檎香に立ちて静けき夜を霽降るなり

村 木 ふ く 子

雞ひななけば陸りくや近きと醒めし子に月夜あかりの海見せにけり(船中)

淋しさに一人馴れ住むわが庭に秋さく花のいつよりか多き

村 木 雅 美

たり水を手にうけて飲む岩の蔭ほのかに咲ける青苔の花(甲斐駒山麓上
友を訪ねて)

村 越 文 吉

義宮正仁親王御命名祝賀式に宮城前にて

朝しぐれ過ぎし玉砂利踏みゆくや心は冴えてひたぶるにあり

廣場ひろばはみ冬のひかり隈もなし騎馬憲兵の一騎ある影

大谷觀世音石佛

をろがむや衣紋のひだもけざやかに平安の世のほひ端はししさ

村 越 友 吉

辨當箱がらがらさせて木枯の夕べ電車を追ひかけて乗る

村 崎 勇

目をあげてなにを求めむ秋さびて稻原遠く變電所見ゆ

海と野づらと日暮の色のしづまれりほのぼのとして人とほるらし

松のうれひとところ赤し陽にむきて頂の鴉動かざりけり

谷を距て向山崖の遙けさよ先に逢ひたる人の行く見ゆ

病める子よ戯るるはあし庭の木に遊ぶ雀もひそやかにあり

明り戸に朝を飛びゆく禽の影このうららかさかなしといはむ

村崎 三斗

潮けむる渚を遠くゆく人の一點となれどいまだ紛れず(千倉)

日の暮れし町をまがればひそかにも寄る浪音の耳に入り來ぬ(保田)

がまぐちに一錢銅貨二つあり朝の寢床にさびしく笑ふ

松風をききつついつか眠りしかさむればやはり松風の音(病中)

村崎 凡人

無花果はいまだも青し葉がくれの深き井戸より水汲みあぐる(小豆島)
青空に浮きて眞白き鶴一羽空を廣みか鳴き鳴き渡る

奥州白河

この路の人ことごとく枯草を背負ひて過ぎぬ奥の女たち
山清水軒より入れて白き障子閉せる中に白を搗く音す

村澤 多計夫

村醫師に子をゆかしむるわが兄はゐろりの縁に銀貨ならべぬ

村瀬 宗之助

雨降りて寂けき夜の交叉點に交通標示機のべるのむなしさ
歸り來て服をぬぎつつ妻がいふ話の筋を聞きそらしたり(ある時)

村瀬登司夫

刈穂山霜置きにけりこの朝を小禽の聲も冴えかへりつつ

村田利明

恣ほじまに怠けしことも足るばかり勵みしこともありしや否や

雨合羽かづきて雨のひた降りに走り出る兒よころばずゆけよ

つね父の坐りてゐたるところにぞ今宵は吾のをりて飯食む(父逝く)

山峽吟

灯のともる頃より出でて歩みぬし村のいづくも谷川の音

越後路へつづく高嶺にのこる雪夏過ぎゆかむ朝かがやく

草鞋はきてこの山峽を父と越えき父がまにまにやすけかりしか

川音につきてひさしき路をのぼりせまりし山の草に觸れゆく

村田 豊成

梅雨じめる夜更往診よりかへり来て心さびしく妻の名を呼べり
夏ながら霧島の宿は涼しけれ遠くも來しを子らのよろこぶ
鑿^{つみ}打ちて骨くたく音に泣きさけぶ吾子^{わがこ}の頭^{かぶ}を押へて居りぬ

村田 豊作

我ままも矩^{のり}を踰^こえずと宣^のりましし聖人^{ひじり}の年に我なりにけり(古稱の正月)

村田 豊雄

炎天の晝かげろふに薬^{しよ}くろき鬼芥子の花のむらむらと咲く
ひでり雲ぢつとうごかず亞麻畑の熟れいろあかく空につづける
梧桐^{あまぎ}に雨^{あめ}逆^{さか}しるなりけさ出羽の秋をつげこし小包の栗
秋もはや露^{つゆ}濃^こ葡萄のむらさきの陽光^{ひかげ}しづるる山峽のくに

村田 榮子

外科室の壁にうつれる木のかげのうすれ來にしが消えにけるかも

村田 チヨノ

亡き夫を憶ふ 四首

月光つきかげの深くさし入る部屋の内につね語りぬし人はいまさず

癒なぐさえまさば楠かき妣ひな庵あんを共に訪ねんと申しし時は軽く笑ましぬ

時雨して冷ゆる今宵を君がため仕立てておきし夜具かさねつる

六萬行願今日ぞ始めてつとめたる在りし御姿胸にいだきて

山水に米磨ぎ居れば赤き蟹とぎ汁の中をわたりて行けり

村田 菊水

修道院のなだら坂道くだり來る道士の木靴はくかかこ音す

噴きあぐる熔岩夜空にかち合ひて火花を散らし地に落つる見ゆ（駒ヶ嶽噴火）
實らざる稻をそのまま焼く炎移ろふ早し燃えこたへなく（凶作）

種子蒔きて足らひ心に聞く雨の降りの強みも親しまれつる

村 田 泉 園

初夏の光り樹海にふりそそぎ風は若葉の波をさわがす
工賃をもらひし今日は悦しくも妻と向ひて錢を數ふる

村 田 光 敬

昇給の銚衡にひたと惱めるとき兒あまたもつ社員のことを聞けり

村 田 百 合 子

花ささぬ青磁の花瓶さむぎむと朝の光を受けてさみしき

子が背丈我と等しくなりにけりブリツヂの昇降は子が肩に倚る（十年の病癒えて）

村田 珠子

きみはよも忘れたまはじふるさとのねむの花さく小さなる家を

村田 順子

縁にさす日ざしはいまだ強けれど空ゆく雲は秋たちにつり

はかなげに一もと咲けり逝く春の芝生の中のたんぽぽの花

村田 末治

コアン岳に登りて駒ヶ嶽の噴煙を見る

見かへれば浮島の如見ゆる山時折くろき煙吐きをり

村田 静子

青木湖と中綱湖とをつなぎ居るその川べりに口をすすぎぬ

村田 章一郎

こだまする山もなければ船笛や消えてあとなし須賀の入江に

病みこもればけながき冬か鐵瓶に湯をたぎらせてけふも暮しつ

夕あさみ麥の畑にふる雨の春はあかるし傘かしげゆく

蟬の音もなくなりけりと思ふさへ身に沁むものか病みて生くれば

村 田 波 江

この山に夫の病を癒やさむとこもりしことも十年まへなり

村 田 光 烈

丈夫の行くべき道をつひに行きて歸らぬ君となりにけるかも(犬養本堂先
生を悼む)

空の鳥野のけだもの如くにも生きむと思ひ涙を流す(隨處生活に入
らむとして)

草原に吾子をおろせば犬ころの如く驅りぬ春陽にまろく

かたはらに子を遊ばせて枯草に寝てあればわれも獸の如し

村 田 憲 一

あらあらしく何か食ひるし梟は獲物掴みたるまま飛び立ちにけり

村 田 り せ 子

呼蘭移住。日本小學校なければ學齡に達したる長女をひとり
ハルビンに出して通學せしむ

飛びつきて來るやと思ひ待ちし子は寮母の蔭にはにかみをるも

村 田 孝 子

試験とて夜を更しゐる吾子の側に火鉢かきたて吾も寢やらず

宿題を今とき得しとはればれしく打笑む吾子よ我もうれしき

病みてより甘ゆるくせのつきし子を叱りつつなほ愛しさまさる

村 田 平 三 郎

千人針の小包解けば乙女子のうつり香あはれほのかににほふ
山裾へ轉びつつ逃ぐる匪賊等にたはむれのごと小銃撃ちにけり
友軍の重機のねらひたしかなりわれ銃撃つを止めて見てゐし
すぐそこにあかとき告ぐる鷄をりて交戦前の不氣味さにあり
命令を待ちて久しく地に伏すに賊馬のいななきまた聞ゆなり
今朝われ等放ちたる火に賊の家遠くに燃ゆるを見つつ晝餉す

村 中 滋

血を咯きて日數は經つつ裏山にはや啼きすめる寒蟬のこゑ
常臥とくわの窓一ぱいの秋の空や思ひまぎれむ雲さへもゐず

念 珠 唱 二 首

朝まだき身はふき清め白珠のつめたき數珠はもつべかりけり

歎異抄よみつっこころ度しめば月まどかにものぼりけらしな

緋葵の花に照りつつ寂かなる日はおもむろに虧けゆくらしも(日蝕)

村野次郎

しらじらと立枯そよぐ前小田の今日も日ぐれて雨のつめたさ
生き難き土に思ひの斷ちがたくおのが田畑と共に衰ふ

日 光

樓門を出でてゆきたるからかさの明るく見えて雨あがるらし

霧の山中湖

かへり見て山の木かげに呼ばへどもわが來し道は霧にかくれぬ

霧ふかみ今見えし花かたはらにありと思ひてしづけかりけり

山の湖に吹き下す霧時にはれ水の面押しゆく風すぢの見ゆ

今日ひと日山に遊びて來し人の街の灯にあひておどろく

店頭の海鼠

いさぎよくならべる鯛にとりゐて生ける海鼠なまこのおろかしく見ゆ
おろかなるむしろ安けし店に賣る黒き海鼠の静けき見れば
いつの世に人の食ひそめし海鼠かも食ひ得るとして食ひし人を思ふ

太平洋上にて

日を幾日越え來し海かしづむ日のはたての空のあかくしづけさ
渡津海にけふも霧れざるさむき霧アリユウシヤン近き緯度にしあるらし

パナマ運河

人の力凝りて地を割き逆卷ける兩大洋をここに會はしむ
大汽船地峽の水をつたひ來り群山が中に高くただよふ

水門より水かがやきてしたたれり船行きていまだ間のなかるらし
地峽さきて群山の中をゆく水のはたて輝きて大洋に及ぶ

僻地の日本移住者

天皇陛下の額かかげまつりとつ國に貧しく老いて國戀ひにけり
よるべなき心きほひて老いぬらしとつ國人とうち競ひつつ
日本を遠く戀ふれど住みつきて人のししむらの土人さびたる

折々

眼にふれて時に光るは春の日に蜘蛛の糸など飛ぶにかあるらし
薔薇のうすくれなるに春雨のしづくするほどは降りいでにけり
春のあらし明るく吹きて松の葉のこぼれてあたるここの障子に
風いでてこのもかものかたらひの親しさもなべて吹き暮れにけり

道のべに咲きむらがりし草木瓜も目につきがたし實ごもりぬらむ

青葉闇ひとり歸るに晝の日の暑さこもれるあぢさゐの花

雨に濡れかへり來れるつばくらの軒にひそけしあぢさゐの花

吹く風にふふめる雨をふりこぼし重くゆらげるあぢさゐの花

町に住み親しむこともなかりつる秋空はれて雁渡る見ゆ

いましてがた霞こぼしてゆきし雲の寒々として夕焼けにけり

松の葉にさす光さむしこの庭もこの頃霜を置きそめにけり

村松 苦行 林

柔らかき消し炭の山が爐の隅に盛りためられて冬を籠らふ

村松 信郎

糲すりの音にまざりて子等の聲はなやぐ家の前とほり來ぬ

杉の幹の尺をはかりてゐし人等やがて檜原ひばらに入りてひそけし（遠江地藏峠）

村松 鍾 一

北海道の高原眞狩岳の麓なる倶知安の町に獨り住みて

この原にをりをりは見る風吹けば風に流れて飛び行く鴉を
雪の原に餌をあさりゐる鴉の群飢ゑたるものの聲あはれなり
一人ある下宿の部屋のうすあかり山の雨して朝あけにけり
夏山は日ねもす晴れてをりをりに白き雲わきおのづから消ゆ
白雲のおりゐる山に路むかひ刈草はこぶ馬のかよふも
高原に雲とびみだれ秋來れば眞狩山は黒くさびしき

奥山方廣寺にて

濱名の湖引ほづい佐細江さほこを入り行けば奥には廣き藁わらの田つづけり

こほしくも岬に立てばみんなみの海のもなかに島一つ見ゆ

村本石雄

能登行

白崎の岬山を越ゆる松の間ゆ荒御子御厨七つ島見ゆ

白崎の岬山を越ゆれば能登の海きはまりもなく押照る荒潮

村山勇

門牌潭の水の落ちぐち岩を噛む波の白きが闇に光りぬ(臺灣日月潭)

村山英雄

谿谷くぐる笈の清瀬の落合ひは水沫たぎちて大き渦巻く

村山茂

木群ごし家棟がくれに見たる帆は大き船體となりて今し現る(臺南安平城趾)

村山俊太郎

まひるまの嵐しづまりてひとときを楢若葉山に陽はさしにけり

村山きつよ

産婆として産院に働く 四首

はづかしき業わざと思はじ白服に産科器械をもちまはるわれ

山吹の花咲く家に生れたる女めの子の産毛うぶげかきなでにけり

心安さいく日ぶりぞ露ながら白菊活くる藥局の隅

世のことを思ひつづけて盛るくすり人もわが身もあはれなるなり

柿青葉すきて明るき日ざしなりもの縫ふ指は紺にそみつ

矢車の花にすがしき青嵐いはけなくして嬉しき日なり

みつまたの花の匂ひのする日なりわきても今日は母の戀しき(亡母)
お互に助けあひつつくらさむと母の忌日にきし姉のふみ
秋となる山の心のさびしさを靜かにわれの守りてゆかむ
蔓草の蔓のすゑまで照る月の明るき方に心向けなむ

村 山 苦 農

行く末を思ふゆとりなしその日その日働き居れば安しと言はむ
働きて食へばたぬしも貧しかる夕餉の膳に言ふ事はなし
灯のもとに夜を更しつつ草履あむ妻の笑は力こもらず

村 山 清 益

もろ人のこぞりてさけぶ萬歳にわが大君は御手あげ給ふ

地上掃射戦闘機の角度よしと見る水銀の如き弾丸たまの連続(實彈爆撃演習)

冷え冷えと雪もよひして空くらし兵士の骨は今朝着くといふ

村山楓葉

大いなる西瓜一つをころばして板間に遊ぶ兒ははだかなり

汝が帽子かけよと吾子に教へつつ部屋の柱に釘打つ我は

村山のぶ子

蔭ふかき夕べの小屋に並びみて牛は靜かに足ふみならず(搾乳場)

村山忠

その昔のひじり目蓮（もくぜん）すらだにもひとりの母を救ひ得ざりき（孟蘭盆會故事）
街中にはなちし螢遠くとばず濡れし地面に落ちて光れり

村井淑人

「勅令下る軍旗に手向ふな」と空に上げしアドバルーンの文字今も瞳めにあり

村井 幽果

肱川を夜ふけてわたす水棹の音のさむけさ霜夜なるらし
廣庭のくれなる牡丹ふる雨に花びら重くかたむきにけり
空はれて吹く木枯や椋鳥のとびゆく群もかたよりてとぶ

秋風の野山にみつる今日をかも部屋にこもりて君おもふわれは(子規忌)

村井 清臣

隣家の潜戸開くる音のして寒行の僧に御布施するらし

村井 義嗣

八束穂の垂穂の稲はみのれども今年の米は亡父ちち食をさずかも

われの亡父に及び難きもの數ふれば一つ二つにあらざるがごとし

村井清楚

小夜ふけて疊を蟹の歩く音そのかそけきは小蟹なるべし

村井潔子

この夜ふけ雪となるらしかそけくも土より起る音を聞きつつ

村井せい

この悔もこの悲しみもなべて皆在^ますべき夫^{つま}のまさぬ故かも(亡き夫を偲びて)

村尾茂明

今にして去年の心をなげけどもすでにありし日の我にはあらず
體^すゑくさき匂を保つ地下足袋をぬぎて今宵も夕餉にむかふ

まどかなる心の友と思ふとき又起き出でて文をひらきぬ

笹やぶは黄に照りながら冬の日是我がまともなる山にかたむく

村尾 清彦

或る家にひきめを感じ居しことを尙思ひをり月明き部屋に

村岡 黑影

別れねと母はいへども妻と兒に別れて何をいのちにはせむ

ふるさとのわが兒がために買うて來し手ざはりかろき夏帽子かな

群山 伸

朝より頭いたみて寒かりし五時間の授業終へてうれしも

濱村ゆ背向そがむの山を越えて行く一すぢの道細くつづけり

紫野 野守

新しき廻轉椅子を買ひにけりつぎつぎ子等の來て腰掛くる

室賀 文武

かさかさと蟋蟀あまたはひのぼる古蚊帳のなかに旅寝せりわれは

室 田 精 次

極度に疲労せし軍馬この町に着きて間もなく死にゆきしとぞ(旅團演習)
襦しよ衣つ着つずに幾日か働きぬこの夏の暑さもこころあたりが絶頂ならむ

陸軍特別大演習に飛行機見學

實戦も演習もただ一筋に死を覺悟して飛びゆくといふはあはれ

室 伏 秀 平

温室の白きを見れば護謨の葉の互生ととのへり自記乾濕計(戸塚千足屋農園)
つ見つゐて何か忘れし思ひあり鴝にほどりが浮びひろきさざ波

すでにして浮びゐたりける鴝どりにふたたびわれの歩みつつゐし

玻璃ひやう邃ふかき魚鱗の光りや紅の藻草も清きよに魚ら來むかふ(油壺臨海實驗所)

ひるがへりゼブラは縞のす敏びんくて早や尾びれ搖る藻草（熱帯魚）ごもりに

室 伏 健 一

岨道そぼみちは傾斜ひだり急なり陽に對むかきて春はかそけき榛はらの房花

室 町 廣

梅雨ぐもり重く垂れつつ夕づきぬ母屋の土間に白起すおと

室 井 弘 志

緑なす鯖の肌の凍りたるを白服の人が皿に持ち來る（冷凍魚室）

目 黒 信 子

城址の藪の小みちにほひくる匂ひを梅ときき分けてゆく

玉藻よる由比ひと浦の磯の香に春は來にけり汐曇りして

思ひつめてぬる夜の床は體さへ夜具さへとみに硬ばりてくる

やみがたきものにもあるか刈あとにひこばえ立つる土といふもの

目 黒 草 水

雷鳴のはためくときし屈斜路の湖は眞晝の驟雨を走らす(阿寒國立公園周遊)

目 良 巧

巖かに立たし給へばこの國の安き思ひの胸に湧きくる(聖上陛下御親闕)

米 良 た ね

生きの身の吾がかなしさや夜になればむせぶばかりに君の戀しさ
一期の望みの如くあひたさの心つゝのは術なかりけり

そむかれて

指組みて落さじと涙たへ居ればはろけく近く過ぎしこと見ゆ
足のさきより身うちはしりて冷きもの突き上りくる頭の中に

つつましく一日ありけり葦の葉の秀先揃へていよいよ青し

いへば言足らはぬ思ひいはざるが満ちし思ひのありてよろしさ

登りつめて葱の尖りにゐる蟻の愚さにして一途なりけり

虚無に墜つる一步手前にゐるわれか仰ぎて空の青さに見入る

去就の心定まらず夾竹桃しとどに雨に濡るるをみてゐる

やりどころあらぬおもひの苦しさにずばりずばりと人にもいふ

かへりみればみな過ぎにけり生き難く歎きしことも生きて過ぎにけり

心の張り無くなりて秋寒し一つよりなき思ひ捨てにけり

一途なるわれの心はさ青なる空に飛ばしてものは思はず

美貌によりくる幸をはばかりなくうけゐる女を時に羨む

ひとりゐてものを言はねば一切の思ひ止まり空なる如し

木彫り人形のでこぼこ顔の笑ひ顔撫でつつ見つつわれも笑ましき
満員の割引電車走り去り春の埃りの道の明るさ

曇りたる空にまぎれて鳴く雲雀ゆけどもゆけどもかぶさり聞ゆ

崖畑は白豌豆の花にして吐くわが息のひそかに熱き

桐の葉の葉末に溜る露の玉たやすくは落ちずふくらみにけり

五月の朝の曇を吹く微風われの思ひも伸びてたのしく

川の面の空も樹影も波となり光の如き風吹き光る

電車待つわれを廻りて吹きし風空の青さをまきちらしたり

表にも裏にも鳴ける地蟲の聲ひびきとなりて小夜更けにけり

飯

武

夏ながら朝間は涼し杭うてば向ひの岸の森にこだます

最上 隆雄

麥熟雨むぎうらしこまかに降りて芥子畑の芥子かはか黒き實みとなりにけり

藻谷 銀河

雪國ゆきくにに生なれて見飽みきし雪ながら都大路みやこおほみちに降ふらくともしも（上京）

黄ダリヤの八重やまに咲さき照てる夕畑ゆふはたけにことしの試験しけんあきらめにけり

竹やぶを行いけば灯あかりともす家ありて家のまはりの竹青たけあおく見ゆ（上馬引澤所見）

東京外國語學校記念日に帝政ロシア時代貴族のみのために作
られしといふ豪華極まる新聞紙を觀て一首

ときいろの絹きぬに刷しりたるしんぶん（新聞）に古ふるきろしあをなつかしむかな

ゆふまぐれ風呂ふろをもらひにゆく路みちは海うみよく見えて水仙すいせんのさかり（安房白濱）

網染あみぞめむる丘かみは冬日ふゆのかのうららかさはるかに伊豆いずの島しまふたつ見ゆ

尼稚兒にじごは泣なき泣なきあたま剃かられをりよその犬いぬ來きてそれを見てをり

我が汽車とすれちがふとき家も木も寒き響をたてにけらずや

茂木 初枝

人ひとり忘るることのかくばかり難きといふを今にして知る

茂木 絢多 蘆

幾山の尾根を越え來て朝明けのニセコヌプリのいただきに立つ

持田 利雄

晴れあがる高原たふぼらのうへの畑より日の暮るるまで遠き磯みゆ

持田 勝穂

岩を越す水の勢まはたひは我が洗ふ飯盒の米いたく流しつ(古處山)

ほのぼのとつづく波野は天の下にただにひといろの海原に似て(阿蘇根子岳山嶺より
波野高原を大觀す)

諦めて日ごろ過ぐせど梅雨めきてものの黴つくになげきぞわきぬ

酒の黴日にけに生ふる梅雨の日をこころひたすらに生きの幽かすけさ
朱の榭の漆のひかり侘しみつ酒はかりをり霖つゆ雨の日暮れを
硝子戸に薬罐の湯氣の夜は映りことなかりけりさびしかれども

望　　月　　光

二葉なるかへでの苗を一鉢にあつめて植ゑぬさみだれの頃
雪じもの花はすぎたる秋そばの畑の畔草紅葉せりけり
秋立つと鳴くやすいとの肝ひびくしが聲悲し小夜くだちつつ
谷そまを廻りて仰ぐ大空は削れる巖に瀧かかる見ゆ
白骨の温泉いそげの道は山深み松も黄葉もみぢもをがせ垂れたり
ただきは檜も桂も秋さびてまひる日弱く雲低く飛ぶ

數ならぬ歌はよみつつしかすがにいつく心のみ靈たまは知らむ
長月の秋雨しげみみだれ伏す秋海棠の六かへりの花
弟が石盤に描く馬の繪は顔もをかしく足もをかしも
馬かけば耳はおとさず兵士描けば髭は落さずねもごろに描く
朝露をふみしだきつつ行く岡の白榛しらもみ深く雉子けいこ鳴く聞ゆ
雨はれと雲は流るる雲のまゆ見えてかくるる夕日青山

伊豆遊草

たむけぢを熱海に下る坂途に伊豆の崎々重なりて見ゆ
荒磯根に岩噛む浪のさわがしきどよみが間まに石を切る音
鴨鳥の群れてめぐれる兜岩烏帽子が岩は低し木の間に
老松をかざす黒岩青潮の打つ潮泡しほにまじりて立てり

夕風も寒くあらねば巷路の道にすぢ引き子等跳び遊ぶ

堀内卓を悲しむ

數ふれば幾度君と逢ひしかど物足らぬ思ひ今しきりなり

強からぬ君を思へば道遠き薩摩にやるを別れかねてき

紫陽花あざさの花さく庭にふる雨を相見語りし事をしぞ思ふ

君が手にふれし埴鈴はにすずふり鳴らしわれはしぬばむとはの形見に

遠白き夕べの空の曇りにも君が名思ふ胸のおくがに

望月 久貴

霜白き枯野にいまだ日は射さず噴井ふきゐのふちに小鳥むらがる(世田谷近傍)

望月 れい子

身を離れ暗き質屋の倉に行くわが紫の帯をかなしむ

本を買ひて急ぎ夜の町をよぎりつつこほろぎのなく小路こみちにきたりぬ
買ひし本の包を持ちて家にむかふ心はずみも久しきことなり

元 木 國 雄

病む母は箱櫃に乗りて滿洲に出征する子に逢ひに行きけり(滿洲事變)

元 坂 忠 三 郎

日に日に死にゆく日の近まれば人々に言葉やさしく話す

身に沁む夕山風に命絶たむ心冴えかへり何ものもなし

山の下に美はしき湖うみもぬば玉のま夜のくだちは見むよしもなき
ひたぶるに人の上を思へ夜くだちて現世のもの音も絶えたる

元 田 龍 佐

何をみてか稚兒は氣負ひて匍うてゆく敷居を越えて人居ぬ部屋に

元 橋 俊 彦

濁り川は海にそそぎて一ところにごりしままに沖へ續けり
入江なす長き砂濱の風強し日に輝らひつつ砂は移ろふ

元 吉 利 義

かたことと秋蠶の繭を積みてゆく荷馬車の音の遠き日の暮れ
はねつるべ汲めば音あり夕暮れの庭のさくらは散りしきりつつ
晝深く牡丹花にゐる黒き蝶高くは飛ばず花うつりつつ
ひそひそと夜襲に急ぐ畑みち野ばらの匂ひ嗅ぎとめにけり
今朝咲きし槿の花の鮮しさ鯛ふれ來る聲きこゆなり
蟬の聲きこえずなりし陽の弱さ棗たまたま地に落つるなり

山茶花のうすべにの花陽に透きて空氣明るき朝のみちなり

さむざむと冬の夕日の残りたる二階の窓を人閉めてゐる

黒き蝶とまらんとしてたゆたへる大き牡丹の花のかがよひ

閑庭の地に散りたる牡丹花のまだ鮮しき花びらのそり

大佛殿の暗き御堂ゆ出でてくれば雪しらじらと降りてゐにけり

洛東江の岸邊の春の未だ淺しチヨコマンひとり凧あげてゐる(チヨコマンは鮮童)

雨あとの山肌あか明く陽の照りて豎虹太くあらはれにけり

機關銃はたと鳴り止む夜のしじまあたり一面の蟲の聲かも(夜襲)

山羊の乳絞り湛へたバケツトの冷ひいやりとある青草のなか

本 鳥 キ ク 子

ぬるくさす日ざしにひとりわが居れば障子に蠅の來てとまる音

本橋 靜江

あきらめてありとあらねど春の日の林のみちをゆけばしづけし
卒業の日のま近きに教へ子の一人は街の工場へ行きし

この部屋に君がくつろぎ目にとめしつるうめもどき今朝すてむとす

本 林 彌

木の上に皮ながら食む柿の果は日のぬくもりを未だ保てり

本 山 石 鳥

わが船のあり處を地圖の上に見れば舟山列島の一つ島かげ
天そそる佛頂山にゆくひとと瓶に詰めたる茶を分ちけり

上海事變

着弾點おもむろに移りゆくらしく身を伏せながら感じてゐたり

わが室に砲彈炸裂の跡あるに時にしみじみとなりて起伏す

本井ひさ子

再びは歸りくなどて送り火を人ら焚くなるわが出づる門かどに(嫁ぐ目)

本居亮一

弟辰二、巴布札將軍の率ゐる蒙軍四千と共に清朝復辟の旗を翻して滿洲に攻め入り向ふところ支那軍を破りて士氣大いに揚りしが郭家居にて敵彈のために腹部貫通創を負ひ絶命す

はや亡きか世のくまぐまをたづぬとも汝いましにあはむ術はあらじか

日の本の男の子の中の男の子ぞと人も許しし弟なりしか

もろこしに晝寢やせむと高らかに笑ひてゆきし我が弟はも

雄ごころを伸べむ國あらばいづべにも往いなむと言ひしわが弟はや

房州鯛の浦

大波を分けつつすすむ我が舟の舳の前に天あまし垂れたり

富士登山

鈴鳴らしくだる行者等まなかひの夕照る雲にかくろひにけり
人の住む國べこひしみ見さくれば夕凝る雲のかかりゐるかも
くだりゆくわが身とめあへずまなかひのかがよふ雲に走り入りにけり

日本北アルプスを

いただきを寒みねがてみ腹匍ひてテント出づれば天の川近し
わが立てるいはほ埋むる雲海やはるけくつづく乗鞍が嶽
ひく山はまたく沈みて高山の秀はのみさやけしあさ雲の上に
のぼり來しこの頂の静けさにほとほと心おびえたりけり

湯が島

澄みとほる瀬とろの青水あそみにかげひたす向つ大岩夕あかりせり

向つ山月おし照れり裾深くこもる谷川鳴り沈みつつ

戸 隠 山

いただきの夕立霽れて百合一むら紅く輝く夕日にむかひて(長野より戸隠に向ふ)
風のむたうづまききたる白雲をかきくぐりつつ岩匍ひのぼる

孟 蘭 盆

涼かぜの畑より入れば魂棚のおほき蓮(はまなす)の花ゆらぐなり

親のめぐみいよよ思ほゆ子を持ちて子が愛(かな)しさのいよよつのるに

師範學校教師として宇都宮にとどまること二ヶ年、東京にかへるにのぞみ教へ子等に別れを惜しみて

かりそめの契(むす)と思ふな離(わか)れがたみ熱き涙のはふり出づるもの
かへりゆく都の町のどよめきにまぎれはつべき思ひならなくに

子等がおもつばらに胸にうつしおかむかく相見るも今日を限りぞ(最後の授業に)

都大路人はみつれど枋の葉の帽章つけし子にゆき逢はず(東京にかへり来て)

昭和新春

にひ帝新にましろしめす新た代をたたへ祝いわぎつつ屠蘇くみかはす

油山の溪にて

飯の粒しろき鉄にささげつつ石のはざまゆ蟹匍ひ出でぬ

石の間の小暗き清水うかがば蟹ひそみ居り朽葉かづきて

かきおこす石のはざまのさざれ蟹あわてさ走る夕日あびつつ

修善寺獨鈷の湯

川中の温泉ゆにひたりつつ枕する岩のそがひに水とどろくも

歸省して水車小屋に人をたづねしに

この谷の米を搗きつつ幽かにも住みるし人は去年こぞ死にしとふ

この溪の清水飲みつつ生ひ立ちてつぎつぎに人は死にゆきにけり

日光深澤溪谷

鳴りとよむ瀧の轟こだまする谷の底ひを霧分けくたる

長男繁樹十三歳にして逝く

愛し子ようまらに飲めよこれぞこの父が手向くる末期の水ぞ

苦痛の今は失せしかさわやけき面を見するよこの父母に

命かけて育くみて來しこの父の深き心をくみとりて呉れよ

今ははやせむ術もなし無量壽の佛の世にししづにかへれよ

今はしも限と思ふ子が顔のあなさやけさや我を目守りて

しののめの鐘のひびきにおのづから目は覺めにけり吾子はあらぬに

妻がたたむ亡き子が服の隠よりキヤラメル一つこぼれ出で來ぬ

梅が島温泉にて

笈より落ち來るみ湯を肩の上に受けつつ居ればみ湯の重たさ

許山茂隆

舊友淺香一忠梅干の實を彫り美しき鈴を造りて送り來る

くさぐさの世の遊びごとにあきはててひたむきに彫るか梅の實の鈴

二十年ぶりに妻と旅行す 一首

わかき日のときめく心もたずとも妻と旅行くはたのしかりけり

人の良き古明地左内耳遠みおもわいよいよおだやかに見ゆ(病友訪問)

物河鈴子

病みて耳しひとなる

ものみなを奪はれて眼に月ひとつ残りし心地秋さびしけれ

村雨も野分も音は無きものと慣れて住む世の静かなるかも

靱山みゑ子

夕はやく日のあるうちにつきし燈のしらじら光れり街一列に

前山はすでに日あたり爨々に消のこるよべの雪かがやけり(初冬の伊香保)

門間 春雄

吹雪風の強きに向ひ飛ぶ鴉たゆたひにつつ高くのぼれり

あづさゆみ春淺ければ風寒し生垣の根の霜凝りの土(病床より)

いたづきの病の床に明け待つと物思ひ居れば風出でにけり

くれなるの椿の花を見つつ飲む血止め薬は口ににがしも

うつ伏して疊に落ちし花椿枕にとほく手にとりがたき

幾そたび枕べの花は活けかへて今宵はさびし月見草の花

枕べの月見草の花は咲きかはり宵々ごとに小さかりけり

晝見れば籠の底なる死螢まがなしきかな腹白く見ゆ

下草の燃ゆるが中に丈たかき葭は倒れて燃えにけるかも(野火)

家かげの畑に咲ける豌豆になほあたたかきゆふべ夕の潮風

二階より見ゆる柘榴の赤き芽に雨降りながら朝明けにけり

籠中かごちゆうにいく夜を鳴きしきりぎりす風吹く庭にはなちたりけり

短かる命をひたにかなしみて寝返りて聞くこほろぎの聲

ねむられず苦しみ居れば曉あけ近くこほろぎの聲もおとろへにけり

ものおもひ思ひみだれてひと時はこほろぎの聲を忘れて居たり

思はぬに血を喀きければ言はむすべせむすべ知らに妻の顔見し

一時を睡りけらしな枕邊におもはぬ人等集りゐたり

幼な子を一人背に負ひ一人連れ時雨にぬれて妻はかへりし
妻の背にシヨールをかぶり幼な子は光る眼を我に向けにけり
つつましく妻の袂ゆ出だせるは蜜柑の袋落花生の袋

桃 北 好 澄

風窓ふうそうの光幽けし王後の寢室といふにわれは入り來つ(故宮博物館)

桃 澤 虎 雄

朝夕のみづしのわざも子らのためまことかひあるわざと思ふに

百 瀬 百 代

もののいろ靜かに澄める初秋の背戸にさみしく咲く萩の花
月に寄せて和なごむ心とおもはねど柿の下びにしばし佇む

百 瀬 達 子

大降りの雪の晴間を眞日てれる鉢伏山はちぶせのなだり静けし

百瀬 元通

夕蒼き大雪溪のやや上に低くすばるの輝やきて居り

百瀬 千尋

冬の日の照りかわきたるほこり風つめたくうけて身はひきしまる
白川の夕のきりぎし枯芝に火をつけて子らが訛したしき(歸省)

張りつめし漢江の氷の裂くるおと夜空に冴えて潮みちぬらし(漢江)
焼け焦げし樹林むざむざ残りたりあはれに山の雨は降りつつ(火田)

開けひらく宮殿みやみやさむきに清始祖の玉座といふをひとり見てゐき(金鑾殿)
きばきばと言ひきる時し東京の女人きはやかに美しきごとし(東京)

百田 宗治

かかる夜もはなやかにして人あらむ戸の面の草生雨しづかなり
うつくしき孔雀の羽のおとろへのごときこころを君に感ずる

風吹けば落葉も土になげく夜のいらかのうへの寒き月の出

流俗の歌のあはれにさそはれて秋はつめたき水の音かな

夏ざくらさびしく咲きし水無月の山のふもとの有明月夜

いとさびし黒土の畑にささやかな紫蘇を眺めて君をおもへば

紫蘇の花わづかに咲けるくろ土を眺むるに日の暮れにけるかな

かへらざる魂のこゑきくごとく耳を澄ませば秋風さびし

みづうみに白き帆泛^フけりかなしくも泛きてうごかず日の暮れにけり

湯わかしの湯の沸^なる音と太陽となぐさむるものみな明らけし

ときがたきかなしみをもつふたりなり夢のごとくにあひいだけでも

守 すがる

しなびたる乳房の奥に血のわきて漲るごとし吾子思ふとき(子と別れて十年)

守 時 高 樹

澄みとほりひびくひとつのものをこゑ水鶏くひまは鳴けり月の夜ふけに

朝顔の白のとなりのむらさきの花をすがしと見てゐるわれは

冬の日は大樹の幹にかくれしがふたたびわれに照りいでにけり

しろじろと板の廂に霜こごる朝なりわれは生きて目ざめつ

守 永 愛 子

松山の下生の草をふみ下り明るき原に背のびせりけり

幼兒の自由畫帖を繰り見れば飛行機の畫えがかれざるは少なし

戦傷の兵士迎ふと夜風鋭とき驛の廣場に人群をなす

谿底ゆ仰げば空を渡る雲強き西日にかがやきて見ゆ

捕蟲網持ちたる人に逢ひてより又われらのみ峽かひを辿りぬ(逍遙山にて)

朝畑に露けき茄子をもぎてをりよりどころなき嘆きなるかも(母逝く)

ゆく方に日かげこほしき森見えて吹かれ散る葉のみな光るかも

雪山のふかきくもりに思はざるこのしづけさを登り來にけり

守 部 市 美

こみあぐる涙を殺すすべ知りて吾れやうやくに三十路みそぢ越えたり

守 屋 重 二

麓原霧吹きはらふ朝風の清しさにゐて草刈りにけり

晝ながら榛名湖畔の冷えしるしひた押しにくる霧は山より

守 谷 富 太 郎

團栗くわんりをひろひ集めて何にせむすべもあらねど拾ふたのしさ

久にして逢ひたる甥なまこにふるさとの生きのこりゐる人のこと聞く
日食は遂にすすみて一ときに光うせたる黒き日を見る

守 分 準 一

宮城二重橋前廣場にて御親閲を受く

大君は神にしませど集ひたる御民我等にゐや賜ひけり

森 三 樹 雄

枯々の尾花の穂立さみしきに雪解の風は吹きとよみたり

見る限り木さへもあらぬ廣原の深きくもりに風のふくなり(近江蒲生野)

ま冬めく寒さは疎し門川の夕かたまけて音ひびくなり

草木みなすがるる庭に日あたればなほほそほそと鳴きいづる蟲

大君のつひの御幸とゆきませる曉かけて雪つみに積む(大正天皇崩御)

夜となり思ひよらざりし月照りて山に降りたる雪さむく見ゆ

木深くもなりにし庭や夜更けて降りいでし雨のあらく葉を打つ

蒸暑くいねぐるしきに降りいでて今はあまねき長雨の音

幼稚園へ明日よりゆくを喜びて寝れども寝れども眠れぬらしき(長女翠)

春深きさみしさならむ大棟の梢より絶えず花をおとせり

いとまありて見る庭の面や青きものおどろに枯れてすでにひそけし

風の音に夜中を覺めて寝ざる兒にものをぞ言ひぬ吾もさめめて

小學校入學考査の爲長女翠に附添ひゆきて一首

先生に聞かれしことははつきりと答へをやしつる答へよといひしを

水雪はしとしととして庭先の暮れてしまひし暗みにぞ降る

しんとして雪は降りをりたかぶりし心なごみくることのさみしさ
わくらはにたぬしくて吾は子と遊べり常遊ばねば子らは甘ゆる

森 光 義

唐箕たうみよりあふられおつる粃殻あみの軒端のの雪に位置を限れる

森 小 一

雨霽すれて清すがしき庭の日あたりにほされし傘の乾く匂す

森 勇

大空のはたての雲にすでに來し春にかあらむ花やぎて見ゆ

とりごゑのしづむ楡山夕づくやねもごろになき父をしぞ思ふ

あひよりてかたみに喙くちをふふみあふ鳥あり山は愛ふかきかな

水内みのちなる裾花川のささにごりみなかみこめてかすみたなびく

泣けばまたなくとてすかす小半日わが日曜は子にくれてゆく

森 無 明

あたたかき雨に濡れ行く馬糧車は強き匂を舗道にのこす

森 秀 雄

朝霧の流れ早きに山原のむら明りして馬群るる見ゆ(阿蘇に登る)

森 暉 雄

荒磯あひそよりここに入り来て南みな白は龜き川が簀すいをあぐる舟の朝をしづけき
うす明り水槽に浮きて動かざる鯰はわれと面向きあはす(水族館)

森 治 三 郎

疲れたる馬を憩はす草原に更けて夜露は深くおりたり(重砲隊宿營)

森 美 禰 子

戦のいとまに父が拾ひまししのろ漱江のさざれ小石行李より出でぬ

君が戦死の牡丹江畔氷解けとらやな白楊芽ぐむときくぞかなしき

森 三 郎

晝の間は白き煙と見し野火の暮れて明るき火はにたちにけり

森 快 逸

この日頃持佛に坐る時だにも妻子養はざりし僧伽こほしも
自らが老の法師となるさまを何のはずみにか思ひつつをり

森 白 崖

妓生キイサンが唄ふ南薰太平歌膝たたく子は涙ながしつ(朝鮮にて)

たはむれにも女のことを思はざる日の來べきやとふと思ひけり

白塔をめぐりて飛べるつばくらのゆきずりにふれ鳴れる鈴かな(遼陽)

砂丘より砂丘を越えて蒙古路のかなしき旅をわれ等つづくる

森 光 丸

奈良朝に悲田院施薬院を思ふにもかなしきものの世に絶ゆるなき
連立ちて歩む草野に視力弱き我はしばしばものに躓く

園の中にすでに定まる日光さしうら枯るる箒草を引き伏せてあり

森 憲 二

ひた心み國を思ひ世を思ふ民の一人と生きゆく我は(獄窓より)

森 精 太

二二六事件 二首

鎮定を報ぜらるるや聲あげて雪崩のごとくよろこびをいふ

東京の異變のなかにわがうからあるが幾日胸に凝りをり

春あらし野を吹きあげて松山の松のひびきの艶だちにけり
赤松のやまに霞をふきあげて風の光のみなみより来る

森 二 郎

禪堂の疊の上に赤蟻子たまゆら歩む梅雨となりにし(禪堂に籠りて)

秋菜蒔く頃としなるか白雲の高嶺にたまる季ときは來にけり

白馬嶽しろうまにつらなる嶽の十あまりしるくも今朝は雪をおきたり

啄木さつぼくの啄たたくくを聞けば二つなり終日ひねじつ同じ處ときこゆ

北の空ひらきて冷ゆるこの國の山の相すがたはととのひにけり

この日頃空よく晴れて群山の上に眞白き乗鞍の山

佛法の鳴かぬ夜ごろとなりてより山の蕨もこはばりにけり

この朝の光に染みておもむろに嶽やまをはなるる秋の白雲

森 繁 夫

夜を長み鈴の屋の大人鈴振りて讀み續けけむ書にやはあらぬ
書を編む人の悩みは書を編む人より外に知る人もなし

此書に二十年執りし此筆をさしおきつべき時近づきぬ(自著に三首)

とにかくにかかる男子もありきてふ名は遺りなむ書し遺らば
堆く積み重ねたる書見れば唯わけもなく嬉しきものを

かにかくに欲りする書の若干を求め得る身の幸をこそ思へ

耕さむ土持たぬ身は晴るる日も雨の日のごと書讀みてまし

或時は幼き頃の心地にて聲高らかに書を讀むかな

新しき事を見出でて古書の誤れるをば正す嬉しさ

讀む書の所々に書入れし我筆のあとも物古りにけり

書を見ておほかた夜は寝ねずあらむ明日のつとめのなからましかば
あぶら火の光小暗き陰にても古しへ人は書を讀みしを

森 川 久

熟麥うれむぎの匂ひ漂ふ山畑に心ゆたかに鎌とぐ吾は

思ひしより高値にうれし米の事語りつつ樂し今日の夕餉は

森 川 秀 子

しまひ湯にひとり浸りてしみじみと心安けく星空を見る

今日けふのよきこの玉づさに吾がいのちかがやくばかり嬉しき日なり

森 川 す み

峰にわきてすなはち海に入る雲のあわただしさや山にうつれり

白雲かぎりの落す辰は山はだを生きもののごとく移りゆくなり

山原の雲のかげりに時の間もゆきてやまざる歩みを思ふ

堀ごしに子が投げ入れしゴムまりは枯草の上に軽くはずめり

森川 眞砂美

工面して買求めたる新刊書雪降る夜を読み更したり

森木 虎喜

釜を磨く鰯夫の兄のうしろかげつくづくと老のきざしそめけり

母子して飯を食すこと稀なれば二日三日を経ちやすく居り

孕み居りと鹿守が指す牝の鹿の地に腹ばひて人にそむきぬ(五百山)

森 下 豊

海中の小岩に集ふ鷗どちみんな落日に向きて愛しも

森 嶋 忠 雄

恩納岳

恩納岳夕陽片照る尾根の上ゆすぐ立つ虹を人は知らずも
一本のロープにかけし命なりひた心もて吾はのぼるも

恩人腦溢血に倒る

手を取ればひしと握り來うつつなき人の力をかなしみにけり

森田和夫

むかふより柿食ひながら來る童ふところも柿でふくらまし居り

森田みつ子

秋晴れの山つつぬけに見ゆ町筋のまだ戸の入らぬ新建の家に

森田虎雄

熱き湯にまなこをとちて快し外は篠つく夕ぐれの雨

法師蟬きほひ鳴きいそぐ夕山に聲遠けれど一つひぐらし

森 田 桂 吾

化學實驗室

遊離する水素の強さ火つくれれば焰とはぜて音にひびきけり
重く光る金コロイドを見つめつつ正午過ぎたる静けさに立つ
透過光澄みたれや金液のフラスコに蠅一つ來て夜を動かず
減壓の中に泡立つ蛋白の弾力は見よ光透き居り

ピペットを吸ひ終へて息つく時の間を農園に鋏の音冴え聞ゆ

地下鐵にて

するするとエスカレーター中程より地表の光浴びて昇りぬ

森 田 京 二

立川驛にわれは下りたり貨物車の並ぶ向ふに夕暮るる富士

眞夜中に積りし雪を踏みしめて寂しく歩む人もあるべし

しづまりし死顔の唇くち濕しつのおのづからなる泪いでたり(妹の死)

森 田 ま つ 子

ともに住まばあらがふこともありなんをたまに逢あひつつ姑ははのやさしさ
胸さわぎ人に見せじとひたすらにまなこつむりて産床に居り

森 田 馨 造

爆薬筒脇に抱へて一瞬の後に果つべき身はためらはず(爆弾三勇士)

森 田 佐 一 郎

下宿に母を迎ふ 二首

部屋のうちとりかたづけけて母と我と並びて寝ねるに狭くはあらず

ふと目ざめ母がかたへに寝ね居るをうれしみにつつまた眠りたり
日あたりに浮びて冬を住む金魚しづかに鰓に水を含めり

嫩草山上

木津川のうねる河原をのこしつつ麥畑青し大和國原

兒童學藝會 一首

うちならば歌ふ子供のどの子供もえらしと思ふはにかまぬなり
大人らの交す話のつまらなさひぎに居る兒はため息をつけり
家の前につづく堤の草に居る黄色の服はわが子にあらむ

昭和九年九月一日關西地方に颱風襲來す

兩腕もうでに烈風の壓力たへつつも閉かせる雨戸をひたささへ居る
床下をおし上ぐる風の激しさに疊は浮きて飛ばされむとす

烈風は玻璃戸破りて吹き入りぬ家のうちにして身のおき處なし

子をつれて

たまさかに子を連れて来る秋の野はうれ田明るくよき日和なり

鴻池邸

いかめしくおろす大戸は潜戸持ち昔ながらの構なるかな
町角をまはして高き塀の内人はしづかに住めるなるべし

森田梅子

いつか買へる時もありぬべし欲しと思ふ書籍の名あまた書きためにつつ

森田曠平

登り來てはるかに見れば伊賀の國古き國內は朝曇りせり

ねむの花咲きしづもれる山路にひびきてすがし谷川の音(佐岡村)

物部川はるかに見ればきはやかに河原は長し人鮎を釣る

森田 三千三

月を背に今日も山より歸り來て厩の中に牛を勞はる

森田 麥の秋

頬白がけさ囀づるはわが庭のもつとも高き木の梢なり

葦の秀をなびかす風にたかぶるやむしやうやたらに行々子啼けり

渡り鳥南をさして渡りつつまことに高き空さやかなり

雨の日は母が厨に取りこみし紫蘇も茗荷もおのおの匂ふ

冬の日のいみじき寒さにむかふとき枯れて鋭し山萱の葉は

土用あけの朝間は涼し放たれて庭にちらばる白色レグホン

石なげてひびく音あり竹林にななめに深く冬の日させり

行方なめがたのうみの洲濱を目にうかべ食はみつつうまし生公魚なまわかまぎは（公魚を贈られて）

あどけなくもの言ふものをこれの子は凶まがつ火のなかに救ひ出されし（義妹の家焼失す）

たのもしき健やかさなり軍服に着かへて立ち笑む弟を見つ（弟入營す）

わらはべら山にさわらび田にたにしきそうて採れり錢にかへむと（農村窮乏三首）

ここに住む農家おほかた苗代の青むころには食ふ米あらし

若葉照る五月いたりて食ふ米のあらぬなげきを朝ゆふに聞く

わだつみの日の出まぢかし陸べよりゆく雲はみな東に向ふ

足もとの落花吹きあげしつむじ風むかうの兵舎にあたりて止みにき（水戸聯隊營庭）

こよひごろ霽か雪かけざむきにきそふがごとし藁打の音

歳ごろにいたらば賣られむ娘たち百姓わざをおろそかにせり

目もて追ふ鴉ちひさくになるところ一刷毛青き海見つけたり

下總の言葉なまりをきくからにわが血縁と思へずさびしき

森 高德 次郎

山ゆけば山のほひぞさびしけれ遠き雉の聲近き鴨の聲

森 路 匆 平

朝鮮釜山にて

蘆負ひて北より來る赤牛のひねもすつづく頃となりけり

赤牛も牛を曳きたる童子わらぼこもおのれ埋まりて蘆を負ひ居り

國道をそれていゆけば砂河すながはのひろき流れに徑みちつきにけり

さむぎむと鵲かささぎの巢もあらはにてもみぢ葉つひに散りはてむとす

秋深きこのみ山に風こもりそこはかとなくせまる音あり

哭に泣きていつはりならぬ涙なす朝鮮人よまこと別れむ

若やぎし心をもちてこの海を渡りしこともありにけむもの

森 中 二 郎

にはか雨やみて片照る川端やぶ若竹がもつ明るきひそまり

炭竈とめてかへる夜ふけの峽みちほのぼのと白きとねりこの花

森 永 忠 子

葬所におひかぶされる若葉山若葉が中に燃えゆきましぬ(京都蓮華谷に
叔父を葬る)

朝虹は尾根にあえかにかかりけり燕の群の眼路をよぎりぬ

茶を立つる室の静寂に床の間の椿しみじみ紅しと思ふ

朱を濃き陶器手にとり滑肌の冷たき感觸樂しみわがるる

人に會はず歸る鋪道の日の光しみじみとしてわが足袋しろし(病む人を訪ひ
て空しく歸る)

森野子郊

毛茛きんぼうげうち散らしつつはかなけれわが童貞のいつまでならむ

森本田鶴子

望み見る麓國原もやこめてかそけきかもよ人の家居は(アロヘツド湖)

森本三郎

晝すぎて山路は雨となりにけり雑木の新芽ほこりくさしも

かぎろひのほのかに見ゆるたまゆらも花あぢさゐは移ろひぬらむ

しげり葉の立ち寄りそひておのづからくれなる深き睡蓮の花

花びらの深く寄り合ふ底ひよりまぶしと思ふ黄の蕊しべは見ゆ

森本忠

君が続ぶる大き軍いくさの近づくちかづくと花火鳴りひびくこの朝空に(齋藤副將軍
より熊本に凱旋)

水桶に腕深々とさし入れて觸るるラムネを引上げにけり(山茶屋)

森 本 光 友

御饌殿をもるる神燈のほそぼそとおよぶ木暗れに鶏たむろせる(節分の夜)

森 本 治 吉

島木赤彦先生挽歌——大正十五年二月一日最後の御上京二日
日比谷長興胃腸病院にて絶望の診断を下され十三日御歸國三
月二十七日逝去さる 三首

生れたる國に死ななと風沁みる信濃の山を越えてゆかしつ

ふたたび見る事無けむ山々と眼に沁みて視てゆかしけむ

隈もなき今宵の月や葬らむ山べの土も凍て果ててゐむ

野の家に妻と住みつつ曉に遠く聞こゆる鶏のあはれさ(萩窪)

吾が妻の眠るま夜中に起き出でてものを思ふは安らけきかも

遺言狀書ける夢を見て目は覺めつ午前五時なればまた寝ねむとす

長男の頭を撲ちて叫びゐる妻を見てゐるよりほかはなし

友の皆良き勤め口にかはりゆく羨うらやましさ言ひて妻おりゆきぬ

心をどりて求むるものの次々に失せ果てし時吾は死ぬべし

吾が部屋に寢せし兒が夜中ごろ目覺して襖を撫でてひとり遊びす

村肝に貯へて來しもろは子に傳はらむ寂しくはなし

昂奮のをさまりし妻はこみいりし過去を語りて涙を落す

苦しみし一生ひとよの果に何人の手を握りつつ吾は息絶ゆる

のどやかに終ふる一生ひとよが必ずしもしあはせと思はぬこの日頃なり

やすらかに臥り思はむところをと休み日に家を出でゆく吾は

妻のかへり待ちきれず喰ふ子の飯は生卵かけて早く終るも

聞く人の皆笑ふ迄に厚着して稀なる暖ぬくき冬を終りぬ

思ひ出は湧きつつ盡きずひとり居て履歴書を書く墨をすりつつ
確かなる勤を無みとうち侘ぶる吾を慰むる人は滅りゆく

森 谷 繁

夜じめりの未だ乾かぬ道隈にようらくの花咲きこぼれたり

森 山 伊 三

磐梯の裾野廣原焼くる火は夜更けゆきて赤々と見ゆ

磐梯の高原廣み焼くる火は右に左にあかあかと見ゆ

森 山 縫 子

庭乾く秋のさびしさ一ひらの落葉の音も總身にひびく

えにしだのあしたの露に映りたる日のむらさきの秋におどろく
神を捨てて十年はすぎぬ寂しさの底をこそげて生くるこのごろ

はらわたにこたへて聞きし圓覺の太鼓の音をわれは忘れず(圓覺寺一宿)

放送の鎌倉谷ぐまの除夜の鐘に二聲ばかり犬もなきをり

すみ渡る月の光りは雪の上に我が影坊を黒點となす

森山謙一郎

唇くちに吸ふ蜜柑の肉のあえかなる甘さにしみて思ひおぼるる(追憶)

雪のなかにみだれて人の吐くといき荒らけきかも土搔き落す(松木静泉を葬る)

雲はみな月にうごきゐて友ひとり罪をかなしと酔ひ泣きをする(月見)

みちのくの悪戸あくどの土を焼き陶すゑてか黒く深く光てるを入れたる(古陶器)

この軒の棚ひさこの瓠ひまのつめたさも青さもさびし子なきわが家は

春の雨鬮をうちくれば青疊草生のごとし濡るる思ひに

遊廓にとなりて小さき農家ありしみみに葱の花さきにけり

雨のあとの肌かわかして渦黒く青太山のよこたはりたる

落ちてゆく不義のなさけにむせびつつ三味の高音はしばしいざよふ(新内)

牡丹一つ春邸廣くうち据ゑて日は寂かなりひとり居の縁

手打そば涙もともにすすりあふ別れといふは寒きことなり(病友を旅にやる)

大雪の夜ふけにものを讀みてをりしづけさ沁みて餓ゑをおぼゆる

古も干鮭からさけ裂いて寒の夜の御食おんじきすごく籠り給ひし(芭蕉と冬)

この軒の月の氷柱つららは刀より青き光りに匂ひ立ちたり

みすず刈る信濃にわれの山ありてさびしき時は夢に見えくる

聲よべば泥を垂らして田の中に笑み應こたへたる伯母を忘れず

春ぐもり机の上に小時計のチクタクとして晝たけにけり

森山よしの

あたたかくなり来ておもふ湖の邊のわが侘び住居あらはなりけり

森山寒木

曼珠沙華咲きてゐたれば夕川のながれも秋のいろになりたり

露の葉にふり來し雨の大きけれ夕鷄が戻るその雛を連れて

萱の穂にとりまかれたるいちにんの吾れが嬉しくてならなくなりぬ

森山汀川

燕連山に登る

雲とぎす天のそぎへに落ち沈む美の夕日の動かぬ如し

比叡山

帚目のすがしき庭や沙羅の木の散りたる花に蟻あそび居り

伊那町郊外

鳴き死ぬと思ふまでも野雲雀は空の高處たかどに囀りにけり

天龍峽に遊ぶ

漕ぎ下る舟にて見れば石原は目路より高し日差のきびしさ

箱根行

幾尋に湛ふにかあらむ澄む水の湖うみのなかより山はそば立つ

沖つべはいよいよ澄みていろくづも浮藻も見えず陽の色透す

南越後

謙信の言のまにまにきほひ立ち戦ひ果てし人をとむらふ(春日山)
潮うしほぐもり天路とぎせる海うみ中に沈なまむとして夕日はありぬ(直江津)

高野山

あかときの足先冷えて目ざめたる高野の山に月ぞかたぶく

紀伊の國高野の山の鹽甘き齋とぎにも馴れて起臥しにけり

高野山に落ちなむ月は蚊帳なくて眠れる部屋を照らしるにけり

大和國

雲退そきて月に見え來る國原のいづらにか都したまひにけむ

午近き照りのきびしさ香具山は遠目にし見て道引きかへす

いづ方に下らむも遠き山かげの土を平ならして庵建てたり(吉野西行庵)

病床吟

日を浴あむと待ち居る我に朝寒く晝すぎ空の今日もにござれる

月讀は遠山の端に傾きて湖うみむかうより既に小暗む

寒の内の今日降る雨に霏ふごもり炭つけ馬に眼の前に逢ふ

川中島

郭公は國のもなかに鳴きをりてあからひく日のいまだ沈まず
泰山木の花はゆふべにおとろへて廣葉がくりに既にかそけし
千曲川ながれをりとも思ほえず穗麥香にたち唯に平なり

富士見

徑こみちより舊道に出てあゆみをり稻田つ熟れつつこもる水音

吾子の死 六首

高臺にのぼりていのり天つ日の沈むを見つつまた下りたり
東京をあわてていく日かけめぐり流るごとく金を支拂ふ
ひらきたる竈の中にてうつそみは炎となりて面かげもなし
なきがらはともしき灰をかうむりてかなしむ前に引きいだされぬ
死にすればなべてはものなごやかに唯淨らかにありとし思ふ

竹やぶを漏るる日光にみづひきのほそぼそ伸びしくれなるかなし
路盡きて兒童等に先だちくぐり行くから松稚し雫をこぼす

森脇千里

印度洋は果しも知らずよもすがらひねもす雲の浮きて沈みぬ

うねり來し波は阿弗利加の岸にして海嘯の如くもり上りくづる

秋の陽は遠き亞刺比亞の砂山を炎の如く染めて落ちゆく

戦は我が死と共に滅びよと罌粟咲く野邊にひとら死にけむ(大戦無名戦死者忠魂碑)

海の色碧く濁りて地平線に坡西土のまち浮きあがる

森脇一夫

奈良にて

春日なる竹柏の林の朝じめり踏みつつゆけば小雀鳴くきこゆ

小牡鹿こましかの群れむらきほひくるや道のべの馬ま醉木しびも笹ささも押したわめつつ

森脇俊夫

春さむき雨なりながらこの朝はとみに動ける庭苔の色

森尾新一

ポーナスを貧しき父母にみな送り淋しきなかに心足らへり

森岡三智子

かりそめの風邪とは思へ子が咳せきけば我胸にしもひびく心地す

盛壽

海峽の潮のうねりにうきあがりうきしづみつつ遊ぶ海猫うみねこ(半島生活)

盛田武男

南嶺のひむがし低くひらけたる耕地に雲のかげたむろせり

諸崎清二

磯崎にさし來る潮はうづを卷きわが立つ浦は既に滿ちたり
夕ぐれの浦に下りたつ海鳥はいく群ともなりて磯に寄りくる

諸星利作

こまごまとひろひいれしが吾子の骨白磁の壺にいくばくもなし
骨壺のまへ燈明ゆらぎ吾子ながらみ佛なりけりこころつつしむ
忘れむとすれど顯ちくる吾子のかげひとり冷くいねて眼を閉づ
忌みこもり久にいできて晝の街のあかるき光に身を疲らしぬ

青白き照空燈さつと傾きて明る屋群に人等しづけし

あひつぎてわが知人の死にゆくに我すこやけく飯あまたくらふ

兩角春雄

山かげに靜かなるかも炭を焼く竈ならべて人の住み居り

兩角 朋 幸

疲れたと言はぬばかりに頸たれて馬はすなほにあとついてくる

兩角 七 美 雄

又しても本買ひしかば祭の日晝過ぎかけて草鞋を作る

夏深けて晩き肥の過ぎたれや秋田となりて糝青立つ

兀山に立ち見おろせば吾が小田に動き居り見ゆ妻と稚兒

雨晴れの田に滿つる水を浴びたがる代踏馬を吾が引廻す

獨身の若人どもとあげつらひおのれはただに古びとさびぬ

一筋に狭き心は激し來て言ふよしあしのすぢさへたたず

水浴びて裸の我はもろこしの花粉がかかる庭畑歩く

彼岸過ぎて射しこむ秋の日は暑し涼しき方にテーブル移す

土曜日の夕歸りてすがれなる軒の夕顔棚をこはせり

白飯を勿體ながり吾が妻は麥をあがなひ雜へて暮らす

秋雨のあがる夕のうらがなし炬燵ながらに月見てありぬ

昭和十一年の秋の身にしみて北山村におのれ暮らしぬ

蓼科山瀧の湯川の激つ瀨の響みこもらふ深き岩谷

吾が子等の荒ぶる室に本の上に落つる埃を吹きつつ讀めり

師 岡 鶴 榮

我二人雪の夜道を行く時はみちのせまきもうれしと思ひし

八 木 錠 一

人乗ればはだか馬さへ輝きてこの現世はたのしきものを(曲馬師に寄す)

かがやける春日のもとに寄る波のひびき聞えて山ざくら咲く

静けさに足ふみ入れし早春の林の雪はさくさくと鳴る

眞晝間の玻璃戸の玻璃のひとところうすくれなるに染めて薔薇さく

春の日の花の素肌のかがやきにこころ明るみてうらさびしけれ

ローランサン桃色の日のさすなかにさ青のみゆる顔をうつしぬ(マリー・ローランサンはフランスの閨秀畫家)

この磯のとがれるいはほ寂しめば白浪ひびき魚のしづみぬ

匂ひ立つ光悦の書は墨のうらに寂しき金のがやきを見す

天の原すみぬる青のさびしさに白雲ひとつ噴泉をなす

春深き駿河の海のただなかの船のへさきは富士の峰さす

八 木 富 子

ぬくき陽が吾が家のかどに射す頃をどこからとなく子らつどひ來る

八木下 芳春

このねぬるあしたとなれど白飯をうまらにきこす父ぞいまさぬ

八木沼 丈夫

昭和八年二月より約半歳に亘り熱河征戦にしたがふ 二十八首

砂ぼこり吹きたつ道のかたへにし凍れる飯を音たてて食ふ

村人ら幾山こえてのがれぬむ犬もぞ瘦せておびえつつ吶ゆ

黎稗を焚き加へつつ息凝る襟毛を拂ふ霜夜かがり火

しかばねの凍れるこえて雪耀る山路をゆけば荒しこの道(紅石嶺越)

鳶が鳴く離宮草枯れてあかとき寒し池もこぼれる(熱河離宮)

塹壕の焚火の上になほのこる春の斑雪はまなく消ぬべし

晝飯をここに食しつつ砲丸の破片を拾ふ岩むる山(長山峪)

關をこゆるすなはちここは密雲か砂吹く風も夕しづまりぬ(古北口占領)

砲の音の谿づたひ來るこのゆふべ馬洗ひをり清き河原に(砲煙)

群山の秀竝み明るむあかときを空ゆりひびく重爆のおと

槐の太樹のもとにかがり焚き飯かしぎ食へば夜ぞ更けにける(露營)

星明り出し夕べには銃の音もまたくたえたり藁喰める馬

日を一日鳴りとよもせる飛行機もいまはかへりぬ巖尖る山

望樓の上にかたぶく月清し一夜をこめてたたかひにける(拂曉戰)

戦ひはけふもつづかむ東の山の上の雲散りみだれたる

地の底ゆもり立つごとく炸彈のひびきは重し敵が據る山

水筒の水を分け合ひ相ともにこよひもねむる酔を賣れる家(懐柔にて)

野あざみの花むらさきに咲ける見て懐柔城にひと夜寝むとす

地ひびきて爆音あがる敵の塹ざんわが重爆は翼よくつらねけり

晝はありし雲吹き絶えてあかあかと長城の上に月押し照るも（月下對陣）

戦友を想ひはかなむ兵もあらむ下照る壘るいはくろぐろと見ゆ

押し照るや月下の陣に據れるものみちのくの兵へん南京の兵

山上に敵が據りにし掩蓋えんがいも日にひ日に崩くえて散らふ藁くづ（新戰場）

敵がかばねを塚にまつりて雄々しきやわがつはものはさらにたたかふ

清らに鳴きひるがへる岩燕いま砲陣に兵據れる見ゆ（空陸共襲）

入り亂りわが飛行機の翔とぶ見れば砲列の兵も吾もいきほふ

長城の古りし煉瓦に苔むして蠍さそりはすまむくろき巖むら（河北密雲
檀州古城）

いにしへの檀州城に吾立つや北平ぺい平の方は雷ひそむそら（以上）

行潦ぎょうらうひかりさしそふときのまはその子はぐくむむらどりのこゑ

霜しろく降り置く山のあかつきはひとつのものの音もきこえず
赤錆びし釘の散りぼふ屋敷あと踏みならしたる庭あれにけり

湯 崗 子

風の秀ゆのむかへる方にさざ波のひろがりかつは消ゆるしづけさ

松 花 江

ひたすらにこほらむとする河水の瀬になるときは音たてにけり
流れ寄る氷層かこり見る間おかずわが眼下に音とどろきぬ

八 幡 香 秋

自動車は過ぎゆきにけり時置きて麥の穂並はあふられにける

八 幡 富 美

冬ながら晴れ日つづける昨日今日軒の乾菜は甘く香に立つ

買初に人ら出盛る町すぎて古本あさりす一月二日

八幡ふさ

あざやかにゆふべの空に尾をひきてひとつの星のきえてゆきたる

夜久虎之助

磨る墨のほのぼのかをる頃となり晝室の冬も去いなんとすらん

矢口奇鳳城

老いませし母がはじめて見るといふ地圖の中なる日本の國よ

矢崎一郎

門口に出できて我を待つ母の老の姿は遠くより見ゆ

世の隅にかかると思へや人を焼くなり(落合火葬場)

矢崎天洋

祖國に寄す

日本を正しく知れる米人の言擧げするは聞きてうれしき
あめりかに骨を埋むる心守りて闘ひ來つれいくとせを我は

カリフォルニア州南端帝國平原

はらからのたふとき汗に沙漠さへ深き緑の畑と化したり
眼もはるか灰ひと色の沙原に碧さたたへてソルトン湖見ゆ
夕されば沙漠をわたる風の冷え大空澄みて星降らんとす

矢 澤 孝 子

伊 勢

素白^{すしろ}布^{ぬい}ゆたに垂りつつおほ前をよそひいませず^{かんながら}神隨可裳^か

うちはへて刈りし穂麥を束ね干す御倉^{みくら}津國原ゆたけくし見ゆ

山麓の古き家後醍醐天皇の行在所と仰ぎ奉る

古びたる樹のおぼしまもかしこしやみ立たしましし時を思へば
おぼしまゆ丹生ニの上つ瀬みそなはしみ思ひ深くいましたりけむ
いにしへをここにしぬびて吾がなげくおきその風にとの曇る日や

この家より少し登りたる處に黒木御所の跡あり。後醍醐後村
上長慶後龜山の四帝五十七年間南北和解の日まで神器を奉じ
て隠れ居たまひし處なり。今は平地に碑石のみ立てり

石ふみをよみつつひとりうらなげくまことと思ふもおそれおほさに

北畠親房の墓

八重むぐらしげれる中にまさみちをここと叫びし聲の大きさ

墓 参

吾心父にかよふと夕山に草を刈りつつ物思ひもなし

ふるさと一首

物はみな昔ながらのこの家に老いたる人は世を去りにけり

風ふけばかゆれかくゆれ風止めばしづもりふかし五百箇萩むら

伊吹登山

高山の雲のゆきかひたちまちに降るとし見ればまた晴れわたる
ここにして雲近き峯と思へども見ゆる限りは花畑にして

看 護

こともなく一日過ぎぬと一日ごと神にぬかづく病む母もてば

母の一周忌を迎へて

春の日のほがらかに吾は過したり去年のきのふは母のいまして
この夏は古きすだれも亡き母の好ませしものとそのままに懸く
家ぬちを夏よそひして清しきにいまさぬ人を今はたしぬぶ

病床より見たまふ母もあらなくに庭樹に水をいたづらに撒く

菰野蒼瀧

天の門ゆ落ち來るみづに七山の木の葉みながらいろのさやけさ

矢 澤 聆

桐材業のうたへる

研ぎつけし機械鉋は切れのよし心明るみて勵み吾がをり

鉋機の削りて飛ばす木の屑はかさなりあひてにぶく光れる

矢 嶋 歡 一

今は今はあぶら乗り來し囃子ならむ聞き入るころただにときめく

河岸に泊てし舟多けれど宵淺く舟にともりし燈はひとつなる

をとめ子のおもひあなはかな俱にゐて小夜のしぐれに眼をうつけるる

離れじと言にはいはね汝の泣くかたじけなさますらをわれは
ますらをは口寡ななれ夕霜に米磨ぐ汝をおもひるるものを

雪の枳殻

枳殻の棘にかかりし白雪の解けつつむすぶ玉のこまかさ

枳殻の棘にかかりて降りしかば解くるに間なきゆふべの雪は

枳殻の棘にかかりて解けし雪ひそまり久し雫となりて

こまごまとかかりし雪に光ありて枳殻のさす棘のするどさ

風冷えの中を來てみれば枳殻の雪おく棘の青く鋭し

落 花 四 首

さくら花散りもたまれば庭土に浅き轍の痕しるく見ゆ
片寄りに花散りしきぬ垣のもと大き轍のひとすぢ白し

この園に人あらぬかも散る花のたまる轍の痕は亂れず
おぼめく夕日とおもへ散る花のみな光ありて園のあかるさ
夕風に洲に寄る波をかづく鳥浮かびて鴉にばのかげさむざむし

小田原木菟の家

まれに來てこの裏山に茅花つばなの穂そよぎかがやく夏に遇ひにけり
夏來れば日蔭の崖に薊の花咲きは咲きたれ咲きて數なき
麓田に鳴ける蛙のこゑまさり落ちかかる月の紅味あかみさしたり
聖嶽に月かたぶきて果物の齒にしみるまで夜氣しめらひぬ
降るともなき小雨のあとの日に光りつゆけきものか螢の乳は

矢 島 誠

密林の濕れる土に咲き闌けしごぜんたちばな脆くこぼるる(志賀高原芳の平)

裾花川の源といふせせらぎに大き岩魚いわなのひとつ泳げる（戸隠行）

丘を越え入り來し村は日の當る何處の庭も甘茶乾あまぢやしたり（信濃尻村）

斑尾まだらせの嶺ろより動き居りし雲湖うみをめぐらす山にかかれる（野尻湖）

昨日までわれに聲かけ居給ひし父のみ骨を今拾ふなり（父逝く）

矢代東村

この朝のこころけはしさ人みな顔ことごとくゆがみて見ゆる
わが耳に君ささやけばさらさらと雪にまぎるる夜半の寐屋かな

毛絲はた女の髪のちらばれる冬の庭より淋しきはなし

窓ちかくけだものの血の紅のざくろ花さき五月雨のふる

人生の目的などを本氣にて議論せし頃のなつかしきかな（あの頃）

夏の夜の教文館を出でて來し女はあまり美しかりし（銀座）

別るる前

男とよ別るる前の苦しみをかなしみを抱き今日も仕事す

別れなばふたたび見じと故わかぬいきどほり覺えわがいひにけり

別るる能はず 二首

ただひと目君見てしかば死ぬばかりなげきし心ぢつと落着きぬ

この心ただ相抱く一瞬を措きては君を憎むなりけり

麥の穂のかがやく中を一人ひとの人間が行くぞ急いで行くぞ

うら若き青春の日を日本の小學教師なせるわれはも(職業)

蜆賣この炎天にはだしなり蜆を買ひてくれといひたる(蜆賣)

水天彷彿たるあたりを眺めぬしに人間のことしばし忘れぬ(岬頭遠望)

かくしどころあらはに見ゆれ屍は悲しきものか人等動かず(溺死者)

つるべの音に見やれば彼方藁屋ありてそのまへの蓮田花盛りなり

桶たたく音の大きくあかあかと入日はあかく落ちてゆきにけり

大聲に農夫なにやら話せどもかへつてさびし秋の夕ぐれ

ドーナツトのやや脂こき味覺など秋はかなしき夜の卓かな

春いまだ東京小兒科病院の洋館のいろ青くつめたく(駿河臺風景)

青空の青きをば眺め人間の仕事つまらなくなりけるかも

わが笑めば幼兒も笑むわがこころ幼兒の心に感ずるものか

矢田部穂柄

つひの日はとほくあらしと思ひつつ心靜めてありへし人はも(子規居士の歌を偲びて)

秋さりて木々はさびつつかけ遽ふかし明るきものは赤埴のみち(十國峠附近)

矢野幹愛

病 中

病いゆるきざしは見えず寝ながらに見るからたちの芽はのびにけり
この命いつの日までかつづくべき今日の朝日の松をてらせる

蜘蛛の巢の朝の日光にてらされて光るを見つつ心寂しむ
すこやかに働く人はともしきかも牛に水やる音の聞ゆる

矢 野 千 春

大山の揺らぐが如くすめらぎの御艦みかんは港出でにけるかも

矢 野 君 枝

水底をみつめて居れば何やらむこまかきかげのただよひ行くは
來る日來る日同じ仕事にかかづらひ燃ゆる望は消えゆくらむか

矢 野 柳 香

曼珠沙華すがるる畦につかみたる日なたの蝗いせむしあたたかくあり

この里に住みてかにかくに父母のすこやけき今を思はざらめや

うつしみぞやさしかりけるちちのみの父に似しところ母に似しところ

矢野誠一郎

枕邊の桃のほころぶ氣配ありぬくとき今朝を水かへにけり

矢野平次郎

椅子一脚靴一足をば描かきにけり偉おほき生命に觸れぬものなき(ゴッホの繪)

蓮葉はぢすばの太葉の縁ふちのよき曲線うねりとらへがたくて描きあせりつつ

ゆたかなる蓮の花びらのふくらみを急がきつづけて飽くとせなくに

矢萩直作

日は落ちてにはかに寒し山道の遅き野梅に風出でにけり

矢吹 正衛

悪天明暮

おびえつつ更けゆく秋か刈り甲斐のなき稻ながら刈るべくなりぬ
あきらめて馬の飼料と刈る稻も人並みなれば狎なれにけるかも
食はずして何の歌ぞとあからさまに非難きき來しを妻告げていふ
恃みゐて實らざりける稻原に時期すぎて日の照るはいまいまし
百姓を行まひらと言ひしはいにしへのひじりなりしを今夜思ひ出づ

磐梯山登山

燒山の石崩えあらしき急斜面踏みはづしたる礫吹き飛ぶ
脚もとの崖吹きあぐる霧凄し背囊おもきわれは地を匍ふ
夏すでに秋草咲きて穂に垂るる山の上の沼青くしづけし

見のかぎり四方の海原おし照りて沖雲に入る日は燃えに燃ゆ(燈臺展望)

義兄永眠 四首

訪ふべくてきのふ來ざりしあけがたにも
の言はぬ兄となりにけらずや
み佛となりにし兄が臥りゐるむさき藁床は戸尻より見ゆ

み柩に兄ををさめてつつしめる一夜のねむりいくたびか醒む
枕べのくらきランプに醒めてみる兄の柩のうごくおもひす

いにしへの田づくり人がたぬしみて田をつくりしといふはまことか
あきらめて田はつくれども聖代に稻がみのらぬ嘆きをぞする

實らずてめぐみ受くれば乞食とぞ人言ふらむか食はずともよき

炭焼きのとみにふえしは凶が作しつぎて米食へぬ人山に入りゆく

大瀧根山越え。川内村 二首

野葡萄の若葉をおもく負ひし人石あらしき瀬の近みちを越ゆ

山蕨のこはくなりしをうらみゐし妻は日あつき野を越えゆかむ

灯のもとにささげの莢をむく妻にわれは言ことなく雨夜ふけ行く

おもりゆく病にありて老い母がもの惜しみこころをさなくなりぬ

矢船婦美枝

咲くうはさ盛りの噂さ散るうはさ春もなかばとなりけるかな

病ややこころよければとことばに生くべきごとくこころおごれる

いつの日かつひに消ひぬべきいのちもて悲しきことをくはだつる人

心あてにまてるたよりは今日もなく聖しやうご護院ゐんのかねまたなり出づる

矢部道氣

九十九里鳴濱海岸にて

砂畑に茄子花咲きしらしらと夏の雨降る九十九里の濱

鳴濱の磯をひろらに秋づきてひきさしはやき浪の音かも

八ヶ嶽縦走途上 二首

利鎌うつ鍛冶のきほふ音冴えて佐久の平は雨あがるらし

おのが穿く草鞋の音のかくばかり耳につくなし山ふかく來し

あしかびのそだつ澤邊の春時雨日の照る方に降りうつるなり

奥秩父山中

ゆふづきし山の木群の風冷えて摺れ合ふ枝の鳴り出でにけり

うつし世のあはれはふかし白雲のたゆたふ嶺にもかよふ道見ゆ

槍ヶ嶽縦走途上

とりどりの花咲く見れば高山は季ときのうつりのすみやかならむ

高山の小草は風にさからはず匂へる花をもちてなびかふ

夜明けにはいまだ間あるに赤き灯をかざして誰か山を越え來る

きのふ越えしつばくろ嶽ははろけくも雲のそぎへにありてほの見ゆ

身邊詠

生きの身を人にうたせて太刀さばきみちびきゆくはかりそめならず

母を葬りて

氣ぬけして家發たちくれば外套のぼたんちんばにかけゐたりけり

紙片かみきれに母の戒名かきうつし財布に入れて古郷ふるさとを發つ

身邊詠

あしたまで正氣づくなきふか酒をわれとさびしむ日もありにけり

名工加トを稱ふ

名工の加かトはくがうちし荒あ鉞らの反そりおのづから手にぞかなへる

滿洲出兵をおくる 一首

いつにならば戦ははてむ山の手をすぐる將士の日につづくなる
鼻柱刷毛にたたきてはばからぬ今の女につつしみは見ず

府下小山田村にて 一首

小山田のゆふ野をすぐる二羽の五位あとなる五位の鳴くしきりなり
ゆふだちの雨はおもしろわが家を境になして降りわかれたり

柿生山中

秋そばの花のさかりの畝あかり心もしぬに思ふ古郷(一)

松の間に阿夫利丹澤見えがくれ行く行くたのし春蟬のこゑ(二)

ひといろに白きはわかき檜の葉の風にあたりてひるがへるなり

武州御嶽山 一首

つまづきて闇にころがる石ころのひびき立つ時山はかなしき

日にかざす指のあひまに日のとほり生きのこほしも血は赤く見ゆ

まなぶたを閉ぢてをれども目にとほるあかき日かげは消さむよしなし

生きの身の日かげをこふる季ときいたり松の樹脂は垂れそめにけり

平泉金輪佛

み佛がほのかにあける目の中にあはれかがやくひとみはありぬ

もろ肌に張りたる乳房あらはなり佛といへど人堪へめやも

甲州國分寺址にて

老杉の木の間に射せる朝あかりきはまる寒かえの身にはしづけき

矢部善一郎

かぎざきのずぼんの破れ氣にしつつ町をいそげば寒き朝風

ひばの葉に軽くとまりてやすらへるとうすみとんぼすずしげに見ゆ
わが胸にすずしきものをかよはせてしんと鳴きすむ夏蟲のこゑ

矢部甚一郎

河上に晴るる雪山見つつ行けど今朝うけし恥を忘れ得なくに

光しづけき入日の山へ吾は向ふ歸り來る人いくたりもなき

屋代 温

十年前世界史をわが學びしがすでに移れる思潮にぞ遭ふ

谷田川 優

山の色濃きにうすきにはてしなし中に高きは藏王の山

正札のつけられしまま店先の苗木のびつつ春たけにけり
たらちねに麻の單衣を送りたる次の朝より蟬の來て啼く

谷田部 謙

海面低く飛び居しかもめ米艦の高きますとを輕がる越しつ(横濱港)
父が生きて聞きわびにけるこの家の笹葉の鳴りはこころこほしき(歸省)

館 一 郎

茶毘にふする戰友の遺骸は凍りはて干魚の如く重なりあへり(旅順攻圍戰
突撃後に)

安 房 子

あらかべが乾きしごとくにひび割れて増水あとの河原に日が照る

安 江 潔

貧乏の心安さは戸じまりに心をくばることさへもなし

みづからの古着を裁ちて子ろに着せ妻の着物はへるばかりなり
百姓のつましきこれのくらしにも節約せよと布令ふれまはりたり

安 江 不 空

大楠公六百年の春河内國赤坂建水分神社南木神社に詣づ

いにしへをしぬぶにはあらず吾れただに建武の軍ぐんにあるらむ思ひす
さみどりに棚田つくれる赤坂の七丘すがしくきらふはるさめ
宮山の樹の間しらしらくすぢの旗ぞなびけるごせおろしに
皇稜すめらみしづ威いやひろりゆく御榮にみちたりまさむ神のこころも

山たかし山なみちかしゆふまけて雨をよぶなるかぜふきおろす
ももさかの谿のそこひに咲く花は岩きる水のなみにまがへる
つるぎ舞ふうるはしき妹こをみるもよし齋庭さいていの躑躅もゆるあたり

こまつるぎ若草の上に足ぐみして見和ぎとき經つ奇靈山川

宮山は踏みのゆゆしも大國魂地下神璽ひめし磐城と

こぬれよりこぼるる雨は罔象女のさくらつつじにそそぎます雨

葛城ゆ金剛嶺かけてふかぶかとゆふ雲わたせり菩薩摩訶薩

もも年は六たびめぐりて山川もどよむばかりに神まつりすも

狭小松にさくらつつじをこきまぜて美服おれり神のうつはた

弓取夫がここに禱りし忌垣外のいはが根躑躅映えにはえたり

いつくしき三棟御あらかあふぐときしぬばざらめや三吉野の宮

たけき駒この岩角をふみならしゆゆしかりけむきみがいでたち

あめ牛のつぬにせなかに散る花も社あるけふのよそひとは見る

さうさうと水車のひびき麻桑もかはらぬ里のどけさに居つ

あかさかのさとの憾嬌とよめはたしだしにゆふはた織れりうつ木垣根に
七もとのみきうねうねと百日紅さるすべり和枝にこくきたつ館たむのふるあと
ゆふ櫛かみに丹ぬりの小櫛などさとびたるよき赤坂の妹こよ
山の邊の田井の走出はくれはやしうつ木の花に雨霧合きりふなり

甲戌九月關西劫風時作歌

三千年みちをきよまはるべき時はきぬあめの逆風さかては大地おほを吹く
なぎはらひながれただよひ伊吹戸主いばきどい猛る風はものものこさず
劫風とふは暴疾いちはやくすぎつおほとこのあしけあらけて被ふはじめと
天なるや神經綸みはかりじとのただならぬときのつぎつぎあらはれゆゆし
吹きに吹きあらびにあらび大地おほをどよもす風は神の雄轉を毘ころ
なにもものい向ひ得べきあめなるやその神稜威みちのおこりいたれば

ちよろづの神の御うごきうべなうべなさやけかる世の産うみのくるしび

詣攝北神秀山時作歌

神秀山そらの眞中の長松ちやうしようのこぬれにかかるゆふべうす雲

並みよろふ松の間にみる向むかつ峰せの八しほ紅葉に伊穂里いほりうするる

い照る陽のかぎろひたちて有馬山務古山うすし秋霧の上に

もとあらの山菅原にかぜみえて秋の陽すでにかぎろひゆきつ

うらがれのあら草中のたまり水ここにもすめる空の眞青の

「嬰兒行」慈雲の筆にあひむかひ時は經ぬらしゆふ風來ぬ

はらはらとさくら紅葉に降るしぐれゆふ山寺の門をいでにけり

ゆふ下る山路は月のかげ昏らしうすきしぐれに袖しをををなり

御垣外のひろきいさごのしらじらと月かげにそよぐみだれ高萩
萩花のすぎば惜みかひえ鳥は小枝たちくぐ朝にけにきて

山づきの常蔭とかげにはは霜はやしややにもみづる天の吉葛よきざら

安川圭一郎

月かげのおとろへそむる頃なれや勤行とんぎやうの鐘しきりにはやし(慶州佛國寺)

安川孝次

妻とわれ見ぬふりをして行きすぎぬ勤めの路に出會ひたれども

安田欣平

春の雨しみゆく土のふくらみをこの朝戸出にやはらかくふむ

安田佐和乃

夫つまよりも文數もんすう多き子の足袋を買ひ求め來て何か笑ましき(師走)

明日はいよいよ元日なりと幼な子の手首にぎりて爪剪りてやる

安田章生

このことも時ながれゆき遠き日の感傷とならばたのしくあらむか

安田昌子

青萱をこまごまさきて綴りたるすずしき簍を買ひたかりけり

初霜や髪ふさふさと育ちゆく子に新らしき足袋はかせけり

落葉たく火を二ところ吹き立てて山晴るる日のたそがれの風

大經師襖仕上げて歸りけり夕日となりし芍薬の花

若葉かげ土にゆらぎ居りたちばなの花咲く家を住み捨てむとす

つといでて金釘買ひに來し店よ東海道の古き町筋

安田爲己

いろ映えて匂ふつつじに岩がねのゆるるばかりに思ほゆるかな

安田 勝子

富本憲吉氏の窯明に

おふけなくもの生るるたまゆらの寂しづかなるときめき窯明けを待つ
手ふれなばまだ熱からむを玲瓏と冷たく澄みてしづかなる壺
きびしかるひとりの道にありへつつ心もはらに陶すえは作るか

子

はしけやし子が黒髪を梳きやりつわが心ふとかへりみせらる
ふといぶかしげにもわれを見る子の瞳めに心たじろぐ母なり
やうやくにをとめとならむ子を見つつこのうつそみを寂しみにける
いつしかも源氏物語よむ娘こなりおのづから歩みよる心愛かしも

これやこのまみのしづかさ首ばかりの古き塑像のしたしくかなしき
一つの手首ありつつましく曲げられし指の表情に心打たるる

奈良朝出土品の中に一センチ程の黄金きんの小筐ありふとほほゑまる

大いなるものの寂しさ高原の廣野が上にかかる虹見つ

雨氣もつ夜空の暗を深めつつ閃きめぐる航空燈臺の灯

おのづからしづもり深く到りつつ内にひそけく常うごくもの

安 田 青 風

朝はやく寶水橋けつをわたりくればきやべつはにほふ霧のはたけに(釜山)

人の道ひとに教ふるなりはひをおのれはからずえらみしうつけさ(自嘲)

小判草はやも實になりゐたりけり出雲阿國がおくつきどころ(出雲に旅して)

妻の生地播州西谷村上野に名物のしやんとこ踊を見る 二首

一踊りをどりめぐりて手をたたく月の夜山のしやんとこ踊

城山じやうやまに月が出てゐるかか夜ををさなき時に汝なも踊りけむ

山波に日はてりかげるうつしみをうつしみと見てやすけく居らむ

霜かづく小笹上枝はもろ寄りによりて朝日の和なぎたまりたる

蕭條と竹のはやしにふる雨はおのれ光りて音立てにけり

朝さめてすであかるき窓の外もやたちうごく竹のはやしに

藪原をぬけてあかるき積かほみちふむ石しろく日のぬくみあり

ほがらかに魚らゆきかふ川淀の底の石むらに日は照りにけり

播州林田村鴨池

水尾みづおひきて泳ぎあそべる鴨すらにおのづから眉目まゆめのよしあしはあるも

凍てとけし庭のしめりに照る日かげしみじみ見ればてり動きけり

音水國有林

齒朶の葉をすべり落ちたる山蟹は谷水の底にしづみ据りぬ

室津にて

廢鑛の山にはつはつ草生ひて何かさびしも海よりの風

船越山瑠璃寺に泊る

閑かなるねがひに老いむ日を描けりこの山寺にめざめしわれは

農村疲弊

百姓を國のたからとあがめけむ遠き昔はおもふ人なし

播磨國分寺に詣で壇場山の古墳に登る 一首

よき人の頭かぶをふみてあやしまず世のへだたりはまことさびしき

澄み入りてこころはむなし笹鳴りのやみたるあとにまたもとの闇

川波の秀立はだちましろくさやげども静けかりけり冬の日ぐれは

病床にて

いのちなき風とおもへど夜半すぎて折々すぐる音はさびしき

安 田 謙 治

大隊長の従卒といふ兵の服ほしつつをれば馬の匂ひす

安 田 光

紅梅の蕾やうやくほぐれきてこずゑ明るき朝なりけり

安 田 稔 郎

露じめる朝晴れの庭を掃きにけり一叢の牡丹花咲きさかる

朝風にゆらぎし牡丹ゆれやみてひそまり深くれなるの花

秋の雨しき降る日なりたまたまに獨りこもれば部屋ひろくおぼゆ
たまたまに獨りこもればみづからの動作かゝるまゝにさへ心とまりつ

こもり居の心疲れてゐろりべに焼かむと思ふ栗の皮むく

栗焼きてひとり食くみつつひそかなり一日語らねば人の戀しき

年越しの豆はめばかたし家にいます父の齡よせばをかけてしぬぶも（節分）

草の上に足をのばして坐りたれば爪先の下に見ゆる山々（ニツ山に登る）

頬髯の手ざはり粗しちちのみの父とふ思ひ身にしむ夜かも（妻男兒分婉二首）

さわやかに顔こそ洗へこのねぬる朝のわが家に赤子の聲す

あやまちも無くて罵らるる家妻の狎れては我にかかはらず居り

このあたり白壁多き家造り山よりくれて稲田明るき（上田所見）

見詰むればおのが眼の青むかと岩魚いはな走れる淀の澄みたる（上高地二首）

流れつつ雲消ゆるなり秋晴れの高山のすすきわけつつゆけば

枯草の一色に山の傾きて午後の陽ざしの早くかげりし

安田 ちよ

名も知らぬ草の穂にさへ結ぶ實のおろそかならぬ世のつとめなり

日を一日世は春めけどひとすぢにまなぶ子たちのさびしき瞳(受験準備)

長城を突破したりし益良夫の日やけの顔がおしだまりゆく(凱旋)

闘病の人のみ歌の尊さもにじむ涙も病めばこそ知れ

安田 尙義

あをく飛ぶ螢を見ればふるさとの夕べのごとし心うるほふ

かめに活けし檜扇の葉のいきほひは二夜をすぎてなほおとろへず

菊の秋や今朝紋付の羽織紐白くふときを引きしめにけり(明治節)

紅海星觸手を伸べて晝潮の澄み透りたる底にかがやく
誕生の祝の鯛に敷きて來し寒笹の葉はみどり冴えたり
掌てにのせて米をやるとき鶏のとさかのいろをおどろきわが見し
大隅の國見が嶽の猪じの肉厨につるし日ごとそぎて食ふ

父逝きて半歳また母の喪にあふ

ねばねばと手先にへばりつきにける鯉の生き血を舌になめずる
葡萄糖注射の針を突きたつる母の股根の肉荒れにけり

言ひ終へてつむりいませる眼がしらの涙はふとし靜かに拭ふ(遺言)

ひたすらに癒えん願も空しく妻療院にゆく

浦浪に夜雁のこゑの鳴きくれば涙あふれけん白きシートに

鞍馬山奥嶺の雲の立ちくづれ濡れぬ日ぞなき谷の杉むら

鞍馬よりくだるケーブルましがらに夕日の虹の中を落ちゆく

法隆寺

梨畑に寒の肥する人をりて法隆寺道塔の見えくる

大連にて

壓搾機しぼる油のねつとりと重き空氣の底にしたたる(油房)

あるものは佛のごとき慈顔してその快樂をむさぼりにけり(阿片窟)

支那杭州西湖に遊ぶ

菱の實を咬めばす甘し湖心亭楊柳の髪まだあさあさと

秦膾の毒に倒れし大忠臣岳飛三十九ほととぎす啼く(同岳墳)

昭和六年十一月十九日今上陛下鹿兒島伊敷練兵場に行幸あり列立拜謁の榮に浴す

敷きわたすその白妙の玉砂利に下照るもみぢ色ぞ映ろふ
蒼空を絹笠にして大君のみいのち若く立たせたまへり

大西郷をおもふ

隼人の薩摩男の大ふぐりいく世の史のうへにまぎれず
狩倉の大隅山にうちとめし猪の荒毛のふとかりし眉

長子歸省

わが家の明るさ持ちて歸り來し青年の丈は鴨居にとどく

時相

經濟力持たぬ女性ら柔軟の姿體をつくりて媚を投げあふ

安田治

日々の仕事疲れの氣もややにおちつく朝の石路の雨

星影の澄めばすむとてさびしけれ秋さわさわと松を吹くかぜ

安 田 秋 夫

白嶺山に雪の光る見れば寒々し今朝はつぐみの群れて渡りぬ
寒々と白嶺高山に雲る立ちこの朝あけを凝りて動かず

安 富 六 男

雨にぬれし若葉のいろは明るけれ雫ひとときに地におつる音
今日の月を言ひつつ通る人のあり圓まどかならむと思ひ寢て居り

北海道倶多樂湖にて

上り來し頂てらすま日あつし肌着を草の上に乾かす
山裾すそとほく海にかたむく原始林幾山谷を越えて來にけり

安 永 信 一 郎

山の谿の橋を馬引きわたる人手綱はながくもちてのどけし（菊池川水源地）

山鳥舞ひ群れて鳴く聲さびし峰ふき越ゆる風のながれに（宇土半島縦走）

大き丸太をかたげて男くんだり來ぬ夕山畑の潮明りみち（綱田より三角へ）

おほおほに雪消ゆきの水の落ちゆくか道の下べに音こもらへり

笥の水を手桶みづくに汲める娘むすめがをりて竹の疎林そりんの雪みち明し

山谿の水底みなすましろくづの幽ゆいかにをるをわれは見たりし（淨道寺遺詠）

常日頃なれてはうとき妻子らを旅に來りてわれ戀ひにけり

小刀の研ぎ刃やいばにうつる空の色朝はすがしく晴れにけるかも（仕事場三首）

堅木かたき刻るわが小刀の刃やいばこぼれてこの日さみしき風ぐもりかな

地つちの上におくものの影つばらかに眼につく秋となりにけるかも

冬ふけて背戸の小川の水とぼし沈める落葉かたよりにけり

踏みわたる板橋の板しろじろと夕べの風にふき乾きたる

電車の中に金のことわり考へをる悔やしきわれと誰か知るべき

朝ごころあやに和なごめり庭隅のだりやの花に歩み寄り來つ

手に摘みて山粟茱萸ぐみの實を食べぬ眼にひろびろと裾原はあり

ゆらゆらと揺るる潮の底ひ澄めり静やかにして魚介はあらむ

日の光あ酣かけゆくなべに今朝の霜ながれて草も木もしとどなり

安 水 弘

南京放送局

探り當てし支那よりの電波の感度よし蔣介石シヤンカイシといふアナウンスを屢々聞きとむ

聞きすまず南京電波に雑音多し支那海に蟠わだかまる雲深きならむ

安 水 な せ

ひややかに對ひては居れこの人の話はずひに心をみだす

安井竹美

制服を着物に更へて處女めく吾子の容におどろくことあり(長女女學校卒業)

安井信一

妻は長男を産みたれども俗に言ふめくら乳なり一首

歌會に出歩く錢で吾子のミルク買へとわが母は妻に言はしむ
日もすがら機械の騒音の響きくる家になれつつ子らの育つか
魚市に商ふ人のこゑごゑが朝あけ川にひびきてきこゆ

安井俊二

八町の杉並木道のぼり來て眼にしたしきは大屋根の反り(船越山瑠璃寺)

保田素

大杉におりんけはひの山鴉そのまま低く峯越しにけり

保田 静

新調の服をつけたる中學生露地より手を振りて出て來たりたり

靖西 齊

われ過ちて友をそこなひ更に學校を中途退學す

父ははの寢物語のわがことにかかはれるらし母泣き居たまふ

柳葉 子

母となりて知るよろこびか夜は夫つとに今日買ひし子の足袋を見せつつ

柳宏 二

葛飾かつしかの春すでに闌けて松の花こぼれつきつつ掃かれゐるなり

柳豊 年

軒並にひねもすしるく潮の香の漂ふ村に住み馴れにけり

柳 瀬 留 治

宇治平等院鳳凰堂

千年経る櫂の大戸手力をこめてあくれば音のゆたけき

内間木村に遊びて 二首

吹きすぐる風にそよぎて裏返りしなやかなれや蠶豆てらまめの葉は

さみどりの桐の大き葉すきとほり鮮かなれやひろごれる筋

わが庭の鼠麴の木ほろほろの穂花をもちて梅雨に入らんとす

神田川木場の若衆が満潮に筏漕ぎのぼす棹さばきよし

春雨のしとしと降れば庭石も庭木も土も重くすわりぬ(立春のころ)

妻の病居にて年を迎ふ

移り來しこの碑ひま文谷ふみやの廣き原に春來なば妻よいでて歩まむ

蛙なくふるさとを憶ひて

午寢せるわれのつむりを母剃るかもねむきのど聲こゑに蛙かはづなくかも

太子をしのびつつ大和法隆寺より法起寺へ

岡本の宮の大路は畦あぜとなり冬田の遠に塔一つ見ゆ

飛鳥あすかより難波なにわに大路貫ぬかしめつ御身みかみ河内かはちに埋め給ひき

二二六の兵亂に

蹶起將校の心はあはれ醜俗を殺し殺さば人は盡きなん

柳 生 四 郎

起きなければならぬ時間と思ひつつ井戸の水汲む音をきき居り

植込みに降る雨の音きき居れば雨に打たれてわが居るごとし

柳 澤 文 秋

庭さきのジギタリスの花散りてより空の碧さはさだまりにけり

濃緑こみどりの槐あんにゆのかげは夏すずし心すまして支那人とをり(北京)

柳 澤 宣

見らく涼しわれのゆくてを朝風にうねり顯あちゆく青麥の波

噛みゆきし戦車のわだち残りゐてみ冬せまれる札幌の街

柳 澤 勳

患あむ肉しの斬り口あかき奥まりに生きゐる骨のま白く見えつ(足患)

柳 澤 きよみ

笑ふと云ふことも擬態なり生活のほこりにまみれしはるけき我が道
大根の花し開あかなりふるさとの圍爐裡に父と茶を掬くめるかな

柳澤 恒吉

舟人の湯あみどころといふはよし湯桶は置かる蘆原の中に

柳田比左士

陸奥宗光著蹇々録を讀む 二首

保守攘夷あげつらふ世に陸奥宗光生命いのちを削ぎてつらぬきにけり
かりそめに國は興らずそのかみの蹇々録けんけんろくを讀めばつつましき
愛郷塾頭斷罪すべしさりながら世の勢ひをはばむべからず

柳田新太郎

若狭閑居

湯がへりの肌ひややけし月夜となり明るく露けき磯村を通る

天の橋立

松原に日はありながら與謝の海沖べを霧らし時雨ふり來る
傘さして時雨の海をゆく舟の松のしげみにかくろひにけり
橋立の切戸入江の淺蜷舟漕ぎつれてかへる夕べとなれば

憂愁抄

もつこ昇ぐ外役囚の役服の裾高くしてみな素足なり
袴たたみ羽織も脱ぎてたたみたり常の日のごとくわが敷きて寝む
羽織脱ぎし肩先さむく日暮れたり臉を撫でて寢につかむとす
官給の三布蒲團をのべてをりこれは縹いろ裏も表も

障子紙と張られし明治の所刑帳は武士めく名もありていたく古びたる

三月宿志成り上京のこと決す。住み馴れし地の人々と別る。
丹後岩瀧にて

曉方にひとしきりせし淡雪の凍てし道のべに別れをいひつ

漸く若狭高濱に歸り荷物を纏む

旅にゐて久しかりしがこのあさけ目覺めにききし潮騒しほさるの音

濱宿の軒にかけ干す笹鱒ささがれひにおよぶ日ざしははや春めきぬ

都にいでて住むに生活たつきの難からむあれこれと思ひ荷を多くしつ

けふをかぎりの吾が室まなりけり電燈の球のくすみも久しきものなりき

片寄せし荷によりかかり目をとぢぬ障子にひびく潮鳴りの音

中央線を迂廻、鹽尻驛に夜半の列車を待つ

やうやく炎だちたるストープに残れる赤き錢をしらぶる

拂曉、中野驛に著く

ひと氣なき驛にわれを降ろし須臾しゆゆにして動きいづる汽車を見送りてをり

著京四日目、三月七日丹後大震災の報至る。慌しく五氏母堂に
隨ひ歸る

みんなみの庭の白梅咲く家に老ゆらくのひとを伴ひかへれり

東京生活最初の新年 一首

大つもごりの夜となりて何をすることなく著物の襟の脂拭きをり
上州下仁田より葱と餅もちひをたまはりてゆたかに過ぐす三日ばかりは

従業をりをり

心弱りてわが蓐食じよくじきにつけるとき寒き時雨の軒を降り過ぐ

夜毎さく貨物列車のにぶきとどろきはおよそ二時過ぎて間なきときにか
中野電信隊朝調練の兵の聲曉に徹る潮のごとく

柳 原 利 次

ほのかなる丁字の香りただよへり春の雨降る高臺寺の道

柳 原 興 子

ともすればやりどころなき怒りをば母に投げては歎きもぞする
もろともに死なむといひて神かけし誓ひのほどもおそろしきかな

柳原白蓮

われはここに神はいづこにましますや星のまたたきさびしき夜なり
忘れむと君いひまさばつらからむわすれじといはばなほ悲しけむ
けふの日もなほ呼吸するやふとしたるあやまちにより成りにし軀
友とのみおもふ心のあぢきなしふとして君が怖ぢたまふ時
骨肉は父と母とにまかせきぬわがたましひよ誰にかへさむ
一を二とよむすべしらず知らざれば智慧足らぬ子とかしめらるる
われなくば吾世もあらじ人もあらじまして身をやく思ひもあらじ
若き日も美しき日もくれはてて戀のほかなる悲しみぞわく

毒の香燻きてしづかに眠らばや小がめの花もくづるる夕べ

わがために泣きます人の世にあらば死なむとおもふ今の今今

寢臺車窓かけすこしひきて見れば月はさびしくわれと共に來る

追憶の帳のかげにまぼろしの人など入れてけふもながむる

月も日もわれらがための光ぞといひてし日より天地をしる

船ゆけば一すぢしろき道のあり吾にはつづく悲しびのあと

朝化粧五月となれば京紅のあをき光もなつかしきかな

行きなれし麻布の寺の大銀杏その木の下に落葉つむらむ

いとけなきわが魂をもてあそぶ人よとおもひ憎さまさりぬ

思出に泣かじとこそは誓ひつれ雄々しきものとなどのたまはぬ

吾を恨む人の言傳たのまれし四國めぐりの船のかなしも

われといふ小さきものを天地の中に生みける不可思議おもふ

ああけふも嬉しやかくて生の身のわがふみてたつ大地はめぐる

思ひきや月も流轉めぐのかげぞかしわがこしかたに何をなげかむ

萬葉の唐使が見たる月やこれ今南京の古城の上に（南京にて）

たはむれに母の亡き後といひかけて涙わききぬ子は泣かねども

秋の風ゆふべにはやき窓しめてきけばはてなきもののさみしさ

先の夫つまもこの夜のごとく待ちにける思出とほしみぞれふる音

かへりおそきわれを待ちかねいねし子の枕べにおく小さき包

母病みて重しと姪よりひそかに知らせくれどまだ里方に出入

の許されぬ身なれば 三首

かかる日のいつかあらむとかねてよりなげけるものを今あひにけり

知らぬうちにはわが母なりきしりそめて母ならぬ母となりましぬ母

母の手をとらせてくるる姉が手を佛の手ともひた泣くわれは
我が手をば見つつしづけし親しめる人の倂次々らかぶ

ここにありし見ぬよの人のおもかげのあるかとぞ思ふくらきともし灯

故九條武子夫人の舊邸にて 二首

今の家の主はしらず身をひそめ垣かき間ま見るなり梅の咲くかと
罪ありと人交らぬこの我をよびてくれけるこの家なりしを
手をとりにて我兄の泣けば別れるし十三年の月日かなしも
いつかまた逢ふ日しらねば別れゆく人の足音惜しみてぞ聞く

柳 本 城 西

うづ潮のあぐる飛沫は磯山の裾ゆく道を吹き越えて飛ぶ

藪 内 春 彦

野火過ぎし跡に残れる芽かひよもぎ撓たがまぬものの力を思ふ

大 和 澄 夫

四版の校正刷が出来たりと居残給仕喜び歸る(新聞社)

大 和 勇 三

笑あまひつつ口にしあつる手のさまのをとめさびたる子になりけり

愁あはいつか心に返りゐたりけりひげ剃りをへて机こに來れば

町角まちがしに集りてゐる吾々に何か言ひたげに巡查あやあゆみ來

流れ來し大きな家鴨あひるは水かきの黄いろさやかに地を踏みにけり(動物園)

伊豆大島遊行

腰こしの邊へに毛布けふしをまとひ夜半過ぎて冷ゆる船室ふねむろに將棋しょうぎ指しをり

大島の輪廓りんがくは闇やみに溶けゆきて赤く浮かべる火の山の煙

ふたむれに飛び立ち行きし磯鴉空のなからに重なりにけり

富士山麓山中村

リヤカアに妻子を乗せてゆく人あり田舎の人はさみしく親しき
山の家のうつろにひろきさみしさよ灯かげ小暗く襖に及ぶ

山 と し 子

言こともなくただに讀み耽くる夫つまなれど寄り添ひ居れば心足らへる

山 柿 美

子ゆび程に中ゆび程にふくらみてふさを見せたり藤のわかふさ
ささやかに集ひて出づる蘇枋花大宮人のめでし色なり

山 内 一 郎

家をうり別れて生きむ親子四人庭にさかりのかきつばたみる

山内清平

やすらかに眠るがごとき細眼して何をや笑まふ死にちかき子の
なきがらを前にし坐りおもへればかくなりしこともやすけきに似つ

山内純男

花の精ここに集めて蜜蜂の蜜は琥珀の色に張りみつ

山内友五郎

三年越し飼ひたる河鹿生命いのちありて春さり來ればまた鳴き出でぬ

山内國治

風風ぎて潮のたゆたふ海遠くみちのく山は低く起き伏す

高原をひと日歩みて山あひの赤川村に日は暮れはてぬ

貧しければ忙しく姉はあり經つつ婚期遅れしを言ふこともあり

夕近くなりて歸り來し弟はそそくさと履歷書を書き初めたり

山内眞珠子

客あればわづかに笑ふ聲もするひそけきわが家を時に愉しむ

山内司

聞にしてとほくききたるせせらぎはまなかひに低き溪川の音

山之内康

歌一首何ぞ寶玉に劣らむや心驕りて思ふ時あり

山浦爲一

法の光かかる邊土に及びけむ天平の代は遠つ世にして(隱岐國分寺)

裏山の梅の木立をつつむ雲いよいよ深く雨おとし來ぬ(八ヶ岳登山)

草木瓜の花咲き初めて淺間野の燒石原の青む頃かも

松生ふる磯山の上に細々と燈臺に通ふ道つづきをり(日の御崎)

山形 徹 一

日あたる峽の山に炎立つ野火のなびきをおそれつつをり

弟の呼吸せまりたるあかつきを飛行機ひびき屋上を過ぐ(弟逝く)

山形 勘 三

川口とおもふ空飛ぶ海鳥のかたむく翼日に輝きぬ

山形 信 太郎

谷ふかく墜つる陽かげは濃き青の木群がなかにとどまらずけり(秋田温泉)
城東區に入りきてながき橋越しぬ水口しろく海に注げり

山形 吉 藏

三田尻の沖に假泊するわが精銳無敵艦隊は汽車中より見ゆ

五月の雨冷ゆる日を朝あしたより父の遺品を母と調ぶる

僧のいふままになりて母上の承知せる寄附金をわれは斷る

山川 秀夫

ひつそりと庭に秋日は溜りたり人のゐるかと思つてとほりつも

山川 茂朗

そこはかところが戯あそびのあとありて川原の砂のしろき夕ぐれ(石狩川)

山川 福代

幾たびか父に従ひ移り住みき吾が記憶なき頃より然りき

使ひなれ給へる君がくさぐさの物ある部屋に明るくぞ居る

山川 弘至

きはやかに光しみ照る岨そだの道雪來る山のしづもりきびし

海洋わがたなかの島にこえ來てひそかなり流人るいじんの墓はかわき居にけり(流人の島)
春ふかく見知らぬ國の山川を心にもちて日毎すごせり

山川 柳子

南半球めぐり來たりし巨おほき船浪押伏せて岸壁に寄る

夫の逝きし折

父なき子まるうつどひて物食めりこれを我子とながめけるはや
君と我めでのたからのこれの子らあはれ幸なき子となりにけり

病みつつも子は育ちゆく

肩ならべ手ならべ見ればいづれも皆母とひとしく育ちたりけり

娘は病みて二年となりぬ

暑さに負かさじとおもふ病める子の髪あげてやれば額のしろさ

久しき鬪病に心身とみに衰へたる十六歳の娘は或時は幼子の如く或時は大人の眼をもつ。なにげなく母と語りつつふとは涙さしぐむなり。今は思出となる二首

まなじりにあふるるなみだ白々とかぼそき指に拂ひたりけり

をとめ子が病み衰へつ美しきものをながめてつきし吐息はや

寺庭に白き山茶花咲き散れり苔のあつきをふむはしづけき

日かたむき山々は皆影もちぬ秋たちそめて影のあざやか

白樺の稚木が原に日鎮もり一向ひとむきに風の走りゆくなり

岩涯いはがひのただくろぐろとぬれひかり霧の底なりこの深溪は

風の音山より山にひびくなりいつしか夏も終りたるらし

抱きあぐるそのあたたかさやはらかさ乳兒は寢起きの香をはなつなり

空見れば亡き子戀ほしくかぼそかりし肩を抱かむおもひ切なり

ふつつかに生きしいのちとおもへかもはるけく人をおもひつつ來し

ほほゑみをひとつのすべとゆるされて老いに入るべき我身なるかも
谷へだて聳えたつ山連れり甲斐ふかく来て秋のけはしき

大きな山四方に連る高原に散らばり光る秋の夕雲

秋の夜の月照りわたる高原に大きな山々秀をならべたり

夜をふかみ我にむかひて来る蜘蛛の燈をむけたればあゆみ止めにつけり
野をよぎり森のはづれの一家に入り来し猫はわが顔を見る

高原に親子の馬のあそべるを輪に入れて大きな虹たちにけり

信濃なる志賀の高原他木なく柵の木原に霧しまくなり

雨過ぎし眞野のみささぎぬれそぼち這ひもとほるや日かげのかつら

二十八になる男子を亡ふ

まなじりにつたふ涙をのごひやりいまはの名残りつきなむとする

死にゆく子大人となりて居たれども母を呼びにけりたえず呼びにけり

山川 英子

田植道具車に積みて賀茂をんな歸る夕の星あかりかな(洛北にて)

收穫とらひのかぶら大根の荷車の音あらくゆく月あかりかな

大根を積みし車の音ひとつ夕木枯にふかれゆきたり

灯を入れてひとりの窓によむものにふるきアルネの譯本はよき

山上 三千生

託兒所の寢臺の横に千代紙ら散りぼへるなり蛹さなぎのやうに

山上 泉

夕さればかならず雨か蓼科たぐさの高原すでに片戻かたかへりせり

さやさやと茄子の葉ずれのする頃ぞ畝にこぼるるむらさきの花

もくもくと炭焼くけぶりたちつぎて雲の峰までいたるしづけさ(伊奈溪谷)

・赤石の山たちならしおほらかにうたへる禽(鳥)はちひさかりけり

迦陵舞(かりら)ひ頻伽(びんが)のうたふかたちしてみ田の菖蒲ら花さきにほふ(明治神宮御苑)

信濃路の月は秋蠶(あきご)の食みぬべき桑の葉ごとの露にやどれり

信濃路のしづが伏屋の屋根石も白珠のごとし雪に映ゆれば

ひとり兒に父とおほぢとあひよりて有漏(うろうろ)の垢をぞごしごし洗ふ(錢湯)

母も子もただに黙(もだ)して涙せりひととせぶりに逢ふいのちゆゑ(歸省)

水心(すゐしん)のみどりの渦はおのづから汀(みぎは)の石に觸れてしづけし

凡人は凡人ながらあだ花はあだ花ながら散るもよろしき(偶感)

もみぢ葉のしたべる娘(こ)らと奥多摩のきよき河内をさかのぼるなり

小使は梯子を肩にこはれたる煙突を見上げ見上げ近寄る

山岸 大二

家族は幾人などとききて見る山の部落の春のひそけさ(笹子平)

山岸 義 昂

ひとなだり茂る葛の葉おし返し吹きあげてゆく谷の風みゆ

山岸 貞 治

眞晝間の炎熱(はとぼり)に草木しをれをる砂原を匍匐前進は身にこたへたり

山北 幸 子

丈夫(ますらを)の君に言ふべきことならず今日の想ひはひとり書きとむ(結婚二日目
に夫出征)
漢文句調の手紙を笑ひ合ひつつも父のなさけは心に應ふ(渡満す)

山極 二郎

長崎のみ寺の鐘は夕まぐれ澄む秋空に響きわたりぬ

低谿ひがたは吹雪しづけき風のまにともしく家の見ゆることあり

川べりの家まで行きし郵便夫のぼり來りて橋に憩へる

雲海は明け沈みたり思はざる涯よりのぼる陽のしづかさよ（未曾御嶽）

山口 豊光

むささびのあまた鳴けども紛らはずいよいよ透る佛法僧のこゑ（三河縣來寺山より放送）

子が寝顔夜毎いとしみ吾が寝入るこの楽しさは父もなしけむ

いそがしく鳴き居し百舌もずのいねてより村は無風の月夜となりぬ

風はらむ雨のさ中の海にしてまぎれず透る海女あまの呼吸いきぶえ（清見潟倉澤海岸）

大空の光の中にとけゆくと見居れば鳩のまた舞ひ戻る（軍用鳩）

音たててひととき降りし夜しぐれの遠ぞく音はきこえつつ消ゆ

山 口 好

坑内惨事 三首

落磐の重なれる下のうめきごゑ立ちきけるまにことぎれにけり
落磐におしつぶされしまはだかの女人にょにんをみたりあかりの下に
堀りいだす落磐下の片足はわらぢをはきてゐたりけるかも
米ぶくろおろしてやすむ岡のやしろ空の四方よむより雲わきいづる
夕焼けに人の顔明かき夕街をひもじくかへる口はからびて
たぎりつつ粒玉の飛ぶあぶら壺熱量見るとわれちかづきぬ
ことごとくおのれにかへるふかき罪をのきたもつ今の心に
肉體のをみなに觸れぬ苦しさを人にも告げずさびしむ吾は

引き窓のがらすにしとどつゆじもの流るる見ればまだ寒からず
引き窓に月は移りてころろぐくつかのま照らすたたみの上を
婦つとの家に身をよせくらすこの日ごろ親しき言葉すくなくなれり
脚立たず寝ねつつすすぬるき粥日ながく病めばうとまれにけり
磯岩に波ゆりひびく日ぐれがた大雪きたる曇りとなりぬ

貝 漁

生きものと思へぬ小貝かず知れず夕ひく潮になくがさびしさ

山 口 一 夫

二日の日に千住の兄のところまで父は来てくれと言ふ金のことならん

山 口 恭 代

幼き日むつみし友と申さむもはばかりあれど嬉しかりけり
天津てんしんの小學校に通ひまししみ姿こそは今浮ぶなれ

盲腸手術

手術終へて室へやに運ばるる大廊下の曲り角いくつ身に感じをり

伊香保榛名行 二首

見晴らしの峠たけに生なふる熊笹くまざさをなびけ吹きすぐる風はつめたし
すがれたる草原なかに幾匹の馬は遊あそべりはなればなれに
庭の木にわたせる竿はしに乾す衣きぬの赤あかきが映うつゆる室へやのうちまで
この日ごろ食たのすすまぬ夫つまがため紅べにく漬つけけたる生薑しょうがをきざむ
桑くわの葉はの黄きにすがれゆくさま見ればたちまち過ぎし夏なつとし思おもふ

山口 妙子

笹道を露にぬれゆけばいにしへの清水わきてあり木群がくり
この峽にわけこし今日のかたみにと紅葉の一葉髪にかざしつ
大きな空とそきたつ嶺とまなかひに緑につづく樹林とわれと
そのかみを思ふもかしこみ吉野の山の櫻の落葉ふみつつ

山口 貞子

かへりきて静けき土間の夕あかり尻切れわらぢぬぎすててあり

山口 白陽

みどり死す

子の病篤きにつれてこと足らぬ家にいさかふ日の續くなり

右の手は母に左の手は父にゆだねて今か息の絶ゆらし

合掌の小さき骸は御佛に抱かれつらむ泣くなわが妻

山口 重吉

榑火消してまだほのぬくき圍爐裡邊に父の藁沓ほして寢につく

山口 不二子

晝に凝りて時を忘れし夫ならむ眞夜の沈みに晝筆洗ふ音す

湯に入れし子が丹の頬のつやつやと灯の下にしてにほふ愉しさ

山口 軍作

いささかの蠶糞を持ちて捨てに來し晝の畑のゑんどうの花

炭を背負ひ一人吾が下る尾根の道星の夜空となりにけるかも

夕まけてつのである寒さかちちのみの父と掘り居り山のながいも

夏もなほ山にこもりて炭を焼く身のしみじみとなげかるるなり

鶯の啼くこゑ聞ゆあかつきの山の井戸水吾が汲み居れば

山口 頂風

病みぬいて此の頃飯のうまければ三度の食も待ち遠しかり
うつし世に生きてかひなき此の吾を兄にもちたる弟あはれ

山口 不二花

花曇るひと日の暮れて夜雲濃き向つ山邊に初雷の鳴る(甲斐)
わが甲斐の都留つるの群嶺にこのあした秋風立つと雲騒ぐ見ゆ
鯉幟見ればこころにかへりくる山々ふかき父母の國

桂川の谿ひろくなりて水ゆるし下瀬は光る相模の國に(上野原附近)

海にひらく浅き峽間は秋づきて鞍掛山より下る霧多し(湯河原)

夜半の月彌陀みだのすがたに見ゆといふ伊豆の國邊に月待つ吾は(熱毒にて、二十六夜待)

沖津邊にしろくむらだつ冬雲は三原の山のうへになづさふ

土ぬくむいでゆの山に冬ながらかなしきまでに咲けるしら梅

雪けぶる山河のすがた極りなし寥々として寂しきわくも(上州湯原)

秋の夜川を距てて相對ふ二つの村に月照りにけり(川原湯)

しづかなる今日とぞおもふ雲おりて裾野ばかりなる冬赤城山(總社鑛泉)

天に立ち常白山のはるかなり低山裾の湯にゐる吾は(山代温泉にて加賀白山遠望)

枯れなびく草の起き伏しも見のかぎり照る日のなかに寂しくなれり

喪にこもる天が下には土に生ふる松はあれども門松は無し(昭和二年一月一日)

起重機のゆらりと宙に吊りあげしこの鐵材よ春冴ゆる空(ビルディング工事)

夕かげはうすら寒けし停車場の柵外に並ぶ家の裏口(高圓寺驛)

山下の稲田ふく風吹き上げて山には冴えし松風の音(高幡山)

山口由幾子

藤浪はむらさきゆたに匂へどもをみなの盛り吾はすぎつる

双乳房あらはにみせてはにかまぬ生命なきものを愛しみにけり(埴輪)

手弱女のやさしき埴輪みし吾やいにしへの戀におもひいたりつ

花と花寄り合ひ咲きてくれなるは暗きまでふかし庭の丹躑躅

山口 綾子

きほひつつ坂を降りてゆく子等の聲弍して山の明るさ(日光)

山口 重次郎

吹き猛る音聞き居れば眼交にむごくもまるる稻見え來る

山口 武二

店ぬちの商品の間に夜は寝るこの寂しさも慣れゆかむとす

夕べ來て泊る磯宿のしづけさよ疊の上に蟹あがり來る

山口 甚作

ラヂオニュースに兒も覺えたるアヂスアベバの空襲の日も近きにあらむか

山口 榮一

朝はまだ土踏む足の冷たからむ草履をぬぎて子らの遊べる

山口 濱雄

靜かにもたけし晝かなわが祖母おば茗荷めうがばたけへ杖つきて來る

山口 幸安

村人の門出祝ふと吾にたびしこの三色旗は屋根より高く(入營近づく)

りうりうと土か潛ひき行きしもぐらもちの盛り上げし土を踏みつけにけり

灯の見ゆる町は宿營地なりと喜びのあふるる聲は言ひつぎ來たる(露滿國境討匪行)

山口 則之

演習の兵を迎ふと田に畑に忙しき秋を古たたみ乾す

山口 白二

棉畑に漁るともなき鷺のむれ夏めきにけり白き涼しさ

山口 武夫

露の葉の葉がくり青し蟻群れてにはかに山の雨降りにけり

山口 つゆ子

燈火管制のままに明るくなりけり遠き木むらの朝蟬のこゑ

氣むづかしくていよいよ長き父の夕餉守りつつ我はほほゑまれくる
手桶に鯉がゆらめく水の音いねむとしつつ耳にのこれる

山口 美代

給桑に少し間のある今宵なりかさむ新聞拾ひ讀むなり

山口 茂吉

土手こえて木枯の吹く濠のみづ岸の氷にうちあげて居り

惜妹こつる 一首

妹が肌身につけし守護札汽車の中より川に流しつ

この山のす枯れに向ふときならし遠く眺むる山晴れにけり

外燈に照り出されしところには霜しみつきし草みだれたり

道尻のところどころにとどこほる雪解の泥に降る寒の雨

砂利道に朝より暑き日の照りてむらがれる蠅飛びたちにはけり

大川の空につらなりて夕ぐれの明るきかたに雁わたりゆく

あかあかと灯をつけし汽船の近づきて大川口に波たちわたる

啼きながら晝空わたる雁がえの列らかくまぢかくに見しこともなき
かりがねは群れて渡れど夕されば柴崎沼おに下りてたむろす
こころ驚きてわれは見にけり幾百の雁がえの落つるは時のまにして
葦あしむらはいまだ茂らずみづうみの暗がりに湯のたぎり湧くおと
近づきて羽ばたきやめし大き鶺鴒あひぢはかたむきざまに木に著かむとす
夕づく日ひととき赤くかがやきて空わたる鶺鴒あひぢを照らしいだしつ
岬山の木立は古りて青潮をかづく海鶺鴒あひぢをやすく居らしむ

武藤山治氏を悼む 一首

貧しくて君にすがりしことを思ふこの夜ごろわれ室むろに居りつつ
峽かひとほく杉原谷にかへり著きて古りし疊かさねのうへに坐りぬ
高はらは朝よりさむき雪ぐもり樅の木立のつよき匂ひす

裏白の新芽ほぐれて行春を石見の國に旅とほく來し

おのづから心なごみて吾は見つ藁くひもちて飛べる海鳥

ひがしより光きたりて富士の嶺をあけぼのの空に照らしいだしつ

前山の落葉のうへに裸木の浮き見ゆるまで山はさやけし

棚雲の下に晴れたる淺間山見つつ寂しも片明りして

三保のうみの遠磯濱は水際まで草は黄いろく枯れわたりけり

洲の上にあがれる鴨ら枯葦を胸分けざまに匍ひもとほろふ

夕潮のたゆたふ海のうへ低くうつろふ雲は磯とほからず

春 雷

一日晴れ春の來むかふ夜となりて光たばしる坂のうへの雲

山之口 辰夫

伊敷練兵場における航空ペーデントを病床に見る

かぎりある四角の視野にあらはれてとぶ飛行機を寝ながらに見し

山崎 重雄

しまひまで男をみな葛藤をくはへぬ映畫はうらやすくみぬ

休み日の徒然つれづれをわが訪ひゆけば友は内職に賀狀書きみつ

秋をふかみ鳥は鳥にて清すがしからむ籠をへだてて囀りあへり

山崎 捷治

菖蒲湯をいででからだ身體はあたたかし眼鏡のたまはくもり持ちたり

青田風さむしと思ふくれてゆく富士に向へる窓をあけつつ

山崎 かすみ

朝宵の冬づく寒さ人去りて部屋にさす日のただにしづけし

山崎 美正

夕せまる丘の彼方に赤々と野火もえさかり人動く見ゆ

ひねもすを水田に入りて稻株の根ばりうれしく草取りにけり

山崎 秀子

檜の木の根株に及ぶ陽光^{かげ}闌けぬ白き粉^{こな}ふくさるのこしかけ

山崎 喜久一

甲板は人居らずしてワイヤ一の影くろく曳けるよき月夜なり

無線受信所の窓を洩れくる受信機の音さやさやし秋づきにけり

テニススコートの白きラインは眼にとめて夕闇寂し獨り居る部屋

廣瀬村は陶物^{すまもの}どころ宵ながら路に洩れ來る皿運ぶ音

放水路のここを流れてゆく水の水皺^{みぢわ}も見えてよき月夜なり

山崎 眞 吾

頂はいよいよ鳥の聲しげしわが目の前に來るやまがら山雀(英彦山)

日のさせる水ぎはに寄りて鯉の子のにごりを立つる池は淺しも
谷かげは暗くなりつつ鋸屑おがくずの下に凍りし雪を蹴りゆく(英彦山)

山崎 眞 砂

たたずみて月を見てをるわが側を人話しながら通りてゆけり

山崎 謙 二

盜心あるにあらねど預かりし金に卑しく胸ときめけり

地下深く基礎コンクリート打つといふ錘おもりの音は地を響き來る

山崎 周 信

ひた廻る調革べルトの音に聞き入りて老いたる技手は眼閉ぢゐる

山崎とね子

風のゆめいくさの夢とおとうとの夢の日記の面白きかな

山崎 静子

つらなりてなびくほのほの黄に澄みて大文字いま燃え熾りたり(大文字焼)

山崎 隆子

濕りたる朽葉ごもりにこぼれゐるかやの實青し晝深き山

山崎 君子

死ぬいく日前にてありし姉の顔のいたく美しくたまゆらありき

山崎 哲太郎

山川を船引きのぼる舟人の石拾ふ如くのぼりゆく見ゆ

山崎 秀峰

斃れたるつはものどもが榴彈をにぎりてゐしはあはれなりけり(双城堡激戰)

山崎千代子

久々にくつろぎいます夫つとと居て語る多くは生あるものこと

母吾れの乳房まさぐり吸ふすべを知りゐて舌の強き力はや

山崎良幸

砲彈を車につみて兵二人鐵橋の方へ話しながら行きぬ(漢江)

山崎光利

うかららが炬燵によりて葛の粉を立てて食たむ夜となりにけるかな

何となくわれの心を澄ましむる秋瑠璃色の露草の花

秋早く背戸に來てなく馬追のこゑよりもなほ細き稻妻

二つ三つ帆船落ちゆく大江にたゆたひて陽の沈む紅雲

山崎亭

雪げむり高くなりたるひるつかた翼ふれつつ鶴ちづ二つすぐ

北國の海渡り來てこの空に鶴いどみあふかなしくもあるか

山崎松野

春のとり籠に啼かshめてうらやすしまことにここはわれのふるさと(かへり棲みて)

山崎等

汽車去れば又も黄いろきかれ麥の野となり晝を静まりにけり

桑室まぐに桑つみためてゆるゆると夕餉食ひ居れば雨ふり來たる

父も出て畠に桑をむぎ給へり年老いまして佛のごとし

咲きほけし花は夜となく散りてをりもの心の深きしづけさ

子規啼きてゐるぞとおもひつつ一日顔をあげぬ草取り

我が心ものをおもふとせし時に稻扱器械稻を喰ひ込む

つぎつぎに牛を屠りて手を洗ひひるむ色なし牛殺したち

現代の世に添ひがたき啼きをして閑古鳥は一日山を下らず

ぐみ實る五月となればやりくりの行きつまり來て税をおこたる

大橋の鐵骨太き咬み合ひを船の上より仔細に見たり

萬能の鍬一挺に一千年昔ながらに麥をまきつく

春の風障子の穴の破れより笛ふくさまに吹き入りにけり

幼子に桑を負はせて悲しみぬ蠶飼ふわざはあらかきわざなり

蟬のそのきちがひじみて鳴き立つる聲をばきけり午の炎天

畦豆はひとりはじけてゐたりけりあらくれはてし手のかわきかな

枯れるもの枯れてしまへばうとうと急ぐことなき小六月なり

わびしさに我も出て割る眞木丸太ぱくりと割れてこだはりはなき

くぬぎ眞木ぱくりぱくりと割れにけりものさながらの思ひするなり

寒がすみ知多の岬は色さめて海の水より低く見えゐる

庭石の根に吹きよせし花びらの光るよごれに日は曇なり

静かなるものの聲かな閑古鳥は草をむしりて居よと教ふる

伸び立ちし茅の若芽のとがりには寂しきもののすなほさを知る

雪のなかを驀進しくる列車あり命きびしく我が思ひをり

つまみとる朝の螢の肌の冷指紋にしむるごとくしづけき

東京の片隅に學ぶ子の宿に涙おとして一夜ねにけり

草のあくによごれたる手の黒きかも灯に照しつつかさびしみにけり

山崎 ヨシ

赤く大きい毛絲のたまのほぐれゆく糸の動きを見つたぬしも
雪もよひの寒き夜空にあかあかと鑄物工場の火はたち上る

山崎 忍

足ららの感覺いつかにぶりはて馬櫃いくつも吾れを追ひこす

山崎 剛平

妻の死後再び學徒たらむと上京して下宿に宿る 二首

我が室と坐つてみれど何もなし玻璃越しに見ゆる秋は夕ぐれ
我が前の一つトランク眺めつつ遂に來にける我をこそおもへ
歸り來れど座布團一つあるのみなりともあれ我はその上に坐る

或夜の藤原隆信

あかるきに過ぐる月夜かおばしまに凭るをみならおもはゆげなる

徹　　夜

藝術は畏かしこきろかも書き悩み悩み積るに身ぞ遜ひくる

徹夜癖十年續けど文字書かで明けし夜明けの如何にか多き

宿世すくぜとし覺悟變らね疲れ果ててこの曉を床に悲しき

山　　崎　　誠

ふるさとかへり住まへば村びとが山のぜんまいくれにけるかも

山　　崎　　敏　　夫

動力を停めて工場の夕ひそけく水をうちたるたたきの清しさ(半田麥酒工場)

大歳のくれ近きまち鳥獸店に鳥けもの等のなきかはすこゑ

講演終へしたまゆらの心やすらぎを愛で惜しみつつ手套てぶくろをはむ

天城嶺を越えて來にしが道の邊にわさび田ありて水あふれたり

秋雨の中をとびくる槍の穂のかそけき光りやがて地に落つ(陸上競技)

漆黒のびあひかりて灯のもとにこの春宵はたけゆかむとす(公會堂にて)

この丘の青葉となれるしづけさを行きて面影に立つ人のあり

見るままに紫紺の水着なか空にくるりとまはり水にくぐれる(全日本女子
水上競技)

ひそやかにたあん終りて水ふかくのびるだけのびし四肢の美しさ

しみじみと秋をおぼえて寂しきはらぢおに入り來るぷうるの水音

屋上庭園のくれなゐの旗ふかれをりはれきはまれる冬の空なる

外とのものには梅の實賣りのこゑさびしくもれるままに夕さりにけり

石の上にながれてあかき月のかげなきて夜蟬の立ちにけるかも

かこみをる青葉がなかに見てさびし戒壇院のいしのくづれは

生垣の若芽ののびに春日さしまたあたらしきこのさびしさや

山崎 平吉

大寒のあしたの空にむんむんと醗酵しをり軒の堆肥は

このあさの凍みをつよみかべつたりと大玉櫛鎖手にへばりつく

夏もなほ薪の挽場のおがくづの下にのこれる雪のかたまり

盆すぎていまだ穂の出ぬ田の上にくらくかぶさる海霧ぐもり空

釜下の火は燃えさかり眼にいたき蒸溜薄荷の烈しき刺戟

製品の薄荷精脳は純白の棒状にして霜柱に似たり

あげつらふ言葉のはしを本能の話におとすこの女達

山崎 一輪

常の如くめしひの父母を隣家の人にたのみて野良にいできつ
貧しければ眼科博士にも見せずして遂につぶせし父の眼母の眼
めしひなる母が洗ひし敷布なりよこたはりつつあつきまなうら
飛行機のプロペラの音とどろけば見えぬ眼をもて空あふぐ父

山 崎 茂

千里濱見ゆる限りは草なだり天にはろけき馬飼ひどころ(阿蘇)
日はすでに向ひの山に入りしかど夕明りあり茶をかどいる門(嬉野温泉)

山 崎 茂

南風にレール一筋雪消えて春來る道か遠くかげろふ
照る月の光かすめてふる雪はひらひら暗きものとし思ふ
かぶさり來る夕立雲の風先に桐の大葉の涼しく息づく

山形を暗く隈取る月魄に汐の差落のすさまじき音

雪山の波折の茜吹き消えて簷の垂氷のふとる夕冷え

山崎多比良

三河鳳來寺山に登る

この谿の杉の秀群ゆわきのぼりやうやく迅し夏の雨雲

あつまれる山の雨みづ岩たぎち飛沫はしろく葛の葉にかかる

山澤秀潤

ぬばたまの夜道いそげばはろかなる山焼の火のたえず見えつつ

ひたぶるに月夜おし照る河の面生きもの泳ぐ水の音あり

山志田潔子

子を生さず老いにしわれのしみじみと双乳を見たり湯ぶねのなかに

炭焼竈むつくら高きその上に這ひひろごれる山葛の花

山下 寛 治

雨ばれのすがしき朝や街かどの赤きポストを吾がひらくなり

山 下 清

そぞろにも手觸るを機に讀む書は歌書詩書隨筆ときに醫書かも
大方のものは知らむと勢ひつつ讀みては忘れ忘れては讀む

山 下 隆 一

ときとして藥忘るる日のあればほほゑみてくるる母あるものを

山 下 秀 之 助

遠くより別れのしるしきみがするその手は暗に白かりしかも

對ひゐて春寒き夜はふけにけり火鉢にかざす指も寄りつつ

満ちたりて人も思はず櫻花かつ散る見ればゆめのごとしも（結婚）

魂むかへ火を焚きをれば蜻蛉きて煙のすゑに小さかりけり（亡兒の初盆）

山かげの川瀬のたぎちしづもりて人をおくらむ霜夜にあへり（野元正彦の死に）

わが園の紫苑の花の白けつつけふも早の雲わきのぼる（北海大旱）

明けしらむ氷の海の杳なり千島國後まさやかに見ゆ（根室にて）

春あさし神居古潭の谿の雪はや解けそめて波立ち流る

寒明けてつづく日和の朝床に雪墜の音をききて樂しむ

よく晴れて眼路ひろびろし牧場の地をゆすぶり來るトラクター（眞胸内にて）

夜すがらの暴風雪はおちて家ちかく除雪トラクターの音ひびき來る

地に垂れて積みたる乾草の大ぐるま家とどろかしつぎつぎ通る

山の湯の朝たけにつつ庭木々に氷華かがやきこぼるるもあり（定山溪）

天つ日の光みなぎる青野原緬羊の群のすこしづつ動く(月寒種羊場)

八瀬の里に朝はやく来て山かげの細瀧みづの光身にしむ(比叡山)

金銅こんどうの盧遮那佛ろしゃなぶつここに仰ぎ見て偉おほいなるものは取りつきがたし(奈良)

北見のあら野をはしる沿線にビート栽培の畑あをあをし(阿寒國立公園)

母父おふちちと並べし寫眞うち目守まもりわれもわが妻とかくなるべしや(母の初盆に)

山下 みち子

わが古着色そめかへて此の冬の袖無を縫ふ母はげんきなり

山下 治子

春あらしわが立つ山をゆり来るやはげしき思ひおししづめ居り

山下 陸奥

母うへが磨ける釜のかがやきてわが妻來べき日は近づけり

障子洗ひ

草に置きし障子の硝子透きて見ゆ押へられたるたんぽぽの花

ふるさと

ふるさとに汽車近づきぬ春空に凧あがりゐて夕日あたれり

北アルプス

つぎつぎにわれ追越して登る人を越さしめて足らふ齡よほひとなりぬ
槍が嶺ねをつつめる霧はちぎれつつ月の夜すがら離るることなし
夕より奥穂高嶺にまつはれる雲を照らして月のぼりたり

犬吠岬

くれなるは薊あざみの花とおもふまに燈臺の燈火ひかりたちまち過ぎぬ

山中湖畔双宜山莊にて。徳富蘇峰先生七十三歳

樹の肌を撫でてゐたまふ先生は手の毛も白くなりたまひたり
四阿亭あづまの卓まに散りたまる松の葉を拂はひたまへりその大き手に
先生はゴム長靴をうちたたき落葉松かじまつの葉を出いしたまへり

三河鳳來寺

土のうへに提灯をおきて聞きにけり谷くたに下れる佛法僧鳥ぶつぽふせうの聲

初潮

初潮ありし娘こがおとなしく縁先を歩く足音われは聞きゐつ

婚後數年

鉛筆をなめなめ妻が支拂のやりくりせるはたのしげに見ゆ

長門線

國土の西なす陸は低々と草をかうむりて海に入り果つ

濱の驛にとどまりてひさしわが汽車の屋根を人あゆみ音遠のきぬ

八ヶ岳山麓

この村のさ霧に群れてゐる山羊の耳は濡れつつ耳のなか赤し

霧島山

霜ばしら深かるべしと答へつつ木槌もて草鞋をたたきてくれぬ
霧島のたをりに立てば住みつきて人の焚くなる田の煙見ゆ

日向鵜戸神宮

み岩屋のうちよりも見ゆ果しなき大海原の晝縹雲

神岩門出で來しわれにあなまぶし五百重八百重にたたむしら波

山下星峰

水溫のまだ低けれど大安のよき日えらみて種も糶みおろし初む

山下源藏

御園の奥どにひそむ岩清水そのすがしきはいただきて飲む(京城昌慶園)
石門の落書みれば支那の子らつねここに來て遊べるならん(水師營)

山下政一郎

春の雪杉の梢にふりかかりこぼれて土に消えゆきにけり

夏の夜のしらじらあくるさびしさにうまごやしふみゆきぬ山べを

以下臺灣に渡りて後

うつむきて線路をよぎるわが姿さびしきものに思ひけるかな

このしづけさ晝も深しとゴムの樹の見ゆる玻璃戸をのこらずあくる

朝ぐもりすずめの群の庭にきて草のふかきにあゆみ入りつも

秋の日の晝もちかしと海のべに咲ける木たき権くげを見てすぎにけり
水甕にわが汲む水のおふるればあなやと母は惜しみたまへり
めづらしく冬の山べを雲ゆかず晴れたる空の水のごときかも
母と住みて事もなき日をありふれば春の雷など大きくべかりけり
冬青き草にいこへば眼の前の檳榔樹こそうれしかりけれ
海に向ひ久しくもわがありにけりこころさびしくならむとするも
夕空に黄雲たなびくあかるさに立ちいでて見ればいよよ明るき
うつくしき秋の日和に咲きいでし芙蓉の花は軒よりも高し
水色の島しま連つらぎ翹たけは咲きさかりすぎたるは散れり黒土の上に
ふるさとの梅のさかりにかへりきて咲きさかる梅を今日し見にけり

手を舉げて吾を呼ばふ兒に應へつつ山峽畑の麥踏みてをり

山かげり伸びくるはやし夕小田にはげまし合ひて稻刈りいそぐ

山科 ゆうみ

亡き父が棕櫚繩なふと採りし跡そのままありて丈伸びにけり

叱られてすねて居し子の樂書に僕は家出すると書いてありけり

山城 正忠

浪華客中

三疊に過ぎぬ部屋すら大阪の城よりひろし君とある日は

黒きまで人行く橋を五つほど横にならべてつづく河の灯

琉球雜詠

草原にその半をしづめたる日傘に雨と降る蟻蚶ばつたかな

尾 類 馬 一首 (尾類は遊女。舊正月二十日に催さるる琉球特有の春駒行列也)

躍りぬく駒の一むれ春の日を浴びて朱總の光る白き毛

文の來てはじめて知りぬ待ちわびてたしなみもなく伸したる爪
露にすら如かず心の置場なしわがおもふこと形せぬかな

たかぶりて責むれど更に靜かなり兒等もさびしき父と知れるか
半朽ち藺田の水車の動かねば心おちゐるとんぼとまれり

人知れず高きところに晝の月さびしく秋の風を聽けるや

兒のとりといふを諭しぬ知る仲の去年のとんぼぞ庭のとんぼぞ

あな咲けり培ふとなき朝顔にあはれなるかなよきほどの花

あはれなる錯覺ならんわれを呼ぶ籠の鳥君の語韻に似るも

忘るべきよすがの酒も秋の夜は過ぎて及ばず酔ひてかこてば

果てしなく心躍れば空氣より身のかろかれとおもふ秋晴れ
待ちわびぬおのが煙草の吸殻を罪負ふもののごとく踏みつつ
わがこころ既に澄めりと人の見ん堪へて忍べば言葉少し
疲れたる妻に代りて添ひ臥せば病む兒が手もて探るわが胸

琉球海神祭 (祝女は神職を司る女官)

祝女のせし船をむかへて娘らが嵐の濱にをどる海神祭

多磨、與謝野寛先生の墓前にて

手に觸れて碑のつめたきを嘆けどもあやまれり師は天に在さん

山 須 豊

土間にして鳴き澄むこゑの蟋蟀のさびしきことは言はずねむらむ

山 田 兼 次

曼珠沙華の花咲く土手のところまでわれをつれゆくわが子供らは

箱根より伊豆にのびつつ山なみの巒すでに深く影をおとしぬ(三島より箱根へ)

山田 春岱

航空母艦加賀の威大なるを見て思ふかぎりなき人間の創造力を

山田 蕤雨

櫻若葉楓の若葉梅若葉風に吹かれ居り五月の朝を

山葵わさび田だの落ち水の音ほそぼそと冬枯れの野にひびきこもらふ

山田 繁雄

歸り行く櫓曳き馬のいななけば彼方の里の馬もなきつつ

山田 小枝子

木蓮の花の白きが咲きそめて晝あたたかく春さりにけり

山田美穂子

柿も熟れぬ柚子も黄ばみぬさはあれど畠に背戸に母は在さず（ふるさとの秋）

山田眞澄

仕事着のまま來し選舉民受付に裾をおろせば草の葉の落つ（投票所）

セパードの四肢のびきはまりて空にあり一瞬にして越ゆる障害（警察犬）

山田巖

白馬の峯の岩かけ駒草のべにむらさきの花をわすれず（白馬岳登山）

山田甫

雪解水樋をつたひて流れゆく音かそかにも夕づく日かな

山田祐紀代

見はるかす幌内川口に打ち上ぐる白きたか波ひとつらに見ゆ（國境行）

とどの太幹吾が目の前にくだかれつべるとにのりて流れ行くなり(製紙工場二首)
乾燥機ゆ出で来て重る白きばるぶ取り上げ見れば未だあたたかき
浅間嶺に立てる煙は大空に白雲となりてこりてうごかず

山 田 垂 穂

敵を逐ひのぼりゆく山の草いきれ險に汗はたまりては落つ(討匪行旅)

山 田 四 郎

諸木々の紅葉づる峽に浮く雲は夕づきて黄なる光放ちぬ
磐梯に朝の雲のとどこほる磐城平を吾れは去り行く

十年ぶりにて郷里なる樺太清川村を訪ふ

月明き河を渡りてみちのくのあがたにさびし行く雁のこゑ
オホツクの海につづける海なかにわが船ありて利尻島見ゆ

流水の觸れあふ音が夜もすがら聞ゆる宿に一夜ねむりぬ

占領當時移住せし父がそのままに老い給ひたることも尊し

此處にして間宮海峽の見ゆるなる山の夕べの思ひがなしも

ホムトフカ簡易教育所に吾が學びしは三十年過ぎて夢の如しも

幼きときに共に學びしマーニヤといふ露西亞娘を時に思ひ出づ

山 田 光 秋

つとめより夜霧のまちをかへるとき心しめやかに妻を思へり

山 田 武

埃上ぐる衢より屋上に上り來ぬ陽は赫々と安平港に落つ(臺南)

山 田 猿 吉

開け放つ疊のうへに深くさす晝の日ざしも寒くなりにし

山川の瀬音ひびかふわが家に今夜は父と床並べ寝む(歸郷)

植付の頃としなりて背戸の道代搔き牛が日に日に通る

わが村ゆ海は遠けど田植時いたれば鷗山こえて来る

山田 文吉

あはれかくも山はさびしと炭窯の口火燃しつぐ日暮なりけり

山田 耕二

足を病みて衛戍病院に入院

歩くこと許されし日よ病院のせまき草地を素足にてふむ

女學生の慰問に来るといふ朝は病みて久しきひげそりにけり

山田 平一郎

朝暑き日は照りながら北空の暗きを見つつ行くはさびしゑ

輕はずみにふるまひし今日を悔しみて月照る部屋に床を敷きつつ
貧しかりし我が家に生ひて嫁ぎゆきつひに貧しき叔母をしぞ思ふ
傳記を讀み小説を讀み或時には偶然を光のごとく恃みけり
傾く日隈なく照れる高原に踏みつけし草が起きあがりをり
さびしめる心なごみてこの朝は疾風吹く庭に鶏を放てり

月かげはあらしに搖るるもろもろの樹の葉に照りて冴えにけるかも

山 田 青 江

菰まきて冬をかこへる庭木々に月夜の雪は降りしきるなり

たそがるる湖はみぞれとなりにけりぬれ帆をおろす音のさむけさ

山 田 三 秋

一番鶉へさきにたちて誇りに大なる羽根をはたたきにけり

庭清水われらこよひのもてなしに屠らるる鯉の飛ぶ音をきく
わがかどの早稲田一枚かりほして祭の米をひく月夜かな

山 田 淳 實

吉野川まだきに人のさざめくは七夕笹を流すにかあらむ
荒潮の寄ると退くとすれすれて紀の海の砂利はなめ肌の砂利

山 田 愛

埃風今日も朝より吹きたちてひねもすにぶき天つ日のかげ
大方の人には向かぬ亡き父の著書の印税すくなくなれり
七輪を夕庭に出しねもごろに火附きのわるき炭おこしをり
蟲の音を聞きつつあれば我が庭より遠き野邊まで啼きつづくらし

山 田 耕 道

石槌いしづちの山拓やまひらきゐし人あまた入り日そがひに山下りくる

山田 信人

降るあめに濡れてぞ撓む庭隅の尾花のしづくそぞろ寒しも
山かげの草屋根うちて霰ふり寂しき冬もふけにけるかも
小雪ふる日も出でゆきて持山もつやまにま柴刈るとぞ君に告げなむ

山田 登志子

ものいはば涙あふれむ大きくみはるまなこを空にうつしてまぎらす

山田 廣紀

轉任の記事見て知れる吾が友と何時の頃よりかうとくなりぬし
昨日までうから安かりし家燃えてかげろふのぼる焼跡に立つ
生きながら火中にもがき死ににけむ牛豚山羊は掘りいだされぬ

火事跡の狭き假家の荒蕪あらくどに父の御棺すゑられにけり

山田 あき

腹の兒の胎動確かなれば心強し汗したたらし焼鳥焙る

子の寢ざまたしかめむとして手に觸れしあたまのわた毛に胸とどろきぬ
あなどられて身じろぎならぬ女なりしか目覺めていだく重き乳房を

地藏横丁の人ごみのなかにわれもゐてころなきつつ漬菜買ひをり

山田 惠美子

ふりつぎしみぞれあがりて西空あかし寒鮒賣りの聲とほり過ぐ

山田 英太郎

夜業終へて出づれば街は燈下管制布かれそこらしばらく見極めがたし(防空演習)

山田 吉春

小山田に水の光りのみなぎらひ春は谷間もふくらみて見ゆ

山櫻谷の奥がに吾が春の情こころほどなるくれなるを引く

背戸の山吹き渡りくる秋風のおどろくばかり音ふかくなりぬ

山田 珂瑛子

街の辻よぎるたまゆら眼に入りし山の青さの近きにおどろく

山田 春彦

しみじみと堰こえてゐる水の音月の下びに聞きて通りつ

かひばをけに鼻する馬の額星めがほしのたまたま白し月の明りに

灯ともしびを消せばさし入る月の光机の上に青くとどけり

山田 一麿

ほりかへす土より出でて眼をつむり蛙はしばし動かざりけり

山田 妙子

世の中の清きことのみ知る如き黒き瞳に疲れあらずな

山田 宣

山茶花の花栄く咲く日だまりに我が歩みよりて手套をぬぐ

山田 穀城

國のため説くべきことは説きをへぬ靜かに立たむ裁きの庭に(筆禍を得て)

山田 一子

水近く萌えたる草にかがやける朝の光はいまださむしも

山田 畦人

身は冷えてさ霧の中に憩ひ居りここの岩根に赤き寒露梅(本白根山)

此處にして見下す磯の白波は遠き岬のかたにつらなる(犬吠岬燈臺)

山田 政 郎

發動機しきりにまはり白玉の米さらさらとさ筵の上に(收穫)

春雨のしばらくにして晴れゆけば扇骨かたな本若葉はつやめきまさる

昨夜よの風に庭松青葉散りしきて朝あしたすがしき匂ひを放つ

山 田 ふ み

菊つつむ古新聞の記事読みぬ時雨すぎたる山道に來て

山 田 幸 子

幼らの語るを聞けば面白しおのおのにもおのにも思想もちをり

山 田 武 彦

たちまちに暗くなしたる闇の舞臺にまがなしき聲の残りてあるも(淺草レヴェー)
曇りたる太平洋の見ゆる部屋に妻と子として朝飯をくふ

山田彌三男

足うらを妻にふませて居りにけり明るき雨の降る夏の朝

山田百合子

初々しく生ひ立ちし子等の心には吾がいふ言の溶け入るごとき

離り住む母を

思ふ事語らむ人なくありし母かわが坐る間もいひつぎ給ふ
うらもなくものいひ給ふおん母のみ心にたまる事はかなしも

卒業二十年記念の同級會に舊師十名程をお招きして 三首

懐しさ胸に溢るるを師の君の他人の如も見知り給はず

畏れぬし師の君達も老いはてて常の世人と異なることもなき

つつしみてわが聴くものか師の君の老の日暮しの菊つくりの話

まなぶたに陽ざしぬくとし細々と立つ草の穂の乾き光れる
自らを顧みずては一時ひとときもあり得ぬと言はす師を清すがしみぬ

山田 弘通

罌粟 島

淡輪の月夜の海に西風にし吹けば波きらきらし罌粟畑をゆく
罌粟の果の圓球の半面の陰深く月は東に澄みのぼりをり

阿蘇山 二首

阿蘇山の日曜日の人出の多きなかに遠く來りてわがまじりをり
あからひく晝の日射に燃ゆる火の火口の焰色澄みて見ゆ
竹そこばく月夜の風に影亂しさわぎしあとはひたと靜もる

三十路こえてめとらぬ吾れを叱り給ふ言の勢にわが歌罵られし

灰の中から出てくるもの埒もなし折釘ばかりまだあるらしき(火鉢によりて)

葵 祭

はかどらぬお練の行列あとに續き先驅警官跑だふまし來きたる
馬の額にたれにし葵しなびをり今日の日照りはじりじり暑し

長良川鶉飼

河上の遠稻妻の低空を鶉舟の火明り移ろひ來る
舟の上に引揚げられし鶉の鳥の羽風伴ふ羽搏はばの音たぎ

鳴門觀潮

鳴門の瀬戸一ばいの夕陽なり落潮のたぎちその中を流る

山 田 義 幸

夜をこめて靱摺り居れば靱がらにまみれ居睡ある吾子こいとしかり

山田 葩 夕

ふるさとの姉がおこせし餅あまた寒の水汲みたくはへにけり
寒けども春の水田のくまぐまに黒みひかれる蛙の卵

あかるくも椿の大樹花咲きてあたりかまはず花こぼしけり

いつとなく白き砂路を行くわれの心なごみて佛を拜む(法隆寺)

年古れば年ふるままにわが母の母らしきことがしのばれてきぬ

下げ髪もしばし見ぬ間にたけのびて娘らしさをそへてきにけり(教へ兒來る)

嚴島潮みちくらし御社の礎(いしすゑ)の石かそけく鳴るも(旅にて)

わが行きもかへりも同じ一人(ひと)の昆布拾ひのぬれをる海邊(春の鎌倉)

たづねあてて呼鈴のボタン押しにけり泥靴の泥ぬぐひもあへず(土岐善麿氏訪問)

山ざくらあるかなきかの晝の風吹けばや花のひまなく散れる

青芝の中の噴井ふきゐのあふれ水あふるるままに音立ててゐる

麥青し國をおもへばわがまうへ雲雀のどかに啼きのぼるなり

山田清三郎

獨房集

未決監の朝のたのしさ點檢に一人々々が答へる聲のほがらかにして
塵取りに掃かれる髪の毛をみればさすがにさびし獨り牢にゐて

千葉だより

恐れぬし寒さにも挫けず懲役の最初の冬も半ば過ぎにけり
子供のやうにニコリと笑みぬ麻の緒の出來惡からずとほめられたれば
家にては影膳据ゑてゐるならむかく思ひつつ箸とる雜煮

雨あと

あたたかに雨霽れあがり運動場の芝生の新芽けさ眼にしるし

晩 春

流れ来る風は青葉の匂ひなり夕光る空に兒等の叫ぶ聲

山 田 晴 夫

蛙鳴く夜頃となりぬいつしかに子等の眠りも深くなりたり

山 田 良 春

大正十二年九月九日 二首

焼けあとは小暗くなれりところどころ見ゆる焰は人焼くらむか

焼けのこる電車に人の住めるらし蠟燭の灯の窓に明るむ

天てらす日はかたむきて蓼科たじこの山にのこれる雪かがやくも

淺間登山

山崩^がえて土赤あかと色あたらし高きに残る青き草むら

山 田 正

大根の白き花咲く高原の煙草乾燥場の雨の思出

山 田 舉 子

夜汽車ゆきぬ汽罐のまへにあかあかと操作するもののがたを見たりき

山 田 満 雄

棧橋に着きたる汽船が吐きすする水ほそぼそと海の中に落つ

山 路 青 村

冬さびてのぼる山火のほのけむり揺らぐともなき晝に入りけり(昇仙峽)

山 路 昇

たまさかに家に歸りて新聞を見るを楽しむ炭焼く吾れは

山の湯に行くといふ人等立寄りて物問ひ行きぬ炭焼き居れば

山路 みどり

夜ふけて薬貫ひに行く父にすまぬ思ひのこみあげてくる

山寺 住夫

春の雨しき降るあしたすがと疊替せし部屋を掃き出す

山取 明石子

日並べてぬくき陽ざしの縁先にやつれし母の髪結ひ參らす

鶏賣りて今はあらねば朝毎の目覺め寂しくなりにけるかも

陽かぎれば寒々鳥屋とやにかへり行く鶏はいとしも物を言はねば

山名 秋花

わかれゆく今日のかたみと秋深き宵の巷に物も買ふかな

山名 英郎

相聞

愛なくば羅馬もつひに羅馬ならずと歌ひしゲ^トテ常^{トコ}若^{ワカ}みかも

わづらはしき法文の翻譯にかかづらふ日頃は沁みてひとの戀しき

山名 千代

教室の窓押し開けてゐる吾に苗代の風吹き上^{アガ}りくる

庭石にのぼらむとする蜥^{トカゲ}蜴の背たまゆら青き輝きを見す

糠味噌の手を洗ひたる水捨てに出でて仰げる天の川かも

寺庭の百日紅のこぼれ花まろばす程の風はあるなり

夜仕事の終りてとみに寒々し裏松山の風ぞきこゆる

山名 薰人

花過ぎてこのひと丘は青麥の晝の嵐をそよがせにけり

雲雀子のなきこぼれくる聲にだに親はおろかなり子を戀ひにつつ

鼠ヶ關の松の夕べの潮風のつばらに晴れて秋の島見ゆ

くづれくる霜もうつくし來ると云へば恥しきまでにひとの待たるる

四十路なほ貧に徹してあせらざるこの落付きをよしと思はむ

山中 正雄

脊髄カリエスを病み仰臥五年

梅の花咲きぬと聞けどわが視野に入り來るかぎり梅の木もなし

山中 一明

海女の住む安乗浦曲の船だまりひたひたとして上げ潮にあり(志摩安乗崎)

百濟くだらより奉りしとふ白瑪瑙の大き礎石の土はらひ觀る(飛鳥川原寺)

昭和十一年十月二十九日阪神沖に觀艦式を拜觀す

あきつかみすめらみことの統べ給ふ陸奥日向山城續々と視界に入り來く

山中 忠 男

この花をひとにたとへて言ひしことむかしありきと見て過ぎにけり(しくらめん)

山中 春 夫

わが這へば小さき子らは先にたち障子唐紙明け放つなり(カリエスを病む)

山中 茂 樹

人の借錢拂はねばならぬ破目となれり

添付命令といふあはれいみじき法ありて借らぬ金拂ふ小役人吾は

山中 石 占 井

病床にて

きのふけふ熱のなければ晝飯後柿食ひて藥食くすり

運ばれし飯を寝ながら喰ふ吾れのけだものめきてあはれと思ひぬ

落葉木の風に吹かるるあはれさをひもすがら見つつ吾れは病み臥す

山中勢津子

野の道がここより細く岐れをりここより今日もひきかへすかも

山中範太郎

旃檀の木の葉おほかた落葉して雲のかからぬ甲斐が根の見ゆ(多摩川にて)

籠のなかに光る螢よ老いて行くわれに寂しき色とおもふに

山西敏郎

山の土匂ふゆふべのまがりみち牛のつそりとあらはれにけり

古土間の灯かげさむけき宵の口子供が酒を買ひに來てゐる

山 根 浩

新聞の二日も來ずて雪ふかし人の斃れし噂つたはる(大雪)

噴きいづる硫黄の湯氣は岩角に吹きつけられて高くのぼらず(温泉獄)

病む子つれてたよりなかりし汽車旅の今日のひと日ははるけく思ほゆ

山 根 ふ み 子

孔孟のみちにしたがひてわが父の亂れざりしもいまはさびしき(父逝く)

月の街を歸りて來しがひとりゐて本の分類をまたはじめたり

簸ひの川かはのとどろく宿に君とゐてところがなしも時惜しむべし(出雲國湯村温泉)

山 野 す ま 子

背の君に呼ばれて友の紅らめりあなやさしくもよびたまひけり(新婚の友を訪ねて)

山の夜は更けにけらしもさむざむと木立のひびき谷にこもらふ(高野山)

冬日影ひそかにさせば青竹の空にさゆらぎ光りつつ見ゆ

しら玉の米とぐ音のさやさやにつつましきかもわがうれしさは

山野井三良

吾が上をいくつもの雲過ぎゆけり遠きくもりにたたまるらしき
(樺太國境附近
ケトン岳にて)

白雲の山べの川はたはやすく降りすぐる雨に水かさましぬ

山野井 洋

人里遠く炭を焼きをりて病む。樺太大鼠無數に出で來りて
恐れ氣もなし

深山ふかやまにひとり籠りて起きられずわが顔の上を鼠歩くなり

流送夫

雪しろの冷たき水に丸太流す流送りつ送人夫なり濡れて働きぬ



作者略歴

みの部

三池亥佐夫

四十歳。福岡縣八女郡安路五〇八大阪毎日新聞社滿洲通信總局に現住。新聞記者。十五六歳頃より作歌、大正七年より若山牧水氏に師事し、創作社友として今日に至る。嘗て筆名を葛於と稱せしことあり。歌集「虛谷集」あり。

三浦正守

明治六年五月十二日、青森縣西津輕郡木造町に生れ、北海道旭川市九條通一二ノ左八號に現住。衛生伍長。六十歳に垂んとして始めて作歌生活に入る。

三浦勇

明治四十年十月五日、大分縣臼杵町海添一に生れ、京城府孝子町一九七に現住。商業。年少より作歌、昭和九年創作社に入社、現在に至る。

三浦靖

四十五歳。宮城縣に生れ、大連市水仙町二五

に現住。滿洲國財政部勤務。

三浦百郎

明治四十年十一月一日生。本籍宮城縣本吉郡氣仙沼町字町裏二五九ノ一、同地に現住。十六歳より作歌、二十四歳熊谷武雄氏の門に入り、二十五歳昭和六年ぬはり社に入り、今日に至る。

三浦敏夫

明治二十五年五月九日愛媛縣越智郡岩城村に生れ、廣島市田中町七〇に現住。元三等郵便局長、酒造會社取締役、現在無職。若山牧水氏の創作社創立に當り之に入社して現在に至る。

三浦正次

二十歳。山形縣西村山郡大谷村大字大沼に生れ、山形市香澄町木ノ實小路一四に現住。教員。山形師範四年より作歌す。

三浦瑞穂

二十六歳。秋田市添川字添川一四〇に生れ、同地に現住。神職。昭和十一年二月より作歌今日に及ぶ。

三浦修秀

本名修一。二十四歳。山形縣酒田市北千日堂

前三段に生れ、東京市品川區大井瀧王子町四五二に現住。吏員。昭和九年より光田滿穂氏の指導を受く。

三浦忠

五十五歳。東京に生れ、堺市大濱通四丁に現住。實業。昭和十二年三月アララギに入會、岡麓氏に師事す。

三浦友三

大正八年五月二十八日岩手縣紫波郡彦部村高金寺に生れ、東京市世田谷區新町二ノ一八五に現住。駒澤大學生。昭和十一年七月一霸王樹に入社。

三浦正雄

大正四年四月卅日生。本籍宮城縣遠田郡元涌谷村涌谷字黃金迫一九、仙臺市荒卷堤裏字杉添縣官舎第一號に現住。高等小學校時代より作歌、地方二三の短歌誌に發表せしのみ。

三浦守治

大正五年二月歿。醫學博士。帝國學士院會員。佐佐木信綱氏に師事す。歌集「移岳集」あり。

三笠香富

三十二歳。徳島縣那賀郡富岡町に生れ、兵庫縣尼崎市西向島町二一七に現住。昭和五年四月關西詩歌に参加し、高原弦太郎氏の指導を受け、翌年五月同氏等により青雲歌會創立さるるや之に参加、今日に至る。尙昭和十三年三月より阿迦雲歌會にも入會す。

三河 春野 三十八歳。東京市に生れ、大阪市外吹田町御旅島五〇三〇に現住。岡麓氏に師事し、昭和三年アララギに入會す。

三上 茂 號漁火。二十六歳。函館市外湯川町湯倉神社神職の家に生る。國幣中社函館八幡宮名譽主典。皇典講究所、國學院大學に學ぶ。一吾が嶺ニ無風帶ニ心の花支部」を経て昭和十二年一月「岩檜葉」同人となり、現在アララギ會員を兼ね。

三鬼 實 三十三歳。福島縣伊達郡桑折町に生れ、東京市目黒區洗足一三三〇野澤方に現住。會社員。歌と觀照創刊當時より入社、今日に至る。

三木 洋子 本名江崎りき子。二十九歳。横濱市に生れ、東京市淀橋區上落合一ノ四四六に現住。

三木 小雨 本名森太一。四十六歳。埼玉縣北葛飾郡金杉村に生れ、愛知縣半田町東洋紡績社宅に現住。會社員。大正二年より同六年迄白日社友。現在「多磨」會員。

三木 孝 本名杉山康。大正三年二月十七日、靜岡市高松字敷地に生れ、同地に現住。公務自由業。作歌に志して十年餘、のち大地社に入り、同社と不二社合併となり、現在不二社同人、靜

岡歌話會々員。
三雲 青二 本名三宅靜。明治三十年十月、岡山縣赤磐郡山方村に生れ、同地に現住。糸商。昭和七年より作歌、同八年一月正分蒼生二氏の歌誌「早蕨」に入社、現在に至る。

三聲 富太郎 明治四十五年二月二十日、島根縣那賀郡石見村大字黒川二五五二ノ一に生れ、同郡濱田町字朝日町に現住。郵便局員。

三澤 孔文 四十六歳。長野縣上伊那郡伊那町に生れ、同郡東春近村に現住。小學校長。大正十年アララギ會員となり島木赤彦氏に師事し、同氏歿後土屋文明、齋藤茂吉兩氏の指導を受けつつ現在に至る。

三島 祥道 出雲松江宍道湖畔に生れ、松江市魚町に現住。後期明星時代より新詩社に入り、與謝野寛、晶子兩氏の指導を受け、昭和五年「冬柏」發刊と同時に同人となり今日に及ぶ。大正十三年頃歌誌「腫」を主宰せしことあり。歌集「水開く」あり。

三島 秀次 二十五歳。山梨縣北都留郡上野原町二〇三〇に生れ、東京市荏原區中延町九七二山田方に現住。銀行員。昭和十年「潮音」入社、今日に至る。

三島 彌生 四十二歳。島根縣周吉郡に生れ、臺北市大正町三ノ三二(十條奥)に現住。總督府屬兼學校教員。現在迄約八年「相思樹」創作」に關係す。若山喜志子、柴山武矩兩氏の指導を受く。

三島 格 二十歳。臺北市東門町三ノ三二(十條奥)に現住。臺北第一師範學生。五年間「相思樹」に在り、柴山武矩氏に教を受く。

三島 ふさ 三十八歳。廣島縣蘆品郡網引村に生れ、同地に現住。昭和二年アララギに入會して今日に及ぶ。

三ヶ島 葎子 明治十九年八月九日、埼玉縣入間郡三ヶ島村に生れ、昭和二年三月二十六日、東京市麻布區谷町に歿す。享年四十二。明治三十九年埼玉女子師範病氣中途退學、大正三年三月倉片寛一に嫁す。初め與謝野寛、晶子兩氏に學び、大正五年アララギ入會、島木赤彦氏に師事、のち古泉千樞氏に從ひて青垣會を結ぶ。

三品 千鶴子 本名千鶴。二十九歳。京都府加佐郡倉橋村字行永原家に生れ、滋賀縣草津町瀨川に現住。昭和三年京都女子専門國文科入學と同時に作歌指導を吉澤義則、大井廣兩氏に受く。同六

年より潮音入社、太田水穂氏に師事して今日に至る。

三隅 正行 三十八歳。東京市本所區緑町五ノ一三に生れ

同市本郷區眞砂町三七に現住。凸版印刷株式會社彫刻課員。大正九年一月「潮音」に入社して現在に至る。

三田 祐一 四十三歳。廣島縣廣品郡有磨村上有地に生れ

東京市中野區宮前町二六に現住。歴史科教諭。大正五年より數年間アララギ會員。同十二年より「とねりこ」會員。

三田 遷人 本名柴田儀雄。四十五歳。愛知縣一宮市傳馬

町に生れ、名古屋市東區高松町二ノ三六に現住。名古屋新聞社理事。大正三年より作歌、同十二年歌誌「短歌」を創刊、爾來專ら同誌による。大正十年歌集「水脈」刊行。

三田 喜藏 二十六歳。北海道石狩郡當別村に生れ、札幌

市豊平五條六ノ三〇に現住。鐵道員。昭和八年九月芥子澤新之介氏の「吾か嶺」に據る。昭和十一年九月「多磨」に入會、現在に至る。

三谷 涉 明治四十五年廣島縣に生る。教員。昭和九年

國學院大學卒業、同年四月アララギに入會し今日に至る。

三谷 蘆華 本名爲三。明治十九年一月伊勢津に生れ、昭和七年六月二十八日歿す。明治四十一年國學院大學卒業。その間「文庫」「詩人」等に詩歌を發表し河井醉茗氏の薰陶を受く。後歸郷して四日市商業學校教諭となる。傍ら昭和三年より中島達源、印田巨島氏等と共に「鳥人」を刊行。昭和十年四月「蘆華詩歌集」出版さる。

三戸 保 三十二歳。岡山縣久米郡大塚和村大字境に生

れ、同郡佐良山村大字北に現住。小學校教員。昭和六年二月「蒼穹」に入社、同六年六月正分蒼生二氏と共に歌誌「さわらび」を創刊、今日に至る。昭和十年十二月「蒼穹」退社、翌年十月「國民文學」に入社し今日に至る。

三苫 守西 本名治。四十二歳。大分縣日田郡大山村に生

れ、八幡市三條一丁目に現住。八幡製鐵所事務員。大正八年四月「創作」に入り故若山牧水氏に師事、引續き創作社友として今日に至る。

三苫 京子 三十七歳。福岡縣若松市藤ノ木守田家に生れ

八幡市三條一丁目に現住。三苫守西の妻。大正十一年七月「創作」に入り若山牧水、同喜志子兩氏に師事、引續き創作社友として今日に至る。昭和六年十一月、歌集「青梅」刊行。

三野 刀雄 本名剛直。三十歳。京都府與謝郡府中村に生

れ、神奈川縣高座郡橋本に現住。國學院大學卒業、神奈川縣立農藝學校教諭。「炬火」「樵の木」同人として詩作、作歌經歷といふほどものなし。

三原 空蟬 本名與十郎。明治二十市徒士町三六五に現住。松本高女書記。大正三年頃窪田空穂氏の十月會に入り、大正五年アララギに入會、島木赤彦氏の指導を受く。大正十年以來十餘年間作歌に遠ざかりしも、最近時折作歌す。

三重野 善人 三十二歳。大分縣大分郡瀧尾村片島八〇一に

生れ、同地に現住。溫室花卉園藝。昭和二年より俳誌「石楠」幹部たりしも最近短歌に轉ず。

三村 瀨蘆 本名靜雲。三十三歳。熊本縣阿蘇郡古城村に

生れ、同地に現住。僧侶兼小學校教員。大正十一年頃より作歌、九州新聞にて上田英夫氏の指導を受く。爾來「熊本歌話會雜誌」「常春」歌と觀照」等に據り、齋藤瀏氏、岡山巖氏等にも指導を受く。

三村 達麿 明治四十三年一月三日

東京に生れ、同市淀橋區上落合一ノ四六八に現住。高女教員。國學

院大學豫科時代「鳥船社」にて釋道空氏の指導を受く。一時アララギ會員たりしが新詩に轉換すると共に退會、昭和十年頃より再轉換し獨り作歌しつづ現在に至る。

三村ふさ子 二十三歳。東京市小石川區小日向臺町一ノ四

三に生れ、小石川區雜司ヶ谷町一二二に現住。竹柏會々員。印東昌綱氏の指導を受く。

三室文夫 本名諱田文雄。明治三十七年八月十六日、長

崎縣南高來郡守山村七七に生れ、同縣東彼杵郡早岐町下苗手免一二に現住。蠶業技手兼書記。昭和三年一月より作歌、同十一年一月以來歌誌「やまなみ」同人たり。また昭和十二年一月國民文學に入社、今日に至る。

三本千史 本名松本一郎。二十九歳。埼玉縣秩父町上町

一六五六に生れ、同地に現住。教員。昭和九年三月歌と觀照に入社し今日に至る。

三宅恒久 本名恒壽。三十五歳。岡山縣小田郡美山村に

生れ、尾道市久保町防地一五九四に現住。尾道高女教諭。學生時代より作歌、昭和十年水廻に入社し今日に至る。

三宅雪枝 三十七歳。廣島縣高田郡吉田町に生れ、廣島

市三篠本町二丁目に現住。昭和六年新詩社入會、與謝野晶子氏に師事す。現在冬柏同人。

三宅健治 明治十五年十月、岩手縣膽澤郡佐倉河村常盤

字中陣場一三に現住。農業。少年の頃作歌せしことあれど中絶、大正十五年の頃より再び作歌、今日に至る。

三宅繁樹 三十八歳。北海道旭川市に生れ、札幌市外圓

山に現住。小樽新聞政治部兼論說部員。大正五年頃「中學世界」に歌を投じ、明治大學在學中創作社に加盟、若山牧水氏歿後橋田東聲氏主宰の「霸王樹」に入る。

三宅幹次 六十歳。京都府相樂郡中和東村字南に生れ、

同市上京區大將軍一條町九に現住。元小學校教員。田舎に在りて獨り作歌し樂しみるしも昭和六年アララギ會員となりて現在に至る。

三宅貞綱 三十七歳。山口縣柳井町に生れ、同地に現住

歌を作り始めてより二十年餘、元「吾妹」同人、現「水可美」同人。

三好達治 明治三十三年八月二十三日大阪市に生れ、神

奈川縣鎌倉町極樂寺五六一に現住。著作業。歌集「日三はり」あり。同人雜誌等に加はりし事なし。

三好ゆきる 五十六歳。愛媛縣西宇和郡三瓶町安土に現住

大正十一年竹柏會に入り山下陸奥氏の教を受

く。爾來心の花及び一路に發表。昭和八年歌集「桑の實」發行。

三好七郎 五十三歳。三重縣津市に生れ、東京市大森區

馬込町東四ノ二二五に現住。豫備海軍大佐。昭和六年以來佐佐木信綱氏の教を受けて今日に及ぶ。

三好保 三十歳。香川縣綾歌郡昭和村に生れ、同地に

現住。小學校教員。アララギ會員。
三好英子 三十一歳。山口縣熊毛郡周防村五五五に生れ

兵庫縣有馬郡有馬町藥師寺に現住。元東京市社會局員、方面事業に従事。昭和五年五月以來潮音社友として太田水穂氏に指導を受け、現在に至る。

三輪文男 三十歳。愛知縣西春日井郡師勝村六ツ師六二

八に生れ、名古屋市東區田代町北畑三六ノ二に現住。教員。昭和八年水廻に入社、十一年退社、松田常憲、故石井直三郎兩氏に師事す。

三輪汪子 舊姓佐野。大正三年二月十一日名古屋市内に生れ、同市中區仲之町二ノ五に現住。昭和四年

十六歳松田常憲氏につき短歌の手ほどきを受け、同年秋より水廻社に入社し今日に及ぶ。

三輪田元道 明治五年東京に生れ、同市麴町區九段三ノ四

に現住。東京帝大哲學科卒業、三輪田高女校長。若き頃より作歌、近來は現代語にて日常生活そのままを歌ふことに努む。

三輪田美津生

本名清。前筆名秋津くに雄。二十九歳。名古屋市に生れ、同市西區日比津町野合二五四ノ二〇に現住。公吏。昭和二年頃より作歌、同四年國民文學社に入り、初め故川崎杜外氏の選を受けしが、のち半田良平氏の選を受けて今日に至る。

三橋公勇

千葉縣長生郡茂原町東茂原六に生れ、船橋市海神一〇七二に現住。教員。昭和三年より作歌、同五年水壺に入社、現在に至る。その間數種の地方誌に關係す。また昭和十年佐野翠坡氏を中心とし「蒼蒼」を創め、現在に至る。

三橋隆臣

長生郡豐岡村御藏芝に生れ、同地に現住。農業。十八九歳頃より作歌、初め前田夕暮氏の詩歌社友、詩歌廢刊後若山牧水氏の創作に入社して今日に及ぶ。現在創作以外冬木健氏の「短歌創生」、吉田牧水氏の地方誌「思索之旅」に關係す。

三堀雪子

明治四十四年一月、神奈川縣横須賀市不入斗町に生れ、同町三〇に現住。小學校教員。昭和六年上越の歌誌「土塊」に入社、同八年十月國民文學社友となり、植松壽樹氏の選を

受けて現在に及ぶ。

三矢重松

明治四年、羽後鶴岡藩重職の家に生る。二十三年、國學院卒業、岡山、大阪の中學教諭を経て東京に歸り母校教師となる。後、東京高師教授となる。大正十二年文學博士を受け、七月癌を發して歿す。年五十三。國語文法に關しては一代の權威たり。

三井金藏

四十歳。熊本縣宇土郡不知火村大字御領八一〇に生れ、同地に現住。熊本中央放送局松橋集金所長。十九歳より作歌、歌誌「不知火」及松橋短歌會を主宰せしことあり。其間熊本歌話會を経て古城同人、現在創作社友。

三井八郎

二十八歳。東京市神田區猿樂町に生れ、同市四谷區坂町一三二に現住。藥劑師。歌誌「エラン」に據る。

三井甲之

明治十六年十月十六日山梨縣中巨摩郡松島村に生る。一高を経て明治四十年東京帝大文學部を卒業。正岡子規氏に私淑し、其門人諸氏と交りしも伊藤左千夫氏及其門下とは人生觀の乖離により袂を分ちたり。歌の友人はあれど師もなく門人もなし。

三井正雄

三十三歳。岐阜縣惠那郡中津町に生れ、大連市葛蒲町六に現住。貿易商。大正十一年「創

作」に入り、若山牧水、喜志子兩氏に師事して今日に至る。

三井實雄

三十八歳。大分縣南海部郡佐伯町に生れ、滿洲新京雲鶴街二〇六に現住。滿洲電信電話株式會社副參事。十八歳頃より作歌すれど、獨學、昭和二年同志と共に「合萌」を創刊す。同七年京城に於て數氏と朝鮮歌話會を興し、同十一年十一月新京に於て數氏と新京短歌會を興して現在に及ぶ。

美甘武子

明治四十三年愛知縣岡崎市に生れ、熊本市新屋敷町三六〇に現住。昭和八年十月より作歌同十年潮音に入社し現在に至る。

美木行雄

本名清一。明治三十八年三月十一日、岡山縣和氣郡伊里村穗浪に生れ、神戸市林田區塚塚町二ノ七に現住。神戸新聞社勤務。中學三年の頃より作歌、尾上柴舟氏選の中國民報歌壇を経て「日光」に入り、「詩歌」復活と共に同人に加はる。正宗敦夫氏及び國學院大學時代釋迢空氏の指導を受けし事あり。歌集「抗争」他に「短歌朗吟の研究」の著あり。

美岐かすみ

本名阿部はしめ。大正七年十一月三十日、宮城縣石巻町仲町三八に生れ、石巻市仲町七〇に現住。下宿業。石巻高女二年より作歌、十八歳より河北新報短歌欄に投書す。

美島百合繪

本名金田スミ。三十七歳。和歌山縣日高郡南部町に生れ、同縣西牟婁郡白濱溫泉場に現住。

昭和四年以降創作社友として現小學校教員。昭和四年に創作社友として現に在る。一時アララギ會員たりしことあり。

美島佐恵子

本名丸山久。明治四十二年、長野縣東筑摩郡

笹賀村神戸に生れ、東京市麻布區本村町一四四に現住。昭和四年ぬはり社に入り爾來菊池知勇氏の指導を受け今日に及ぶ。

美代かつ

四十四歳。鹿兒島市清水町に生れ、東京市大

森區雪ヶ谷町六一三に現住。初め「創作」に據り、現在「ぬはり」に學ぶ。

美波早智

本名田口貴久子。二十一歳。長崎縣東彼杵郡

竹松村字黒田に生れ、同郡竹松驛通に現住。昭和八年五月より歌誌玉響に投稿、同九年末ひのくに、向日葵に入會、現在地方歌誌長崎女人筑紫野會員。

美禰國樹

本名山田洋三十五歳。山口縣美禰郡於福村平

國木二四二に生れ、静岡市水落町二ノ一七に現住。軍人。昭和六年以來偕行歌壇により齋藤瀏氏の指導を受け、同十年一月竹柏會に入り、爾來「心の花」に作歌を發表し來る。

美濃谷茂介

明治四十四年五月二十二日、山形縣長崎町六

六に生れ、同地に現住。米穀商。昭和四年六月「吾妹」入社、「草徑」を編輯。同六年十月「梅檀」を創刊し今日に及ぶ。歌集「白夜」あり。

美濃谷咲子

二十九歳。新潟縣三島郡寺泊町字磯町に生れ

同地に現住。昭和二年四月女高師時代水壘入社、同年七月退社、同九年八月水壘再入社、「潮」入會。

美作まさ子

本名川田和枝。二十四歳。大阪に生れ、東京

市澁谷區千駄谷三ノ五四〇に現住。昭和十一年七月潮音に入社、現在に至る。

見原文月

本名市太郎。三十六歳。京都市に生れ、同市紫

野中柏野町に現住。西陣織工。十二歳の頃より作歌、後に京都の橋川正氏に指導を受く。二十一歳の時「心の花」に入り、主として新井流、石種茂兩氏の指導を受く。

見原常子

三十四歳。京都市に生れ、同市紫野中柏野町

に現住。文月の妻。二十二歳にて結婚、爾來夫の指導を受け夫と共に「心の花」に據る。見沼冬男 本名西角井正麿。三十九歳。埼玉縣大宮町高

鼻に生れ、同地に現住。國學院大學教授。大

正八年アララギに投稿、釋道空氏に師事す。大正十年アララギを退き、同門にて白鳥社を結ぶ。雜誌「白鳥」四號にて廢刊。以來結社に屬せず、多藝創刊に及びその一員となる。

深山裾夫

本名西久保貞。三十九歳。三重縣南牟婁郡五

鄉村大字和田に生れ、同縣名賀郡名張町二本松町に現住。縣立名張高女教諭。大正十年神宮皇學館入學、短歌に志し、翌年三月館内の五更會員となり、現在同誌同人。昭和五年十二月歌集「あしびき」を福井守中氏と共に著して出版。

深山小一郎

本名小兵衛。四十歳。東京市麻布區飯倉町二

ノ一四に生れ、同地に現住。紙茶販賣業。大正五六年頃竹柏會々員、後珊瑚礁の社友となり、同誌廢刊するに及び湖王樹社に入り現在に至る。

深山影二

本名砥上榮次郎。明治三十三年六月十七日、

福岡市西職人町三〇に生れ、同市六本松四三ノ一に現住。福岡工業學校助教諭。詩歌同人。

御子柴誠子

二十六歳。長野縣東筑摩郡廣丘村吉田に生れ

東京市淀橋區諏訪町一九六に現住。六年前より作歌、當時「歌と觀照」に一年在社、後昭和十年「山柿」に入社し現在に至る。

御崎津多雄

本名太田利一郎。三十六歳。静岡縣榛原郡相良町片濱五三に生れ、同地に現住。農業兼漁業。作歌經歷といふほどのものなし。

御園恭子

二十三歳。東京市京橋區龜島町一ノ八一に生れ、同市世田谷區北澤五ノ六七三に現住。昭和十一年十一月明日香入社、現在に至る。

御津磯夫

本名今泉忠男。三十七歳。愛知縣寶飯郡御津町大字御馬字西三七に生れ、同地に現住。醫師。大正十二年アララギ會員となり、岡麓氏の選を受けて今日に至る。

岬三呂

本名伊崎三郎。宮崎縣宮崎郡佐土原町に生れ、昭和九年八月歿。享年三十五。小學校教員。昭和二年アララギに入會。

溝口登美咲

五十一歳。佐賀縣杵島郡六角村中郷に生れ、同地に現住。洋服裁縫業。大正九、十年頃國民文學にて本居亮一氏の指導を受く。其後殆ど中絶。昭和十年病氣にて歸郷し再び作歌。

溝口秋子

大正二年十二月十五日福岡縣遠賀郡香月町馬場山八六五に生れ、同縣粕屋郡箱崎町西御門一九〇五に現住。福岡女子専門文科卒業。昭和十一年アララギに入會し今日に至る。

溝口巖

明治三十一年七月十一日、千葉縣君津郡小糸村に生れ、大正十二年七月二十一日同地に歿す。大正四年頃より作歌、同十二年「真人」に入社、細井魚袋氏に師事す。

溝淵道次

三十八歳。香川縣香川郡一宮村大字一宮五七五に生れ、高松市松島町六六六に現住。刑務所看守。昭和九年三月香蘭に入社、同十年八月多磨に入會。

道場清二

二十四歳。兵庫縣飾磨郡白濱町乙四七三に生れ、同地に現住。マツチ工場職工。昭和十一年六月より作歌、大朝歌壇等に投稿し、同年十月より神戸六甲短歌會に入會して今日に至る。

道久良

明治三十七年三月十五日、香川縣仲多度郡十郷村生間に生れ、京城府外廣州郡九川面に現住。農業。大正十二年細井魚袋氏の「真人」創刊と共に同誌により作歌、野口米次郎氏に師事。昭和四年歌集「澄める空」を出版す。

滿岡照子

明治二十五年七月、北海道白老郡白老村に生れ、同地に現住。若くして獨り作歌、空爾毎日歌壇に投稿せしが、のち白日报社に入り前田夕暮氏の指導を受け、氏の自由律轉向と共に退社。

光田滿穗

本名野々村三雄。四十四歳。盛岡市に生れ、東京市品川區大井瀧王子四六一二に現住。官吏。大正七年舊派より轉向し翌年尾山篤二郎氏主宰の「自然」岩手支部に加入、大正九年「翻王樹」に入社、同十年「林鐘」に入り、同十一年吉楨庄亮氏の「敬禮」發行に際し加入、現在に至る。大正十三年「林帶」を主宰す。

光田作治

明治三十五年四月八日、岡山市西川原に生れ、京都市左京區吉田上大路町九に現住。京都帝大圖書館司書。十五歳より「水甕」に入社、尾上柴舟、石井直三郎兩氏に師事、今日に及ぶ。

光永比佐夫

本名久男。四十一歳。長崎市に生れ、横濱市保土ヶ谷區帷子町三二五七に現住。海軍工廠勤務。作歌二十年餘「とねりこ」にありしがその廢刊後「新進歌人」を創刊主宰し今日に至る。歌集「南國」あり。

光永セツ

二十六歳。愛媛縣越智郡龜岡村大字種に生れ、同郡波止濱町大字高部に現住。小學校教員。二十歳頃より作歌、二十三歳歌誌「真樹」に入り現在に至る。

光村謙

本名芝太郎。四十四歳。愛媛縣北宇和郡成妙村大字大藤に生れ、京都府愛宕郡岩倉村渡邊保

養所に現住。精神病、神經衰弱者の看護に従事。二十歳頃關西學院中學部在學中作歌、三十歳頃東洋大學に入學、創作に志して歌を中絶す。最近再び作歌。

光岡 良二 二十八歳。兵庫縣に生れ、東京府北多摩郡東

村山村全生病院内に現住。昭和八年癩發病し同院に入り、今日に至る。昭和十一年「勁草」に入社、現在その社友たり。

水鳥川 春帆 本名安爾。四十四歳。千葉縣長生郡豐田村

當に生れ、千葉市新宿町に現住。千葉師範二部卒、初等教育に従事せしが現在縣視學。大正六年二月若山牧水氏の門に入り、爾來主として「創作」に歌を發表し現在に至る。

水落貞次郎 福岡縣三瀨郡木室村中

木に生れ、大正八年二十六歳にて歿す。大正三年青島戰に従軍し砲彈にて負傷、爾來その破片數度の切開手術にもとれず次第に弱りて病死す。作歌約一年。

水川 天一 本名克己。三十四歳。岡山縣小田郡三谷村に

生れ、同地に現住。前鹿兒島女子師範教諭。高等師範在學中より作歌、文理大を経て教職に就き、其間作歌を續けたれど規則立ちたる作歌經歷なし。

水川 貞而 二十九歳。岡山縣小田郡三谷村横谷に生れ、

廣島縣賀茂郡廣村に現住。書籍文具商。生田蝶介氏の「吾妹」に據る。

水上 赤鳥 本名健二。四十四歳。福岡縣糸島郡可也村大

字師吉に生れ、東京市瀧野川區中里町三七二に現住。教員。大正六年「創作」に加入、若山牧水氏に師事、昭和二年「ぬほり」創刊と共に同人となりて今日に及ぶ。昭和七年歌集「更生」を出版。

水上 トシ 明治四十二年福井縣大野郡勝山町下元祿島田

家に生れ、新潟縣長岡市東神田町一四八に現住。大阪府立夕陽丘高女在學當時より作歌、奈良女高師文科卒業、水上家に嫁ぎ、現在は「水壘」に據る。

水上すず子 本名加藤壽々子。明治三十八年十二月二十六

日、長崎縣平戸島に生れ、神奈川縣鎌倉大町妙本寺前に現住。昭和五年より水町京子氏に師事して作歌、十年迄「青垣」に屬す。以後「遠つと」と同人。

水木 之青 本名山脇清枝。三十三歳。高知縣赤岡町に生

れ、神戸市灘區備後町一ノ五二に現住。銀行員。昭和八年一月創作社に入社、現在に至る。

水澤 邦畷 三十二歳。長野縣北佐久郡輕井澤町に生れ、

同郡大里村に現住。小學校訓導。昭和二年アラギ入會、今日に至る。

水島 麗峯 二十七歳。岐阜縣養老郡宇治邊村三六九に生

れ、靜岡縣濱松市北寺島町三五九に現住。無職。十年前より作歌すれど經歷といふほどのものなし。

水島 いね 二十七歳。神奈川縣中郡土澤村土屋に生れ、

同郡秦野町會屋上乳牛一六四四に現住。小學校教員。實踐女子專門國文科在學中、武島羽衣氏、高崎正秀氏等に學び現在「明日香」會員。

水田 房子 本姓栗林。二十七歳。神戶市に生れ、同市灘區神ノ木通四ノ三六二に現住。作歌九年、現在「ポトシム」六甲一に所屬。

水谷 静子 明治三十九年七月二十三日岐阜縣に生れ、東京市王子區下十條一五〇二に現住。北原白秋氏に師事、同氏の「近代風景」短歌民族」等を経て現在「多磨」に據る。其間「ぎやう」に参加せり。

水谷 艶子 名古屋市に生る。昭和六年一月金雀枝短歌社主宰水谷一楓に嫁し、昭和十年四月二十七歳にて長逝す。

水谷 理安 本名周一。三十九歳。三重縣員辨郡笠田村坂

東新田に生れ、同地に現住。小學校教員。富田中學在學以來作歌、昭和七年桑名の「金雀枝」社友となり今日に及ぶ。

水谷 貞子 二十二歳。新潟縣高田市裏川原町に生れ、東京市澁谷區櫻ヶ丘九八に現住。「とほつび」と同人。

水谷 一楓 本名信一。三十五歳。桑名市に生れ、同市大福一五四に現住。銀行員。昭和二年四月同志と共に「金雀枝」創刊、同年十二月「潮音」入社、今日に至る。歌集「鈴鹿嶺」あり。

水谷 文憲 二十五歳。三重縣桑名市大字東方二〇一三に生る。商業。昭和九年六月潮音社に入り現在に至る。

水谷比呂志 本名浩。二十八歳。香川縣大川郡相生村に生れ、同郡引田町に現住。小學校教師。荒木暢夫氏に作歌指導を受け、昭和八年香蘭入社、多磨創刊と共に退きて多磨會員となる。

水谷 信吾 二十三歳。名古屋市中區下笹島町七二に生れ

同區島西町三ノ一に現住。銀行員。昭和六年東邦商業學校短歌部入部、同十二年一月歌誌「東邦」同人となる。

水谷 香畝 本名勇。明治四十一年一月伊勢桑名に生れ、

三重縣桑名市愛宕下に現住。初め歌と國學を叔父に學び、十八歳の時東京日日新聞歌壇に投じ、爾來諸新聞雜誌に投稿す。

水谷 貞之 二十六歳。三重縣三重郡朝日村字繼生に生れ

同地に現住。指物師。農村青年學校にて和歌俳句の指導を受け、十八歳より金雀枝短歌社に入會、今日に至る。

水溪 峽村 本名後藤素行。明治四十年山口縣玖珂郡川越村に生れ、奈良縣吉野郡中莊村大字宮籠に現住。眞宗本願寺派布教師。東京在學中より作歌、新聞雜誌に投稿す。昭和七年頃より中外日報歌壇に投じて吉澤博士及藤井つや子氏の選を受く。同八年「ささがに」に入る。同九年より柳原輝子氏の「ことたま」誌會員となる。現在専ら花田比露思氏の「あけび」に據り、同氏に指導を受く。

水沼 達哉 本名小原忠三郎。明治三十四年一月二十三日

福島縣若松市榮町三ノ三〇〇に生れ、昭和十二年三月十三日歿す。看板業。橄欖社同人。

水野 詩華湖 本名一郎。二十六歳。岐阜縣に生れ、同縣吉

城郡船津町に現住。三井神岡鑛山鑛夫。昭和九年より「短歌研究」により作歌、現在に至る。「あらがね」同人。

水野 柿園 本名榮次郎。七十三歳。名古屋市中區古屋市に生れ、東京市杉並區西高井戸二ノ四六に現住。無職。歌は殆ど獨學にて別に師なし。

水野 薫 金澤市に生れ、東京市大森區田園調布四ノ五一に現住。無職。大正五年東京女師文科卒業。

水野 つね 愛知縣知多郡常滑町字保示丸山三一に生れ、

同地に現住。昭和十年より病床の慰めに作歌す。

水野 鈴夫 明治三十八年三月三日

長野縣松本市仲條町七三五に生れ、同地に現住。理容術業。初め胡桃澤勘内氏の指導を受け高原藝術其の他の雜誌に發表、大正十五年美穂の豊島晃氏を識りて入社す。昭和十年十一月歌集「川邊の街」を發行。

水野 榮二 本名榮次郎。三十歳。東京市深川區小松町七

に生れ、大阪府豐中市大字麻田九九四に現住。會社員。昭和六年潮音社入社、同九年退社。同十一年あじろ木短歌會加盟、同十三年退會。同年秋田青雨氏と青櫻社を興し今日に至る。

水野 謹吾 明治三十八年四月、岐阜縣に生れ、臺灣高雄

市湊町五ノ一七に現住。官吏。昭和七年名古屋短歌會に加盟、「短歌」同人として現在に至る。

水野 美知 大正二十一年十一月、東京市麻布區に生れ、川崎

市東渡田三ノ二六九三に現住。教員。昭和十一年、早稻田大學文學部哲學科卒業。十七歳より作歌。昭和九年春「槻の木」同人となる。

水野 良一 明治四十年五月二十七日、名古屋市中川町に

生れ、同市鍋屋上野に現住。陶器會社員。昭和二年秋創刊早々の蒼穹社に入社、岡野直七郎氏につきはじめて作歌、約二年後自由律短歌に轉向「詩歌」に入る。昭和七年二月再び定型に戻り青垣會に入會、同十二年一月青垣會を退く。

水野 來馬 本名加藤茂。三十三歳。仙臺市北鍛冶町四三に

生れ、同地に現住。煉炭製造業。作歌經歷といふほどのものなし。

水野 準三 三十九歳。岐阜縣惠那郡岩村町に生れ、同地

に現住。藥種問屋。中學二年より作歌、専門學校に入り大阪に學ぶに及び中村憲吉氏の教を受く。後名古屋短歌會に入り、現在武都紀

同人。なほ現に岩村短歌會を主宰し「美野」を刊行す。

水野 秀雄 三十一歳。函館に生れ

町九八三に現住。中外商業新報社員。初め函館日日新聞に作品發表、地方同人雜誌に關係昭和三年十月雜誌「道南短歌」を創刊(第七號を「提壺」と改題此の號を以て廢刊)、里和久の名にて作品發表、現在「エラン」の同人。歌集「二五八九年」あり。

水原 隆 本名野津原登。宮崎縣

昭和九年九月十九日三十六歳にて歿す。大正十三年熊本縣菊池の九州療養所に病を養ふ。それより雜誌「古城」の會員となり、昭和三年「水麴」社友、同五年アララギ會員となる。

水町 遼 二十六歳。東京市目黒區上目黒五ノ二四七二

に現住。會社員。昭和九年アララギに入會し岡麓氏の指導をうけつつ今日に至る。

水町 佐多雄 本名林貞雄。三十七歳。美濃國洞戸村に生れ、

岐阜市下太田町に現住。藥劑師、官吏。名古屋短歌會同人。

水町 京子 本名宮坂三千子。明治

日、高松市内町に生れ、千葉縣成田町寺臺四

三九甲斐方に現住。大正三年水麴に入り數年後去りて古泉千樾氏に師事、十四年友人と共に「草の實」を起し昭和九年に及ぶ。昭和十年「遠つびと」創刊。現在は釋道空氏門下。「青垣」多磨に作品を發表せしことあり。歌集「不知火」(大正十二年刊)あり。

水本 敏 本名敏夫。明治四十二年一月、福岡縣八女郡

大淵村に生れ、同縣嘉穂郡山田町上山田伊藤ふじを方に現住。小學校教師。十五歳より作歌、「花房」に據りて現在に至る。歌集「幌馬車」あり。

水井 れい子 三十八歳。鳥取縣に生

れ、京城明倫町三ノ九に現住。新聞記者。水麴にありしも後アララギ派に傾倒、京城帝大高木市之助氏の指導を受く。

湊 美子 本名栗栖喜美子。三十

一歳。和歌山市久右衛門町に生れ、同市葵町一二二に現住。汜濫同人。

湊 盤雄 號翠舟。明治四十年十

二月二十六日、福島縣石城郡八莖村に生れ、札幌市南十條西一二ノ七八八に現住。書道教授。昭和八年五月、東京の葦芽に入社、今日に及ぶ。

南 うをこ 本名宮本のぶ。三十

歳。群馬縣澁川町北嶺

町に生れ、新潟縣南魚沼郡石打村大字關山に現住。小學校教員。六七年前より新潟縣の歌誌「土塊」及び東電發行の歌誌「青煙」による。

南みどり

明治三十三年九月六日 廣島縣豊田郡竹仁村に生れ、米國加州ロスアンゼルス市に現住。白人市場内果菜部經營の夫を手傳ふ。六七年前より獨り作歌、昭和十年頃より高柳沙水氏に師事し日刊邦字紙日米、加州毎日の兩新聞に多磨光子、南みどりの名にて投稿す。

南栗人

本名千田憲、五十歳。徳島市に生れ、宇治山田市宮後町九五に現住。神宮皇學館教授。作歌經歷十年餘。

南邦之

三十一歳。秋田縣南秋田郡五城目町築地町に現住。十八歳より中村徳也氏の教を受け二十四歳頃より現實短歌の社友となりしも中絶、のち短歌至上主義に入る。現在休詠。

南大濱

明治七年大阪府泉南郡上之郷村に生れ、同地に現住。明治二十九年春上京、佐佐木信綱氏に師事し同三十五年夏に至る。大正八年より石博千亦氏に師事して現在に至る。

南龍夫

三十歳。兵庫縣揖保郡揖西村に生れ、同村内海方に現住。無職。十年程前より獨り作歌せ

るも雜誌には關係せず。昭和九年より「短歌評論」に参加。

南唯雄

明治四十年十二月十九日、香川縣木田郡十河村字小村に生れ、徳島縣美馬郡里村に現住。教員。徳島歌人協會同人。現在多磨會員。

南正胤

明治二十九年奈良縣宇陀郡榛原町上井足に生れ、東京市淀橋區上落合二ノ六一八に現住。著述業。中學三年頃より作歌「スバル」アララギに席を置きしことあり。其後北原白秋氏の「曼陀羅」に加はりしが間もなく前田夕暮氏の白日社に入社、プロレタリア短歌運動の發生と共に同運動に携り「プロレタリア短歌」の編輯を擔當せり。

南森之

二十四歳。三重縣北牟婁郡尾鷲町矢濱に生れ昭和十一年七月より作歌、大阪朝日東海歌壇に投稿、同年九月より「武都紀」會員となり今日に至る。

南谷和吉

本名野田千夫。三十四歳。高知縣高岡郡北原村甲原三〇一七に生れ、大阪市東雲町三ノ二三四野田方に現住。會社員。昭和四年霸王樹に入會、同七年退きてアララギに入り、爾來森山汀川氏の選を受く。

南谷繁治郎

明治四十四年滋賀縣蒲生郡市原村甲津に生れ昭和十一年四月三日歿。行年二十六。農業。「香蘭」青虹「やまぶき」入社。後郷土歌友と回覽誌「みづうみ」窓」を發行。また昭和六年一月創刊の「いぶき」に入る。

峯百合子

號香齋。明治八年東京市日本橋區本銀町二ノ一〇に生れ、大正八年八月二十八日歿す。醫師の妻。佐佐木信綱氏に學ぶ。竹柏會同人。

峯日出吉

本名諏訪巖。三十五歳。和歌山縣海草郡西脇野村に生れ、東京市赤坂區青山北町四ノ五八に現住。人事録編輯員。昭和六年頃より和田山蘭氏に學ぶ。又一時土屋文明氏に就きしことあり。

峯村文人

大正二年九月十四日、長野縣小縣郡富士山村に生れ、東京市豊島區巢鴨六ノ一五三三に現住。東京高師卒、昭和十年新潟縣立六日町中學校教諭、同十二年東京文理大に入學、現在同學生。昭和八年潮音に入社、太田水穂氏に師事し現在に至る。

峯村國一

明治二十一年十二月十二日、長野縣小縣郡富士山村に生れ、東京市豊島區巢鴨六ノ一五二二に現住。銀行員。十六歳の頃より作歌、新聞雜誌に作品を發表したるが、太田水穂氏の

潮音創刊と共に入社して現在に至る。歌集「玉砂集」の著あり。

峯村 英薫 三十七歳。長野縣小縣郡富士山村に生れ、大阪市住吉區田邊本町七ノ三四に現住。銀行員。大正十二年潮音入社、現在に至る。

峯村 清江 明治四十年十一月、長野縣小縣郡富士山村に生れ、昭和二年六月二十一歳にて歿す。峯村國一、峯村英薫の妹。遺稿歌集「鈴蘭」あり。

嶺内 六步 本名油上英雄。二十五歳。大阪府中河内郡八尾町八尾に生れ、同町大信寺五に現住。逓信局員。昭和九年六月曼陀羅に入社し現在に至る。

嶺田 俊雄 五十歳。京都府舞鶴町に生れ、明石市大藏谷字小辻二五五二に現住。官吏。霸王樹社に入り、自然社に轉じ、のち曼陀羅社創立と共に入社、今日に及ぶ。

養部 哲三 三十二歳。宮崎市谷川町二に生れ、同地に現住。腰椎カリエス療養中。昭和三年七月よりアララギに入會、今日に至る。

宮 柎 本名宮肇。大正元年八月三十一日、新潟縣北魚沼郡堀之内町に生れ、東京市世田谷區白澤町一ノ一三六北澤會館内に現住。北原白秋氏の家庭にありて事務を預る。中學時代より

作歌、昭和八年北原白秋氏に師事して現在に至る。多磨會員。

宮 優梨 本名幸。大正九年一月二十八日、新潟縣柏崎町に生れ、東京市中野區上高田二ノ二八五巽聖歌方に現住。十六歳頃より作歌、現在に至る。

宮内 敬四郎 二十五歳。鹿児島市に生れ、京都市左京區岡崎東福ノ川町一〇林戸方に現住。學生。今井規清氏に師事。結社に屬せず。

宮内 浩二 本名武雄。二十八歳。千葉縣銚子市新生二ノ八四に現住。銀行員。昭和五年より作歌、現在敬禮社に在り。尙土筆社同人。

宮内 麻茅郎 本名片山貞治郎。四十七歳。千葉縣海上郡飯岡町に生れ、同郡旭町に現住。雜貨商。大正四十五年八月、前田夕暮氏の門に入り、明治七年十月「詩歌」廢刊後は同氏中心の回覽誌「耕人」により作歌、大正十年十一月同人等と雜誌「獨創」を發刊せしも一號にて終り作歌中絶、今日に至る。

宮川 佳胤 三十歳。愛知縣丹羽郡市浪速區木津川町一ノ一〇西野方に現住。材木商店員。昭和十年いぶき詩社入社、今日に至る。

宮川 喜一 明治四十四年十月二十七日、大阪市東區南本町三ノ一五に生れ、同地に現住。病弱の爲數回職を替へ、現在小工場に勤務。昭和三年「白鷺」に入社、分裂と同時に復活したる「地上」に加はり現在に至る。また昭和十一年「まひるの」を創刊、編輯に携る。

宮阪 古梁 本名常。五十四歳。長野縣小諸郡縣村に生れ、同縣小諸町に現住。新聞記者。少年時代より作歌、若山牧水氏と交を結び小諸町に白閃會を起し創作に據りしも、大正四年太田水穂氏潮音を創刊するや之に參加し今日に至る。

宮崎 たき子 明治四十四年、埼玉縣秩父郡中川村大字小野原に生れ、同縣秩父町上野町七六五に現住。昭和九年中津賢吉と結婚し夫の指導を受けしのみ。

宮崎 康一 本名安一。三十四歳。大字原古賀二四一〇ノ五に生れ、臺灣臺中州東勢郡新社庄字復盛一に現住。實業補習學校教員。昭和五年十月臺北平井二郎氏主宰の「あらたま」に入社、現在に至る。

宮崎 茂久 二十七歳。長野縣下高井郡延徳村新保に生れ、同地に現住。農業。昭和九年頃より土田耕平氏に師事して作歌、のちアララギ會員となり

森山汀川氏に指導を受け現在に及ぶ。

宮崎 静思 本名静治。舊姓金子。四十歳。新潟縣中頸城郡和田村柳井田に生れ、同村月岡に現住。桶職。二十八歳宮崎家に入る。初め高田日報、高田新聞に投稿、二十八歳より橋田東聲氏に學び、現在は高木一夫氏の歌誌「博物」の會員。

宮崎 りく 本姓辰。三十一歳。神奈川縣高座郡藤澤町鶴沼に生れ、東京市京橋區月島西仲通四ノ一飯田方に現住。派出婦。横濱にて女中奉公中二十四歳春より二十七歳暮迄三年間與謝野晶子氏の指導を受く。

宮崎 修介 二十五歳。長野縣更級郡鹽崎村に生れ、同縣諏訪郡本郷村に現住。小學校教員。十六歳の頃より作歌、地方新聞短歌雜誌等に投稿したる以外師につきたることなし。

宮崎 龍介 四十七歳。熊本縣玉名郡荒尾町大字荒尾九四九に生れ、東京市豊島區目白町三ノ三六三〇に現住。辯護士。著書に「地底の露西亞」對支外交論」等あり。

宮崎 銀次郎 明治八年八月九日東京市に生れ、同市深川區森下町二ノ一〇ノ七に現住。元織物商。昭和九年秋より窪田空穂氏に師事して今日に及ぶ。

宮崎 興基 長崎縣西彼杵郡面高村

宮崎 徳 二十四歳。靜岡縣田方郡多賀村に生れ、東京市小石川區原町一六小川方に現住。國學院大學神道部學生。中學三年の頃より本居亮一氏に師事す。昭和十一年三月國民文學社に入り谷鼎氏に就きて今日に至る。

宮崎 紫水 本名勝好。明治三十六年。徳島縣板野郡北島村に生れ、東京市下谷區谷中初音町三ノ一五に現住。中學より師範二部を経て、教員生活二年、のち早大文科に進む。歌は中學の頃村崎華塔氏に教を受け、のち光同人となる。早稻田に入りてより窪田空穂氏の指導を受け卒業後「銀河」を創刊主宰して今日に至る。

宮崎 智恵子 二十四歳。島根縣津和野町に生れ、同地に現住。福岡女子専門學校の短歌會指導者中島哀浪氏の「ひのくに」に同校中途退學後入社して今日に至る。

宮崎 芳男 三十八歳。北海道空知郡栗澤村字北島に生れ札幌市外琴似二一に現住。教員。地方歌誌「草いちご」原始林」に關係、のち「創作」に二年ありしも退社、昭和四年「潮音」入社、地方歌誌「新懇」同人として今日に至る。

宮崎 幸子 明治四十二年朝鮮京城に生れ、全羅南道羅州に現住。齒科醫。京城にて齒科醫專を卒へ、二十歳にて結婚。

本郷一四五に生れ、東京市豊島區雜司谷町一ノ五九に現住。臺灣製糖株式會社員。明治大學政治經濟學部卒業。大正二年中學二年より作歌、獨學にて現在に及ぶ。

宮崎 篤 三十四歳。千葉縣匝瑳郡野田村野手に生れ、同地に現住。教員。昭和七年土筆に入り、昭和九年短歌草原に加はり、現在兩誌の同人。

宮崎 守 明治四十年下關市に生れ、朝鮮全羅南道羅州に現住。齒科醫。明治四十四年渡鮮、京城にて齒科醫專を卒へ、黃海道、滿洲等を轉々す。中學時代より作歌すれど、投稿發表せしこと殆どなし。

宮澤 虎雄 舊姓井上。鹿兒島縣薩摩郡鶴田村に生れ、昭和五年三月二十九日歿す。行年二十九。大正十四年秋病を得て新潟醫科大學を休學。岩谷莫哀氏に氏の逝去前約十ヶ月師事し、昭和三年頃より「水鏡」に投稿す。芝醜男の筆名を用ひしことあり。

宮澤 紀美 本名喜美。三十一歳。廣島縣吉舍町に生れ、同地に現住。少女時代より作歌、昭和七年ア

ララギ短歌會に入りて現在に至る。

宮澤進 三十六歳。長野縣謝安曇郡明盛村中萱に生れ

同地に現住。農業。アララギ會員たりしが目下帯木の會同人。

宮下安太郎 三十六歳。群馬縣佐波郡芝根村大字沼之上に

生れ、東京市澁橋區西落合二ノ四四七に現住。オリエンタル寫眞工業會社員。大正十三年三月村の同志と芝根短歌會を創立、同年霸王樹

及び野菊の社友となり、昭和二年三月霸王樹退社、翌年野菊の同人となり現在に及ぶ。

宮下芳文 三十歳。長野縣上伊那郡伊那里村に生れ、同

郡伊那町に現住。教員。昭和九年アララギ會員となり、土屋文明氏の指導を受く。

宮下仙之 四十四歳。和歌山縣海草郡濱中村に生れ、和

歌山市眞砂丁一ノ一に現住。女子師範及縣立日方高女教諭。大正十五年より作歌、昭和二年「自然」に入り、同六年「曼陀羅」同人となり今日に至る。

宮下菊二郎 三十五歳。群馬縣佐波郡芝根村字沼ノ上に生

れ、東京市京橋區越前堀一ノ五に現住。店員。大正十三年より作歌、昭和二年大澤雅休氏の野菊に入社、今日に至る。

宮島正美 三十六歳。長野縣下伊那郡市田村に生れ、大

連市薩摩町一六一に現住。教員。甲斐水棹氏の指導を受け、昭和九年水壘入社、松田常憲上田英夫兩氏の指導を受けつつ現在に至る。大連アカシ短歌會同人。合朔會員。

宮代直吉 本名留子。明治二十四

年九月七日、神奈川縣大磯町に生れ、平塚市新宿八八五に現住。昭和二年頃島野幸次氏に添削を受けしことあり。昭和十一年五月アララギ短歌會に入り、齋藤茂吉氏の選を受く。

宮田植徳 四十四歳。岐阜縣羽島郡中屋村眞宗大谷派寺

院に生れ、現在同寺住職。大正五年「潮音」に入社、二十餘年間太田水穂氏の指導を受く。

宮田清文 本名清豊。二十六歳。

富山縣西礪波郡吉江村遊部に現住。農業。昭和六年香蘭入社、昭和九年入營後退社、今日に至る。

宮田芳子 丹後峰山に生れ、昭和

七年二月二十九日歿す。享年三十六。大正十年八月以來並木秋人氏の「常春」ひこばえに發表。歿後遺稿集「しのぶぐさ」上梓さる。

宮路緋砂詩 本名壽。三十歳。愛知縣渥美郡高豊村大字七

根に生れ、同郡田原町大字田原字本町に現住。小學校教員。年少の頃「眞砂」に發表せしことあり。現在「水壘」に籍を置き外に「東邦」の同人。

宮永春琴 本名靜子。二十四歳。

神戸市須磨に生れ、同市須磨區山下町一ノ一〇に現住。昭和十一年一月潮音社に入社、現在に至る。

宮野辰夫 明治四十四年九月十九

日、福岡縣八幡市西本町六丁目に生れ、福岡市三宅西大橋一〇二〇に現住。會社員。昭和七年頃より獨り作歌、現在福岡市より發行の歌誌「清明」の同人。

宮野貞男 本名三谷貞雄。明治四

十一年三月三十一日、東京市中野區に生れ、同區本町通三ノ一七に現住。宮内省內藏寮勤務。「相聞」「スバル」「眞珠」を経て昭和九年十一月アララギ短歌會に入會、現在に及ぶ。

宮野薫 二十五歳。山口縣大津

郡深川町澁木に生れ、同郡俵山村湯町に現住。小學校教員。小學校奉職後折々作歌、「山口縣教育」に投ず。

宮原茂一 三十三歳。長野市大字

高田に生れ、長野縣東筑摩郡宗賀村に現住。小學校教員。大正十二年潮音社友となり太田水穂氏に師事し現在に至る。

宮原 秀山 本名晃。三十四歳。長野縣更級郡村上村に生

れ、長野市箱清水町三一六に現住。教員。く

宮本 松雄 不明。

宮本 利男 二十二歳。茨城縣眞壁郡伊瀨村に生れ、東京

市神田區淡路町二ノ一七戸各方に現住。出版業。昭和十年八月作歌を始むると共にアララギ會員となり現在に及ぶ。

宮本 榮一郎 二十九歳。千葉縣君津郡中郷村大寺に生れ、

同縣海上郡旭町に現住。縣立銚子高女教諭。十五歳頃より作歌、早大に入學し尾上柴舟氏の水甕に屬せしが昭和九年現實短歌社に加はり、同十二年一月より檉權同人となり、吉植庄亮氏に師事す。昭和八年歌誌「青繪」を發行せしが九年廢刊す。

宮本 清子 二十八歳。千葉縣海上郡旭町に現住。縣立松

尾高女教諭。昭和九年宮本榮一郎に嫁してより作歌に力を入れ、同十二年二月「現實短歌」同人となり田口白汀氏に師事す。

宮本 利彦 三十一歳。群馬縣富岡町一に生れ、同地に現

住。製絲従業員。昭和十年九月歌と觀照社に入社、今日に至る。

宮元 尚 明治三十七年二月七日熊本縣球磨郡黒肥地村に生る。酒造業。與謝野晶子氏に師事す。

宮脇 武夫 三十六歳。千葉市寒川に生れ、横濱市神奈川

區桶町六四に現住。無職。中學四年秋頃より作歌、東京商大専門部時代學内の聖樹社歌會に歌を出しし事あり。就職後中絶、失明し職を退き再び作歌、昭和元年十二月アララギに入り、齋藤茂吉氏に師事し今日に至る。

都川 勝 明治四十二年七月、千葉縣香取郡佐原町横宿

に生れ、同地に現住。法政大學高等師範部を中途退學し和洋酒食料品店を開業す。

むの部

六車 勇 四十四歳。香川縣小豆郡土庄町に生れ、京都

府福知山市東中ノ町に現住。醫師。大正五年水甕に入社、のち霸王樹に入り、尾山篤二郎氏の自然に入り、曼陀羅雜刊に當り同人として今日に至る。

武笠 曉 本名清重。明治三十八年茨城縣結城郡玉村小

保川に生れ、東京市王子區赤羽町一ノ三七一に現住。醫師。大正十年頃より作歌、同十五年三月竹柏會入會、昭和二三年頃前川佐美雄

氏等と新短歌運動を興せしことあり。當時文藝誌「甲賀文學」歌誌「るつぼ」を主宰。同五年秋より七年迄齋藤瀏氏の指導を受く。

武者 汀焔 本名武。二十五歳。宮城縣宮城郡松島町大字

松島字町内五に生れ、同地に現住。官吏。昭和九年紅鳩に入社、同十一年言靈創刊、同人たり。

武藤 隆一 三十六歳。秋田縣山本郡柏毛村に生れ、福島

市太田町道滿塚三に現住。新聞社員。少年時代學友伊藤永之介氏より指導を受く。十八九歳頃故佐藤嘲花氏に師事す。大正十一年頃竹不二鳴風の筆名にて檉權に歌を發表せしことあり。其後十數年作歌を廢し、昭和十年七月より再び作歌、十一年二月檉權入社、翌年三月同誌を退社すると同時に現實短歌社に加盟し現在に至る。

武藤 阿岐良 明治四十三年、秋田縣河邊郡豐岩村に生れ、

仙臺市東一番丁三五に現住。醫師。昭和二年より作歌、同三年創作入社、四年退社、同九年常春入社、現在に至る。

武藤 善友 三十九歳。秋田縣仙北郡畑屋村に生れ、北海

道上磯町富川町に現住。僧侶。大正八年より島木赤彦氏に教を受け、その歿後齋藤茂吉、土屋文明兩氏の指導を受く。

武藤 勝 三十八歳。佐賀縣に生れ、福岡縣伊田町に現住。商業。昭和三年より數年間條樋瀧四郎の筆名及本名にて「短歌雜誌」に投稿。昭和十年中島哀浪氏主宰の「ひのくに」同人として現在に至る。

武藤 俊一 秋田縣河邊郡豐岩村豐卷字杉ノ下九五に生れ同地に現住。官吏。昭和十年「ぬほり」に入社、今日に至る。

武藤 白咲 本名享一。五十二歳。京都市に生れ、廣島市中廣町九〇九ノ一に現住。官吏。明治四十三年より作歌、大井蒼梧氏に師事、のち創作、現代詩文、晚鐘、短詩生活等を経て現在歌と觀照同人。

無羅多正健 明治三十九年四月六日 神奈川縣川崎市東三ノ四一に生れ、同地に現住。畫學生、歌は獨學。

向井 宗直 明治四十一年十月十六日、東京市深川區龜住町三〇に生れ、同地に現住。大正十三年より作歌、植松壽樹氏を師とし現在國民文學に據る。

向井 清胤 三十二歳。山梨縣北巨摩郡日野春村日野に生れ、同縣南都留郡谷村町に現住。中等教員。大正十三年「アララギ」入會、昭和四年「み

づがき」入社、同五年退社。

向林 菊男 路 本名喜久造。岐阜縣吉城郡小鷹利村笹ヶ洞に生れ、同地に現住。產業組合書記。昭和十二年三月より「光」に入社す。

向山 敬治 郎 三十九歳。長野縣上伊那郡宮田村田中に生れ同地に現住。農業。大正十一年より豐島晃氏の「美穂」同人として作歌。

向山 雅重 三十五歳。長野縣上伊那郡宮田村田中に生れ、同地に現住。教員。大正十二年九月以降「アララギ」會員。

對井 滄人 本名龜井定一。明治三十四年四月十日、愛知縣丹羽郡扶桑村に生れ、同地に現住。教員。昭和元年尾山篤二郎氏に師事、向井桑人と號し「自然」同人となる。同三年岸良雄氏、赤木邦輔氏等と東京より「つきくさ」を發刊、同六年廢刊、のち「短歌」を経て昭和八年高崎正秀氏等と名古屋より「青角髪」發刊、同時に對井滄人と改名し今日に及ぶ。

麥谷 亞星 本名良作。昭和十二年八月歿す。行年四十九。醫師。昭和五年より與謝野寛、島子兩氏の指導を受く。同六年重病生死の間をさ迷へる五ヶ年に得たるもの内より「殘夢抄」を編みて知人に贈る。

宗像 麟 治 良 本名政喜。大正三年十一月十日、福島縣石川郡蓬田村鴉子に生る。農業。縣下四五の歌誌に作品を發表し今日に至る。

宗友 一時 三十七歳。大阪府東區谷町八丁目に生れ、岡山縣和氣郡日笠村に現住。農業。諸新聞雜誌に投稿せる以外作歌經歷といふほどのものなし。

村 磯 象 外 人 明治二十三年四月十六日、千葉縣安房郡東條村和泉に生れ、東京市澁谷區圓山町二七に現住。元銀行員、現在鐵道省官吏。橄欖同人（發行人）。歌集「交響」あり。

村川 益子 四十三歳。大阪府に生れ、西宮市越木岩字隨之池に現住。大正五年潮音に入社以來太田水穗氏の指導を受け今日に至る。

村上 成之 號蛸魚、蟻室、しみむろ。慶應三年九月愛知縣東春日井郡旭村印場に生れ、大正十三年十一月三十日、名古屋市杉村町舟附に歿す。享年五十八。廿六歳石橋羅窓氏に歌を學ぶ。三十三歳頃日本新聞紙上の正岡子規氏の作を讀み明治三十五年三十六歳秋藏堂氏に會し根岸派の歌を作る機縁となる。翌年九月伊藤左千夫氏を訪ね又藤貞氏と交遊す。又俳句を内藤鳴雪翁に學ぶ。歌は常に日本新聞、アカネ、

馬酔木、アララギに投ず。遺著「翠微」あり。

村上義一郎 三十四歳。京都市に生れ、上海楊樹浦河間路五九五號美華印染廠内に現住。工場員。大正十一年頃より作歌、歌誌「砂利道」を主宰し十一號を以て廢刊す。結社に加はらずして今日に至る。

村上昭房 三十九歳。東京市麩町に生れ、大阪府布施市菱屋西二七に現住。大軌參急電鐵社員。十九歳より太田水穂氏の指導を受け、現在に至る。「潮音」同人。尙潮音系歌誌「あじろ木」の編輯を爲す。

村上惇子 本名宮原あつ子。三十四歳。長野縣更級郡村上村網掛に生れ、同縣西筑摩郡檜川村平澤に現住。小學校教員。潮音社友。

村上富六 二十三歳。廣島縣御調郡中庄村新開に生れ、東京市中野區野方町一ノ八六二西武館に現住。工藝。昭和十年頃より「詩歌」の誌友として自由律の歌を作り始めしも次第に定型に移り、高橋英子氏主宰の「花房」に發表す。

村上静子 大正四年岡山縣久米郡埴和村大字枅原芳賀家に生れ、後村上氏の養女となる。昭和十一年七月松岡護と結婚、その任地朝鮮雄基に赴く。同十二年四月男子出産後間もなく歿す。

行年二十三。昭和七年九月早蕨社に入社、正分蒼生二氏の指導を受く。

村上草三 本名忠次。二十八歳。山口縣熊毛郡三丘村に生れ、同縣玖珂郡高森町一八九に現住。教師。山口師範在學中より作歌、アララギに投稿、其他地方の小誌に投稿。

村上廉 明治二十六年二月、愛知縣東春日井郡品野町香掛に生れ、名古屋市東區田代町西畑二三に現住。醫師。二十五歳頃より作歌、「野菊」同人。

村上瓶三 本名三小男。明治三十一年八月三十日、村上成之の三男として愛知縣東春日井郡品野町香掛に生れ、大正十一年六月十六日二十二歳にて歿す。神宮皇學館生徒。高崎中學卒業前後より折にふれて作歌、大正九年神宮皇學館に入學、同校短歌五更會に加入。遺著「村上瓶三歌集」あり。

村上多一郎 三十一歳。長崎縣東彼杵郡川棚町百津に生れ、熊本市外合志村築九州療養所に現住。昭和九年二月アララギ會員となり、岡籠氏の選を受けて今日に及ぶ。

村上晴朗 本名和彦。二十七歳。三重縣津市に生れ、神戸市林田區六番町一ノ六三に現住。無職。昭和十一年春より作歌。

村上清 四十七歳。大阪市に生れ、京都府南桑田郡龜岡町字古世に現住。教員。昭和六年八月潮音社友となり、太田水穂氏に師事して今日に至る。なほ昭和十年一月大阪にて「あじろ木」創刊されるや之に加盟す。

村上義威 三十七歳。岐阜縣中津町に生れ、八戸市鮫町下手代森に現住。教員。二十一歳の夏より作歌、創作社友となり、後退社し作歌にも遠ざかりしが、昭和八年水穂に入り、翌年青垣に轉じて現在に至る。

村上可卿 本名警太郎。明治三十一年十二月四日、山口縣熊毛郡伊保庄村に生る。酒造業。大正十一年若山牧水氏の門に入り、「創作」に屬して今日に及ぶ。

村上泰堂 本名正治。三十七歳。兵庫縣美囊郡久留美村平田に生れ、同郡三木町末廣に現住。日本畫家。昭和五年四月早川幾忠氏の高嶺に入社、今日に至る。

村上新太郎 三十九歳。大阪に生れ、西宮市外東犬飼三四一に現住。會社員。「創作」「自然」「曼陀羅」を経て現在「日本歌人」同人。

村上秀代

三十三歳。長崎市上筑後町五〇に生れ、小倉市金救町城野七二専妙寺内に現住。とねりに暫時出詠せしことあり。現在多磨會員。

村木富美子

四十歳。東京市日本橋區箱崎町に生れ、和歌山縣田邊町東本町に現住。昭和九年春より高橋英子氏の「花房」誌友となり今日に及ぶ。

村木清一郎

五十二歳。秋田縣鹿角郡七瀧村大地に生れ、同縣大館町金坂に現住。縣立大館中學教諭。中學二年頃より作歌、早稻田大學在學中服部躬治氏の教を受く。「新聲」「創作」「早稻田文學」等に歌を發表。歌誌「韻律の國」「新壘」編輯發行。現在「竹筍」を主宰す。

村木一雄

明治四十五年、岩手縣沼宮内町に生れ、室蘭市船見町見晴臺河合方に現住。小學校訓導。函館中學在學當時より作歌、二三の文藝誌に投稿する傍ら級友と共に銀笛、土塊等の文藝誌を作る。函館師範卒業後美唄炭山に赴任。短歌雜誌に投稿、青騎兵、アカシヤ等の同人となる。同師範專攻科卒業後室蘭に赴任、以後興到れば詠するのみ。

村木ふく子

三十九歳。東京市芝區白金今里町に生れ、同市牛込區市ヶ谷藥王寺町五六に現住。女子學習院在學中より作歌、尾上柴舟氏に師事し今

日に及ぶ。水麴同人。

村木雅美

二十六歳。静岡縣濱名郡積志村橋爪一六三三に生れ、同地に現住。綿布製造業。昭和十一年九月水麴入社。

村越文吉

明治四十四年六月十日千葉縣市原郡海上村分目雲内に生れ、東京市小石川區水道端一ノ三八江村方に現住。元教員、現在出版社員。「日光」により作歌を始め、昭和七年一月水麴社に入る。現在同人雜誌「短歌鑑賞」を刊行。

村越友吉

四十四歳。千葉縣市原郡市西村海土有木に生れ、川崎市高津町諏訪に現住。農業。大正十四年三月中央大學卒業。昭和三年金子薫園氏の門に入り今日に至る。

村崎勇

三十七歳。横須賀市に生れ、千葉縣安房郡館山北條町八幡に現住。中等教員。大正十一年より釋道空氏に師事して今日に至る。大正十四年より同志とくむ社を作る。

村崎三斗

本名阿部常福。明治三十三年四月十五日東京に生れ、千葉縣市川市菅野五〇〇四に現住。職業なし。「文珠蘭」「詩歌」を経て「むらぎ」短歌月刊の同人となりしが昭和十年退き、現在結社に屬せず。

村崎凡人

大正三年一月、徳島市寺島本町に生れ、東京市麴町區富士見町二ノ三ノ二〇原方に現住。早稻田大學文學部卒業。櫛の木會同人。本名武夫。三十八歳。

村澤多計夫

長野縣飯田市一三七八ノ一に生れ、同地に現住。裁判所書記。大正五年春より作歌、昭和六年六月アララギ會員となり今日に至る。「伊那歌道史」の編著あり。

村瀬宗之助

三十五歳。名古屋市中區東瓦町に生れ、同市中區東瓦町四七に現住。會社員。大正十年友人等と共に雜誌「白明」を發刊、續いて同十二年「短歌」創刊と同時に同人となり今日に及ぶ。

村瀬登司夫

二十八歳。愛知縣中島郡大里村大字井之口に生れ、同地に現住。陶器畫工。十八歳春より作歌、二十二歳大患のため作歌に遠ざかる。二十五歳より再び作歌、現在に及ぶ。結社に屬せず。

村田利明

東京市神田區駿河臺に在住。勤人生活。大正十一年アララギ短歌會に入會、島本赤彦氏に師事す。伊豆高吉、桐野朝吉の別名を用ひしことあり。

村田豊成

四十二歳。大阪市に生れ、鹿兒島市東千石町九七に現住。醫師、醫學博士。昭和九年三月

アララギに入りてより作歌す。

村田 豊作 佐賀縣小城郡小城市に生れ、昭和十年八月七

十五歳にて歿す。醫師。明治二十一年東京帝大醫學部卒業。昭和三年八月アララギに入門。専ら齋藤茂吉氏の指導を受く。

村田 豊雄 三十四歳。山形縣飽海郡西平田村大字大宮に

生れ、札幌市北六條西一七ノ一に現住。北海道帝大工學部會計係。十八歳頃より作歌。昭和六年一月より潮音社友、また昭和十一年より「新壘」同人。

村田 榮子 四十三歳。大阪府泉北郡高石町羽衣に生れ、

同地に現住。明治四十五年藤村絮雲氏に舊派の歌を學ぶ。昭和五年「高嶺」に入社し今日に至る。

村田 チヨノ 五十六歳。福岡縣八女郡上妻村に生れ、鹿兒

島市東千石町九八に現住。元鹿兒島縣立第一高女教諭。昭和四年アララギ入社。

村田 菊水 三十八歳。青森縣に生れ、函館市外湯川町字

戸倉町二〇〇に現住。會社員。十二歳頃より作歌、窪田空穂氏に師事せしことあり。昭和六年心の花に轉じ函館支部を設立し、齋藤瀏氏に師事しつつ今日に至る。

村田 泉園 本名廣幸。明治四十一年三月八日、三重縣志摩郡磯部村大字穴川に生れ、岐阜市殿町二ノ

四に現住。小學校卒業後農業に従事、現在共同毛糸紡績株式會社職工。二十六歳より作歌、日本短歌、短歌研究、短歌祭に發表。

村田 光敬 號無去來。五十一歳。高知縣に生れ、東京市

大森區雪ヶ谷町石川臺に現住。東京電燈會社員。昭和八年頃より作歌。「青煙」の同人に列するも別に師を求めず。

村田 百合子 三十四歳。高知縣高岡郡壽原村壽原に生れ、

臺灣高雄市鹽埕町一ノ五に現住。少女の頃より作歌、昭和六年頃より數年「水鏡」によりしことあり。現在「海響」に發表す。

村田 珠子 埼玉縣比企郡玉川村に生れ、同地に現住。洋

畫家。中澤弘光氏、故山本森之助氏に洋畫を學ぶ。西條八十氏に師事、詩及短歌を研究す。同氏主宰「蠟人形」に據る。

村田 順子 東京市牛込區南椋町に生れ、同市豊島區目白

町二ノ一六〇〇村田祐治方に居住し、三十三歳にて歿す。初めアララギに入り、のち水鏡社に入る。

村田 末治 明治三十八年岩手縣盛岡市に生れ、北海道虻

田郡狩太に現住。郵便局事務員、村役場吏員を経て現在新聞記者。地方新聞の歌欄編輯の傍ら作歌、同人雜誌を發行し、昭和六年「自然」に入社、今日に至る。

村田 靜子 十五歳。兵庫縣明石市に生れ、東京市豊島區

長崎仲町一ノ二七三〇に現住。二三年前より折にふれて作歌すれど師なし。

村田 章一郎 本名鐘一郎。二十七歳。東京市芝に生れ、神奈

川縣茅ヶ崎町中海岸に現住。無職。十七歳の頃より作歌、昭和八年より山本雄一氏に師事。翌年三月「短歌街」に入社、今日に及ぶ。

村田 波江 鹿兒島市東千石町九八に生れ、同町九七に現

住。昭和九年一月アララギに入會。今日に至る。

村田 光烈 明治十八年三月十七日秋田縣平鹿郡淺舞町三

八五に生れ、長野縣下高井郡平穩村上林、小林方に現住。農業。新聲時代より作歌、大正二年前田夕暮氏の白日报社に入り「詩歌」同人となる。のち長く作歌を絶ち、昭和五年より再び作歌す。歌集「原始へ」若き日の思ひ出よりあり。

村田 憲一 五十歳。埼玉縣秩父郡野上村大字本野上に生

れ、同地に現住。醫師。昭和七年アララギに

入會、今日に至る。

村田りせ子 本名りせ。明治三十三年青森縣下北郡川内町大字鱒崎に生れ、滿洲國濱江省呼蘭南大同街參事官公館に現住。大正十年吉井勇氏の「太白」の社友となり、翌年十一月創作社に入社今日に至る。

村田孝子 三十九歳。兵庫縣飾磨郡糸引村東山に生れ、姫路市北條口一二九に現住。昭和八年より作歌、香蘭に入社して今日に及ぶ。

村田平三郎 大正二年九月二十九日奈良縣生駒郡片桐村に生れ、尼崎市西本町八ノ三二九藤本方に現住。鑄造工。昭和七年より「いぶき」に入り、龜山美明氏に師事して今日に及ぶ。

村中滋 通稱滋。三十二歳。山口縣玖珂郡灘村字保津に生れ、同地に現住。昭和六年以來病臥療養中。昭和七年以來村上廉氏に師事して作歌、現在「野菊」三晩鐘」に據る。

村野次郎 本姓田中。明治二十七年三月、東京府北多摩郡多摩村上染屋に生れ、東京市淀橋區角第二ノ九二に現住。輸出入商。「朱戀」に入り、「地上巡禮」烟草の花「アルス」等に作品を發表し、更に「日光」同人たり。現在「香蘭」を主宰す。

村松苦行林 本名正治。五十歳。新潟縣東頸城郡下保倉村菱田に現住。村長。作歌生活三十四年。高田中學時代相馬御風、會津八一兩氏の教を受け新詩社に屬す。早稻田文學、精神界、越後タイムス、木陰等に發表す。小川水明氏と「光陰」を出せしことあり。また歌誌「かろろ」「雪景」を出す。現在小川水明氏の「やまざくら」同人。

村松信郎 大正元年十月十五日、靜岡縣榛原郡勝間田村切山一三八〇に生れ、同地に現住。教員。昭和七年一月國民文學に入社、本居亮一氏、のち松村英一氏の指導を受け現在に至る。

村松鍾一 大正二年十月十日、靜岡縣小笠郡六郷村半濟に生れ、北海道虻田郡俱知安町に現住。中學教師。十七八歳の頃より作歌すれど何れの流派にも入らず、發表したることなし。

村本石雄 三十一歳。金澤市に生れ、石川縣鳳至郡輪島町に現住。小學校教員。第十臨教國漢科在學中鴻葉盛廣氏の指導を受け、後一時西出朝風氏に師事、口語歌を學びしことあるのみ。

村山勇 三十四歳。東京本所に生れ、臺灣臺北市錦町九二に現住。中學校國漢歴史科教員。大正十三年神宮皇學館入學、館内短歌會「五更」に

入會、昭和三年渡臺して現職につき臺北「あらたま」社に入社、今日に至る。なほ「嚴櫃」誌友。

村山英雄 二十七歳。千葉縣東葛飾郡下總中山町に生れ、仙臺市元寺小路鐵道官舎十一號に現住。鐵道員。昭和十年六月「多磨」短歌會創立に際し入會、今日に至る。

村山茂 三十一歳。佐賀縣唐津市に生れ、臺灣嘉義市に現住。臺灣銀行員。昭和七年國民文學に入社して今日に及ぶ。

村山俊太郎 筆名春山眞琴。明治三十八年、山形縣北村山郡山口村に生れ、山形市築地町三區二五に現住。小學校教員。はじめ結城哀草某氏に私淑して作歌、昭和四年前田夕暮氏の詩歌復活と同時に同氏の門に入り、自由律短歌に轉ず。一時中絶、昭和十二年より春山眞琴として詩歌に發表す。

村山きつよ 三十四歳。宮崎縣高鍋に生れ、同地に現住。産婆。大正十四年より潮音社友。

村山苦農 明治四十年一月十日、山形縣西村山郡柴橋村金谷一八五三に生れ、同一六九八に現住。農業。昭和六年一月より作歌、同志と柴橋短歌會を創立、機關誌「草の香」編輯に當る。故

380

大飼藤八郎氏に師事、後「草笛」に投じて國井直村氏に教を受く。

村山 清益 明治三十五年生。群馬縣群馬郡國府村東國分に現住。酒造業。越後柏崎にて相馬御風氏の指導を受く。現在群馬縣歌人協會員。

村山 楓葉 本名勝次。佐賀縣佐賀郡金立村に生れ、昭和三年十一月十五日佐世保市に歿す。白日社々友となり、後「ひのくに」に入る。

村山のぶ子 三十歳。長野市諏訪町に生れ、同市南縣町六三九に現住。二十二歳津田英學塾病氣退學。二十五歳秋より故川崎杜外氏に師事し國民文學社友となる。氏逝去後は松村英一氏に師事して今日に至る。

村山 忠 大正三十六歳。新潟縣佐渡郡河崎村に生れ、同郡兩津町に現住。眞宗僧侶。十六歳より作歌、「詩歌」社友たりしことあり。昭和四年藤川忠治氏の「歌と評論」創立、共に入社し現在に至る。昭和十一年迄號「秋葉」を使用。

村井 淑人 熊本市新屋敷町に生れ、昭和十二年二月八日歿す。行年三十。昭和十年一月水廻に入社。

村井 幽果 本名伊久馬。明治二十八年十一月二十日、愛媛縣喜多郡大洲町大字若宮一〇に生れ、同地

に現住。農業。明治四十三年中學一年頃より作歌、大正十年花田比露思氏に師事し「あけび」に發表して現在に至る。

村井 清臣 三十六歳。熊本市新屋敷町に生れ、熊本縣上

益城郡御船町瀧川に現住。會社員。昭和十一年四月水廻に入社、現在に至る。

村井 清楚 本名忍。盛岡に生れ、生ひ立つ。創作、常春により歌を學び、のち

横須賀市の諸新聞に歌を投じ、高橋優人氏の「菁藻」發刊さるるや之に加盟。昭和七年八月十二日歿す。享年三十一。

村井 潔子 本名靜子。四十一歳。大阪市西區綿屋町に生れ、東京市澁谷區永住町一四に現住。若き頃より作歌すれど師につかず。昭和七年三月常春に入る。

村井 せい 本姓松井。三十三歳。奈良縣北葛城郡五位堂村瓦口に生れ、大阪市住吉區山坂西之町二ノ二三に現住。女學校時代より作歌、昭和四年「比牟呂」に入會、傍ら夫村井義嗣に學ぶ。同六年より花田比露思氏の指導を受く。現在結社に屬せず。

村井 義嗣 奈良縣生駒郡平端村八條に生れ、昭和六年三十二歳にて歿す。奈良縣廳會計課勤務。大正

六年「しほさゝ」に入會、引續きその後身「あけび」會員となり終始花田比露思氏の指導を受く。歿後歌集「まほろば」刊行さる。

村尾 茂明 本名茂。二十八歳。山口縣吉敷郡秋穂村大字

秋穂東本郷に生れ、同地に現住。勞働者。二十二歳より作歌、新聞、雜誌等に投稿、二十四歳アララギに入會、現在に及ぶ。

村尾 清彦 本名清。三十一歳。山口縣吉敷郡秋穂村大字

秋穂東本郷に生れ、同地に現住。鍼灸醫。二十五歳より作歌、二十六歳短歌春秋、短歌研究に投稿、二十七歳アララギに入會、現在に及ぶ。

村岡 黑影 本名弘市。四十四歳。山形縣西村山郡溝延村

大字溝延六七〇に生れ、山形市香澄町字庚申堂六五一に現住。山形縣麻生山形縣警部。十七歳中學三年の頃より作歌、「秀才文壇」文章世界」等に投稿し、十八歳にて上京、明治大學政治經濟科に學び、前田夕暮氏に師事すること二十一年、白日社同人として「詩歌」に發表せり。

群山 伸 本名村山信一。四十一歳。京都府加佐郡舞鶴

町字松蔭に生れ、京都市山科安未南屋敷町に現住。小學校教員。昭和三年アララギに入會今日に至る。

紫野 野守 本名中野恭一郎。四十
九歳。東京市に生れ、

臺北市新起町三ノ九五に現住。大成殖産株式
會社取締役。早大商科卒業。十七歳の頃より
作歌、金子薫園氏の短歌研究會に入る。數年
にして中絶、四十歳頃臺灣にて再び作歌を始
む。現在相思樹同人。

室賀 文武 明治二年山口縣玖珂郡
麻里布町室木に生れ、

東京市大森區田園調布二ノ七五二に現住。無
職。大正の初頃より作歌すれど獨修。

室田 精次 三十一歳。北海道勇拂
郡苦小牧町西町二五に

現住。製紙工。昭和六年五月よりアララギ會
員となる。

室伏 秀平 明治三十四年四月一日
神奈川縣湯ヶ原町に生

れ、横濱市鶴見區鶴見町一五三九に現住。中
等教員。大正九年朝王樹に入り、次で馬場靜
浪氏の白珠同人となり現在多磨會會員。歌集
「車輪」あり。

室伏 健一 三十三歳。静岡縣田方
郡函南村田代五に生れ

同村間宮に現住。教員。十八歳頃より作歌、
諸雜誌短歌欄に投稿、のち東京日日新聞短歌
壇に投稿、一時中絶、多磨、創刊と共に入會
し、現在穂積忠氏に師事す。

室町 廣 本名室田廣三。三十二
歳。千葉縣香取郡小見

川町小見川一二に生れ、同地に現住。農業。
昭和三年七月敬禮入社、同十年十二月退社。

室井 弘志 大正二年二月九日、東
京市赤坂區青山南町二

ノ一三に生れ、同町三ノ四九に現住。洋品商。
作歌を始めて四年餘、歌誌あしかひの會員な
りしも同誌廢刊後何れにも屬せず。

めの部

日黒 信子 二十九歳。福島縣相馬
郡中村町袋町四九に生

れ、横濱市中區浦舟町四ノ六五同愛病院内に
現住。看護婦。昭和八年六月潮音入社。

目黒 草水 本名義勝。明治四十年
四月北海道釧路市に生

れ、同網走郡女滿別市街地に現住。公吏。十
九歳より作歌、昭和二年潮音に入社、なほ昭
和五年小田觀盛氏の「新藝」發刊と共に入り
て今日に至る。

目良 功 三十八歳。千葉縣夷隅
郡東海村釋迦谷に生れ

同地に現住。小學校教員。短歌に志してより
六年、山下陸奥氏に師事し現に一路同人。又
同志と「みみ短歌」を發刊す。

米良 たね 本名タ子。明治二十九
年一月二十日、北海道

岩内郡岩内町鷹臺に生れ、大阪市此花區西島
町九〇ノ一北港住宅二六〇ノ四に現住。會社
員。少女雜誌投書に始まり、敬禮社に入り今
日に至る。

武 飯 本名飯澤武夫。二十九
歳。富山縣下新川郡生

地町生地二九三に現住。料理人。昭和三年よ
り作歌、藻谷六郎氏に師事し、現在芦附社
友。

もの部

最上 隆雄 本名駒治郎。別名朱雀
歌彦、梢葉。明治三十

三年三月十五日、京都市新ノ町御池に生れ、
同市壬生町所ノ内三三に現住。呉服業。十八
歳頃より作歌、短歌雜誌に投稿、のち國民文
學、水松樹に入りりし一時歌より遠ざかり、
最近再び獨り作歌す。

藻谷 銀河 本名六郎。明治三十三
年十月十四日、富山縣

射水郡小杉町に生れ、富山市木町二〇に現住。
印刷業。大正六年頃より作歌、「抒情詩」に寄
せ、同七年「珊瑚礁」に入り、翌年「霸王樹」
創刊と同時に入社、今日に至る。心の花「日
本歌人」に寄稿せしことあり。歌集「仙人掌」

あり。

茂木 初枝

明治三十九年四月福岡縣田川郡に生れ、東京市芝區白金三光町二五一に現住。初め獨學、三四年前より柳原白蓮氏の指導を受け、ことたま社同人。

茂木 絢多

本名健太郎。二十四歳。北海道高島郡北祝津町に生れ、同虻田郡俱知安町に現住。郵便局員。小學校在學中受持教師の指導を受け、のち新聞雜誌等に投稿、昭和八年歌誌閃光の同人、昭和十一年新藝及び潮音社友となる。

持田 利雄

二十二歳。東京市神田區須田町一ノ七に生れ同地に現住。金物商。昭和十一年六月よりアララギに入會、今日に至る。

持田 勝穂

本名勝男。明治三十八年三月九日、福岡市上鬮町一四に生れ、同地に現住。酒商。大正十年より作歌、白鸞、ひのくに、詩歌、香蘭を經て、現在北原白秋氏に師事し、「多磨」會員。

望月 光

本名光男。明治十八年九月長野縣東筑摩郡島内村に生る。松本中學を経て東京美術學校に學びしが病みて退學す。伊藤左千夫氏の「馬醉木」に歌を授けその教を受く。明治四十四年一月二十五日歿す。享年二十七。

望月 久貴

大正二年八月六日、埼玉縣本庄町に生れ、東京市小石川區大塚窪町東京高師桐花寮國漢會室に現住。昭和九年東京高師入學と共に校内大塚短歌會々員となり、五味保義氏の指導を受け、十一年六月アララギに入會し、竹尾忠吉氏に師事して現在に及ぶ。

望月 れい子

明治二十六年四月、東京市京橋區墨町に生れ同市王子區稻付町五ノ一〇二五に現住。二十歳頃女子文壇に投書、河井醉茗氏に詩を學ぶ。のち中絶、昭和二年「潮音」に入社、七年退社、「短歌街」に入り、九年同誌を退き「七葉樹」を創刊、今日に至る。

元木 國雄

二十五歳。山形縣東村山郡千歲村長町に生れ同縣東置賜郡伊澤村館に現住。小學教師。山形師範在學中結城哀草果氏の指導を受く。

元坂 忠三郎

三十二歳。三重縣多氣郡川添村大字柳原に生れ、臺灣臺南州斗六郡斗六街大崙丸ト運送店出張所内に現住。運送業。昭和五年五月より國枝龍一氏に教を受け、「あらたま」に入社、のち平井二郎氏の選を受く。

元田 龍佐

六十三歳。大分縣杵築町に生れ、都城市八幡町三八六〇に現住。元教師。師につきたることなく、歌の會にも加はりたることなし。

元橋 俊彦

明治四十一年四月十日東京市豐島區巢鴨五ノ一〇九二に生れ、同地に現住。慶應大學卒業後專賣局官吏生活六年、現在會社員。大正十二年より作歌、昭和六年高崎在勤中上毛歌壇に關係、地方誌「山と川」創刊以來の同人たり。昭和十年「青垣」入社、現在に至る。

元吉 利義

本姓花崎。明治三十二年生。東京市杉並區荻窪一ノ二三に現住。會社員。大正九年同志と「曠野」を刊行、「林鐘」「青杉」「日光」等にも關與す。昭和三年「詩歌」復活と共に同人として參加し今日に至る。

本島 キク子

三十五歳。長崎縣西彼杵郡瀬戸町に生れ、東京市麴町區九段四ノ四北原方に現住。教師。作歌經歷といふほどのものなし。

本橋 静江

二十八歳。群馬縣新田郡敷塚本町大字大原乙一二五六に生れ、同縣勢多郡刀川尋高小學校に現住。小學校教員。昭和九年六月水甕に入社、安部忠三、上田英夫兩氏の選を受く。

本林 彌

明治三十六年四月十八日、富山縣射水郡作道村殿村に生れ、同地に現住。銀行員。大正十五年頃より作歌、昭和二年國民文學に入社、植松壽樹氏の選を受けて今日に至る。

本山石鳥

本名英一。四十一歳。長崎市に生れ、上海施

高峯路大陸新館一九號に現住。貿易商。大正四年夏より作歌、大正八年長崎にて「アコウ」に入會、大正十四年「アララギ」に入會、現在に至る。

本井ひさ子

三十歳。京都府峰山町に生れ、同府網野町に

現住。小學校教員。歌誌「山柿」同人。

本居 亮一

本姓本告。明治二十三年五月十九日、佐賀縣

杵島郡須古村に生れ、静岡市東草深町一ノ二五に現住。早稻田大學高等師範部卒業、静岡中學校教師。夙く窪田空穂氏に師事し、國民文學同人。歌集「吾水」あり。

許山 茂隆

明治二十三年十一月十日、山梨縣東八代郡

増田村に生れ、甲府市春日町二四に現住。醫師、胃腸病院長。國民文學社友として昭和二年以來松村英一氏に師事す。

物河 鈴子

本姓村岡。四十五歳。

山形市香澄町字庚申堂に生れ、同地に現住。十六歳より女學世界、文章世界、處女、青踏等の雜誌に投書、のち地方の新聞雜誌に發表す。

榎山みゑ子

二十九歳。桐生市新宿

通二ノ三九八に生れ、同地に現住。昭和二年十月「霸王樹」入社、

白井大翼、奥貫信盈兩氏に師事して今日に至る。

門間 春雄

明治二十三年二月九日

生る。早稻田大學中途退學。二十歳前後より作歌、長塚節氏に交り、次でアララギ諸同人と交る。大正八年二月十三日歿す。享年三十三歳。齋藤茂吉氏編「門間春雄歌集」あり。

桃北 好澄

大正四年三月二十日、

院村に生れ、滿洲國新京永樂町四ノ一錦ビルに現住。新京日日新聞社整理部員。昭和九年水廻に入り、尾上柴舟氏の選で受け今日に至る。

桃澤 虎雄

五十歳。長野縣上伊那

南岡村に現住。農業。大正十年前後國民文學の誌友たりしも、其後作歌中絶。

百瀬 百代

明治三十八年臺灣に生

れ、京城府青葉町一ノ三三に現住。大正十一年ポトナム創刊と共に入社し、佐藤夢見草の名にて出詠、翌年百瀬千尋に嫁し、ポトナム同人として今日に至る。

百瀬 達子

二十七歳。長野縣東筑

摩郡島立村九三六に生れ、同地に現住。小學校訓導。昭和九年アララギ短歌會に入會し今日に及ぶ。

百瀬 元通

二十五歳。長野縣東筑

摩郡波田村三溝に生れ同地に現住。農業。十二歳より山河社の南山紫月氏に學ぶ。のち新聞雜誌に投書、昭和十一年山河休刊、郷土文藝誌「筑摩野」創刊編輯、五號にてやむ。昭和十二年潮音その他の社友たりしことあり。現在無所屬。

百瀬 千尋

明治三十年八月三十日

熊本市坪井黒髮町に生れ、京城府青葉町一ノ三三に現住。朝鮮總督府官吏。十二歳歳の頃アララギにて島木赤彦氏の指導を受く。大正十一年四月小泉荃三氏とポトナムを創刊して今日に及ぶ。また多磨會員。著書に歌集「銀嶺」「鐘路風景」「火田」のほか諺文朝鮮童謡選集、和文朝鮮童謡集、童謡朝鮮、其他あり。

百田 宗治

明治二十六年一月二十

五日大阪市に生れ、東京市中野區小窪町三一に現住。作歌經歷といふほどのものなし。年少二十歳以前に詠めるもの百餘首を數ふるのみにて、當時は尾上柴舟氏を師としてひそかに念じたり。爾後作歌せず。

守 すがる

明治三十三年東京市日

本橋區濱町三ノ一に生れ、同地に現住。結婚後數年にして生家に戻り生花教授の傍ら喫茶店を営む。柳原白蓮氏に師事す。

守時 高樹 四十二歳。岡山縣和氣郡片上町西片上一二七六に生れ、同地に現住。昭和五年六月蒼穹に入社、現在に至る。

守永 愛子 本名アイコ。三十八歳。京城府永登浦に生れ、同府大島町三二に現住。昭和六年二月よりアララギ會員となり今日に及ぶ。アララギ誌上名ノ江桂。

守部 市美 明治三十六年七月一日宮崎縣兒湯郡木城村大字高城に生れ、東京市蒲田區女塚町二四五に現住。二十歳頃より作歌、日向の越智溪水、湯淺文雄、黒木傳松の諸氏に學ぶ。現在「山柿」同人。

守屋 重二 二十三歳。埼玉縣秩父郡久那村三六に生れ、同郡吉田町大字下吉田六一〇に現住。通信事務員。「水穂」に關係す。

守谷 富太郎 六十三歳。山形縣南村山郡堀田村字金瓶に生れ、北海道中川郡中川村字志文内に現住。醫師。日清戰役後、臺灣守備に赴きてより作歌、日露戰役にも従軍、その後アララギ會員となる。

守分 準一 明治二十二年十月岡山縣玉島町に生れ。小學校長。昭和五年相馬御風氏の木蔭に入り指導を受け今日に至る。

森 三樹雄 三十七歳。大津市に生れ、同市膳所本町二二三に現住。銀行員。大正四年頃より作歌、大正五年前田夕暮氏の白日社に入社、大正七年十月「詩歌」の休刊にあひ、大正八年五月尾山篤二郎氏の「自然」創刊と共に入社す。昭和四年十一月尾山氏主宰にて京都より「青海原」を編輯發行、昭和六年十月「自然」に合流、同八年四月より發行所を京都に移し、その編輯を擔當して今日に至る。

森 光義 明治二十三年一月三十日、新潟縣新發田町に生れ、中華民國山東省青島市夏津路九號に現住。鐵道省事務官。昭和七年一月竹柏會入會。佐佐木信綱博士、石埴千亦氏、伊藤嘉夫氏の指導を受く。同九年歌集「青島集」刊行。

森 小一 三十歳。愛知縣中島郡萩原町大字花井方に生れ、同地に現住。農業。二十歳頃より作歌、「水穂」に加入せしことあり。其後新聞雜誌等に投稿、現在「土の香」會員。

森 勇 三十五歳。長野縣上水内郡芋井村大字廣瀬一四九に生れ、長野市南石堂町六五に現住。小學教員。大正八年信濃毎日新聞歌壇に投稿、太田水穂、若山牧水兩氏の選を受く。大正十三年山岸經峯氏等と歌誌「富士之塔」を發行す。昭和二年潮音に入社、現在に至る。

森 無明 本名廣野武。明治三十七年生。神戸市林田區七年生。官吏。大正末期「日光」に投稿、現在神戸の「六甲」に出詠中。

森 秀雄 明治三十一年八月、佐賀縣杵島郡中通村犬走に生れ、新潟縣南蒲原郡羽生田に現住。教員。歌は十七歳頃よりはじめ、新潮、文章俱樂部（前身新文壇）等にて金子薫國氏の指導を受く。後、中島哀浪氏の「ひのくに」に教へを受けしことあり。現在無所屬。

森 暉雄 四十五歳。東京市赤坂區一ツ木町に生れ、同市杉並區阿佐ヶ谷二ノ六一八に現住。會社員。昭和六年四月「歌と觀照」に入り、岡山巖氏の指導をうけて今日に至る。

森 治三郎 四十歳。宮城縣伊具郡荒川區町屋一丁目に現住。機關新聞社員。昭和二年短歌雜誌社友、昭和十年より國民文學社友。

森 美禰子 舊姓天野。二十七歳。名古屋市東區主税町に生れ、横濱市中區蒔田町一七五に現住。女學校入學の頃より作歌、昭和五年アララギ入會。土屋文明氏の教を受けつつ今日に至る。霧島れい子の名を用ひしことあり。

森 三郎 三十六歳。三重縣三重郡羽津村字別名に生れ

同地に現住。商業。大正十年國民文學入社、松村英一氏に師事、昭和九年退社、現在無所屬。

森 快逸 本名快圓。明治三十八年七月九日、徳島縣板野郡住吉村字住吉に生れ、横濱市中區西中町一ノノ普門院に現住。眞言宗僧侶。昭和七年高野山在學中アララギに入會し今日に至る。

森 白崖 本名立名。明治二十二年十一月鹿兒島縣川邊郡坊之津に生れ、大阪府吹田町に現住。會社員。十五歳より作歌、中學四年「半夏草社」を、長崎高商時代「長虹歌會」を組織す。新聲、珊瑚礁、霸王樹、海松、ワカクサ、都會藝術、芽生等に關係し、大正九年秋吉井勇、西村醉香兩氏と「太白」を創刊す。

森 光丸 三十一歳。福岡縣八女郡北川内村生駒野に生れ、熊本縣菊池郡合志村御代志に現住。農。大正十五年より作歌、昭和三年「水鏡」に入社、昭和七年一月アララギに入會、今日に及ぶ。

森 憲二 二十八歳。朝鮮群山府に生る。作歌經歷といふほどのものなし。

森 精太 三十二歳。三重縣桑名郡城南村大字安永五七四に生れ、同一七二に現住。タオル製造業。大正十三年頃より作歌、名古屋新聞歌壇に太田水穂氏の選をうけ、後費く「短歌」に屬す。昭和六年「金雀枝」入社、現在に至る。別に潮音社友。

森 二郎 四十六歳。松本市外壽村に生る。教員。常春同人。

森 繁夫 明治十五年東京に生れ、大阪市西成區粉濱東之町三ノ一二に現住。會社員。二十歳頃より作歌、二三年後金子薫園氏の門に入る。大正六年歌集「流れ」刊行。

森 川久 二十歳。千葉縣長生郡豊岡村粟生野に生れ、同地に現住。小學校教員。作歌經歷といふほどのものなし。

森 川秀子 二十六歳。山口縣阿武郡小川村に生れ、同地に現住。萩高女時代教師黒岩信子氏の指導を受け、二十二歳頃より時折新聞雜誌に投稿、田澤景忠氏に約一年添削を受け、また「冬柏」にて與謝野晶子氏の添削を受けしことあり。地方誌「水可美」社友たりしも退き、昭和十一年二月潮音に入社、今日に至る。

森 川 すみ 本名堀江澄。二十七歳。高知市南與力町二二に生れ、神戸市灘區福住通三ノ一五ノ三に現住。昭和八年「六甲」會員となり、同十一年五月「遠つびと」に入會、現在に及ぶ。

森 川 眞砂美 本名森合正美。二十七歳。福島縣安積郡永盛村大字笹川字篠川一五に生れ、同地に現住。農業。公民學校卒業と同時に文藝誌「反響」の會員となり、郡山短歌會々員。

森 木 虎喜 高知縣吾川郡伊野町に生れ、高知市南新町二丁目二に現住。竹細工師。六年前より作歌す。師なし。

森 下 豊 二十三歳。和歌山縣有原に生れ、和歌山市新通七丁目中六藥局内に現住。藥種商。二年前より作歌、香蘭、紀伊短歌社友。

森 嶋 忠雄 明治四十四年二月十九日大阪に生れ、沖繩縣那覇市久米町一ノ三三に現住。小學校教員。昭和四年より八年まで國學院大學高師部在學中釋道空氏の指導を受く。

森 田 和夫 二十七歳。長野縣下伊那郡河野村に生れ、東京市本所區東駒形四ノ一五に現住。公吏。十七歳頃より作歌、のち橄欖社友となり、三年

餘にして中止、後上京、現在は獨り作歌す。

森田みつ子

本名光子。三十二歳。金澤市材木町三ノ六に

生れ、同町六ノ七に現住。金澤醫大病院營養部勤務。二十歳前後より作歌、昭和八年八月歌誌「閑古鳥」に入社し現在に至る。

森田 虎雄

三十七歳。愛媛縣宇和島市に生れ、廣島縣瀨

品郡府中町出口に現住。中等教員。二十歳頃より作歌、はじめ讀賣歌壇に投稿、のち霸王樹に入り、橋田東聲氏の指導を受けしも暫くにして中絶、昭和四年復活、現在に及ぶ。

森田 桂吾

三十四歳。神戸市に生れ、同市灘區瀧田町三

ノ一〇に現住。神戸モロツツ製菓株式會社技師。昭和九年歌と觀照社に入社、今日に至る。

森田 京二

本名京治。二十八歳。東京府南多摩郡由井村

片倉に生れ、八王子市臺町一七八に現住。官吏。昭和七年七月アララギ入會、昭和九年十二月退會、昭和七年十二月鈴木金二氏中心の八王子短歌創刊と同時に同人となり現在に至る。

森田まつ子

本名まつえ。二十四歳。兵庫縣多紀郡畑村に生

れ、東京市世田谷區祖師谷二丁目に現住。帝國女子専門國文科時代岡麓氏の指導を受く。

現在「ごぎやう」社友。

森田 馨造

本名良正。四十歳。廣島縣深安郡山野村に生

れ、臺灣新竹州新竹市旭町に現住。官吏。國文學社友。

森田 佐一郎

明治二十七年八月京都

區中野町四八に現住。東京帝大佛法科卒業、十五銀行員。大正四年より作歌、詩歌社友となり前田夕暮氏の指導を受けしが廢刊に遭ひ大正九年地上社に入り、國歌、白禱を経て現在地上社同人として窪田空穂、對馬完治兩氏に師事す。歌集「食卓」の著あり。

森田 梅子

明治四十年六月三十日

東京府西多摩郡平井村字千石に生れ、東京市淺草區松葉町九二に現住。雜誌社事務員。昭和八年十二月より山本雄一氏の指導を受く。同十年一月短歌街に入社、現在に至る。

森田 曠平

二十三歳。京都市に生

れ、同市左京區松ヶ崎正田町二〇に現住。生來病弱にて畫筆に親しむ。三年前より作歌、昭和十一年水麴に入社して今日に至る。

森田 三千三

二十八歳。岐阜縣吉城

郡上寶村宮原に生る。農業。小學卒業頃より作歌、同志と「山麓社」を組織して今日に至る。

森田 夢の秋

明治三十年三月五日、茨城縣稻敷郡八原村に

生れ、同地に現住。農村產業組合長。十七歳より作歌、初め故横瀨夜雨氏の門に入り、のち故古泉千樞氏の教を受く。現在「山柿」の同人。著書に童謡集「千本松原」夢くぼり、歌集「やままゆ」あり。

森高德次郎

明治三十五年五月十五

日、長崎縣西彼杵郡茂木町千々名に生る。三菱長崎造船所員。大正九年より作歌、奏皮、青垣を経て昭和十一年多磨に入會、現在に至る。

森路 勿平

本名寬。四十四歳。長

崎市に生れ、同市城山町北四條一二に現住。醫師。大正六年より齋藤茂吉氏に師事し、アララギに屬す。

森中 二郎

三十一歳。三重縣名賀

郡古山村に生れ、同郡花垣村に現住。農業。大正十五年水麴に入社し、故石井直三郎、松田常憲兩氏に師事、現在に至る。

森永 忠子

二十六歳。熊本縣阿蘇

郡坂梨村に生れ、大阪府中河内郡南高安村恩智、松村方に現住。地上社に籍をおき、川島國子氏の指導を受く。

森野 子郊

明治三十六年四月二十

七日、岡山縣日比町和田に生れ、同地に現住。銀行員。昭和四年一

月香蘭入社、村野次郎氏の指導を受く。昭和五六年頃郷里にて夕浪會を組織せし事あり。昭和十年五月多磨創刊と同時に會員となり今日に至る。

森本 田鶴子

神奈川縣小田原町に生れ、大正十二年渡米、

4755 W. Washington Blvd., Los Angeles California に現住。食料品店經營。昭和五年國民文學に入社、今日に至る。

森本 三郎

市安岡町九三に生れ、

東京市本郷區弓町二ノ一春日方に現住。三井生命本店營業部員。東京帝大法學部在學中より、本名又は川上泉の名にて「短歌研究」讀者短歌に應募。

森本 忠

三十六歳。熊本市春日町に生れ、東京市杉並

區馬橋三ノ四三五に現住。東京朝日新聞社々員。熊本歌話會雜誌、龍燈同人たりしことあり。著書に翻譯書二三あり。

森本 光友

二十五歳。大阪府南河内郡加賀田村大字石佛

に生る。昭和七年四月神宮皇學館に入學、歌會「五更」に入會す。昭和九年十月村野次郎氏主宰の「香蘭」に入會、現在に至る。

森本 治吉

明治三十三年一月十日熊本市新町三ノ二に生

れ、東京市杉並區天沼二ノ五六七に現住。二

松學舎、東洋大學、日本大學等に教授及講師。大正七年中學卒業頃作歌、大正八年五高入學アララギに入會、昭和二年まで島木赤彦氏に師事、同年より齋藤茂吉氏に師事し現在に至る。

森谷 繁

明治四十二年三月、山形縣西村山郡高松村大

字八鍬に生れ、同地に現住。小學校教員。結社に屬したることなく、又發表せしこともなし。

森山 伊三

二十八歳。福島縣耶麻郡翁島村字三本木に生

れ、同郡磐梯村大寺會津共働社内に現住。日用品雜貨小賣業。少年時代より作歌、師なく結社に加入せず。

森山 縫子

三十六歳。三重縣津市

二四七に現住。潮音社友。弘前市桔梗町二四七に現住。中等教員。潮音社同人。

森山 謙一郎

三十七歳。長野縣諏訪郡落合村に生れ、弘前

市上諏訪町湖柳町に現住。アララギ第七卷より投稿、島木赤彦氏の指導を受け、その逝去と共に作歌中止、のち昭和七年より再び作歌し齋藤茂吉氏の選を受け今日に至る。

森山 よしの

四十八歳。長野縣諏訪郡本郷村に生れ、同郡

上諏訪町湖柳町に現住。アララギ第七卷より投稿、島木赤彦氏の指導を受け、その逝去と共に作歌中止、のち昭和七年より再び作歌し齋藤茂吉氏の選を受け今日に至る。

森山 寒木

本名松吉。四十六歳。島根縣大原郡加茂町五

〇六に生れ、松江市内中原町二三三に現住。公立實業學校書記。明治四十一年夏より作歌數回小歌誌を主宰、一時詩歌、自然、國民文學に加はりしことあり。歌集「萱の穂」昭和八年刊）あり。

森山 汀川

五十九歳。長野縣諏訪郡落合村神代に生れ、

同縣上諏訪町湖柳町に現住。小學校教員。年少より作歌、伊藤左千夫、島木赤彦、齋藤茂吉氏に師事、現在アララギ同人。歌集「峠路」あり。

森脇 千里

明治三十八年北海道石狩國に生れ、門司市上

本町一丁目目現住。海運業會社勤務。中學時代東京「不二之舎歌會」の教を受けしことあり。

森脇 一夫

明治四十年五月十日、米領ハワイ、カワイ島

に生れ、東京市小石川區第六天町四一に現住。豐島師範、日本大學文科、東京高師研究科に學ぶ。教員。昭和三年一月「ぬはり」に入會、菊池知勇、和田山蘭、高鹽背山諸氏の指導を受け今日に至る。

森脇 俊夫

二十九歳。和歌山縣那賀郡中野上村野上中に

生れ、同地に現住。教員。十九歳水壘社に入

り、二十二歳アララギに轉じ、同年また「自然」に加盟す。昭和六年「曼陀羅」創刊と同時に加はりて今日に至る。

森尾新 一 不明。

森岡三智子 三十九歳。東京市神田區仲町に生れ、同市大森區新井宿二ノ一七三二に現住。昭和十一年一月創作に入社してより作歌、若山喜志子氏に師事して今日に至る。

盛壽 明治二十五年六月十九日、青森縣八戸市大字湊町字濱須賀に生れ、同市外館村大字八幡に現住。明治小學校長。大正九年より奥南歌壇、八戸菊園會、紅詩社、東奥歌壇に加はり、「くれなゐ」の「歌聖」「蒼朮」同人となる。「國民文學」「白鸞」「國歌」其他に投稿、大正十年八月對馬完治氏の地上社に入社し今日に及ぶ。また歌誌「美籠」の同人。

盛田武男 三十歳。鹿兒島縣日置郡伊集院町字郡に生れ、新宮特別市長慶街神泉胡同二三ノ三に現住。滿洲電信電話株式會社員。昭和七年アララギ入會、現在に至る。

諸崎清二 本名佐藤猛雄。明治四十年一月五日、宮城縣桃生郡十五濱村明神二〇に生れ、仙臺市五十人町八四に現住。教員。昭和十年十二月アラ

ラギに入會、土屋文明氏の指導を受く。

諸星利作 三十歳。神奈川縣足柄上郡南足柄村字狩野に生れ、川崎市渡田町九八二に現住。教員。中學時代より作歌、昭和四年香蘭詩社に入り一時退社、九年十月再入社して現在に至る。

兩角春雄 二十七歳。長野縣東筑摩郡中川村二六六に生れ、東京市蒲田區女塚町六二一喜屋中谷商店に現住。店員。昭和八年一月より「科野」により、中村松花氏の指導を受け、昭和十年五月同誌廢刊後作歌より遠ざかる。

兩角朋幸 四十一歳。長野縣北佐久郡本牧村大字茂田井に生れ、同地に現住。農業。土岐善曆氏選時代の「文章世界」歌壇に投稿、回響雜誌發行、數種の同人雜誌に關係、大正十年秋より「創作」に入り、「短歌雜誌」を経て西村陽吉氏の「藝術と自由」創刊より入り口語歌を始む。其後は獨立獨歩。

兩角七美雄 四十五歳。長野縣諏訪郡豊平村御作田に生れ、元農業、現在小學校教員。東京日日新聞の伊藤左千夫氏選、萬朝報の與謝野晶子氏選、文章世界、生活と藝術の土岐哀果氏選等の時代を経てアララギに入り、島木赤彦、齋藤茂吉、釋道空、岡麓、土屋文明諸氏の教導をうけて今日に至る。

師岡鶴榮 明治十四年六月二十九日大阪に生れ、東京市杉並區永福町四四一に現住。中之島高女に學び、山田あつ子氏の指導を受く。

やの部 (一)

八木錠一 明治二十二年四月二日東京市本所區綠町に生れ、同市瀧野川區西ヶ原町九四七に現住。官廳雇員。明治四十二年初めて萬朝報歌壇に投稿、大正五年十二月創作社友となり今日に至る。

八木富子 二十三歳。福井縣敦賀市に生れ、京都市右京區山之内宮脇町二二に現住。昭和十年八月山柿會に入會、現在に及ぶ。

八木下芳春 本名祐治。三十五歳。東京市下谷區入谷町に生れ、東京府下立川町二七二に現住。洋服商。ぬはり同人、和田山蘭氏に師事す。

八木沼丈夫 四十三歳。福島縣東白川郡常豐村に生れ、奉天白菊町六に現住。滿鐵參事。昭和四年五月より「滿洲短歌」を主宰し今日に至る。なほ昭和五年十月より齋藤茂吉氏に師事す。

八幡香秋 本名池田長治。三十一歳。群馬縣佐波郡赤堀

村香林中乙七三五に生れ、東京市荒川區日暮里町九ノ一〇に現住。講談社員。昭和五年頃より作歌、創作、水麴に發表、のち中絶、現在藤浪會會員。

八幡 富美

二十四歳。新潟市本町通六番町一一一に生れ、同地に現住。昭和十一年八月橄欖社に入社、現在に及ぶ。

鹽山フサ。二十八歳。京都府綴喜郡八幡町に生れ、昭和八年七月潮音社に入社、現在に及ぶ。

八幡 ふさ

丹波福知山に生れ、京都市中京區平町一に現住。臥橋と號し谷口香嶠氏門にて歴史風俗畫を研究。歌は嘗て數年間橄欖に屬せしことあるのみ。

夜久虎之助

本名三代市。別號知秋庵、機鸞、三千夫。明治二十三年八月三日、長野縣北安曇郡七貴村鶴山に生れ、松本市南土井尻町六四に現住。松本美術社光雲堂書畫店。太田水穂氏門下。

矢口 奇風城

明治四十二年二月二十七日生。東京市江戸川區小岩町五ノ二一〇に現住。松屋淺草支店員。大正十三年光入社、翌年退社、昭和三年吾妹入社、同五年退社、同年自然入社、同六年須藤克三氏等と梅檀を創刊す。

矢崎 一郎

本名作平。明治十七年一月十三日、山梨縣東八代郡永井村に生れ、米國加州ロスアンゼルス市西三七街一三三三に現住。日本メソヂスト教會退隱牧師、元太平洋雜誌社長、現オクシデンタル生命保險會社員。青山學院、早稻田大學法科卒業。昭和元年頃より作歌、昭和十二年一月より加州毎日新聞歌壇選者高柳沙水氏の指導を受け、同年四月より「橄欖」に加盟し、吉植庄亮氏に師事して今日に及ぶ。

矢崎 天洋

丹波篠山に生れ、大阪市此花區玉川町一ノ四七に現住。七歳より作歌、父及中村良顯氏に師事す。兩師歿後新詩社に入りしことあり。歌集三冊を出ししことあれど、のち作風一轉、作品は「あけび」「阿迦雲」等に發表し來れり。

矢澤 孝子

本名正一。二十七歳。新潟縣古志郡栃尾町大字栃尾に生れ、同地に現住。桐村下駄製造職工。昭和十二年二月より「ポトナム」に入社。

矢島 歡一

四十一歳。静岡市に生れ、東京市品川區大井伊藤町五七七九に現住。會社員。はじめ西村陽吉氏と知り生活派短歌を唱導、のち「短歌雜誌」編輯に加はり、「詩歌」復活するに及び白日社同人となり、新短歌に轉じて今日に至る。著書に歌集「疾風」「山歸來」、編著「昭和一萬歌集」其他あり。

矢野 誠

本名龜廣。明治二十二年三月十一日、千葉縣夷隅郡東村長志に生れ、東京市麴町區上二番町三に現住。辯護士。大正元年九月前田夕暮氏の白日社に入社し、同人として今日に至る。大正十三年「日光」創刊に際し同人として加入、昭和三年九月新興歌人聯盟、昭和四年七月プロレタリア歌人同盟に加入せしことあり。大正四年以來口語による表現をとり、現に自由律現代語歌制作。著書に歌集「一隅より」共著「啄木短歌評釋」あり。

矢野 幹愛

明治二十一年山口縣萩市に生る。山口師範卒業後小學校、中學校に教鞭をとり、大正十五年年初秋病を得て職を退き、昭和二年四十歳にして歿す。歌は少年時より嗜み、一時アララギに入りしことあり。

矢野 千春

本名春雄。二十九歳。北海道雨龍郡一已村に

矢田部 穂柄

明治三十五年静岡縣田方郡三島町宮に生れ、同地に現住。中等學校教員。故豊島逃水氏に學び、その主宰する「山河」に據る。氏歿後同誌休刊、豊島晃氏の歌誌「美穂」と合併し同誌同人となる。同誌廢刊後大岡博氏其他と歌誌「菩提樹」を發刊、今日に至る。

矢野 幹愛

明治二十一年山口縣萩市に生る。山口師範卒業後小學校、中學校に教鞭をとり、大正十五年年初秋病を得て職を退き、昭和二年四十歳にして歿す。歌は少年時より嗜み、一時アララギに入りしことあり。

矢野 千春

本名春雄。二十九歳。北海道雨龍郡一已村に

矢野 誠

本名龜廣。明治二十二年三月十一日、千葉縣夷隅郡東村長志に生れ、東京市麴町區上二番町三に現住。辯護士。大正元年九月前田夕暮氏の白日社に入社し、同人として今日に至る。大正十三年「日光」創刊に際し同人として加入、昭和三年九月新興歌人聯盟、昭和四年七月プロレタリア歌人同盟に加入せしことあり。大正四年以來口語による表現をとり、現に自由律現代語歌制作。著書に歌集「一隅より」共著「啄木短歌評釋」あり。

矢野 幹愛

明治二十一年山口縣萩市に生る。山口師範卒業後小學校、中學校に教鞭をとり、大正十五年年初秋病を得て職を退き、昭和二年四十歳にして歿す。歌は少年時より嗜み、一時アララギに入りしことあり。

矢野 千春

本名春雄。二十九歳。北海道雨龍郡一已村に

矢野 誠

本名龜廣。明治二十二年三月十一日、千葉縣夷隅郡東村長志に生れ、東京市麴町區上二番町三に現住。辯護士。大正元年九月前田夕暮氏の白日社に入社し、同人として今日に至る。大正十三年「日光」創刊に際し同人として加入、昭和三年九月新興歌人聯盟、昭和四年七月プロレタリア歌人同盟に加入せしことあり。大正四年以來口語による表現をとり、現に自由律現代語歌制作。著書に歌集「一隅より」共著「啄木短歌評釋」あり。

矢野 誠

本名龜廣。明治二十二年三月十一日、千葉縣夷隅郡東村長志に生れ、東京市麴町區上二番町三に現住。辯護士。大正元年九月前田夕暮氏の白日社に入社し、同人として今日に至る。大正十三年「日光」創刊に際し同人として加入、昭和三年九月新興歌人聯盟、昭和四年七月プロレタリア歌人同盟に加入せしことあり。大正四年以來口語による表現をとり、現に自由律現代語歌制作。著書に歌集「一隅より」共著「啄木短歌評釋」あり。

生れ、同地に現住。小學校教員。十五歳より作歌、故若山牧水氏に師事す。昭和二年草笛詩社に入社、昭和五年北海道新人短歌協會入會、昭和十年蒔吟社同人。

矢野 君枝

二十歳。大阪市に生れ、神戸市林田區四番町一ノ七七に現住。神港女子商業學校短歌會にて作歌、岡野直七郎氏に師事し蒼蒼社に入社、現在に至る。

矢野 柳香

本名花子。三十七歳。大阪市に生れ、同市天王寺區上本町五ノ一光明寺内に現住。昭和七年秋頃より作歌、爾來婦人公論、短歌研究の選歌欄にて釋道空氏の教を受けつつあり。

矢野 誠一郎

二十六歳。大阪市に生れ、堺市八幡通二ノ一に現住。昭和五年以來病臥。昭和八年頃より作歌、同年一月「やまぶき」に入社、十二年三月退社。また昭和十年十月水麴入社、現在に至る。

矢野 平次郎

三十八歳。熊本市外平山村に生れ、別府市田ノ湯區に現住。初め獨學、二十三歳頃より別府移住と共に淺利良道氏の指導を受く。

矢萩 直作

五十一歳。山形縣北村山郡西郷村大字名取に生れ、北海道天鹽國上川郡劍淵村一四線に現住。農業。

矢吹 正衛

明治三十九年四月二十三日、福島縣田村郡七郷村門澤に生れ、同地に現住。農業。大正十二年頃より作歌「短歌雜誌」に據り松村英一氏の指導を受く。夕秋と號せしことあり。のち昭和六年四月「歌と觀照」創刊と同時に入社し現在に至る。地方歌誌「やまぐに」を主宰す。歌集「山國」あり。

矢船 婦美枝

和歌山縣海草郡紀三井寺村字三葛に生れ、大正十一年十二月三十一日歿す。行年二十五。醫師妻。大正六七年頃水麴に入社。

矢部 道氣

號六齋。明治二十二年十月十八日、千葉縣山武郡陸岡村横田に生れ、東京市澁谷區田每町一三に現住。劍道教師。常春同人。歌集「白空木」あり。

矢部 善一郎

明治三十七年一月二十七年十月十九日歿す。昭和二年「ぬはり」創刊と同時に入社す。歌集「若木櫻」あり。

矢部 甚一郎

二十七歳。福島縣會津本郷町に生れ、同縣喜多方町三ノ四八三三に現住。商業。昭和二年頃より作歌、昭和五年アララギ入會、土屋文明氏の指導を受け現在に至る。

屋代 温

本名鈴木幸一。二十九歳。東京市本所柳島に

生れ、同市向島區吾嬬町西五ノ四〇に現住。教師。昭和四年友人と詩歌誌「小徑」發刊、作歌に入る。同年九月アララギ入會、同七年末作歌中絶退會、九年再び作歌、「現實短歌」創刊に加盟、今日に至る。

谷田 川優

本名ゆふ。四十八歳。茨城縣行方郡麻生町に生れ、東京市澁谷區八幡通三ノ二二光月莊内に現住。東京市雇。小學時代より歌を好み、昭和六年夏「常春」に入り現在に及ぶ。

谷田 部謙

本名謙之丞。明治二十七年十二月二十三日、茨城縣筑波山麓に生れ、東京市本郷區駒込町一三に現住。小學校教員。茨城師範在學中横瀨夜雨氏の門に入り「木星」に作品を發表して作歌を始む。のち「あかつき」を興し今日に至る。

館 一 郎

五十六歳。石川縣鳳至郡西保村字大澤寶來町一七五に生れ、大阪市住吉區田邊東ノ町六ノ一三に現住。會社員。作歌經歷といふほどのものなし。

安房 子

四十一歳。茨城縣東茨城郡上大野村東大野に生れ、同縣那珂郡川田村小學校住宅に現住。大正十四年頃より作歌、初めは口語歌を作り昭和五年常春に加入、山柿創刊と共に之に入りて今日に至る。

安江 潔 本名清。三十四歳。岐阜縣惠那郡加子母村に生れ、同地に現住。農業。「國民文學」に在籍二年、大正八年名古屋「短歌」に入社、三年にして中絶、その間歌誌「旅人」發行。

安江 不空 本名康。眞鐵とも。明治十五年京都府伏見稻荷山麓に生れ、大阪市西成區粉濱東之町四幣垣方に現住。富岡鐵齋翁に書畫道の要旨を受く。舊日本美術院研究部員。正岡子規氏の根岸短歌會創始頃の同人たり。その後香取秀眞氏等の「子規庵歌會」に關係す。

安川 圭一郎 三十歳。朝鮮京城府新町一二に生れ、同町四に現住。昭和四年以來京城の「久木」短歌會によりて今日に至る。

安川 孝次 高岡市百姓町に生れ、四歳にて歿す。銀行員。昭和初年より水響詩歌、蓮の實其他に發表せしことあり。

安田 欣平 三十五歳。神奈川縣高座郡澁谷村長後一五一二に生れ、同村高倉六五〇に現住。公吏。大正十五年七月常春誌友となり。並木秋人氏に師事し、昭和九年三月「現實短歌」創刊と共に同人として現在に至る。

安田 佐和乃 四十一歳。兵庫縣宍粟郡西谷村に生れ、大阪府豊中市新免七五七ノ一に現住。昭和四年水響に入る。歌集「鹿澤の家」あり。

安田 章生 二十二歳。兵庫縣揖保郡石海村吉福四七四に生れ、大阪府豊中市新免七五七ノ一に現住。昭和九年七月より十年九月まで歌誌「六甲」にあり、現在竹柏會々員。十一年四月歌集雲に描く。刊行。

安田 昌子 三十三歳。熊本市南千反畑四一に生れ、横濱市神奈川區淺間町二ノ九一に現住。大正十二年九月潮音に入社、太田水穂氏に師事して今日に至る。

安田 爲己 明治四年熊本市南千反畑四一に生れ、大正三年九月歿す。享年四十三。二十歳頃より作歌吉永千秋氏、羽田眞足氏の添削を受く。

安田 勝子 明治三十年横濱市に生れ、東京市中野區打越町七に現住。大正三年竹柏園に入門、現在に及ぶ。

安田 青風 本名喜一郎。四十四歳。兵庫縣揖保郡石海村に生れ、大阪府豊中市新免七五七ノ一に現住。兵庫縣立山崎高女教頭。大正三年服部嘉香氏の現代詩文社に入り、のち前田夕暮、花田比露思兩氏の指導を受く。昭和二年水響社に入り、尾上柴舟、故石井直三郎兩氏に師事

して今日に至る。歌集「春鳥」外數種の著あり。

安田 謙治 三十歳。京都府與謝郡岩屋村に生れ、東京市日本橋區横山町四澁谷ビル内に現住。縮翰商。大正十四年頃より作歌、昭和三年アララギ會員となり、故中村憲吉氏、土屋文明氏に師事し今日に至る。

安田 光 十九歳。滋賀縣栗太郡草津町本町五丁目に生れ、同地に現住。草津高女卒業後同校補習科に入り作歌を續く。

安田 稔郎 本名良治。三十六歳。千葉縣安房郡吉尾村に生れ、同地に現住。製罐業。初めアララギに入會、古泉千樞氏日光に據ると共に同誌に入る。のち同氏の青垣會に入り、氏の歿後同人と共に青垣を創刊、今日に至る。

安田 ちよ 米澤市に生れ、昭和十一年十一月五十一歳にて歿す。教員。東京女高師在學中尾上柴舟氏の指導を受く。のち安田尙義に嫁し、潮音に入社。遺歌集「松の葉」あり。

安田 尙義 明治十七年四月十九日兒島市上之園町三〇に現住。中學校教諭。早稲田大學在學中若山牧水氏と同郷關係にて親交あり、初め上園素人の名にて「創作」に出

詠、次で太田水穂氏の「潮音」に轉じて今日に至る。尙昭和二年より歌誌「山茶花」を創刊主宰す。歌集「群落」あり。

安田 治 明治四十五年一月二十日、京都府久世郡寺田村に生れ、昭和十年九月十九日歿す。同志社法科卒業、日本炭礦株式會社練習員。昭和五年頃より作歌、昭和八年七月潮音に入社。遺詠集「つくつくし」あり。

安田 秋夫 本名中本義雄。二十八歳。石川縣石川郡出城村字北安田に生れ、同地に現住。教員。昭和八年より金澤閑古島同人にして、現在多磨會員。

安富 六男 四十九歳。山口縣熊毛郡平生町に生れ、北海道磯原郡磯原町に現住。會社員。大正十二年二月「アララギ」入會、島本赤彦氏に師事、大正十三年「スカンポ」發行、昭和五年廢刊、同七年「いちばつ」發行、八年廢刊、目下「はまなす」高橋」の同人。

安永信一郎 明治二十五年一月二十日、熊本市洗馬町三丁目に生る。大正九年水穂に入社、尾上柴舟、岩谷莫哀、石井直三郎の諸氏に指導を受けて今日に至る。

安水 弘 明治四十四年四月五日、神戸市に生れ、同市須

磨區關守町二丁目に現住。昭和十年頃より病床の徒然に作歌を始む。

安水 なせ 明治二十四年十二月、岡山縣和氣郡に生れ、

神戸市須磨區關守町二ノ四一に現住。女學生時代より作歌、一時中絶、昭和八年頃より再び作歌、郷土誌「六甲」の會員となり現在に及ぶ。

安井 竹美 本名豊吉。明治二十四年十二月八日、岐阜縣

惠那郡中津町に生れ、同地に現住。有價證券仲買業。明治四十一年頃より作歌、窪田空穂尾上柴舟、北原白秋氏等の指導を受く。若山牧水氏の第一期創作に参加、のち金子薫園氏の短歌研究會に入り「光」創刊より同人となりしも一時作歌に遠ざかる。現在創作社友、名古屋短歌會同人。

安井 信一 三十六歳。名古屋市南区熱田新田東組字四五ノ割一五一に生れ、同地に現住。製材職工。大正十五年「森蔭」に入會し今日に至る。

安井 俊二 明治卅五年生。兵庫縣司法代書。大正十五年不死鳥社に加盟して作歌、初めアララギに入り、のち安田青風氏に従ひて「水穂」入社、また山崎歌話會々員。

保田 素 本名素一郎。三十歳。福山市西町甲一〇三ノ

五に生れ、岡山市門田屋敷一三四に現住。昭和六年頃より作歌、昭和七年文化學院文學部在學中兒山敬一氏等を中心として作歌、同年五月杜鵑花に入社、今日に至る。昭和九年歌集「色と香」出版。

保田 靜 明治二十九年長野縣に

水町二四に現住。昭和十一年朔日時三郎氏のエランに入社、今日に至る。

靖西 齊 二十一歳。福岡縣筑紫

同地に現住。作歌經歷といふ程のものなし。

柳 葉子 本名田村富子。札幌市

に生れ、昭和十二年二月二十八歳にて歿す。昭和四年芥子澤新之介氏主宰「吾が嶺」に入り今日に至る。なほ昭和五年より九年迄「香蘭」會員。

柳 宏二 四十四歳。東京に生れ

一に現住。丸善社員。十六歳より作歌、二十歳頃土岐良果氏の「生活と藝術」に屬し、廢刊と同時に一時中止、二十六歳頃より再び作歌、北原白秋氏の「多磨」創刊と共に入りて今日に至る。

柳 豐年 明治四十一年七月六日、崎町一三三に現住。昭和七年より作歌。同一年八月國民文學に入社し現在に及ぶ。

柳瀨 留治 富山縣上新川郡船舩村に生れ、東京市豊島區

巢鴨七ノ一六五三に現住。日本大學社會科卒業、藝術科兼修。國民精神文化研究所勤務。

大正六年若山牧水氏につき、のち創作社に入り、大正九年宇野研氏「朝の光」創刊と共に入り、其後窪田空穂氏の指導を受く。昭和四年「短歌草原」創刊、今日に至る。

柳生 四郎 明治三十九年二月二十一日、茨城縣稻敷郡舟

島村大字掛馬一三三三に生れ、東京市中野區氷川町三甘利莊に現住。東京帝大本部庶務課勤務。東洋大學卒業後國文學研究科に入り、尾上柴舟氏につき新古今集の研究に従ふ。歌は初め林古溪氏の「わかうた」に屬し、また故瀨瀨夜雨氏の教を受けしも後「ぬはり」に入社、現在に至る。

柳澤 文秋 二十九歳。長野縣上田市に生る。千葉醫科大學

學佐々内科勤務。醫師。歌と評論社同人。本名宣馨。四十四歳。

柳澤 宣 埼玉縣比企郡今宿村に生れ、札幌鐵道局追分診療所に現住。鐵道省囑託藥劑師。嘗て明星、橄欖、香蘭、半仙戲、霧華、樂境等に關係、なほ詩歌話オーロラを主宰せることあり。現在多磨に屬す。歌集「香蘭集」あり。

柳澤 勲 二十九歳。群馬縣に生れ、同縣北甘樂郡西牧

村西野牧に現住。昭和七年八月頃より作歌、同年十一月「歌人」に入り、同十一年一月廢刊まで川村小坡氏の指導を受く。昭和九年九月、武藏野短歌を創刊、編輯員として現在に至る。なほ十一年六月「勁草」に入社して今日に及ぶ。

柳澤 きよみ 三十六歳。長野縣東筑摩郡本郷村三才山に生

れ、松本市東町三丁目に現住。喫茶店經營。作歌經歷といふほどのものなし。

柳澤 恒吉 二十四歳。熊谷市に生

れ、浦和市外六辻に現住。購買組合従業員。昭和十年六月香蘭詩社に入り、村野次郎氏に師事して現在に至る。

柳田 比左士 本名久。三十歳。本籍

鹿兒島縣、仙臺市に現住。會社員。高校時代より作歌、東京帝大法科在學中病みて歸郷、作歌に専念す。アララギに投稿したることあり。

柳田 新太郎 明治三十六年十一月十

八日京都府に生れ、東京市杉並區高圓寺一ノ一九に現住。昭和二年桶田敏郎氏等と交珠蘭を創刊、同三年二月より編輯に當り、四月復活詩歌同人となる。後に短歌月刊、短歌雜誌、短歌春秋の編輯に携り、同六年一月短歌新聞を創刊、今日に至る。

る。短歌クラブ、短歌評論同人たりしことあり。著書に「短歌年鑑」現代歌壇系統圖」等あり。

柳原 利次 京都市東山通新橋上ル

に生れ、昭和十二年一月十六日三十六歳にて歿す。作歌經歷といふほどのものなし。

柳原 興子 故ありて本名を秘す。明治三十九年大和に生

る。柳原白蓮氏の指導を受く。

柳原 白蓮 本名輝子。明治十八年

十月十五日、東京麻布櫻田町に柳原前光次女として生れ、同市豊島區目白町に現住。十歳北小路隨光養女となる。其頃より養父につきて和歌を學ぶ。十六歳佐佐木信綱氏門に入る。嗣子資武と結婚、後離婚。二十七歳九州伊藤傳右衛門と結婚、三十七歳離婚、後辯護士宮崎龍介と結婚、今日に至る。

柳本 城西 本名滿之助。六十歳。

濱名郡篠原村篠原一一二三に現住。醫師。文庫、馬醉木に學び、伊藤左千夫氏の門に入り、爾來アララギ會員たり。又明治四十一年六月大藪短歌會を組織し「大藪」を發行して現在に至る。

藪内 春彦 明治三十八年三月、大

阪市西區新町橋通に生

れ、同市旭區赤川町一七四四に現住。藥劑師。十四歳より作歌、昭和七年春はしばみ社に入り、傍ら曼陀羅社友として發表、昭和九年以後新短歌に轉向す。

大和 澄夫

別稱須美雄。長野縣に生れ、大正十年三月二十九日二十三歳にて歿す。大阪毎日新聞社僱員。大正七年十月大阪の海松詩社に入會、大正八年九月霸王樹社に、同月大阪の東雲社に入會す。

大和 勇三

大正三年九月東京市淺草區向柳原町二ノ一に生れ、同地に現住。中外商業新報經濟部記者。東京府立三中在學中橋宗利氏に師事、のち早大政經學部在學中窪田空穂氏、楠田敏郎氏に指導を受く。昭和七年心の花同人、同九年短歌月刊同人、昭和十一年筏井嘉一、米北(堀口)時三郎氏等とエラン創刊、現在に至る。

山 とし子

本名白岩敏子。二十五歳。神戸市灘區に生れ、岡山縣英田郡西栗倉村長尾白岩方に現住。高二年前より作歌、香蘭社友。

山 柿美

本名山本勝己。三十三歳。高知縣吾川郡弘岡上ノ村に生れ、大阪市住吉區駒川町四ノ八に現住。市立扇町高女教諭。三年前より作歌すれど師なし。

山内 一郎

明治四十年三月六日、福島縣東白川郡棚倉町花園に生れ、東京市葛飾區本田川端町七二六に現住。酒類新炭商。作歌經歷といふほどのものなし。

山内 清平

大正三年三月、愛知縣知多郡阿久比村阿久比に生れ、同地に現住。白木綿織布業。昭和五年春霸王樹に入社、白井大翼、桐田蔭村、橋田東聲の諸氏に師事、又北原白秋氏の指導を受く。現在霸王樹同人。山川青霞、北川東一郎、青木鶴三郎等の筆名を用ひしことあり。

山内 純男

鹿兒島縣薩摩郡宮之城町船木下に生れ、昭和十一年三十四歳にて歿す。教員。昭和三年より鹿兒島の山茶花社に入社、また潮音に加盟し致年に至る。

山内友五郎

五十一歳。新潟市に生れ、岡山市門田文化町八二〇に現住。第六高等學校數學科教授。作歌經歷といふほどのものなし。

山内 國治

三十二歳。東京市日本橋區濱町二ノ一二に生れ、函館市時任町三八に現住。昭和七年春より本格的に作歌、水麩、朱鳥を経て現在アララギに據る。なほ函館の岩檜葉同人。

山内眞珠子

本名増。明治二十七年七月東京に生れ、同市

麻布區霞町八に現住。教員。大正六月若山牧水氏の門に入り、創作社に屬し今日に至る。

山内 司

大正五年二月十九日、福岡縣京都郡仲津村馬場二〇八に生れ、大阪市天王寺區眞法院町九一小泉方に現住。參天堂株式會社社員。神戸高商時代より作歌、昭和十年十二月國民文學社友となり半田良平氏の選を受く。

山之内 康

筆名筒元光。明治三十三年六月鹿兒島縣蒲生町に生る。歌集「葎露の歌」の著あり。

山浦 爲一

明治二十二年長野縣北佐久郡三岡村に生れ、同地に現住。小學教員。小諸義塾に學び島崎藤村氏の教を受く。明治三十九年より作歌、白夜會に入り、太田水穂氏の指導を受く。若山牧水氏創作を出すに及び社友となる。のち國民文學、潮音にも創刊より關係せしが數年にして潮音を退き、國民文學同人として昭和十一年まで籍を有せしも發表は極めて稀なりき。現在結社に屬せず。

山形 敏一

二十六歳。宮城縣石巻市門脇門脇町五五ノ一に生れ、仙臺市北二番丁七八に現住。醫師。大正十四年石巻中學校入學當時より作歌、昭和九年十月アララギに入會、結城真草果氏の指導の下に現在にいたる。

山形 勘三

大正六年六月二十四日
石巻市門脇門脇町に生

れ、昭和十一年三月石巻中學校卒業、同年七月二十三日歿す。昭和十年六月アララギに入會、結城哀草果氏の指導を受く。

山形 信太郎

明治四十一年三月十日
秋田縣平鹿郡増田町に

生れ、同縣仙北郡大曲町に現住。商業。大正十三年より作歌、現在「霸王樹」同人。

山形 吉藏

三十四歳。下關市阿彌
陀寺町に生れ、同地に

現住。日用品雜貨商。昭和七年八月アララギ短歌會に入り現在に至る。

山川 秀夫

三十歳。滋賀縣野洲郡
篠原村に生れ、香川縣

香川郡一宮村に現住。神職。昭和五年六月荒木暢夫氏に師事、現在に至る。昭和五年七月より同九年十一月まで香蘭詩社に入社。

山川 茂朗

本名博。北海道雨龍郡
深川町字メムに現住。

農業。中學三年頃より作歌、昭和八年香蘭に入り酒井廣治氏の選を受く。北原白秋氏の多磨創刊と共に入會して今日に至る。

山川 福代

二十九歳。福岡縣朝倉
郡秋月町に生れ、福岡

市邊邊通三ノ二〇ノ一五に現住。福岡女子專門國文科學生。高女時代より作歌、昭和八年アララギに入り、土屋文明氏に師事す。

山川 弘至

大正五年九月十日、美
濃國郡上郡高鷲村に生

る。國學院大學國文科學生。釋空室氏の鳥舟社々友。

山川 柳子

明治十六年二月福井縣
に生れ、東京市世田谷

區松原町四ノ一八四に現住。女學校卒業の年佐佐木信綱氏の門に入りて今日に及ぶ。歌集「木苺と影」あり。

山川 英子

本姓松井。三十歳。岐阜
縣惠那郡中津町に生

れ、京都市下鴨膳部町八六に現住。東京府立第一高女、同高等科卒業、同志社大學教授松井七郎に嫁す。昭和三年太田水穂氏の潮音に入社、今日に至る。

山上 三千生

大正八年九月一日、東
京市品川區大崎本町二

ノ四四六に生れ、同市目黒區駒場町第一高等學校北寮五番に現住。學生。かぐのみ社に屬す。

山上 泉

本名智海。五十九歳。
長野縣飯田市傳馬町に

生れ、東京市品川區大崎本町二ノ四四六に現住。元中學文壇主筆、立正大學教授。初め佐々木真古入翁に師事す。かぐのみ主宰。著に歌集久遠の春、歌集虚空、綜合高等日本文法、修辭學新講、短歌作法新講、法華百入一首、日本文學と法華經、聖日蓮の文章法研究、其他あり。

山岸 雨象

本名柳藏。明治六年十
二月一日三河岡崎に生

れ、東京市杉並區荻窪三ノ二〇〇に現住。元中等學校教師。歌は日本及日本人誌上にて三井甲之氏に學ぶ。

山岸 大ニ

二十六歳。山形縣宮内
町三三八九に生れ、同

地に現住。小學校教員。昭和二年より作歌、須藤克三氏の指導を受く。昭和四年吾妹に入社、昭和六年梅檀創刊と共に入社して現在に至る。

山岸 義昂

本名主計。二十七歳。
福井縣今立郡河和田村

北中に生れ、同地に現住。清酒醸造業。昭和五年木苺、ポトナム入社、同七年秋ポトナムを退き、水穂入社、今日に至る。

山岸 貞治

三十一歳。長野縣下水
内郡水内村北信四〇七

に生れ、同郡飯山町上町に現住。鐵道從業員、車掌。大正十三年四月アララギ會員となり、島木赤彦、中村憲吉、高田浪吉の諸氏の選を受けて現在に至る。

山北 幸子

二十六歳。熊本縣球磨
郡湯前村字東方に生れ

滿洲國新京寬城子山縣部隊本部氣附、陸軍軍醫の妻。昭和十年九月創作入社、今日に至る。

山極 二郎 四十四歳。東京市に生れ、名古屋市中區荒田町一ノ七に現住。愛知縣廳河川課長兼道路課長。大正十五年十二月アララギ會員となり、齋藤茂吉氏の指導を受けて今日に至る。

山口 豊光 本名勇。明治三十六年七月十日愛知縣知立町に生れ、靜岡市相生町一ノ一八に現住。日本畫家。大正七年より作歌、同十二年水滸に入り、十四年自然に入り尾山篤二郎氏に師事す。昭和四年「不二」を創刊主宰し現在に至る。

山口 好 福岡縣大牟田市龍湖瀨町に生れ、大正九年九月十日二十六歳にて歿す。鍛冶職。大正二年五月白秋詩社を創立、大正六年四月アララギに入會、島本赤彦氏に師事す。

山口 一夫 本名飯田正明。群馬縣邑樂郡多々良村門前に生れ、東京市足立區五反野南町一三〇三に現住。八九年前より作歌、前田夕暮氏の白日社復興當時の「詩歌」に半年程投稿したるのみ。

山口 恭代 二十九歳。東京府に生れ、東京市赤坂區青山北町六ノ三六に現住。十七歳よりアララギに入會し、岡麓、齋藤茂吉兩氏の指導を受けつつ現在に至る。

山口 妙子 二十三歳。岐阜市梅ヶ枝町に現住。佐佐木信綱氏の門に學ぶ。

山口 貞子 二十歳。大連に生れ、福岡市箕子町七〇に現住。十七歳より作歌、短歌巡禮社に入社し、翌年退社、のち窪田空穂氏に師事すれど作歌することなく今日に至る。

山口 白陽 本名經光。四十一歳。熊本縣阿蘇郡宮地町に生れ、熊本市新屋敷町に現住。雜誌「熊本教育」編輯。二十六年間獨り黙々として作る。

山口 重吉 二十七歳。青森縣中津輕郡裾野村に生れ、秋田縣鹿角郡小坂町横道一二に現住。小坂鑛山用度係。昭和十年より作歌、魁歌壇に投稿。

山口 不二子 本名ふじ子。明治四十五年三月二十日、靜岡縣濱名郡和田村に生れ、靜岡市相生町一ノ一八に現住。昭和六年より「不二」入社、今日に至る。

山口 軍作 明治四十二年十二月二十二日生。東京市大森區田園調布二ノ一三四七町田方に現住。農。

山口 頂風 本名吾市。北海道に生れ、昭和七年秋三十七歳にて歿す。昭和元年頃より作歌、昭和六七年頃より時折り地方誌に發表せしのみ。

山口 不二花 本名不二郎。明治二十三年舊十一月八日、山梨縣南都留郡谷村町に生れ、東京市杉並區阿佐ヶ谷五ノ二四に現住。東京市吏員。大正八年七月創作社に入り、同十一年九月退社、大正十年七月常春創刊に際し同人となる。大正十三年九月より十五年四月まで楳嶺同人。昭和三年四月より五年十二月まで詩歌同人。昭和九年九月あしかび同人となり現在に至る。

山口 由幾子 四十一歳。東京市牛込區榎町四に生れ、浦和市常盤町五三二に現住。判事妻。大正七年十月竹柏會に入り佐佐木信綱氏に師事して今日に至る。歌集「紫苑」あり。

山口 綾子 明治四十三年九月十五日、横濱市中村町に生れ、神奈川縣上溝町本町に現住。女學校手藝科教諭。女子美術専門卒業。地方歌誌「相模野」同人。

山口 重次郎 三十歳。和歌山縣有田郡五西月村大字瀨井に生れ、同地に現住。農業。昭和十一年十二月香蘭入社、現在に至る。

山口 武二 本名備節。明治四十一年三月二十六日、長崎縣佐世保市福石免九〇九に生れ、同市潮見町一二四に現住。藥種商。昭和四年とねりこ入社、昭和六年楳嶺入社、昭和十年多磨入會。

山口 甚作 四十歳。石川縣江沼郡那谷村字善提に生れ、

同縣能美郡粟津村字津波倉に現住。小學校教員。柳瀬留治氏の短歌草原同人たりしことあり。現在結社に屬せず。昭和四年歌集「兒等と歌ふ」を出版。

山口 榮一 明治三十七年八月二十一日長野市に生れ、同市櫻枝町八六四に現住。元銀行員、中等教員、現在無職。中學の初め頃より作歌。

山口 濱雄 本名剛直。長野縣南安曇郡南穂高村細萱に生る。家郷出奔青森縣にて養蠶教師を勤め、後北海道巡查となり擇提島に出張し鮭の番人を勤め大正八年頃北海道にて死亡。「創作」初期より若山牧水氏に師事、初め山口破魔子の筆名を用ふ。

山口 幸安 明治四十四年一月七日埼玉縣大里郡男衾村卒禮に生る。農業。昭和五年五月「青垣」入會。同七年千葉市川騎砲兵隊入隊、同年六月滿州出動により青垣退會、同年十二月四日、黑龍江省甘南縣後長嶺溝に戰死。昭和八年二月遺歌集發刊される。

山口 則之 本名元治郎。七十四歳。栃木縣鹽谷郡矢板町大字木幡一四二に生れ、同地に現住。若き時より作歌すれど師承なし。

山口 白二 三十歳。新潟縣北蒲原郡本田村に生れ、

Association Japonais Mexicain B.C. Mexico に現住。農業。昭和二年九月香蘭詩社に入社。

山口 武夫 二十六歳。山梨縣東八代郡豊富村大鳥居に生れ、同縣北都留郡初狩小學校に現住。小學校教員。昭和六年吾妹會員。昭和八年常春入會、同年アララギ會員、昭和十年常春退會、同年山柿同人、同年美知思波同人。

山口 つゆ子 二十三歳。東京市芝區白金三光町一〇八に生れ、同町八二に現住。昭和四年實踐高女に入學してより昭和七年まで辻トク氏に、昭和十一年夏より高崎正秀氏に指導を受く。

山口 美代 佐賀縣佐賀郡西川副村南里に生れ、朝鮮全羅南道務安郡望雲面に現住。農業。昭和十年夏より婦人書道に投稿。明日香に六ヶ月在籍せしことあり。

山口 茂吉 明治三十五年四月十一日、兵庫縣多可郡杉原谷村清水に生れ、東京市赤坂區青山北町六ノ三六に現住。明治生命庶務課員。大正十三年十一月アララギに入會、島木赤彦氏の選を受け、大正十五年以後専ら齋藤茂吉氏の指導を受けつつ現在に至る。

山之口 辰夫 鹿兒島縣日置郡東市村に生れ、昭和八年九月十七日三十歳にて歿す。小學校教員。二十五

歳「蒼穹」に入る。

山崎 重雄 明治四十二年十月一日福井縣蘆原町二面に生れ、昭和十一年七月十六日、二十八歳にて歿す。村役場書記、銀行員。大正十五年頃より作歌、ポトナム會員、アララギ會員たりしことあり、昭和三年蘆原短歌會を起し、四年一月より歌誌「樛」を發行、五年一月同誌編輯を石原眞一氏に託す。

山崎 捷治 明治四十一年埼玉縣鴻ノ巣に生る。浦和中學四年修了、成蹊高校入學、病氣休學中昭和二年十月七日、富士山麓密林中にて自ら命を絶つ。歌は中學時代教師高橋俊入氏に學ぶ。遺稿集「裾野」上梓される。

山崎 かすみ 昭和三年十一月大連に入會、甲斐水棹氏に師事、昭和四年一月水穂入社。昭和十年十一月歿す。享年六十二。

山崎 美正 大正二年四月、愛知縣海部郡大治村大字西條に生れ、同地に現住。農業。三年前より興の趣くままに作歌、現在土の香短歌會に據り、また水穂に入社して松田常憲氏の教を受く。

山崎 秀子 明治四十四年十二月十五日、東京市本所區小梅瓦町に生れ、東京府北多摩郡武藏野町吉祥寺一六に現住。昭和八年四月草の實社に入

社、現在に至る。

山崎喜久一

四十四歳。佐世保市今福町五〇に生れ、同町

四七に現住。官吏、佐世保海軍建築部書記。大正四年讀賣新聞歌壇に入選以來作歌、短歌月刊、香蘭を経て、多磨創刊と共に同誌に據る。

山崎眞吾

三十四歳。福岡市船町四二に生れ、同市簗島

本町九七二に現住。銀行員。大正十五年アララギ入會、今日に及ぶ。

山崎眞砂

本名直義。三十歳。京都府與謝郡市場村字四

辻に生れ、京都市上京區紫野中柏野壽町二三に現住。織物製織。昭和七年四月頃より「心の花」に投稿、今日に及ぶ。

山崎謙二

三十一歳。石川縣鹿島郡金丸村ノ部三四に生

れ、金澤市里見町四一に現住。公吏。昭和十年一月生田蝶介氏の吾妹に入社、同年九月越野獸歩氏の閑古鳥に入社。

山崎周信

六十四歳。埼玉縣入間郡飯能町大字中山二九

九に生れ、東京市大森區大森二ノ一四二に現住。國語傳習所を卒業したる外特記すべき作歌經歷なし。

山崎とね子

明治十五年六月一日、前橋市曲輪町に生れ、

熊本市大江町九品寺一七二に現住。醫學博士

山崎正董妻。佐佐木信綱氏につきて學ぶ。

山崎静子

四十五歳。九州唐津に生れ、大阪市天王寺區

上ノ宮町一六に現住。九歳より作歌、大正十三年竹柏會員となり、石轉千亦氏の指導を受けつつ今日に至る。なほ曼陀羅、いつかし、あらくさ等に加盟す。

山崎隆子

大正五年二月七日生。東京市世田谷區北澤町

一ノ一二四に現住。昭和十二年「多磨」に入會、現在に至る。

山崎君子

筆名末永潔。二十四歳。福岡縣築上郡八屋町に

生れ、福岡市簗島本町九七二に現住。昭和十二年一月「ひのくに」入社、今日に至る。

山崎哲太郎

二十五歳。静岡縣榛原郡下川根村家山に生れ

静岡市屋形町一三三に現住。父學院大學卒業、小學校教員。小學時代より父に從ひて作歌、國學院入學後金子元臣氏の「あけぼの」により、日本短歌、短歌研究に投稿す。現在アララギ會員。

山崎秀峰

本名秀夫。三十六歳。福岡縣直方市上境一三

八〇に生れ、滿洲國錦縣北五經路四五ノ五一八に現住。滿鐵社員。二十一歳頃朝日歌壇に投稿し、爾來折にふれて社員會誌「協和」等に投稿し來る。

山崎千代子

二十六歳。岡山縣兒島郡宇野町に生れ、岡山

市兒島町一七に現住。昭和八年頃より作歌、同十年より桑山武之氏の指導を受く。

山崎良幸

二十九歳。高知縣高岡郡高岡町丙一三二に生

れ、朝鮮京城府靑葉町二ノ三に現住。教員。昭和三年より作歌、昭和六年アララギ會員、同年秋頃より中絶、昭和十年夏頃より再び作歌。

山崎光利

三十五歳。長崎縣北安曇郡七貴村に生れ、朝

鮮京畿道坡州郡汝山里に現住。官吏。昭和四年より潮音社友となり、太田水穂氏に師事す。

山崎亨

三十九歳。宮城縣登米郡寶江村田沼黒沼に生

れ、仙臺市東三番丁九三三に現住。昭和五年アララギに入會して現在に及ぶ。

山崎松野

三十七歳。岡山市船頭町一三一に生れ、同市

北方大和町二六三ノ一二に現住。昭和五年蒼穹入社、今日に至る。

山崎等

號柏村。明治十九年七

月、長野縣高級郡上山田村に生れ、同地に現住。農業。太田水穂氏の潮音創刊と共に入社、今日に至る。

山崎ヨシ

二十六歳。栃木縣佐野町第二小學校前に生れ

東京市向島區寺島町二ノ一二八名取方に現

伴。小學校教員。若山牧水氏選にて新聞歌壇に投稿、一時水麴誌友たり。

山崎 忍 しのぶ 大正元年十一月十五日愛媛縣松山市に生れ、

滿洲國濱江省一面坡工務段に現住。十七歳頃より作歌、昭和七年渡滿、甲斐水植氏の門に入る。翌年滿鐵に奉職、昭和九年一月水麴入社、松田常憲氏の選を受け今日に至る。十一年十一月大連にて創刊の「アカシャ」に加盟し今日に至る。

山崎 剛平 がうへい 明治三十四年六月二日兵庫縣赤穂郡上郡町に

生れ、東京市下谷區上野櫻木町二七に現住。二十歳上京、早稻田第一高等學院文科に入學間もなく窪田空穂氏に師事す。大正十五年早大國文科卒業、同年二月空穂氏主宰の「槻の木」創刊、爾來同人として今日に至る。昭和十一年歌集「挽歌」を出す。

山崎 誠 せい 三十六歳。千葉縣匝瑳郡須賀村横須賀新田に

生れ、同縣八日市場町イ二三三〇に現住。國學院大學高等師範部在學中鶴社同人として釋道空氏の指導を受く。卒業後「くぐり」に據り今日に至る。

山崎 敏夫 としを 明治三十四年七月三十日、東京市小石川區に

生れ、名古屋市東區矢田町一七ノ一〇に現住。京都帝大國文科卒業、愛知縣立第一高女

教授。大正九年以來石井直三郎氏に師事し、水麴同人たり。著書に「新古今和歌集新釋」歌集「春の鋪道」「火花」其他あり。

山崎 平吉 へいきち 明治四十一年九月十六日、北海道膽振區勇拂

郡鶴川村字入鹿別に生れ、同北見國常呂郡留邊藥町字温根湯に現住。農業。昭和五年北見文語社發行の年刊歌集に初めて歌を採録され、同年十月小田觀登氏主宰の「新壘」に加盟、六年十月「潮音」に加盟、現在に至る。

山崎 一輪 いちりん 二十五歳。山梨縣東八代郡右左口村右左口に

生れ、同地に現住。農業。小學校卒業後山梨日日新聞歌壇にて澁谷俊氏の指導を受け、現在水麴、一路の兩誌に投稿す。

山崎 茂 しげる 四十六歳。福岡縣築上郡山田村に生れ、戸畑

市中原日鐵社宅に現住。會社員。昭和二年松村英一氏に師事、今日に至る。なほ昭和十二年一月よりアララギ會員となり、土屋文明氏に師事しつつあり。

山崎 茂 しげる 明治三十九年十一月二十八日、函館市海岸町

に生れ、小樽市入舟町八ノ七三に現住。遞信官吏。十六歳頃より作歌、二十二歳北見國稚内町に移り、稚内短歌會を興す。昭和五年小田觀登氏主宰の新壘に入社、次で太田水穂氏の潮音に入りて今日に至る。

山崎多比良 たひら 本名良平。明治三十四年十月十三日、愛知縣

南設樂郡東郷村大字平井字沖野二ノ一に生れ同地に現住。藥種商兼農業。大正九年より依田秋圃氏に師事、愛知縣農會報歌壇にて同氏の選を受く。嘗て「歌集日本」「あけび」に據りしことあり。現在「武都紀」同人。

山澤 秀潤 しゅうじゆん 明治三十八年三月二十五日生。鹿兒島縣揖宿

郡今和泉村新西方日潤寺に現住。僧侶。大正十二年より同人雜誌「寛」「展望」の同人、十三年より十四年春迄「山澤俊郎」の筆名にて大阪毎日新聞に時折り投書、故中村憲吉氏の指導を受く。昭和二年より三年冬迄堺市阪界新聞「阪界歌壇」に投書。

山志田 潔子 きよこ 五十五歳。東京に生れ

同市赤坂區青山南町二ノ七三に現住。昭和四年頃より作歌「一路」の山下陸奥氏の指導を受けて現在に至る。

山下 寛治 くわんぢ 明治三十六年一月十七日、山口縣大津郡俵山

村に生れ、下關市大坪町一三三に現住。遞信關係労働者。昭和二年頃より口語歌誌「新緑」「新短歌風景」「短歌文學」「短歌藝術」の同人。現在所屬なし。帆船船「關門パンフレット」「白鷗」を主宰せしことあり。歌集「破れたる笛」「帆に晴れる風」あり。

山下清 明治十六年十二月十五日、埼玉縣入間郡精明

村平松に生れ、東京市小石川區丸山町一に現住。醫師。昭和三年六月より作歌、同年十一月國民文學に入社、今日に至る。

山下隆一 大正四年一月十二日、静岡縣伊豆下田町に生

れ、東京市在原區中延五五〇に歿す。享年二十三。紐育ナショナルシテイバンク東京支店員。昭和七年「吾妹」に入る。

山下秀之助 明治三十年十一月二十

九日鹿兒島市に生れ、札幌市北十八條西三丁目に現住。醫學博士、札幌鐵道病院産婦人科醫長。大正二年創作一入社、同四年より十三年迄「潮音」にあり、

大正十三年「原始林」創刊、翌年廢刊、以後作歌中絶、昭和四年「橄欖」同人となり現在に至る。昭和六年十一月歌集「冬日」上梓。

山下みち子 明治三十五年十二月二

十二日、京都府船井郡吉富村宇島羽に生れ、同郡園部町字内林に現住。小學校訓導。昭和七年潮音社に入社、太田水穂、四賀光子兩氏に師事し今日に至る。

昭和十年「あじろ木」創刊以來入社。

山下治子 二十六歳。大阪市に生

れ、同市西成區粉濱東之町四ノ六一に現住。昭和九年十二月潮音社入社、同年一月あじろ木短歌會入會、同十二

年五月青楳社創立と共に潮音及あじろ木を退社して青楳社に入社す。

山下陸奥 四十五歳。尾道市に生

れ、東京市世田谷區深澤町四ノ九に現住。大正六年竹柏會に入門、昭和十年獨立して歌誌「一路」を主宰す。著書に歌集「春」露鳥「作歌隨想」あり。

山下星峰 本名治市。明治四十四

年二月二十日、北海道空知郡幌向村に生れ、同村字上石川に現住。農業。幼少の頃より獨り作歌、嘗て郷土文藝誌「閃影」の同人たりしことあり。現在岩見澤歌話會々友。歌集「青春の夢」あり。

山下源藏 二十九歳。鹿兒島市に

生れ、同市武町五六に現住。鹿兒島師範訓導。昭和二年「水鏡」入社、同四年「詩歌」に轉じ白日社鹿兒島支社を主宰せしむ退社し、昭和十二年よりエラン同人となる。

山下政一郎 明治十七年七月二十五

日、鹿兒島市に生れ、大正四年渡臺、臺北市御成町五ノ七に現住。總督府鐵道部勤務。明治四十四年頃より歌に親しむ。大正二年若山牧水氏の門に入り「創作」に投稿、大正四年同誌休刊の爲め一時「創造及太田水穂氏主宰の「潮音」に發表、大正六年「創作」に復し牧水氏歿後退社し、以後歌なし。最近また「創作」に復す。

山下朝夫 二十六歳。静岡縣榛原郡相良町波津に生れ、

同縣小笠郡朝比奈村下朝比奈に現住。農業。昭和六年六月「不二」入社、山口豊光氏に師事し今日に至る。

山科ゆうみ 本名佐藤いと子。明治

三十四年五月十一日、東京龜戸に生れ、同市本郷區駒込富士前町四三佐藤方に現住。大正十年頃より作歌、女學世界一に投稿、同十四年「短歌雜誌」にて松村英一氏の選を受く。昭和六年十月「心の花」に入り、山下陸奥氏の指導を受け、同七年一路會に入り現在に至る。

山城正忠 明治十七年十一月沖繩

縣那覇區字若狹町村に生れ、那覇市西本町四ノ五に現住。齒科醫。山城は土地に於てはヤマグスタと訓す。明治三十八年新詩社同人となり與謝野氏の指導を受けて今日に及ぶ。目下「多栢」同人。

山須豊 三十四歳。山口縣美彌

郡東厚保村字植松に生れ、廣島市尾長町三本松一九三に現住。鐵道局勤務。大正十年以降地方にて文藝誌白路、黒蛇、青潮等を發刊編輯す。

山田兼次 三十四歳。横濱に生れ

、熱海市新宿に現住。在京十六年、元書肆、現在工務所經營。昭和二年「青垣」創刊と同時に入會、相坂二郎、大

熊長次郎、橋本德壽三氏の指導を受けて今日に至る。

山田 春岱 本名善吉。明治三十六年六月七日、靜岡縣賀茂郡稻梓村須原に生れ、同縣清水市三保貝島に現住。造船設計製圖。昭和二年より六年迄横濱にて光永比佐夫氏の指導を受く。その後郷里にて印刷業を営み作歌中絶、昭和九年より清水市金指造船所に勤務、最近再び作歌。

山田 蕪雨 本名森茂。四十歳。長野縣南安曇郡南穂高村に生れ、長野市妻科上ノ原に現住。官吏、縣應に勤務。大正八年六月創作社に入社、今日に至る。

山田 繁雄 二十四歳。北海道美唄町字光珠内第四區に生れ、同地に現住。昭和十年三月地方誌「新聲」に入社、同十二年一月「潮音」に入社して今日に至る。

山田 小枝子 大正三年十一月愛知縣中島郡稻澤町に生れ、名古屋市南区千年町裏畑一六七淺井方に現住。昭和八年十一月より作歌、「短歌」に據る。

山田 美穂子 明治三十六年十一月二日、靜岡縣伊豆三島町茅町に生れ、東京市在原區中延町一三五七に現住。齒科醫師。小學校時代より父母に従ひて作歌、時々雜誌に投稿を試む。昭和五年

「創作」に入社、現在に至る。

山田 眞澄 金光町大字吉見二一九八に生れ、京都市東山區山科安朱馬場東町二ノ一に現住。警察官。昭和六七年頃水原正康氏、岡村桂之介氏等と歌誌「影廊」を發行。同十年池田光穂氏等と山科歌人協會を結成す。歌集「竹林三遙照」あり。

山田 巖 愛知縣碧海郡矢作町大字矢作字西河原一に生れ、京都市左京區吉田中大路町三四ノ七に現住。辯護士、府立京都第一高女囑託教授。廣島高師英語部在學中試作、京都帝大經濟學部在學時代中絶、島根縣應在勤時代昭和三年頃より再び作歌、現在に及ぶ。

山田 甫 四十二歳。岡山市仁王町六六に生れ、鹿兒島縣贈嗔郡志布志町志布志二二九四に現住。縣立志布志中學校教諭。十八歳頃より作歌、早稻田大學高師部國漢科在學中尾上柴舟氏の指導を受けしのみ。

山田 祐紀代 明治三十九年十一月十五日、東京府下三河島村に生れ、東京市杉並區天沼二ノ四一五に現住。大正十三年淑德高女卒業、最近水町京子氏に師事す。

山田 垂穂 本名薫太郎。明治三十七年福井縣敦賀北郊五幡村に生れ、間島總領事館百草講士として在勤。東洋大學卒業、外務省警察官吏として昭和七年渡滿。大正七年より作歌。爾來獨學今日に及ぶ。昭和三年雜誌「木苺」同人となりてより作品を發表す。

山田 四郎 三十九歳。北海道小樽市に生れ、東京市板橋區小竹町二六五八に現住。教員。大正八年より作歌、新潮歌壇に投稿し金子薫園氏の選を受く。新潮歌壇廢止以來北原白秋氏選の新聞雜誌に投稿す。昭和九年九月アララギに入會し齋藤茂吉氏に師事し現在に至る。

山田 光秋 本名義信。明治四十三年六月二十二日、福井縣遠敷郡熊川村熊川に生れ、京都市伏見區西柗屋町一〇六三に現住。京都女子師範訓導。

山田 武 二十九歳。仙臺市に生れ、臺北市に現住。臺灣總督府勤務。昭和七年渡臺、八年七月臺北市發行之歌誌「あらたま」に入會、始めて作歌す。それより斷續的に發表、現在に至る。

山田 猿吉 本名安田佐治郎。三十一歳。京都府與謝郡岩屋村に生れ、同地に現住。丹後輪船製造業。大正十二年より作歌、十八歳頃より「短歌雜誌」松村英一氏選に投稿、以後「國民文學」

「創作」に入社、現在に至る。

「創作」に入社、現在に至る。

「創作」に入社、現在に至る。

「日光」等に歌を投じ、續いて「アララギ」會員となる。現在は雜誌に關係なく、歌を發表せず。

山田 文吉

大正四年九月十七日、福島縣信夫郡大森村に生れ、昭和十年九月十日歿す。享年二十一。百姓、職工、土工、炭焼等轉々す。歌と評論社にありて藤川忠治、池田毅兩氏の指導を受く。

山田 耕二

本名幸治。二十六歳。千葉縣君津郡中郷村大寺五七七に生る。農業。昭和六年霸王樹に入社、同九年入營の爲休社し昭和十一年復社、奥貫信盈氏の指導を受けて現在に至る。

山田 平一郎

大正元年十二月四日、滋賀縣神崎郡御園村中小路に生れ、同地に現住。彦根高商卒業後二年間教員生活、現在病氣療養中。昭和七年アララギ入會、今日に至る。

山田 青江

本名善吉。三十二歳。島根縣仁多郡横田村に生れ、同地に現住。農業。地方歌誌數種の同人たりしことあり。現在「勾玉」同人。

山田 三秋

明治八年七月十五日、岐阜縣本巢郡西郷村小野に生れ、同縣武儀郡東武藝村谷口に現住。明治三十年八月村瀬澹翁に學び、翁歿後明治三十七年四月より佐佐木信綱氏に學び今日に至る。

山田 淳實

四十五歳。福岡縣山門郡柳河町に生れ、布施市小阪町東翠園に現住。大阪朝日新聞記者、十五六歳の頃より作歌、文章世界、新潮、秀才文壇等に投稿、漫然たる作歌時代十年ばかりにして現職を得てより自然中絶、大正十三年故橋田東馨氏と義兄弟の縁故生ずるに及び再び作歌、霸王樹に入會して現在に至る。

山田 愛

三十八歳。島根縣に生れ、東京市牛込區原町二ノ六二に現住。教員。昭和三年頃より作歌爾來アララギ派に就きて學び今日に至る。

山田 耕道

二十八歳。大分縣大分郡吉野村大字奥に生れ、同縣南海部郡河内小學校に現住。教員。

山田 信人

本名信一郎。三十四歳。京都府船井郡竹野村に生れ、同地に現住。農業。昭和二年教員病氣退職の頃より作歌、京都教育(選者大井廣氏吉澤義則氏)に投稿、後「曼陀羅」創刊と共に入社、今日に至る。

山田 登志子

三十三歳。名古屋に生れ、同市昭和區龜城町二ノ一〇に現住。大正十四年青木櫻子氏につきて作歌をはじめ、この花會に入りて今日に至る。

山田 廣紀

明治二十八年二月十二日、長野縣下水内郡柳

原村に生れ、同縣下高井郡穂高村に現住。小學校教員。昭和六年七月より作歌、今日に及ぶ。

山田 あき

本名坪野ついで。三十九歳。新潟縣東頸城郡下保倉村に生れ、東京市小石川區關口臺町一二に現住。舊アロレタリア歌人同盟員。現在「鍛冶」同人。

山田 惠美子

明治四十四年十一月三十日、高知市に生れ、東京市杉並區西高井戸二ノ三五に現住。昭和五年「草の實」に入り、十一年十一月「多磨」に入會、北原白秋氏に師事して今日に至る。

山田 英太郎

二十七歳。京都市下京區岩上通下魚棚南入に生れ、同地に現住。銀行員。昭和五年頃より二三の同人歌誌に發表、昭和八年七月より「自然」社友となり現在に至る。

山田 吉春

三十一歳。長野縣下伊那郡上郷村字飯沼に生れ、東京市中野區宮園通一ノ六に現住。齒科醫師。飯田中學時代大井廣氏に師事す。日本齒科醫專入學と共に太田水徳氏に師事し昭和五年五月より潮音に入りて現在に至る。

山田 珂瑛子

明治四十一年京都府福知山町に生れ、京都市下京區木津屋橋通烏丸東入に現住。女學校時代より作歌、昭和五年より「こぎやう」に二

年餘在籍、昭和六年曼陀羅社創立と同時に加盟、同八年頃より六車勇、日比野道男兩氏に師事して現在に至る。

山田 春彦 三十三歳。北海道雨龍郡深川町字本町四に生

れ、同郡一巳村字一巳二〇に現住。教師。大正九年より作歌、昭和五年吾妹入社、同九年吾が嶺に轉じ、十一年吾が嶺解散、同人雜誌「こだま」編輯。

山田 一麿 本名善藏。三十二歳。滋賀縣蒲生郡朝日野村

字嶺山に生れ、同地に現住。農業。昭和四年七月白日社に入社、前田夕暮氏、米田雄郎氏に師事す。短歌草原同人たりしことあり。

山田 妙子 二十四歳。岡山縣津山市安岡町七六に生れ、

同地に現住。女學校の作文の時教はりしまゝにて、後獨り作り樂しむ。

山田 宣 三十三歳。新潟縣佐渡郡澤根町に生れ、同地

に現住。小學校教師。昭和三年四月より同五年一月まで「詩歌」社友、以後同好の士と草吟社を組織し今日に至る。

山田 穀城 筆名小金花作。新潟縣佐渡郡相川町に生れ、

昭和八年七月三十日歿。行年五十八。新潟新聞主筆、新潟市史編纂委員。幼にして歌に親しみ、十九歳新潟新聞に入り地方歌壇の革新

に志す。歌集「野調二若菜舟」他に「新潟縣會波瀾史」の著あり。

山田 一子 二十六歳。熊本縣に生れ、東京市杉並區西荻

窪町二ノ一〇七に現住。教師。アララギ會員。

山田 睦人 本名時松。三十五歳。長野市に生れ、同市緑

町二二三に現住。元教員。昭和二年頃より作歌、初めアララギ會員となり、のち國民文學に屬す。

山田 政郎 二十六歳。靜岡縣に生れ、同縣志太郡島田町

八四〇に現住。會社事務員。昭和三年靜岡中學在學中本居亮一氏の指導を受け、同校卒業と共に「國民文學」に入社、現在植松壽樹氏の選を受く。

山田 ふみ 二十五歳。横濱市中區新川町四ノ二五に生れ

同地に現住。那是シルクコーポレイション電話交換手。特記すべき作歌經歷なし。

山田 幸子 二十七歳。京城に生れ同府並木町一七一に現

住。京城遞信分掌局勤務。昭和十年七月眞人入社。

山田 武彦 明治三十九年十一月、東京市下谷區根岸に生

れ、新京近埠街吉興アパートに現住。昭和五年北海道帝大農經科卒業、拓務技師を経て現

在滿洲拓殖株式會社員。少年時代より歌らしきものを作り、札幌時代「勁草」に入り宇都野研氏の指導を受けて現在に至る。山科杉夫海野露木とも號す。譯書「小農經營學」あり。

山田 彌三男 山形縣に生れ、昭和十三年大阪に歿す。行年

三十五。洋裁店經營。大正十年創作社入社、若山牧水氏の教を受け、その歿後喜志子氏の指導を受く。

山田 百合子 四十歳。東京市麻布區東鳥居坂町九に生れ、

同區櫻田町三八に現住。昭和二年宇都野研氏主宰の「白雲」に入社、同四年同氏の「勁草」を創刊するに及び入りて今日に至る。

山田 弘通 三十八歳。岩手縣宮古町に生れ、京都市左京

區聖護院東町一に現住。文具雜貨商。川田順氏に師事、のち尾山篤二郎氏の自然詩社に入社、現在曼陀羅に屬す。歌集「凹凸」あり。

山田 義幸 愛知縣中島郡千代田村大字西溝口に生れ、同

縣海部郡美和村大字花正に現住。農業。

山田 葩夕 本名基。明治二十年三月三日、岐阜縣養老郡

多良村に生れ、東京市杉並區和泉町一四八に現住。東京市新泉尋常小學校長。十七歳金子薫園氏選の新潮歌壇並に萬朝報歌壇に投稿、久しく「光」同人としてその編輯に與る。昭

和八年同誌を退き「緑地帯」を發行すること
二年、現在「星雲」の編輯に當る。

山田清三郎

明治二十九年六月十三日
京都市に生れ、夙に

勤勞生活に入つて京阪神各都市を轉々、大正七年上京「小説俱樂部」記者を経て同十二年頃より文筆生活を營む。大正九年より作歌、同十年同人雜誌「曠野」を發行、十五部に及ぶ。また「國民文學」の社友たりしことあり。十年以上中斷の後昭和八年頃より主に「短歌評論」に再び發表す。著書に短篇集「幽靈讀者」「小さい田舎者」「五月祭前後」長篇地上に待つもの」及びプロレタリア文藝に關するもの數種あり。

山田晴夫

二十四歳。茨城縣稻敷郡八原村大字八代三八

九九に生れ、同地に現住。農業。作歌經歷といふほどのものなし。

山田良春

四十一歳。長野縣南安曇郡梓村に生れ、同縣

小諸町乙二六一に現住。教員。大正十年五月より故島木赤彦氏に師事、以後アララギ會員たり。昭和三年より土屋文明氏に師事して現在に及ぶ。

山田正

宮崎縣南那珂郡榎原村大字橋之口丙五五四五に

生れ、同地に現住。農業。昭和十一年七月より多磨に入會す。

山田學子

大正二年一月二十五日
岡山縣吉備郡櫻井田村

大字陶に生れ、京都市東山區山科安朱馬場東町二ノ一に現住。昭和六年歌誌「かげろふ」に同人として加盟、結婚後夫の指導を受け現在に至る。

山田滿雄

本姓松村。二十七歳。
京都市修徳學區阪東屋

町齋藤方に現住。商店員。昭和六年木村流二郎氏の指導により「青海原」入社、同誌廢刊し「自然」續刊されるに至り引續き「自然」に歌を發表して今日に至る。

山路青村

本名瀬野忠次。二十五歳。
沼津市に生れ、同

市三枚橋町四九山田佐太郎方に現住。日本水産事務員。静岡商業在學中より約三年歌誌「黒潮」の編輯發行に當る。のち同誌「不二」と合併し不二社同人となる。此の間歌集「山火」を刊行。昭和十一年兵役の爲休社、退營後再び不二社に参加し現在に至る。

山路昇

三十三歳。山梨縣中巨摩郡平林村に生れ、同

地に現住。製炭業。昭和十年より作歌、地方新聞及同人雜誌等に發表す。

山路みどり

本名坂本翠。松山市に

生れ、昭和六年九月二十二日二十五歳にて歿す。神戸女學院出身。昭和三年橄欖社に入り吉植庄亮氏に師事す。

山寺住夫

本名今井武。四十歳。
長野縣諏訪郡米澤村に

生れ、同縣上伊那郡伊那富村に現住。教員。アララギ會員。

山取明石子

二十七歳。埼玉縣川越市宮下町五五八に生れ

同地に現住。川越家庭幼稚園保母。昭和六年三月川越高女卒業後、報知武州歌壇同人となり新井英三郎氏に學ぶ。又「山櫻」の小川水明氏の門に入りて今日に至る。

山名秋花

本名照枝。二十四歳。
廣島縣芦品郡常金丸村

に生れ、同地に現住。三年前より種々の文藝雜誌に投稿し昭和十二年三月熊本の「龍燈」に入り、蒲池正紀氏に添削を受け今日に至る。

山名英郎

本名竹内英之助。横濱

區青山北町六ノ四二に現住。昭和九年東京帝大文學部卒業。獨逸文學及比較文學を專攻。昭和四年以來アララギ會員、齋藤茂吉氏の指導を受く。ヘッセ全集外數種の和譯、兩月物語の獨逸人との共譯、ホルツに關する論文、「萬葉集の歐譯に就て」「詩學研究」等あり。

山名千代

三十八歳。千葉縣船橋市五日市一〇二二に生

れ、同二七一五に現住。和洋裁縫教授。昭和四年一月橄欖入社、同八年七月退社、昭和九年十月霸王樹入社、十一年一月立春に加盟。

山名 薫人

本名林藏。四十一歳。香川縣三豐郡中姬村字安井に生れ、北海道石狩國空知郡金山驛前に現住。運送業。大正九年三月より作歌、郷土誌二三の同人主幹たり。大正十一年三月潮音入社、太田水穂氏に師事す。現在「潮音」及「新聲」同人。

山中 正雄

二十一歳。茨城縣眞壁郡紫尾村東山田に生れ同地に現住。無職。作歌經歷といふほどのものなし。

山中 一明

明治三十三年一月一日、伊賀上野に生れ兵庫縣伊丹町に現住。公立高女教諭。昭和四年一月より石神千亦氏に師事、同五年二月竹柏會入會、昭和七年四月より同十年四月迄小宮良太郎、鷺見治喜次氏等と「朱鳥」を刊行せしことあり。昭和九年二月より竹柏會大阪支部に屬し、川田順、石神茂兩氏の指導を受け現在に至る。

山中 忠男

明治四十三年十二月十一日、熊本縣八代町出來町に生れ、同地に現住。藥種商。中學四年頃より作歌、現在に至る。

山中 春夫

本名治良。四十歳。三重縣河藝郡白子町大字寺家に生れ、東京市王子區志茂町一ノ九一二に現住。職業なし。十七八歳より作歌、地方

誌サフラン、サザナミの諸友たりしことあるも日本製紙株式會社に勤むるに及び中止す。三十七歳發病より再び作歌、花房誌友たりしことあり。

山中 茂樹

本名茂。四十一歳。下關市に生れ、門司市大里上柳に現住。國鐵從業員。大正十三年頃より本格的に作歌、杉野朴氏等と緒土、白土の編輯に携り大正十四年發刊の白樺に入社、その分裂之際に對馬完治氏に従ひ地上に入る。現在地上同人。傍り北九州の綜合誌「日方」の編輯に當る。

山中 石占井

本名祐尊。明治三十八年七月十一日、滋賀縣滋賀郡坂本村に生る。昭和二年頃より作歌。同四年末香蘭詩社に入社、村野次郎氏門下として今日に至る。

山中 勢津子

二十五歳。鳥取縣東伯郡八橋町に生れ、同地に現住。帯木會員。

山中 範太郎

慶應二年岡山市に生れ、東京市世田谷區經堂町四〇九に現住。元會社員。昭和五年より作歌アララギに入社、彌藤茂吉氏に師事す。

山西 敏郎

明治三十九年五月三日、大阪府東淀川區長柄中通一ノ二三に現住。大正十一年より作歌、ボトナム同人。歌集「海鳴」あり。

山根 浩

四十四歳。島根縣簸上郡稗原村に生れ、現在外遊中。長崎醫科大學助教。大正五年アララギ會員となり現在に至る。

山根 ふみ子

明治三十七年四月一日、水戸市に生れ、松江市北堀前町七三三に現住。女學校時代より父につきて歌を學ぶ。昭和七年平賀春郊氏に師事、後アララギ會員となり、土屋文明氏に師事して現在に至る。杉並春子の筆名を用ふ。

山野 すま子

二十六歳。愛知縣西春日井郡萩野村安井に生れ、名古屋市東區武平町三ノ一五に現住。昭和十年九月蒼穹社入社以來岡野直七郎氏に師事す。

山野 井三良

二十八歳。和歌山市に生れ、樺太榮濱郡相濱に現住。樺太廳林務署森林主事。十八歳より作歌、結社に加はりたることなし。

山野 井洋

三十一歳。和歌山縣西牟婁郡田邊町に生れ、樺太豊原市東二條東仲通南九ノ二六に現住。雜誌「樺太」編輯長。歌は獨學。昭和十一年六月歌集「わが巫寒帯」同八月「樺太色歌とカメラ」の著あり。歌誌「ポドゾル」編輯。

——山邊以下次卷——